宮城県文化財調査報告書 107 集

七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

昭和 60 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
建設省七ヶ宿ダム工事事務所

序

本書は、七ケ宿ダム建設事業に伴う関連遺跡発掘調査の成果をまとめたものである。七ケ宿ダムは、昭和54年4月12日、東北地方建設局が水源地域対策特別措置法に拠り七ケ宿町字橋場、字切通の地白石川の流水を湛え、以って流水の正常な機能維持と洪水調節を図ると共に、農業用水、上水道用水、工業用水の潤澤な供給に貸すべく計画した多目的ダムである。

このダムの建設によって、民屋150戸をはじめ410ヘクタールの地が水面下にその姿を没することになったが、この地域には小梁川遺跡・小梁東遺跡・大倉遺跡など縄文期を主とする所謂周知の遺跡が分布しているので、宮城県教育委員会が東北地方建設局と協議を重ね、受託事業として事前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

調査は昭和56年春から開始された。当初、遺跡の数が多く、また面積が広大なので調査作業が長期化し、そのために湛水開始時期を大幅に遅延させることになりはしないかと危慎されたが、東北地方建設局や七ケ宿町など関係当局の誠意ある御協力と担当職員の献身的な努力に支えられて、ほぼ順調な進捗を示している。

末尾乍ら、本書の刊行に際し御協力を賜った関係各位にたいし更めて深甚なる感謝の意を表すと同時に、学術研究ならびに社会教育の分野にいささかなりとも寄与する処あれば幸いこれに過ぎるものはない。

昭和 60 年 3 月

宮城県教育委員会　教育長

郷　古　康　郎

目　　次

（1）小　梁　川　遺　跡……1

（2）小　梁　川　東　遺　跡……99

（3）大　　倉　　遺　　跡……195

（4）道　　端　　遺　　跡……243

（5）矢　立　西　遺　跡……251

（6）若　林　山　遺　跡……265

例　　言

1. 本書七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書第1冊目として、小梁川（古代編）・小梁川東遺跡・大倉遺跡・道端遺跡・矢立西遺跡・若林山遺跡の調査結果をまとめたものである。
2. 調査の主体者は宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所である。
3. 調査および整理においては東北歴史資料館からご指導をいただいた。
4. 土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1973)を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。
5. 地形図は建設省国土地理院発行の地図白石南部・関を使用した。
6. 上記各遺跡の出土遺物および実測図・写真等の資料は宮城県教育委員会において保管している。
7. 整理、報告書の作成は文化財保護課が担当し、各遺跡の整王、執筆は課員の検討を経て次のとおり分担して行った。

(1)小梁川遺跡ー新庄屋元春晴・真山悟、(2)小梁川東遺跡ー真山悟(縄文)・菊地淳一(古代)
(3)大倉遺跡、(4)道端遺跡ー笹原信男、(5)矢立西遺跡ー村田晃一、(6)若林山遺跡ー今野隆

七ヶ宿ダム関係遺跡調査に至る経過

七ケ宿ダムは、阿武隈川水系白石川の宮城県遠刈田郡七ケ宿町字橋場及び字切通地区に洪水調節、流水の正常な機能の維持並びに農業用水、水道用水及び工業用水の供給を目的として建設される多目的ダムである。

昭和50年9月、宮城県教育委員会は七ケ宿ダム建設に伴う水没地の埋蔵文化財の保護をめぐり建設省東北地方建設局長に協議した。

昭和50年12月、七ケ宿ダム調査事務所長は七ケ宿ダム建設地域内の埋蔵文化財の所在、規模、内容等について七ケ宿町教育委員会経由で協議してきた。これに基づいて、昭和51年5月26日～5月27日、七ケ宿町教育委員会の協力を得て分布.調査し、これまで周知の遺跡としてきた小梁川遺跡、小梁川東遺跡、大梁川遺跡のほか鳥川岳遺跡が発見されたことを含め、昭和51年6月2日付け文第128号で回答した。

さらに、昭和53年4月、七ケ宿ダム建設に伴い一部水没する一般国道113号の付替道路計画に伴う関係地域の文化財等の調査の依頼があり、昭和53年5月16日から5月18日まで分布調査した。その結果について、昭和53年6月26日付け文第114号で回答した。この調査で、新たに、矢立遺跡、大熊南遺跡などを追加することになった。また、このときダム水没地域での再度の分布調査が必要な旨を建設省七ケ宿ダムエ事事務所に連絡した。

昭和54年10月と昭和55年8月の二回にわたり七ケ宿ダム工事事務所長は、七ケ宿ダム建設に伴う地蔵文化財の分布及び発掘調査について七ヶ宿教育教育委員会、白石市教育委員会と宮城県教育委員会の三者に協議してきた。

昭和55年11月18日付け文第639号で宮城県教育委員会は、七ケ宿ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の予備調査を実施する建設省側に通知した。

昭和55年11月～12月、最終の詳細分布調査を実施し、その結果を七ヶ宿ダム工事事務所長に通知した。

この頃になると、用地等の買収の見通しがつき、発掘の支障が徐々にとり払われ始めた。

昭和56年3月上旬発掘調査の諸準備に着手した。下旬には発掘調査現場の設営を完了した。昭和56年4月7日、発掘調査の地区設定に入り4月13日には作業員を正式に雇用し、重機も稼動し、調査は軌道にのり動きだした。

昭和56年度から59年度までの調査で養源寺跡と冷清水遺跡を除いて野外調査の大部分を終了することができた。基礎的遺物整理は昭和56年度から実施している実施しているが、本格的遺物整理は昭和56年度からで、今回、上記で遺跡と遺構、遺物の多カッター小梁川遺跡（縄文）と、小梁川遺跡を除いた6遺跡についてとりまとめができたので報告するものである。

小梁川遺跡

（古代編）

目　　次

Ⅰ　位置と環境 3
Ⅱ　調査の方法と経過 6
Ⅲ　発見された遺構と遺物 9
　1. 竪穴住居跡 9
　2. 掘立柱建物跡 66
　3. 方形周溝状遺構 69
　4. 土　　壙 69
Ⅳ　考　　察 76
　1. 土器の分類 76
　2. 土器の年代 78
　3. 竪穴住居跡 80
　4. 掘立柱建物跡 82
　5. 方形周溝状遺構 83
　6. 土　　壙 83
Ⅴ　ま　と　め 84

調　査　要　項

遺跡記号：ＪＣ（宮城県遺跡地名表登載番号 04032）

遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町小梁川

調査期間：昭和 56 年 4 月 21 日～10 月 31 日

調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：佐々木茂楨・新庄屋元晴・加藤道男・真山悟・菊地淳一・相原淳一・小徳　晶

調査対象面積：約 4500m^2

調査面積：約 3700m^2

Ⅰ 位 置 と 環 境

刈田郡七ヶ宿町は宮城県の南西部に位置する。町は北方に標高約1800mの蔵王連峰、西方および南方にはそれぞれ山形県、福島県との境をなす標高700～1000mの山々が連なる山懐にあり、その中央を白石川が東西に貫流している。川沿いには沖積地や河岸段丘からなる狭隘な低地がひらけており、そのなかに関・追見・原・渡瀬等の集落が形成されている。

小梁川遺跡は町の中心地である関から東方へ約5㎞の地点に位置し、白石川と小梁川の合流点に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡の南端および東端はそれぞれ白石川、小梁川に面する段丘崖になっており、西端は湿地帯である資人沢によって画され、北側は標高約300mの丘陵がひかえている。遺跡内はわずかに傾斜する部分はあるものの概ね平坦で、その広がりは東西約150m、南北約300mに及び、総面積は約45000m^{2}になる。

遺跡はその南寄りを東西に国道113号線をはさんで北側にあたる「白ハゲ」地区と南側の「板沢」地区とに分かれており、今回報告の対象とした古代の遺構は主に「白ハゲ」地区の東半部に分布している。この対象部分は近年まで畑地として利用されていたところで、ゆるやかに南東に傾斜しており、標高は高い部分で約270m、低い部分で約260mになっている。

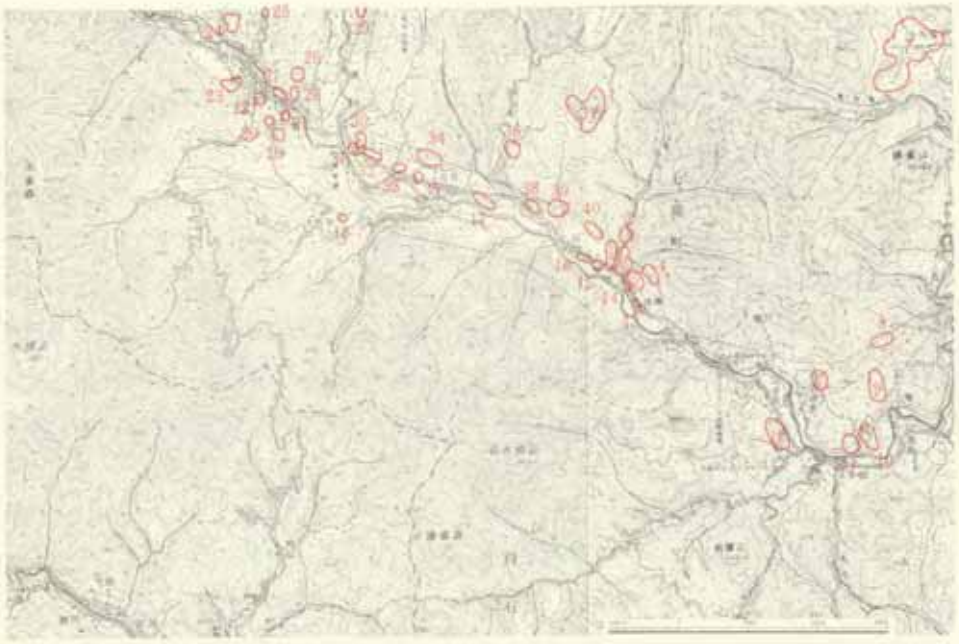
次に同様の地理的環境にある周辺の遺跡についてすでに調査の行なわれたダムの湛水域に係る遺跡を中心に概観してみることにする。

まず縄文11時代早期の遺跡としては本遺跡の西隣りの段丘上に位置する原尻遺跡[(1)]があり、沈線文土器期や条痕文土器が出土している。また早期末から前期初等にかけての遺跡として東約300mの段丘上に大倉遺跡(笠原：本書収録)があり同期の住居跡が4件検出されている。これは県内では数少ない発見例であり、同期の集落のあり方を知る上で貴重な遺跡ということができる。

前期の遺跡としては西方約1.5ｋmの段丘上に原頭遺跡[(2)]があり、前期初頭に比例される土器が出土している。また本遺跡の「板沢」地区からは前期末葉の多量の土器とともに住居跡やフラスコ状土壙が発見され、とりわけ同期の大形住居跡の存在が注目された。

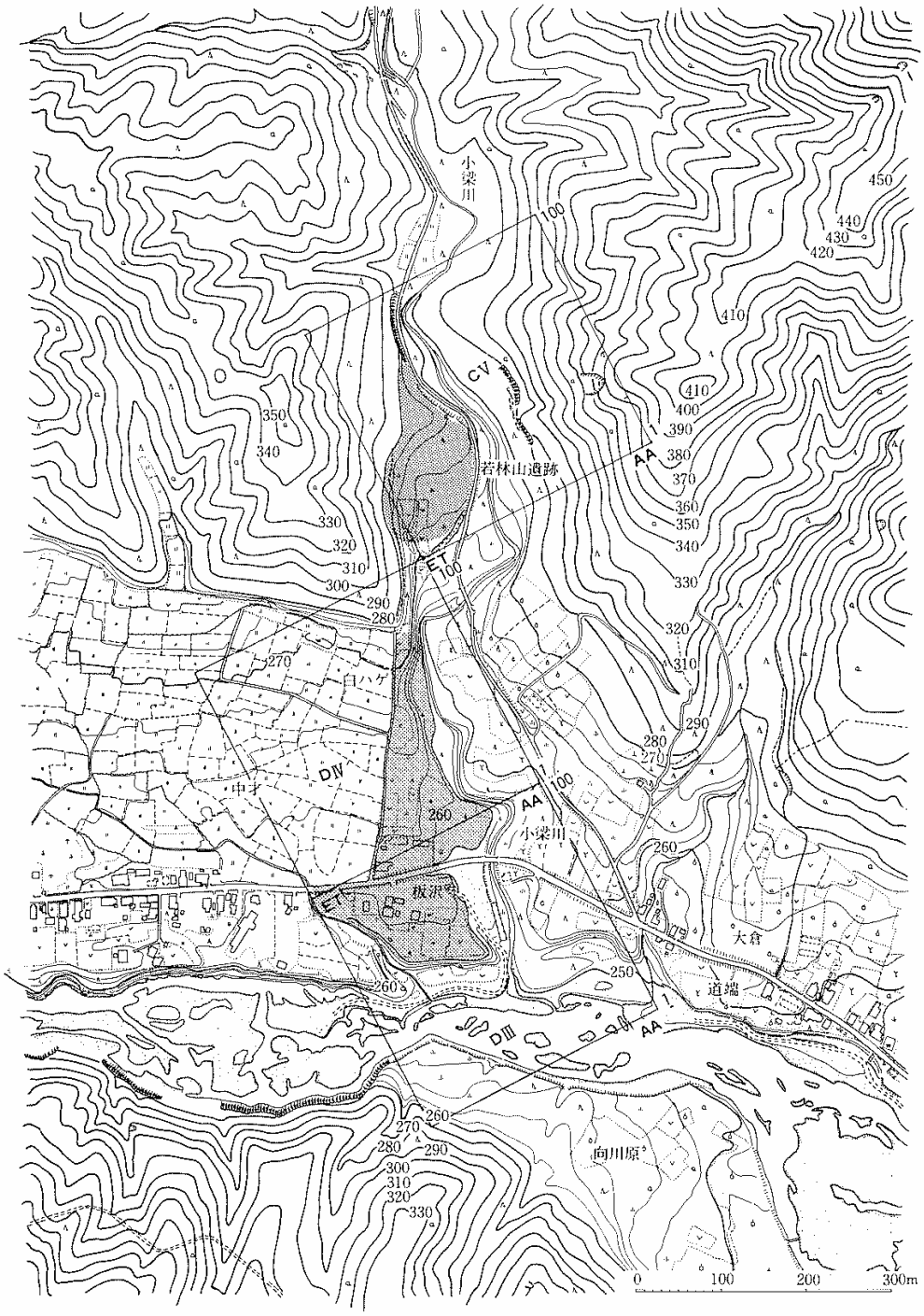
さらに同地区からは中期前様から中葉にいタール時期の住居跡、墓壙、フラスコ状土壙、遺物包含層等が検出されており、2000m^{2}に及ぶ集落の全貌がほぼ明らかにされている。中期後葉から末様にかけての遺跡としては東に隣接する小梁川東遺跡（真山・菊地・本書収録）および西方2kmの丘陵上に大梁川遺跡[(3)]がある。いずれも末葉を中心とした時期の住居跡が発見されているもので、付近の低地帯にあっては中期前中葉とした本遺跡に比べ遺跡の規模が小さくなり、近接しながら複数の箇所に分散する様様がうかがえる。

後期から晩期にかけてはまとまった資料に乏しい。付近では後期初頭の土器が出土する遺跡として上記の小梁川東遺跡や大梁川遺跡があるが、中期に比べ出土量がかなり少なく、遺構も



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	小梁川遺跡	段丘	包含地	縄文(中・晩)	21	東島田原遺跡	丘陵	包含地	縄文
2	若林山遺跡	段丘 丘	包含地	縄文	22	内川B遺跡	丘陵	包含地	縄文
3	小梁川東遺跡	丘陵麓	包含地	縄文	23	八幡館跡	丘陵	城館	中世
4	野沢倉山遺跡	丘陵	包含地	縄文	24	神林A遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中・晩)
5	大倉遺跡	段丘	包含地	縄文	25	神林B遺跡	段丘	包含地	縄文
6	冷清水遺跡	丘陵	城館?	中世?	26	長下遺跡	丘陵麓	包含地	縄文(中)
7	小久保平遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(早・前・中・晩) 奈良・平安	27	内川遺跡	段丘	包含地	縄文(晩)
8	高館跡	丘陵麓	城館	中世	28	宮田遺跡	段丘	包含地	縄文(後)
9	大熊館跡	丘陵	城館	中世	29	大原遺跡	段丘	包含地	縄文(中・晩)
10	矢越遺跡	段丘	包含地	縄文(後)弥生	30	矢立西遺跡	段丘	包含地	縄文
11	大熊南遺跡	段丘	包含地	縄文(早・前)	31	夏梨平遺跡	段丘	包含地	縄文
12	六角館跡	丘陵	城館	中世	32	矢立遺跡	河岸段丘	包含地	縄文
13	薬師寺廃寺跡	段丘	寺院跡	中世	33	上道見遺跡	河岸段丘	包含地	縄文
14	道端遺跡	段丘	包含地	縄文	34	根添遺跡	段丘	包含地	縄文・奈良・平安
15	原尻遺跡	段丘	包含地	縄文	35	町頭遺跡	段丘	包含地	縄文
16	原遺跡	段丘	包含地	縄文	36	大梁川遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
17	大貫平遺跡	段丘	包含地	縄文	37	有谷館跡	丘陵	城館	中世
18	大貫平遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	38	原頭遺跡	段丘	包含地	縄文
19	中高瀬遺跡	段丘	包含地	縄文	39	原頭東遺跡	丘陵	包含地	?
20	土足沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	40	沖遺跡	沖積地	包含地	

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　周辺の地形と調査区

小梁川東遺跡において2基検出されているにすぎない。晩期については小梁川東遺跡において表土から若干の土器片が搬土しているのみで、遺構については不明である。

弥生時代から奈良時代にかけての時期については現在のところ周辺で該当する明確な遺跡は認められない。

平安時代は本遺跡のほか小梁川東遺跡がある。本遺跡から住居跡22軒や掘立柱建物跡等が、小梁川東遺跡からは住居跡6軒が検出されている。だだしこれらは後述するように平安時代でも前半に位置づけられるものでそれ以降の遺構は確認されていない。

中世の遺跡には北方約2kmの丘陵上に有谷館および南東約3kmの丘上に大熊館等があり、また寺院跡として'南東約1kmの段丘上に養源寺跡がある。

(1) 宮城県教育委員会（1983）現地説明会資料　大倉遺跡・原尻遺跡

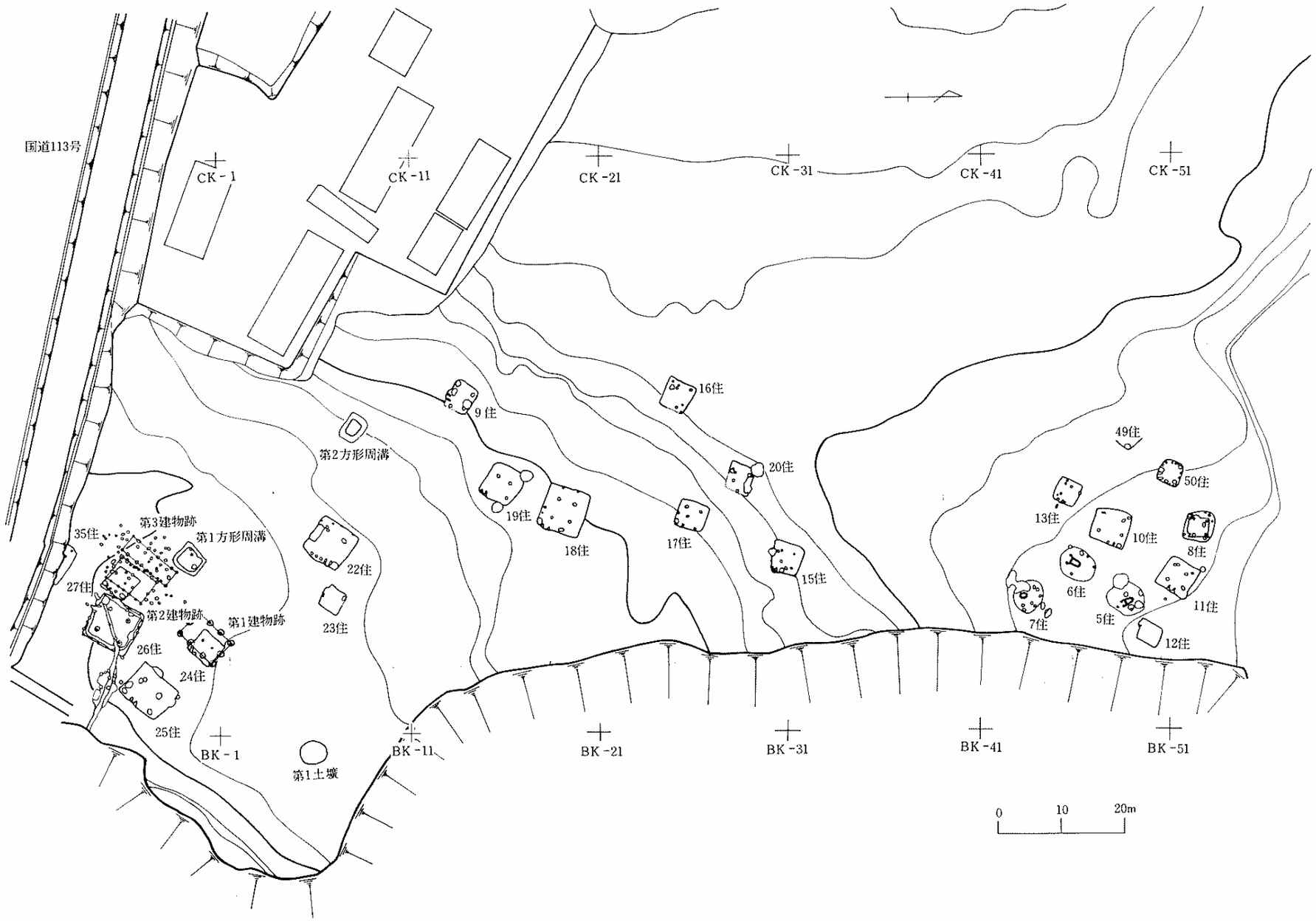
(2) 1983年度調査・宮城県教育委員会

(3) 宮城県教育委員会（1984）現地説明会資料　大梁川遺跡

Ⅱ　調査の方法と経過

本遺跡をはじめいくつかの遺跡と係りをもつ七ヶ宿ダムの湛水域は,第1図に示すようにかなり広大な範囲を占めその面積は410万m^2に及ぶ。調査区の設定に際しては、まずこの湛水域全体を国家座標に準拠した一辺が300mのグリットで区画し、さらにそれぞれ区画内を一辺が3mの小グリットで細分した。グリットについては大グリットが東西方向をアルファベット、南北方向をローマ数字、小グリットが東西方向をアラビア数字であらわし、大小とも組み合わせをもって名称とした。（第2図）

調査の開始は昭和56年4月21日である。まず重機によって表土を除去しながら遺構の確認作業を行った。その結果、「板沢」地区を中心に縄文土器の遺構が検出され、「白ハゲ」地区の東半部から古代の遺構が検出された。4月～8月中頃まで主に縄文土器の遺構精査を行ない、その終了後8月20日から古代の遺構精査に着手した。古代の遺構は竪穴住居跡22軒、掘立柱建物3軒、方形周構状遺構2基、土壙3基からなっており、それらをほぼ掘り上げたのは10月中旬である。また9月下旬からこれらの作業と併行しなが遣り方を設定し、縮尺1/20による実測図の作成や写真撮影および精査の補足作業等を行い、10月31日に調査を終了した。なお、この間調査成果の公開を図るため10月17日に現地説明会を開催している。


国道113号
CK-1
CK-11
CK-21
CK-31
CK-41
CK-51
BK-1
BK-11
BK-21
BK-31
BK-41
BK-51
第1土壙
第2方形周溝
第1方形周溝
第3建物跡
第2建物跡
第1建物跡
9住
16住
20住
19住
18住
17住
15住
49住
50住
13住
10住
8住
6住
5住
7住
11住
12住
35住
27住
26住
24住
25住
22住
23住
0
10
20m

第３図　遺構配図

Ⅲ　発見された遺構と遺物

今回の調査によって古代の竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡3軒、方形周溝状遺構2基、土壙3基が発見され土師器等の遺物が出土している。

1.竪穴住居跡

第8号住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＢ－52の地山面で確認された。

〔重複〕第2居跡跡を埋め戻して構築されたものと考えられ、つくりかえの可能性が強い。

〔平面形・規模〕隅丸方形を呈する。規模は長軸が4.6m、短軸が4.5mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は6枚の層に分かれる。第1～4層は黒色や褐色土で住居の中央を中心にレンズ状に堆積している。第5、6層黒褐色土で壁際に流れ込んだように斜めに堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い北壁で約42～57㎝である。地山を壁としており、立ち上りは急である。

〔床〕中央は第21住居跡の埋土を、壁際は地山を床としており、床面の状況は全体的に平坦でしまりがある。

〔柱穴〕住居内から7個のピットが検出されている。これらは、壁寄りに分布するものの規則性はみられず主柱穴がどうかは不明である。

〔カマド〕南壁の西端に付設されている。軸方向はＳ－20－Ｗで、燃焼部の規模は幅が84㎝、奥行きが90㎝である。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積しており、側壁の内側から底面にかけての部分は加熱のため赤変している。カマドの構築方法は粘土の貼り付けによるものである。

〔出土遺物〕床面、カマド内、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土している。

第9住居跡

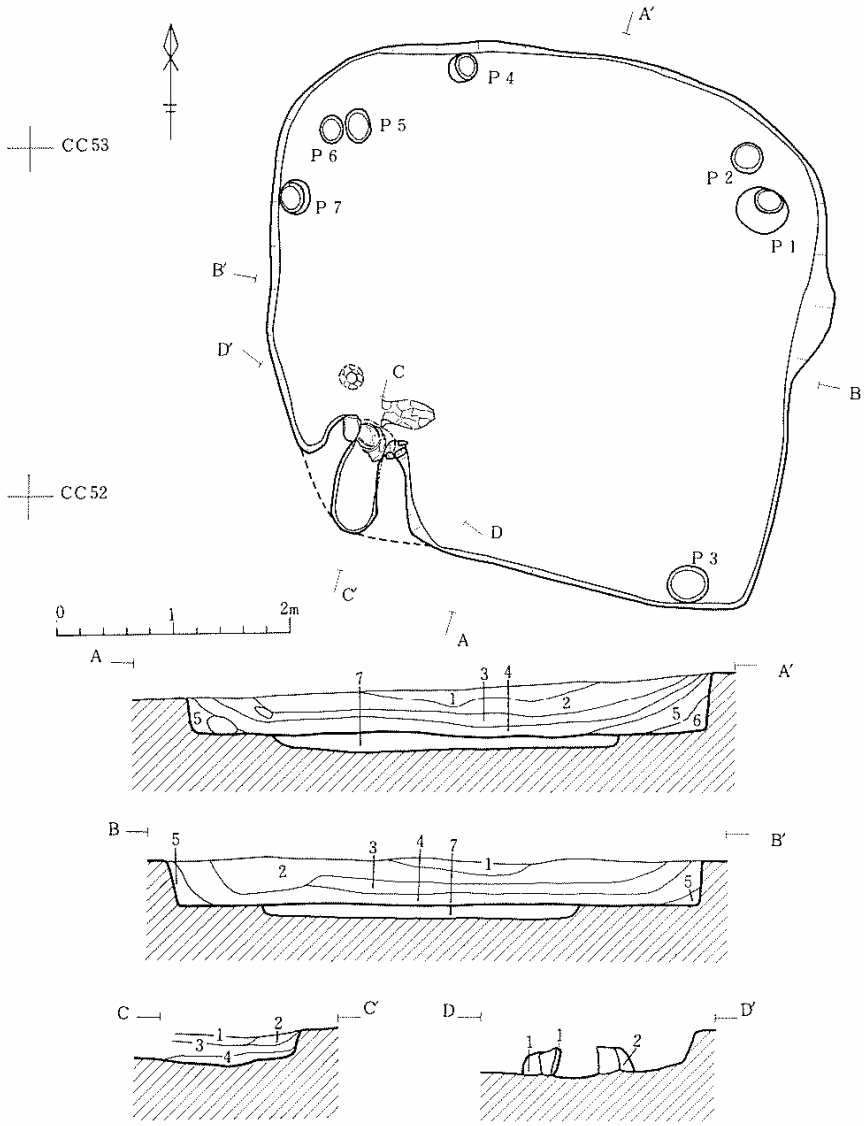
〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＩ－13の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕隅丸方形を呈する。規模は長軸が4.6m、短軸が4.0mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は2枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土で住居内の全域に堆積し第2層は黒褐色土で北壁際と南壁際に斜めに堆積している。

〔壁〕東辺と南辺の一部除き残存している。壁高は最も高い北壁で7～12㎝である。地山を壁としており、立ち上りは南壁と北壁がやや急であるが他はなだらかである。

〔床〕地山を床としている。床面の状況は固<しまっておりほぼ平坦であるが東壁側へやや斜ぎみである。



ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7
深さ(cm)	16	9	8	16	7	8	10

A－A′　B－B′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR1.7/1 黒色シルト	
2	10YR4/4 褐色シルト	
3	10YR2/1 黒色シルト	角礫を含む
4	10YR4/6 褐色シルト	
5	10YR2/2 黒褐色シルト	
6	10YR2/3 黒褐色シルト	
7	10YR3/4 暗褐色シルト	炭化物,焼土,地山ブロックを含む　第21号住埋土

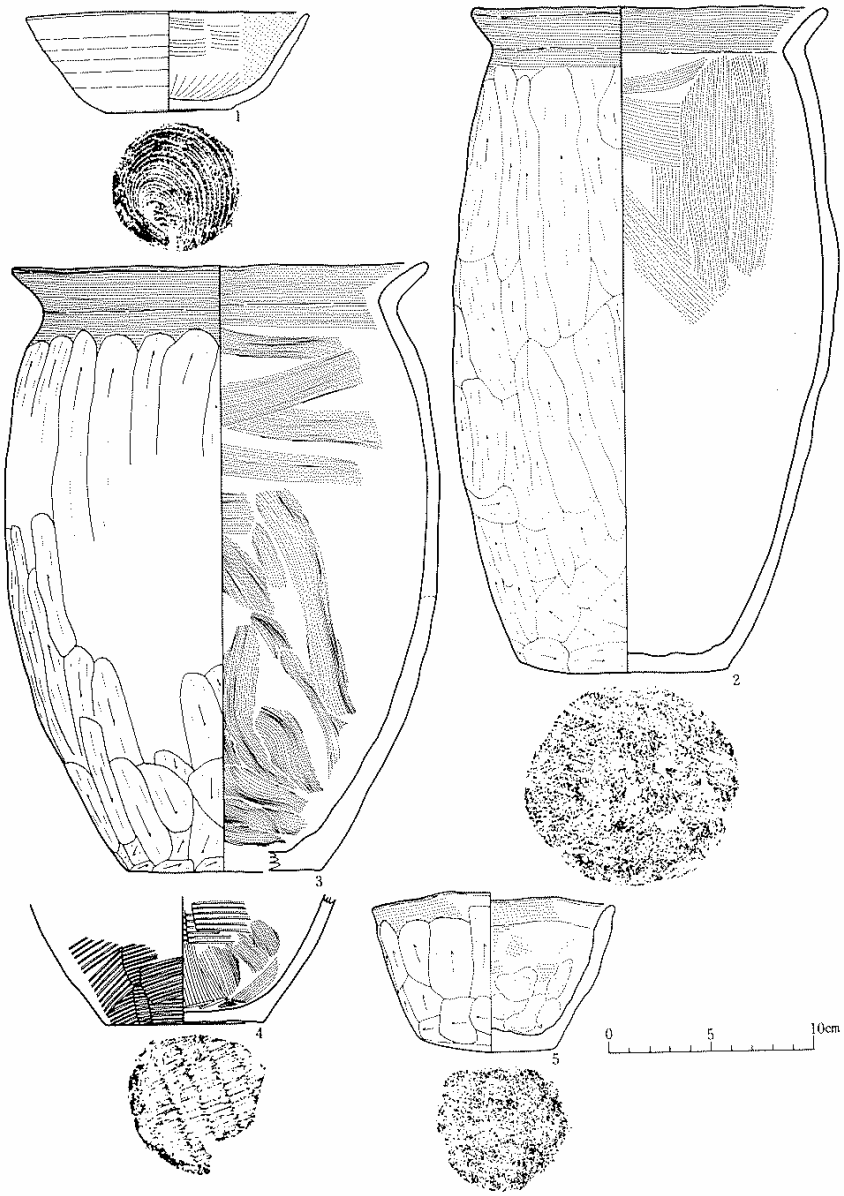
C－C′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色シルト	
2	10YR7/6 明黄褐色粘土	焼土混入、カマド崩壊土
3	5YR5/8 明赤褐色粘土	カマド崩壊土
4	5YR4/8 赤褐色シルト	焼土、炭化物少量混入

D－D′

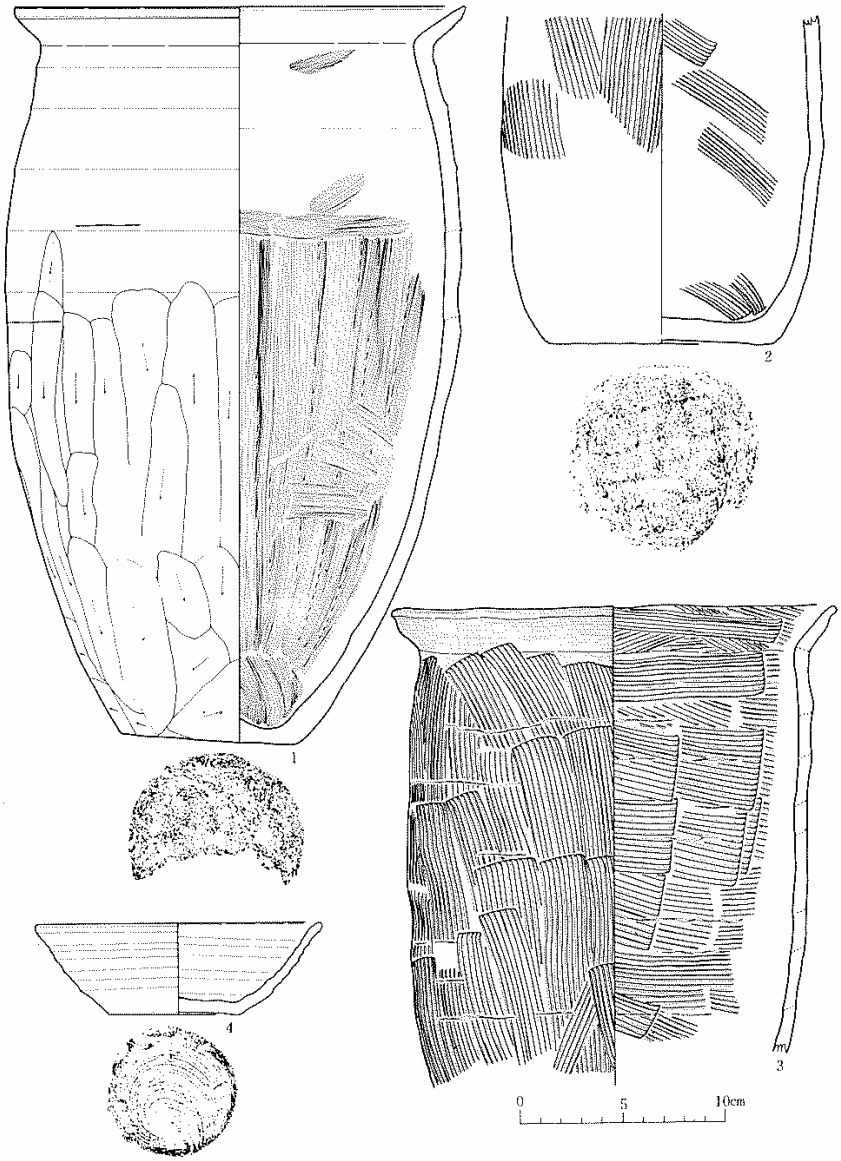
1	10YR5/3 黄褐色粘土	
2	10YR2/8 黒褐色シルト	

第4図　第8住居跡



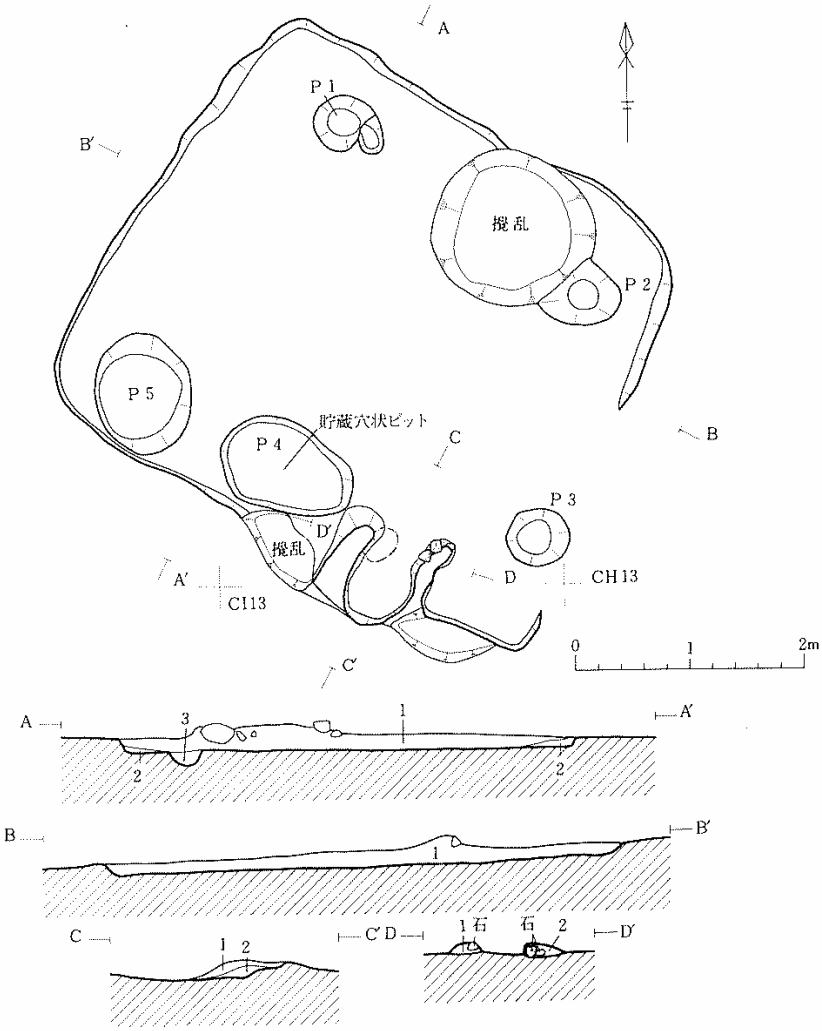
番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	8住床・カマド上	土師器・坏	ロクロ	ヘラミガキ　黒色処理	回転糸切り	4.9	13.6		6.0	27
2	8住床・カマド	土師器・甕	ヨコナデ　ケズリ	ヨコナデ　ナデ	ケズリ	32.4	16.7	18.5	9.9	65
3	8住床・カマド	土師器・甕	ヨコナデ　ケズリ	ヨコナデ　ナデ	ケズリ	29.4	19.7	20.9	9.2	78
4	8住床	土師器・甕	ハケ目	ハケ目　ナデ	むしろ目				7.5	192
5	8住床	土師器・小形甕	ヨコナデ　ケズリ	ヨコナデ　ナデ　指頭状オリエ	ケズリ　ナデ	7.8	11.8		6.5	67

第５図　第８住居跡出土遺物(1)



番号	地区層位	種別	調整		底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
			外面	内面						
1	8住床	土師器・甕	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ　ナデ	ヘラケズリ	36.1	21.7	22.1	8.5	68
2	8住床	土師器・甕	ハケ目	ハケ目	むしろ目			15.7	11.0	69
3	8住床	土師器・甕	ヨコナデ　ハケ目	ハケ目			21.2	19.5		62
4	8住カマド内埋土	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.4	13.7		6.3	22

第６図　第８住居跡出土遺物(2)



ピット No.	1	2	3	4	5
深　　さ	19	35	32	17	13
土色・土性	10YR 2/3 黒褐色シルト	10YR 2/3 黒褐色シルト	10YR 2/3 黒褐色シルト	10YR 2/3 黒褐色シルト	10YR 3/4 暗褐色シルト

A－A′　B－B′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3　黒褐色シルト	礫、炭化物を含む
2	10YR2/2　黒褐色シルト	地山粒を含む
3	10YR2/2　黒褐色シルト	

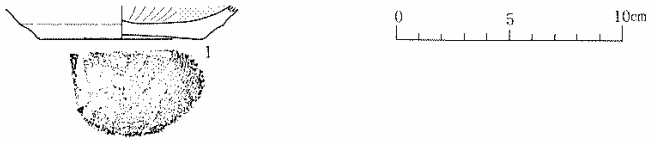
D－D′

層 No.	土色・土性	備考
1	7.5YR5/6　明褐色シルト	
2	7.5YR6/8　橙色粘土	

C－C′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3　黒褐色シルト	炭化物を含む
2	5YR4/8　黒褐色シルト	焼土

第7図　第9住居跡



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	8 住 床	土師器・坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り				9.0	155

第８図　第９住居跡出土遺物

〔柱穴〕住居内から5個のピットが検出されているが大きさや配置関係に規則性が認められず柱穴がどうかは明らかでない。

〔カマド〕南壁中央やや東寄りに燃焼部が検出されている。軸方向はＳ－20°－Wである。燃焼部の規模は幅が約95cm、奥行きが約100cmである。内部は焼土と壁崩落土が堆積している。側壁は河原石を芯に粘土をはりつけて構築されている。右側壁の内面から底面の一部が赤変している。

〔貯蔵穴状ピット〕住居跡の南壁中央から検出されている。これは、カマドの右脇に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が約122cm、短軸が約80cm、深さが約13cmである。壁の立ち上りはゆるやかで底面ほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土からなり1枚である。ピット内からは土師器片が出土している。

〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピットから土師器、須恵器が出土している。これらのうち図示出来たものは坏1点である。

第10号住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＢ－48の地山黒色火山灰層面で確認された。

〔重複〕縄文時代の土壙を切って構築されている。

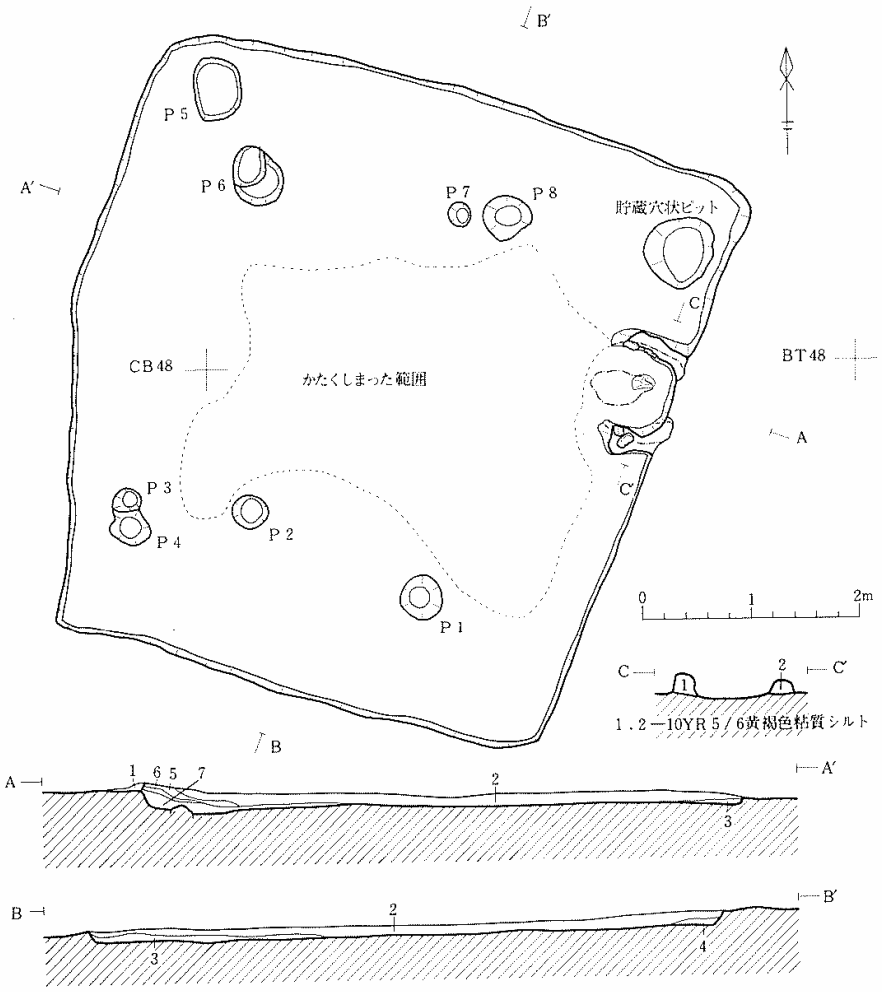
〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は第1層5.9m、短軸が5.6mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は3枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土で住居内の全域に堆積している。第２層は黒褐色土で北壁際に流れ込むように斜めに堆積している。

〔壁〕4辺とも残存している。壁高は最も高い北壁で約17～20cmである。地山を壁としており、立ち上りは一急である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はカマド付近から中央部にかけてしまりがあり硬く平坦であるが壁寄り段丘礫は凹凸がみられる。

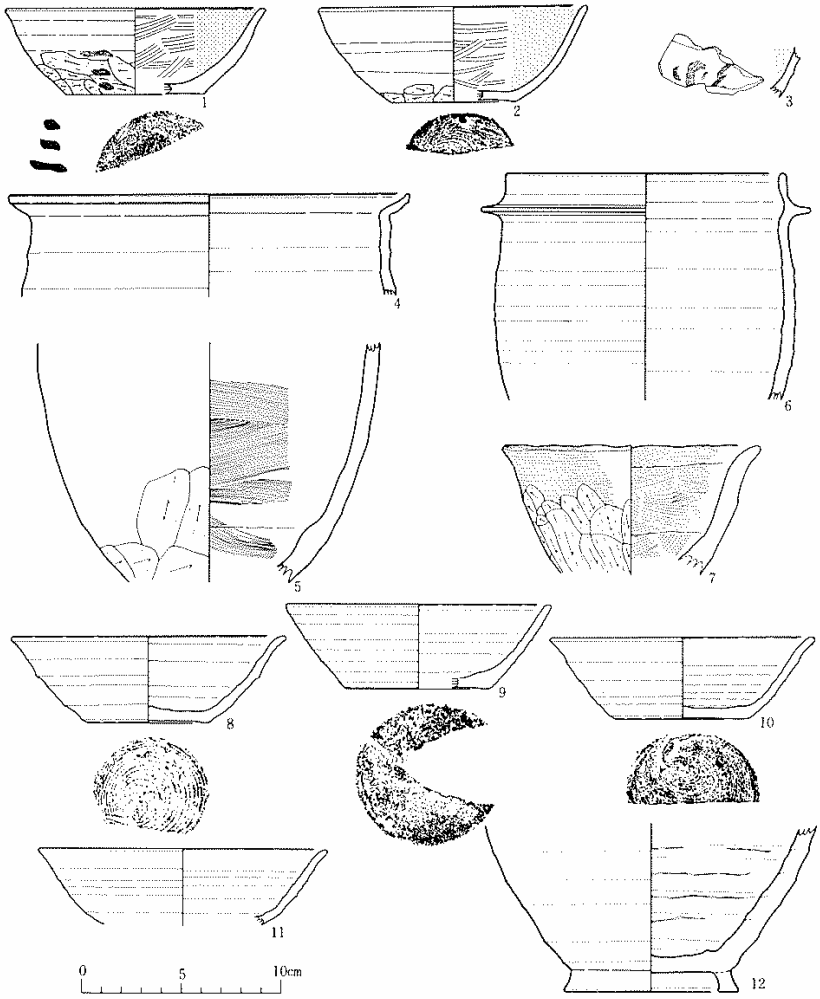
〔柱穴〕住居内から9個のピットが検出されている。このうちピット1・4・6・8はその配



ピット No	1	2	3	4	5	6	7	8
深　　さ	42	35	20	28	10	42	15	46
土色・土性	10YR 2／3 黒褐色シルト	10YR 2／3 黒褐色シルト	10YR 2／3 黒褐色シルト	10YR 2／3 黒褐色シルト	10YR 3／4 暗褐色シルト	10YR 2／3 黒褐色シルト	10YR 2／3 黒褐色シルト	10YR 2／3 黒褐色シルト

層No	土色・土性	備　　考
1	7.5YR3/4 暗褐色シルト	攪　乱
2	10YR3/2 暗褐色シルト	
3	10YR2/3 黒褐色シルト	小礫を含む
4	10YR5/6 黒褐色シルト	小礫を含む
5	10YR6/6 黄褐色粘土質シルト	カマド崩壊土
6	7.5YR6/6 橙色粘土	カマド崩壊土
7	7.5YR5/8 黄褐色粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む

第９図　第10住居跡



ピット No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深　さ	42	35	20	28	10	42	15	46
土色・土性	10YR2/3・シルト	10YR2/3・シルト	10YR2/3・シルト	10YR2/3・シルト	10YR3/4・シルト	10YR2/3・シルト	10YR2/3・シルト	10YR2/3・シルト

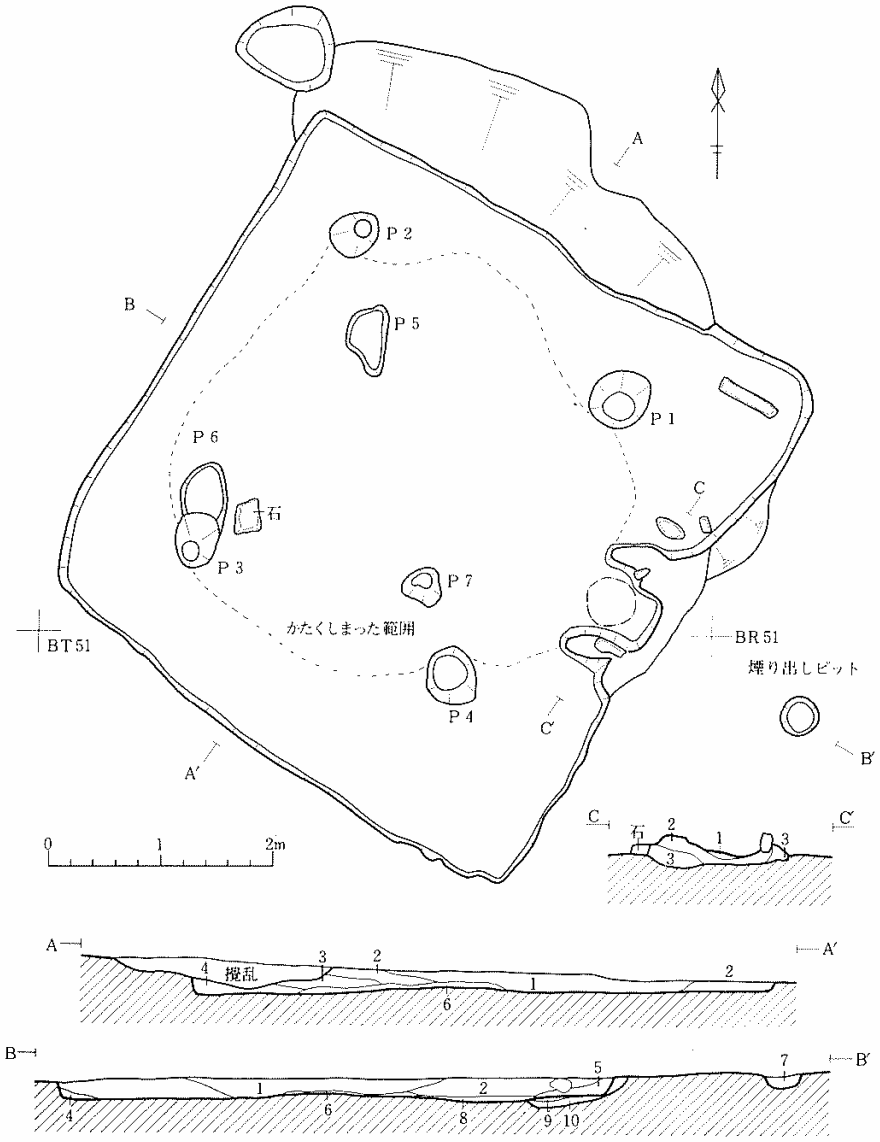
番号	地区層位	種　別	調整 外面	調整 内面	底　部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	10 住 床	土師器・坏	ロクロ 手持ヘラケズリ 墨書(三)	ヘラミガキ 黒色処理	手持ヘラケズリ	4.3	12.8		6.8	18
2	10 住 埋 1	土師器・坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り	4.8	13.2		6.2	5
3	10 住 床	土師器・坏	ロクロ 墨書(弥?)	ヘラミガキ 黒色処理						172
4	10住カマド内	土師器・坏	ロクロ	ロクロ			19.9			132
5	10住カマド内	4と同一個体	手持ヘラケズリ	ナ デ						132′
6	10 住 床	土師器羽釜	ロクロ	ロクロ			13.7	15.1	鍔 16.5	33
7	10 住 床	土師器小形甕	ヨコナデ 手持ヘラケズリ	ナ デ			12.7			19
8	10 住 床	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.4	13.1		6.0	31
9	10 住 床	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	4.3	13.2		7.2	16
10	10 住 床	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.2	13.1		6.6	14
11	10 住 床	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ			(14.2)			175
12	10 住 埋 1	須恵器・壺	ロクロ	ロクロ	回転ヘラケズリ				8.6	32

第10図　第10住居跡出土遺物

置関係から主柱穴と考えられる。
〔カマド〕東壁中央やや北寄りに付設されている。燃焼部だけで煙道部や煙出しピットは検出されていない。軸方向はＥ－10°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が約120㎝、奥行きが約80㎝である。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積している。側壁は内側が赤変しており燃焼部底面も中央部が赤変している。
　カマドの構築方法はカマド付設位置に河原石を、芯に粘土を貼り付けて構築している。
〔貯蔵穴状ピット〕住居内の東北隅から検出されている。これはカマドの左脇に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が縦68㎝、短軸が約60㎝、深さが約10㎝である。壁の立ち上りはゆるやかで底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色土1枚である。ピット内からは土師器が出土している。
〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土している。

第11住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＢＳ－51の地山面で確認された。
〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が5.4m、短軸が5.2mである。
〔堆積土〕住居内堆積土は6枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土で住居の中央にレンズ状に堆積し、第2～4層はそれぞれ褐色・赤褐色・暗褐色土で壁際に斜めに堆積している。第5層は焼土層でカマド内に堆積した崩壊土である。第5・6層は灰層や焼土層でカマドの周辺に分布する。
〔壁〕壁高は最も高い北壁と西壁で10～28㎝である。地山を壁としており立ち上りは急である。
〔床〕地山を壁としており全体に平坦である。住居の中央部はかたくしまっている。
〔柱穴〕住居内から7個のピットが検出されている。これらの内ピット1～4は住居のコーナーを結んだ対角線上にあり、柱穴の規模も一定していることから主柱穴と考えられる。
〔カマド〕東壁のほぼ中央部に燃焼部と煙出しピットが検出されている。軸方向はほぼＥ－40°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が124㎝、奥行きが74㎝である。燃焼部底面の中央は赤変している。煙出しピットは平面形が円形を呈し規模は径33㎝、深さが14㎝である。堆積土は褐色土1枚で焼土を多量に含んでいる。煙道部の長さは約120㎝と推定される。
　カマドの構築方法はあらかじめカマド付設位置に長軸155㎝、短軸が98㎝、深さが6～10㎝の不整形の掘り方に粘土を敷き詰めて燃焼部底面としている。側壁は角礫を芯に外側から粘土を貼り付けて構築している。
　〔出土遺物〕床面、カマド内、住居内堆積土から土師器、須恵器、鉄製品が出土している。土



ピット No.	1	2	3	4	5	6	7
深さ（cm）	41	16		23	8	10	

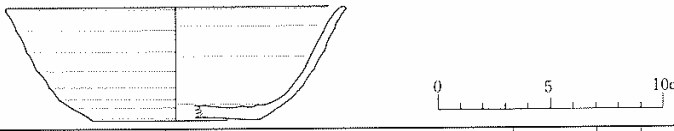
A-A′　B-B′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色シルト	炭化物を少量含む
2	10YR4/6 褐色シルト	
3		焼土、炭化物層
4	10YR3/3 暗褐色シルト	
5	5YR4/8 赤褐色シルト	焼土、カマド内堆積
6	10YR2/1 黒色シルト	炭化物を多量に含む
7	10YR4/6 褐色シルト	焼土が多量に混入
8	10YR4/1 褐色シルト	炭層
9	5YR5/8 明赤褐色シルト	焼土
10	10YR5/8 黄褐色粘土質シルト	
10	10YR5/8 黄褐色粘土質シルト	

C-C′

1	5YR5/8 明赤褐色シルト	焼土
2	10YR5/8 黄褐色粘土質シルト	
3	10YR3/8 暗褐色シルト	粘性あり、しまりあり

第11図　第11住居跡



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	11住理1	須恵器坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	15.1	14.9		7.4	152

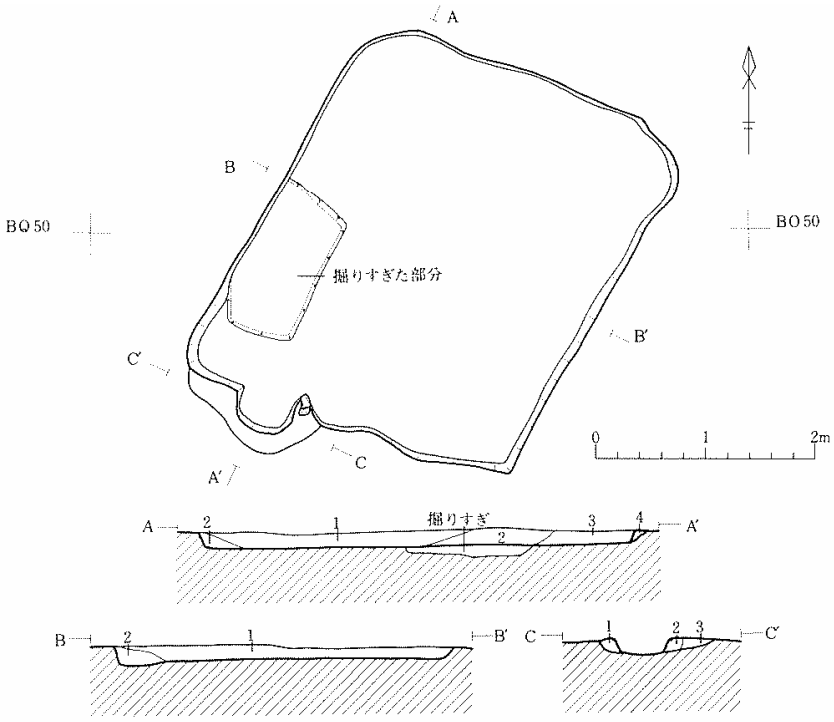
第12図　第11住居跡出土遺物

器類は全て破片であるため図示できないが、土師器坏は製作にロクロを使用し内面はミガキ黒色処理されている。

第12住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＢＰ－50の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が3.1㎝である。



A-A′　B-B′

層No	土色・土性	備考
1	10YR3/4暗褐色シルト	炭化物を少量含む
2	10YR4/6褐色シルト	炭化物を少量含む
3	10YR6/6明黄橙色シルト	焼土、炭化物を少量含む、カマド内堆積土
4	2.5YR5/8明赤褐色砂質粘土	粘土貼り付け部分

C-C′

層No	土色・土性	備考
1	2.5YR5/8明赤褐色砂質粘土	粘性は弱く軟弱
2	7.5YR6/8橙色砂質粘土	粘性は弱く軟弱
3	10YR5/6黄褐色砂質粘土	粘性は弱い

第13図　第12住居跡

〔堆積土〕住居内堆積土は2枚の層に分かれる。第1層は暗褐色土で住居内の全域に堆積している。第2層は褐色土で壁際に流れ込むように斜めに堆積している。

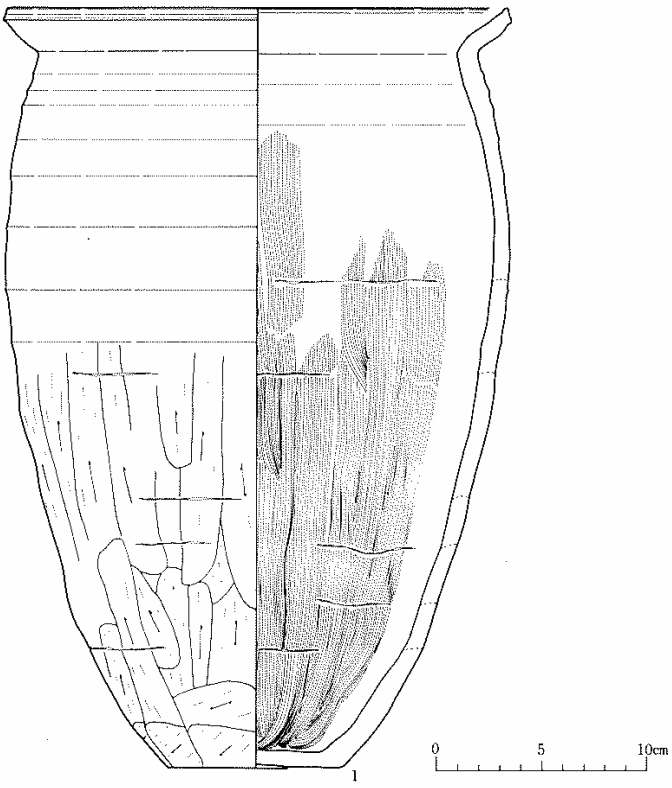
〔壁〕壁高は最も高い西壁で約10～18cmである。地山を壁としており、立ち上りは急である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はほぼ平坦でいくぶんかたくしまり、北西部にはブロック状の炭化物や焼土が検出されている。

〔柱穴〕柱穴は認められない。

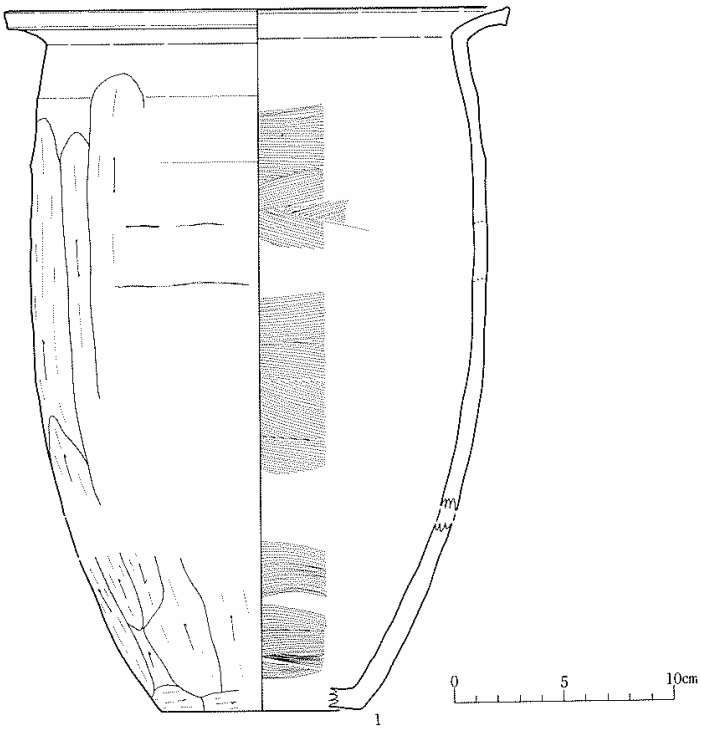
〔カマド〕南壁壁寄りに付設されている。燃焼部のみで煙道部や煙出しピットなど検出されていない。軸方向はＳ－30°－Ｗである。燃焼部の規模は幅が約65cm、奥行き約60cmである。内部は焼土や炭化物が堆積しており、側壁は焼けて赤変している。カマドの構築方法としては南壁の一部をいく分外側に削り、その部分を中心に粘土を貼り付けて燃焼部の奥壁や側壁をつくり出している。

〔出土遺物〕床面、カマド内から土師器が出土している。



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	12住カマド内	土師器 甕	ロクロ ケズリ	ロクロ ナデ	ケズリ	36.3	23.5	23.8	8.2	66

第14図　第12住居跡出土遺物(1)



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	12住カマド内	土師器 甕	ロクロ ケズリ	ナデ	不明	(32.1)	(22.5)	(20.6)	(8.9)	160

第15図　第12住居跡出土遺物(2)

第13住居跡

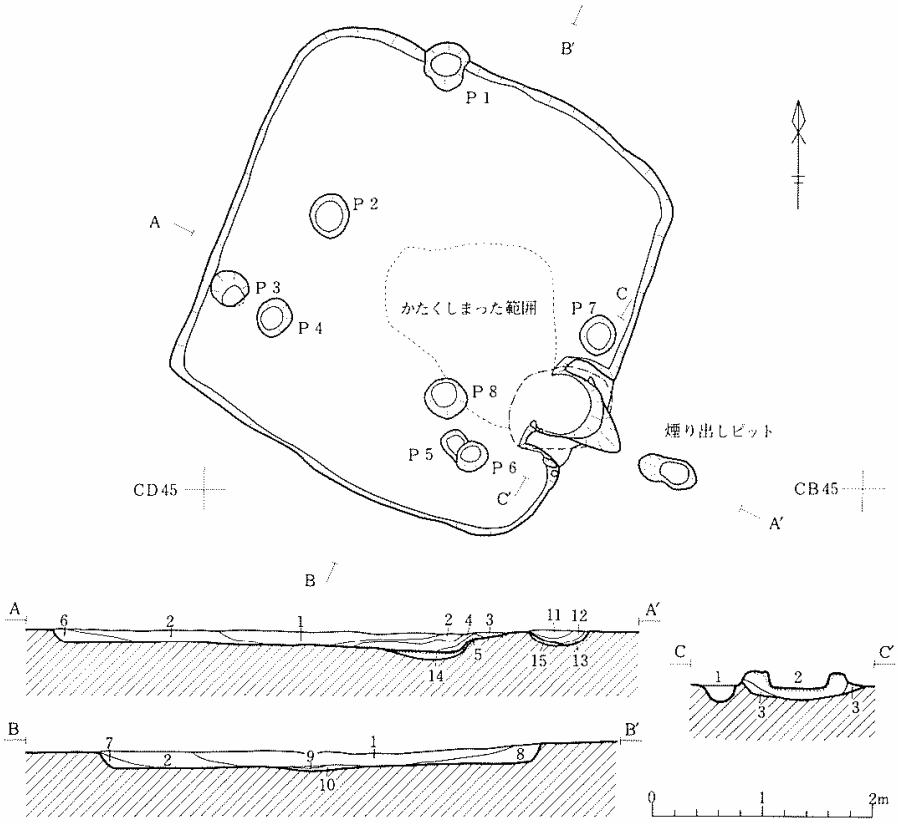
〔位置・確認面〕 D－Ⅳ区・CD－45の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 隅丸正方形を呈する。規模は長軸が4.0m、短軸が3.9mである。

〔堆積土〕 住居堆積土は4枚の層に分かれる。第1層は黒色土で住居内中央部から東北寄りにレンズ状に堆積している。第2層は1暗褐色土で住居内の全域に堆積している。第3層は黒褐色土で南壁際に斜めに堆積している。

〔壁〕 4辺とも残存している。壁高は最も高い北壁で約10～15cmである。地山を壁としており立ち上りはゆるやかである。

〔床〕 地山を床としている。床面の状況はカマド付近から中央部にかけてかたくしまっており平坦であるが、西壁寄りの床面には段丘礫層が露出しており凹凸がある。床面中央部には平面形が円形を呈し径約30cm、厚さ約3cmの焼面があり、その上面及び囲りには木灰片が少量分布



ピット No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ（cm）	18	7	33	55	6	14	19	13
土色・土性	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR2/3 黒褐色シルト

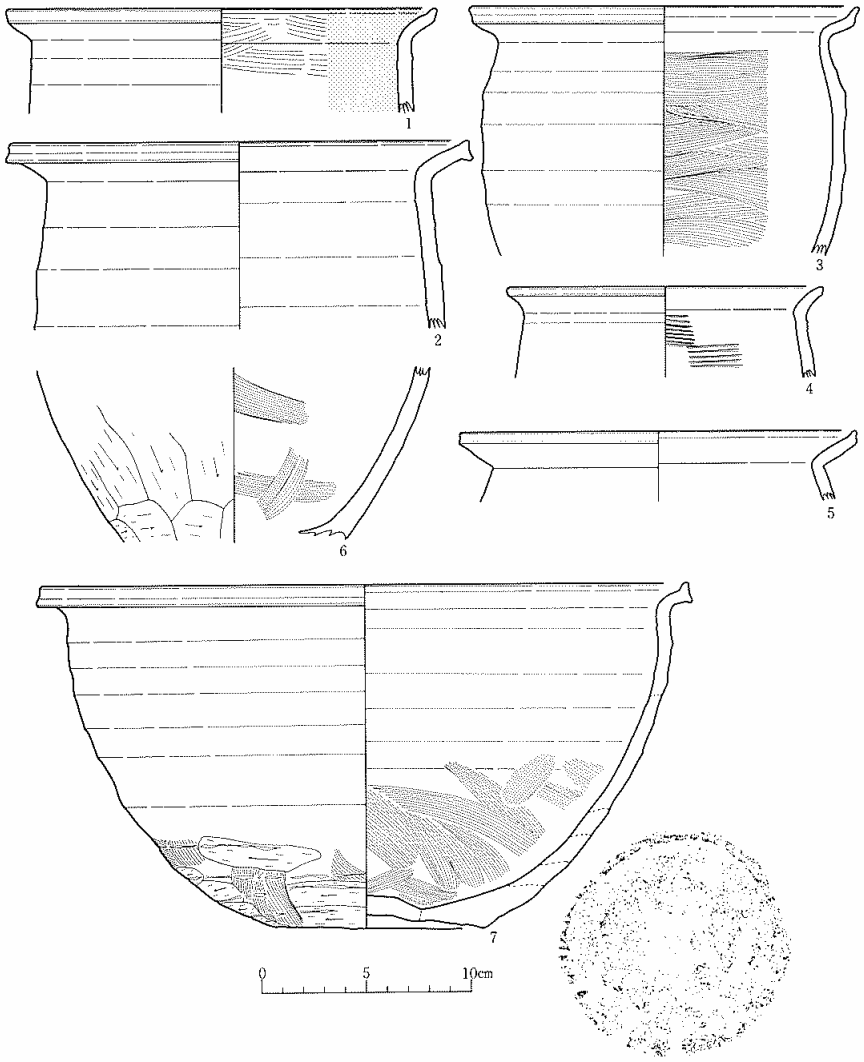
A-A′　B-B′

層 No.	土色・土性	備考			
1	10YR2/1 黒色シルト	炭化物、礫を含む	8	10YR3/3 暗褐色シルト	小礫を含む
2	10YR3/3 暗褐色シルト	炭化物、小礫を含む	9		焼土
3	7.5YR4/4 褐色シルト	焼土	10		木炭層
4	7.5YR5/8 明褐色粘土質シルト		11	7.5YR6/8 明褐色シルト	焼土
5	7.5YR5/8 明褐色シルト		12	7.5YR5/8 明褐色粘土質シルト	
6	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	礫を含む	13	10YR2/3 黒褐色シルト	
7	10YR2/1 黒色シルト		14	7.5YR4/6 褐色粘土質シルト	
			15	10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト	

C-C′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色シルト	
2	7.5YR4/6 褐色粘土質シルト	かなり焼けている
3	10YR3/3 暗褐色シルト	

第16図　第13住居跡



番号	地区層位	底部	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	13 住 床	土師器 甕	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理			(20.0)			161
2	13 住 床	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(21.5)			162
3	13 住 床	土師器 甕	ロクロ	ロクロ ナデ			(18.1)	(17.1)		105
4	13 住 床	土師器 甕	ロクロ	ハケ目			(14.7)			164
5	13 住 床	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(18.5)			163
6	13 住 床	土師器 甕	ケズリ	ナデ						165
7	13 住 理 1	土師器 甕	ロクロ ケズリ ナデ	ロクロ ナデ	砂付着	16.4	30.5	28.6	9.9	61

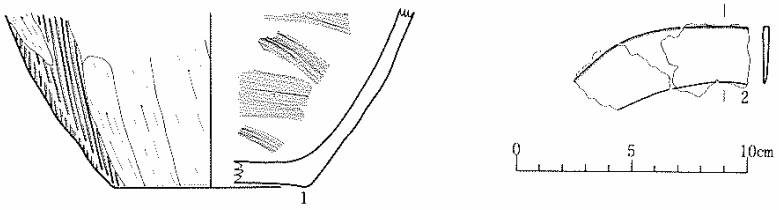
第17図　第13住居跡出土遺物(1)

している。

〔柱穴〕住居内から8個、住居外から1個のピットが検出されている。この内ピット4，8は配置関係から主柱穴の可能性が考えられる。ただし、北側に対応する柱穴は検出されていない。

〔カマド〕東壁中央やや南寄りに、燃焼部と煙出しピットが検出されている。軸方向はＥ－20°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が約100㎝、奥行きが約70㎝である。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積している。側壁は粘土を貼り付けて構築されている。両側壁の内側から燃焼部底面全体にわたっては赤変しその範囲は一部煙出しピットの方向へ伸びている。煙出しピットは平面形が楕円形を呈し規模は長軸が約50㎝、短軸が約30㎝、深さが15㎝で焼土と炭粒を含む明褐色の焼土が堆積し底面は明黄褐色の粘土が貼り付けられている。

〔出土遺物〕床面・カマド内・住居内堆積土から土師器、鉄製品が出土している。



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	分類記号	登録番号
1	13住カマド内埋3	土師器 甕	タタキ ケズリ	ナデ	ケズリ				8.2		107
2	13 住 埋 1	鉄製品 鎌									170

第18図　第13住居跡出土遺物(2)

第15住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＢＳ－30の地山面で確認された。

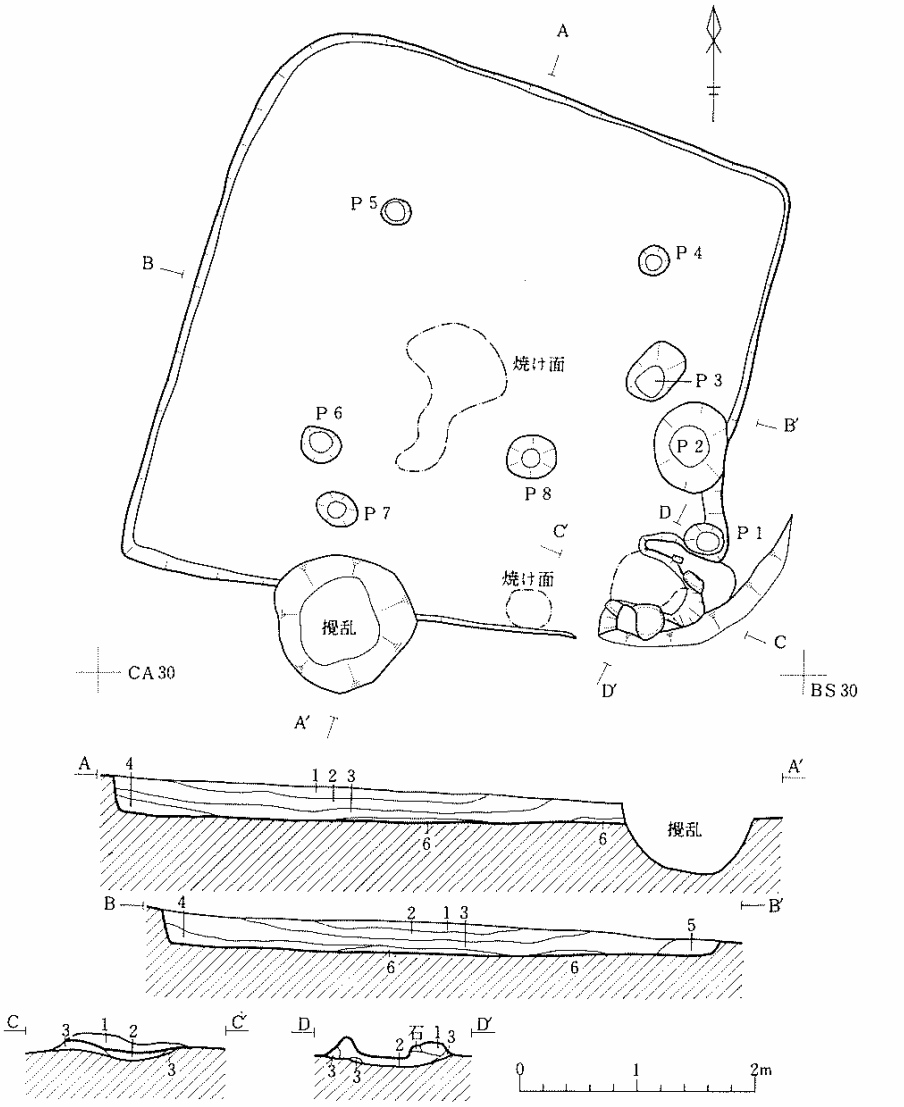
〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が4.7m、短軸が4.6mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は5枚の層に分かれる。第1・2層は黒褐色や暗褐色土で住居内の中央部にレンズ状に堆積している。第3層は暗褐色土で住居内のほぼ全域に堆積している。第4・5層は黒褐色・褐色土で壁際に斜めに堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い西壁で約25～46㎝である。地山を壁としており立ち上りは急である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はかたくしまっておりほぼ平坦である。床面のほぼ中央部に平面形が不整な楕円形を呈する焼面が検出されている。規模は剣長軸が約1.3㎝、短軸が約90㎝である。

〔柱穴〕住居内から8個のピットが検出されている。このうちピット4・5・6は住居の対角線上にあり、規模も一定していることから主柱穴と考えられるが南東隅に対応するピットは



ピット No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ（cm）	27	14	15	18	40	47	24	25
土色・土性	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR4/2 黒褐色砂質シルト	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	7.5YR2/1 黒色砂質シルト	7.5YR2/2 黒褐色シルト	

A－A′ B－B′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色シルト	
2	10YR3/4 暗褐色シルト	
3	10YR3/3 暗褐色シルト	炭化物を少量含む
4	10YR2/3 黒褐色シルト	炭化物、焼土を多く含む
5	10YR4/6 褐色シルト	炭化物、焼土を多く含む
6		炭化物層

C－C′

層No.	土色・土性	備考
1		焼土
2	7.5YR4/6 褐色シルト	上面は赤変
3	7.5YR3/3 暗褐色粘土質シルト	

D－D′

1	7.5YR5/6 明褐色粘土質シルト	
2	7.5YR4/6 褐色シルト	上面は赤変
3	7.5YR3/3 暗褐色シルト	小礫を少量含む

第19図　第15住居跡

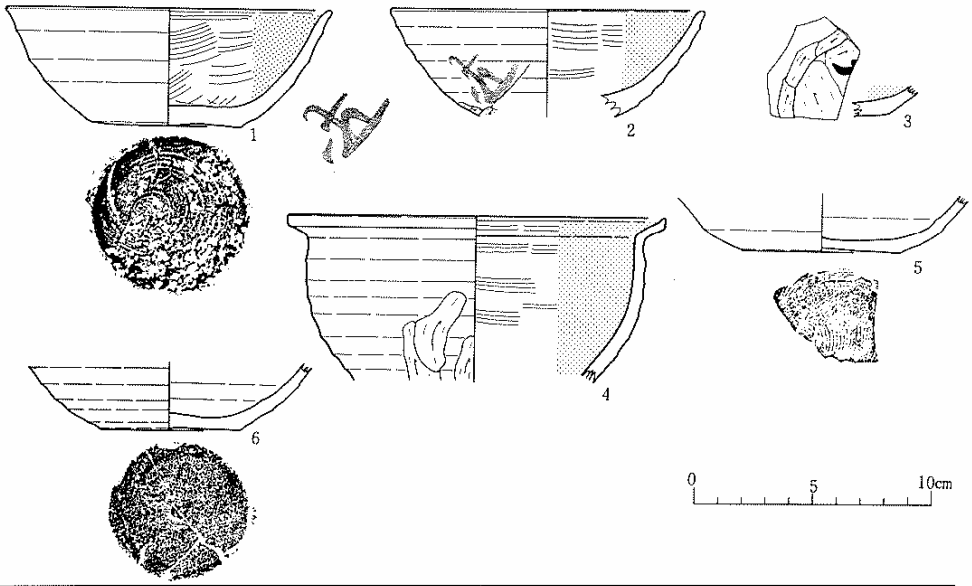
検出されていない。

〔カマド〕南東隅の東壁に付設されている。軸方向はＥ－30°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が103cm、奥行きが83cmである。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積しており、燃焼部側壁から底にかけては熱のため赤変している。

カマドの構築方法は長軸約1m、短軸約90cm、深さが約10cmの掘り方に粘土を貼り付けて構築している。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の東壁中央やや南寄りに検出されている（P_2）。これはカマドの左脇前に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が78cm、短軸が60cm、深さが22cmである。底面は皿状を呈し壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土は褐色土1枚で焼土を多量に含む。

〔出土遺物〕床面、カマド掘り方、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土している。



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	15住カマド掘り方	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り	4.9	13.6		6.2	20
2	15 住床	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ 墨書	ヘラミガキ黒色処理			(13.0)			153
3	15 住床	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ					154
4	15住攪乱部	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理			(15.7)	(14.2)		150
5	15住カマド掘り方	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り 手持ヘラケズリ				(6.5)	149
6	15 住床	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り				5.8	148

第20図　第15住居跡出土遺物

第16住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＩ－25の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が4.7m、短軸が4.6mである。

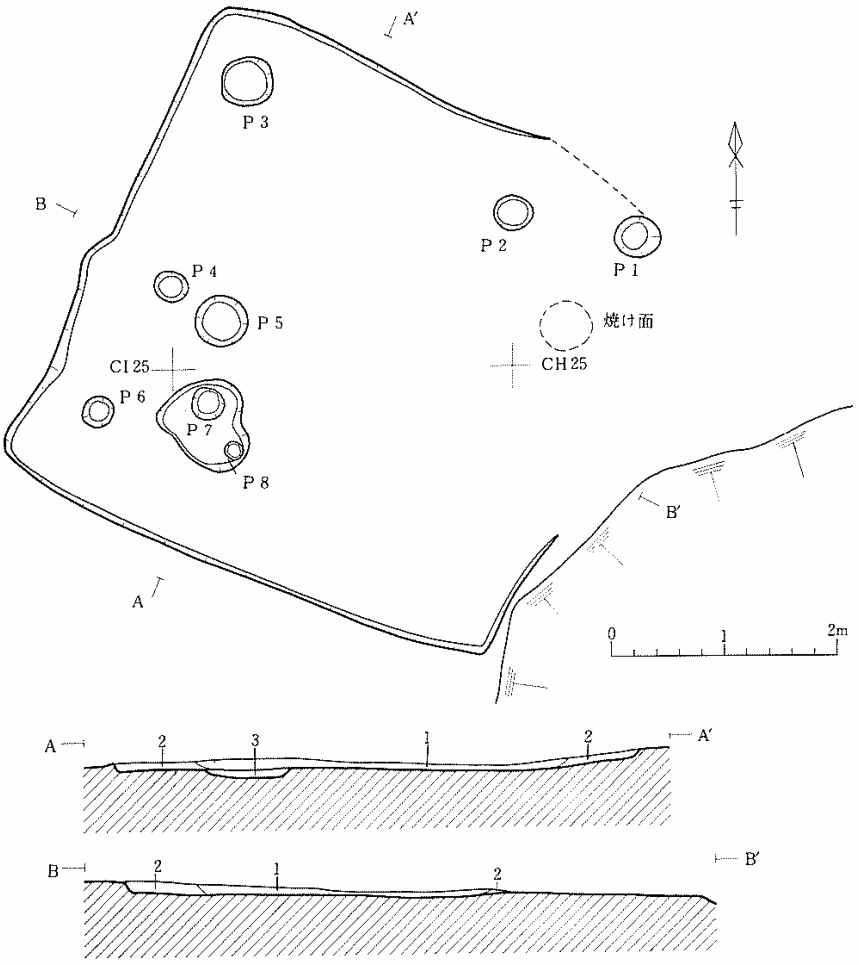
〔堆積土〕住居内堆積土は2枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土で住居内中央部全域に堆積

している。第2層は暗褐色土で壁際に堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い西壁で約7～10cmである。地山を壁としており立ち上りはなだらかである。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はかたくしまりほぼ平坦である。

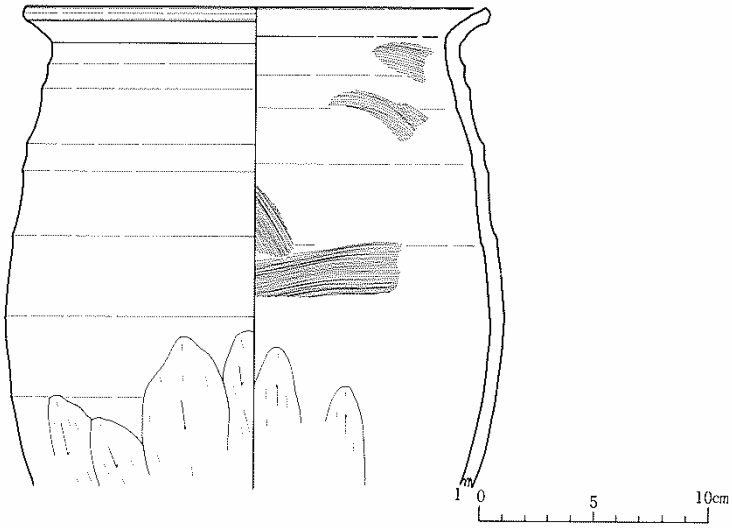
〔柱穴〕住居内から8個のピットが検出されている。配置関係からピット2･3･6について柱



ピット No.	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ(cm)	10	7	6	8	10	8	9	10

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	炭化物を少量含む
2	10YR3/4暗褐色シルト	地山ブロック、炭化物を少量含む
3		

第21図　第16住居跡



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	16 住 床	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ロクロ ナデ 手持ヘラケズリ			19.8	21.6		106

第22図　第16住居跡出土遺物

穴の可能性も考えられるが、いずれも柱痕跡が認められず明確ではない。

〔カマド〕東壁中央やや北寄りに燃焼部底面の一部と思われる焼面が検出された。焼面の規模は平面形が円形を呈し径44cmで軸方向は住居の平面形から推定してＥ－30°－Ｓである。

〔出土遺物〕床面、住居内堆積土から土師器が出土している。

第17住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＣ－25の地上面で確認された。

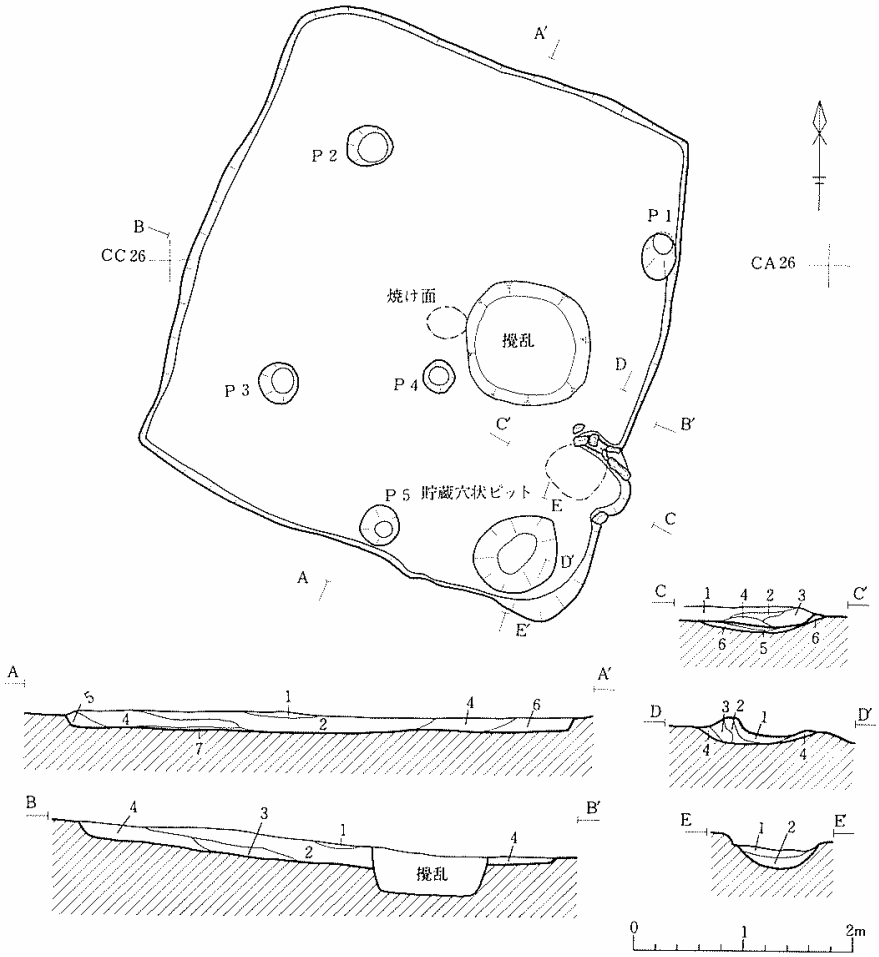
〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が4.6m、短軸が4.3mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は7枚の層に分かれる。第1層は極暗褐色土第2層は黒褐色土で住居の中央部にレンズ状に堆積している。第3～6層は主に黒色や黒褐色土で壁際に斜めに流れ込むように堆積している。第7層は黒色土であり床直上に薄く堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い西壁で15～19cmである。地山を壁としており、立ち上りは急である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はほぼ平坦で全体にかたくしまっており中央部に長軸37cm、短軸28cmの楕円形を呈する焼面が検出されている。

〔柱穴〕住居内から6個のピットが検出されている。これらのうちピット2・3は住居の対角線上にあり、またピット1は東壁際でピット2に対応する位置にあることからこれらのピットは主柱穴の可能性がある。



ピットNo.	1	2	3	4	5
深さ(cm)	29	31	26	16	24
土色・土性	10YR2/2 黒褐色砂質シルト	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	10YR2/2 黒褐色シルト	10YR2/3 黒褐色シルト

A－A′ B－B′

層No.	土色・土性	備考
1	7.5YR2/3 極暗褐色砂質シルト	
2	7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト	
3	10YR2/1 黒色砂質シルト	地山粒を若干含む
4	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	
5	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	地山粒を含む
6	10YR2/2 黒褐色砂質シルト	
7	10YR2/1 黒色砂質シルト	

C－C′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	
2	10YR2/2 黒褐色砂質シルト	カマド崩壊土をブロック状に含む
3	10YR3/3 黒褐色砂質シルト	
4	7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト	
5	7.5YR4/6 褐色粘土質シルト	上面が赤変
6	7.5YR2/3 極暗褐色粘土質シルト	

E－E′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色砂質シルト	土器を多量に含む
2	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	土器を多量に含む

D－D′

層No.	土色・土性	備考
1	7.5YR4/6 褐色粘土質シルト	上面が赤変
2	10YR3/3 暗褐色シルト	
3	10YR5/6 黄褐色粘土質シルト	
4	7.5YR2/3 極暗褐色粘土質シルト	

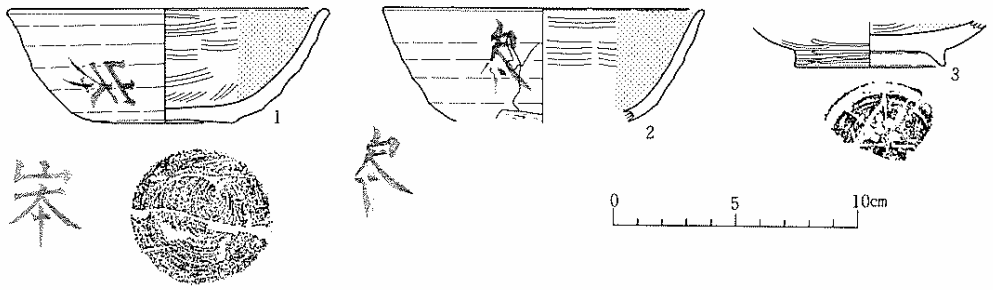
第23図　第17住居跡

〔カマド〕東壁中央のやや南寄りに付設されている。軸方向はほぼＥ－40°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が約80㎝、奥行きが約80㎝である。内部はカマド崩壊土が堆積している。側壁は左側だけが残存しておりその内面とカマド底面が赤変している。

カマドの構築方法はあらかじめカマドの付設位置に長軸が123㎝、短軸が107㎝、深さが12㎝の楕円形の掘り方をいく分壁を抉るように掘り底面にシルト質の土を敷き詰めさらに礫を芯にして粘土を貼り付けて構築している。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の東南隅から検出されている。これはカマドの右脇に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が約80㎝、短軸が約70㎝、深さが約25㎝である。壁の立ち上りはゆるやかで底面は皿状を呈する。堆積土は2枚の層に分かれ第1層から土師器、須恵器片が出土している。

〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土して



番号	地区層位	種別	器 外面	器 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	17 住 床	土師器 坏	ロクロ 墨書（山本）	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り	4.7	12.8		5.5	28
2	17住カマド内	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ墨書(山本)	ヘラミガキ黒色処理			(13.0)			129
3	17住カマド内	土師器高台付坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ黒色処理	ナデ				(6.0)	130

第24図　第17住居跡出土遺物

いる。

第18住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＣ－19の地山面で確認された。

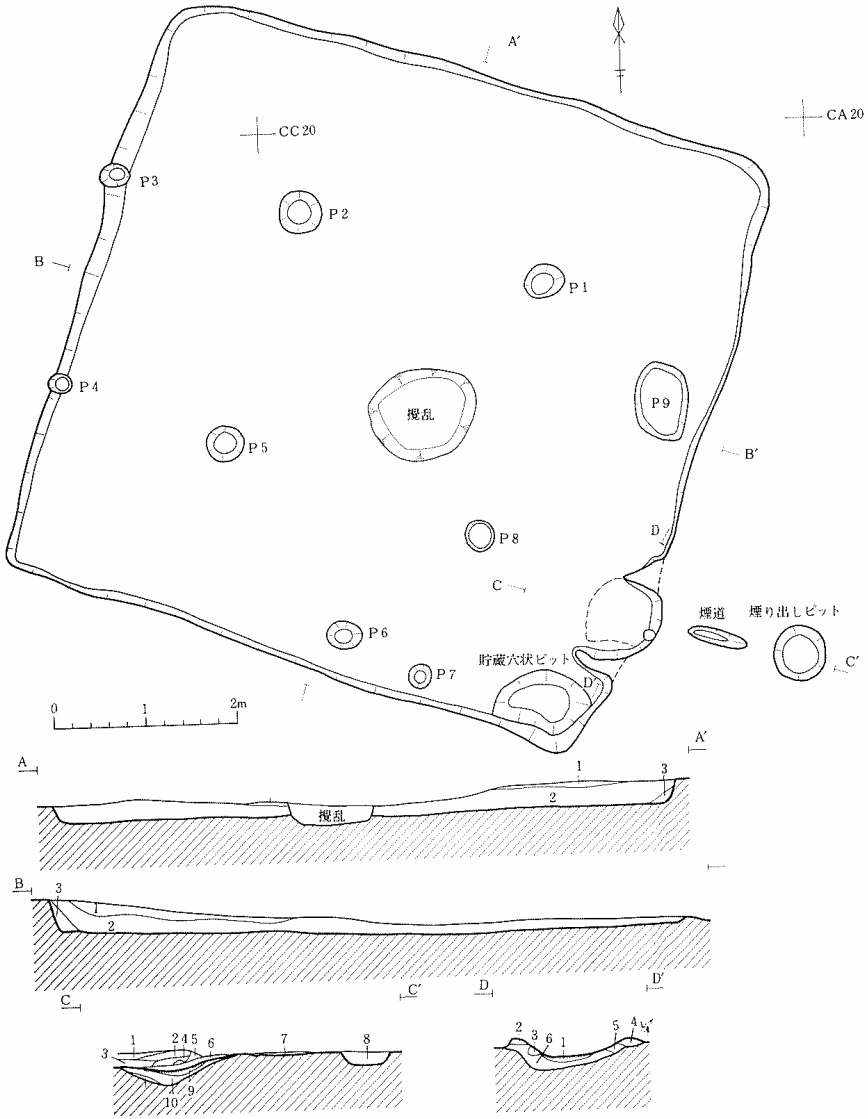
〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が7.0㎝、短軸が約6.8mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は3枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土で住居内のほぼ全域に北西寄りにレンズ状に堆積している。第2層は黒褐色土で住居内のほぼ全域に堆積している。第3層は黒褐色土で壁際に斜めに堆積している。

〔壁〕地山を壁としており壁高は最も高い北壁で38～45㎝である。各辺とも立ち上りは急である。

〔床〕地山を床としている。ほぼ平坦で全体にかたくしまりがある。

〔柱穴〕住居内から10個のピットが検出されている。このうちピット1・2・5・8は住居の



第25図　第18住居跡

ピット No.	1	2	3	4
深さ(cm)	34	8	79	50
土色・土性	10YR2/3シルト	10YR2/3シルト	10YR2/3シルト	10YR2/3シルト
5	6	7	8	9
21	12	10	21	21
10YR2/3シルト			10YR2/3シルト	10YR2/3シルト

A－A′ B－B′

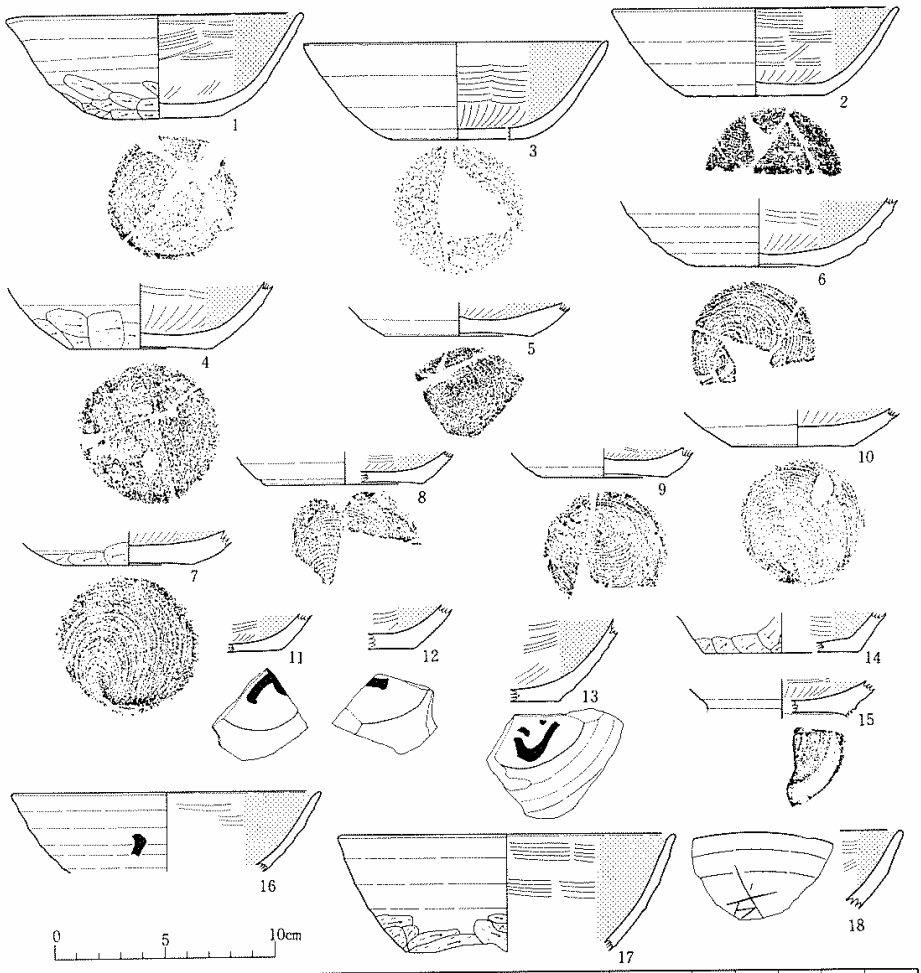
層 No.	土色・土性	備考
1	7.5YR 2/2 砂質シルト	
2	7.5YR 3/2 シルト	
3	7.5YR 2/1 シルト	

C－C′

層 No.	土色・土性	備考
1	7.5YR3/2 シルト	堆積層2層に同じ
2	10YR4/3 シルト	10YR5/6粘土を多量に含む
3	10YR3/2 砂質シルト	
4	10YR3/4 砂質シルト	10YR5/6粘土を多量に含む
5	7.5YR5/6 シルト	カマド崩壊土
6	5YR3/6 砂質シルト	カマド内堆積土
7	7.5YR2/3 砂質シルト	煙道内堆積土（焼土）
8	7.5YR2/2 砂質シルト	煙出ピット内堆積土
9	10YR4/6 シルト粘土	焼けの及んだ部分
10	10YR3/3 砂質シルト	
11	10YR2/2 粘土	

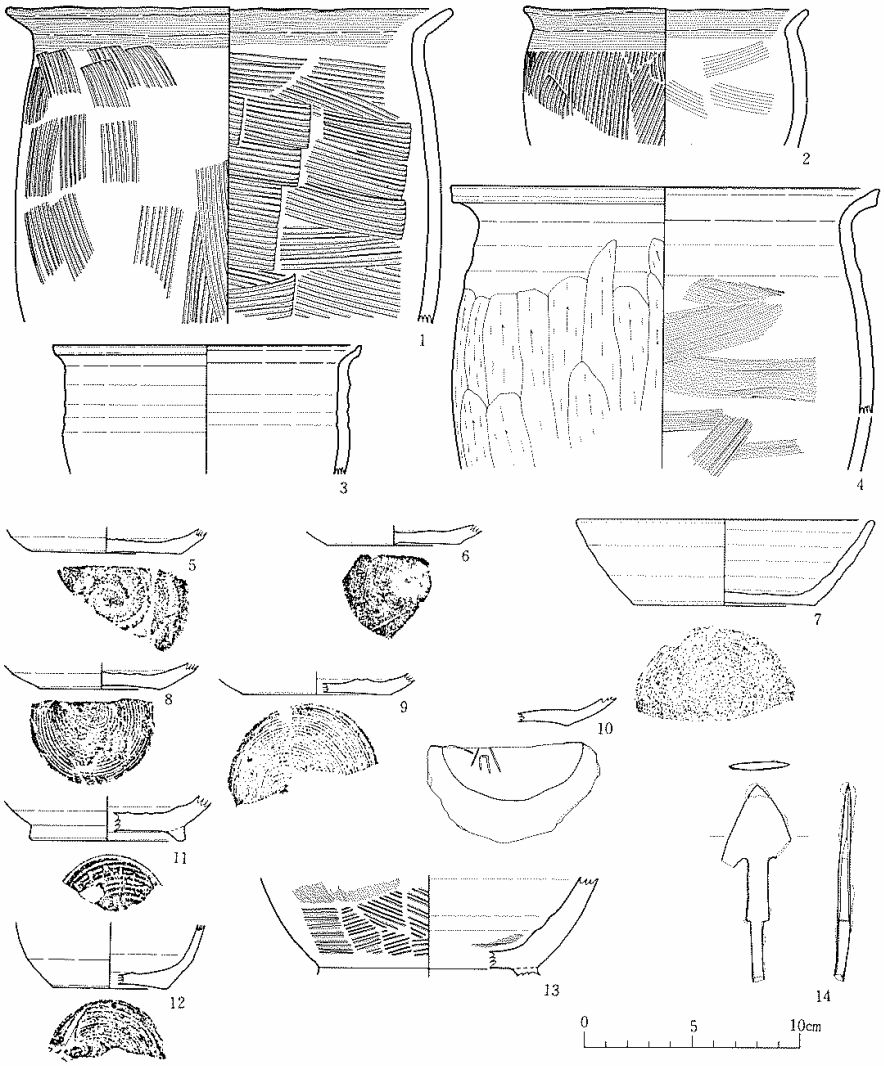
D－D′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR4/6 シルト粘土	焼けの及んだ部分
2	10YR7/4 シルト粘土	かたくしまりがある
3	10YR6/8 シルト粘土	かたくしまりがある
4	10YR3/4 シルト	
5	10YR7/4 シルト粘土	かたくしまりがある
6	10YR3/3 砂質シルト	



番号	地区層位	種別	調 外面	整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り→手持ヘラケズリ	4.7	13.5		5.5	21
2	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理		4.0	12.8		6.3	13
3	18住カマド内	土 師 器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ	4.4	13.7		6.0	199
4	18 住 床	土 師 器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ				6.3	88
5	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り				(6.7)	118
6	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り				5.5	115
7	18 住 埋 1	土 師 器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り				5.9	114
8	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り				(7.0)	117
9	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り				5.6	116
10	18 住 埋 1	土 師 器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り				5.5	39
11	18 住 埋 2	土 師 器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ 墨書	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ					44
12	18 住 埋 1	土 師 器 坏	ロクロ 墨 書	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り					45
13	18 住 埋 1	土 師 器 坏	ロクロ 墨 書	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り					41
14	18 住 埋 2	土 師 器(坏)	ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	むしろ目				(6.9)	119
15	18 住 埋 2	土師器高台付坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り					120
16	18 住 埋 1	土 師 器(坏)	ロクロ 墨 書	ヘラミガキ黒色処理			13.8			134
17	18 住 埋 2	土 師 器(坏)	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理			(15.0)			46
18	18 住 埋 1	土 師 器(坏)	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理						42

第26図　第18住居跡出土遺物(1)



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	18 住 床	土師器 甕	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目			20.3	19.6		131
2	18 住 埋 2	土師器 甕	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ナデ			12.8	13.1		82
3	18 住 埋 2	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(14.1)	(13.2)		85
4	18 住 貯蔵穴	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ロクロ ナデ			19.6	19.4		82
5	18 住 埋 2	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り				6.8	123
6	18 住 埋 2	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り				6.1	124
7	18 住 埋 2	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.0	13.6		8.4	24
8	18住カマド内	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				5.6	122
9	18住カマド掘り方	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				6.8	128
10	18 住 埋 2	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				6.5	38
11	18 住 埋 2	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				(6.9)	125
12	18住カマド崩壊土	須恵器	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				5.3	127
13	18 住 埋 1	須恵器 壺	ナデ タタキ	ロクロ ナデ	回転糸切り					126
14	18 住 埋 2	鉄 鏃								167

第27図　第18住居跡出土遺物(2)

対角線上にあり、規模も一定していることから主柱穴と考えられる。また、西壁において主柱穴に並ぶ位置に間隔がややせマーク規模が小さめなピット3とピット4があり補助的もしくは何らかの施設に対応する柱穴の可能性がある。

〔カマド〕東壁中央南寄りに燃焼部と煙道部の一部底面、煙出しピットが検出されている。軸方向はほぼＥ－20°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が焼く140㎝、奥行きが約80㎝である。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積しており燃焼部底面は赤変している。煙道部はその底面と思われる浅い構状の落ち込みが残存しており、堆積土は極暗褐色土1枚の焼土である。煙出しピットは平面形が円形を呈し直径56㎝、深さが約14㎝で堆積土は黒褐色土1枚である。

カマドはあらかじめカマドの付設位置に長軸が約150㎝、短軸が135㎝、深さが約32㎝の楕円形を呈する掘り粘土を貼りつけて構築されている。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の南東隅から検出されている。これはカマドの右脇に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸約100㎝、短軸64㎝、深さが約15㎝である。壁の立ち上がりはゆるやかで底面は皿状を呈している。

〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土から土師器、須恵器、鉄製品が出土している。

第19住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＣＤ－15の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕隅丸方形を呈する。規模は長軸が5.9mで、短軸が5.5㎝である。

〔堆積土〕住居堆積土は4枚の層分かれる。第1・2層は黒色。暗褐色土で住居の中央部にレンズ状に堆積している。第3層は褐色土で住居内の全域に堆積している。第4層は黒色土で北壁際に斜めに堆積している。

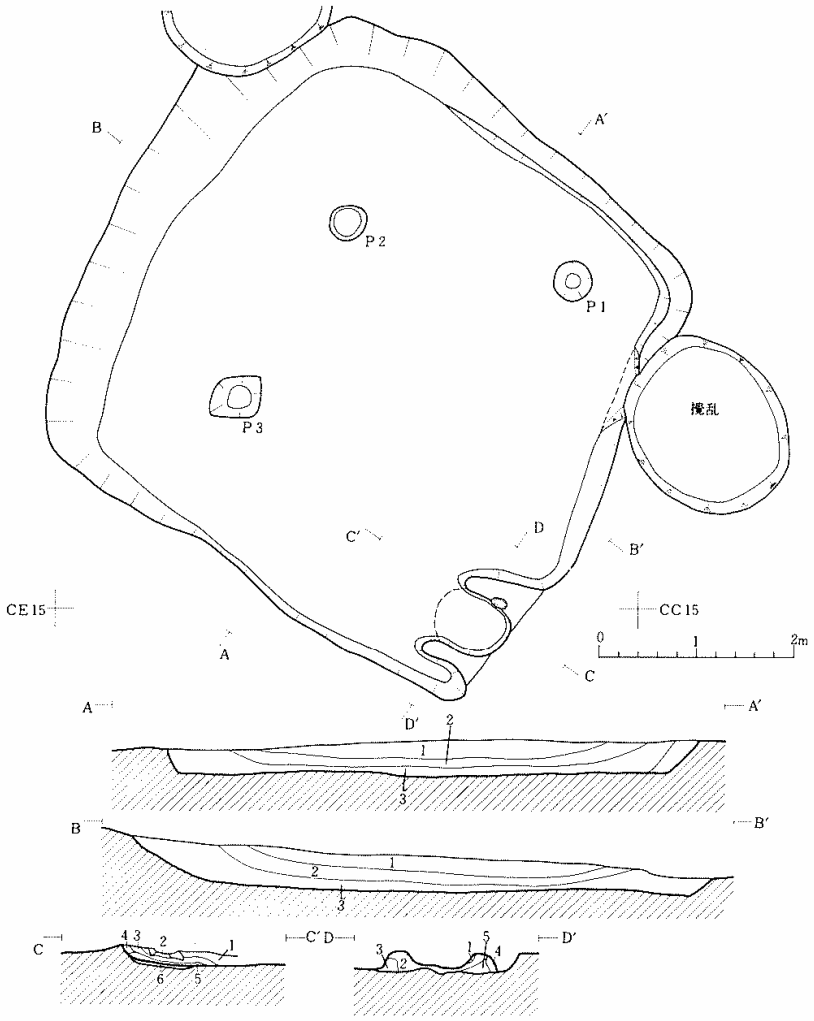
〔壁〕壁高は最も高い西壁で約42～51㎝である。地山を壁としており、立ち上がりは南壁を除き他はゆるやかで特に西壁で著しい。

〔床〕地山面を床としている。床面の状況はかたくしまりほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居内から3個のピットが検出されている。これらのピット2・3は住居内の対角線にあり、規模も一定していることから主柱穴と考えられる。但し東辺側に対応する柱穴は検出されていない。

〔カマド〕東壁の南寄りに付設されている。軸方向はＥ－40°－Ｓで規模は幅約120㎝、奥行き約80㎝である。内部は焼土、壁崩落土、赤変し角礫などが堆積しており側壁の内面及び燃焼部底面は赤変している。側壁から底面にかけての構築方法は粘土貼り付けによるおのである。

〔出土遺物〕カマド、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土している。



A - A′ B - B′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR2/1黒色シルト	
2	10YR3/4暗褐色シルト	焼土 炭化物を多く含む
3	10YR4/4褐色シルト	ややしまり有り、炭化物を含む
4	10YR2/1黒色シルト	礫を含む

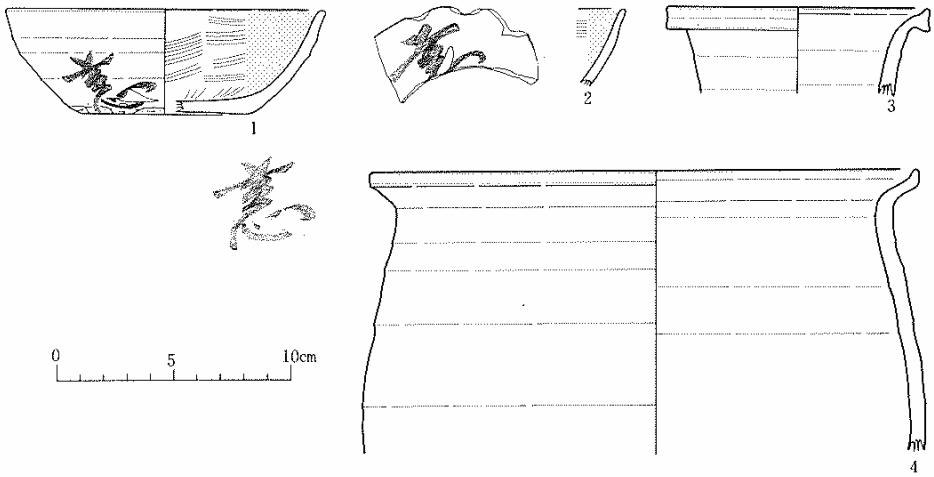
C - C′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR4/6褐色シルト粘土	炭化物を含む
2	10YR4/4褐色シルト	焼土、炭化物を含む
3	5YR4/8赤褐色土	
4	5YR5/6明赤褐色土	
5	5YR6/6橙色土	
6	7.5YR4/6褐色シルト粘土	

D - D′

層 No.	土色・土性	備考
1	10YR3/2黒褐色シルト	撹乱
2	7.5YR4/6褐色シルト粘土	加熱により赤変
3	10YR2/3黒褐色シルト	
4	10YR2/3黒褐色シルト	
5	10YR2/3黒褐色シルト	

第28図　第19住居跡



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	19 住 埋 3	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ 墨書(慈)	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り	(44.5)	(13.4)		(7.0)	35
2	19 住 埋 3	土師器 坏	ロクロ 墨書(慈)	ヘラミガキ 黒色処理						34
3	19住カマド崩壊土	須恵器 壺	ロクロ	ロクロ			(19.9)			151
4	19住カマド崩壊土	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(23.1)			7

第29図　第19住居跡出土遺物

第20住居跡

〔位置・確認面〕 D－W区・CE－28の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 後世の撹乱のため一部こわされているが、残存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は長軸が4.3m、短軸が4.0cmと推定される。

〔堆積土〕 住居内堆積土は2枚の層に分かれる。第1層は暗褐色土で住居残存部全域に堆積している。

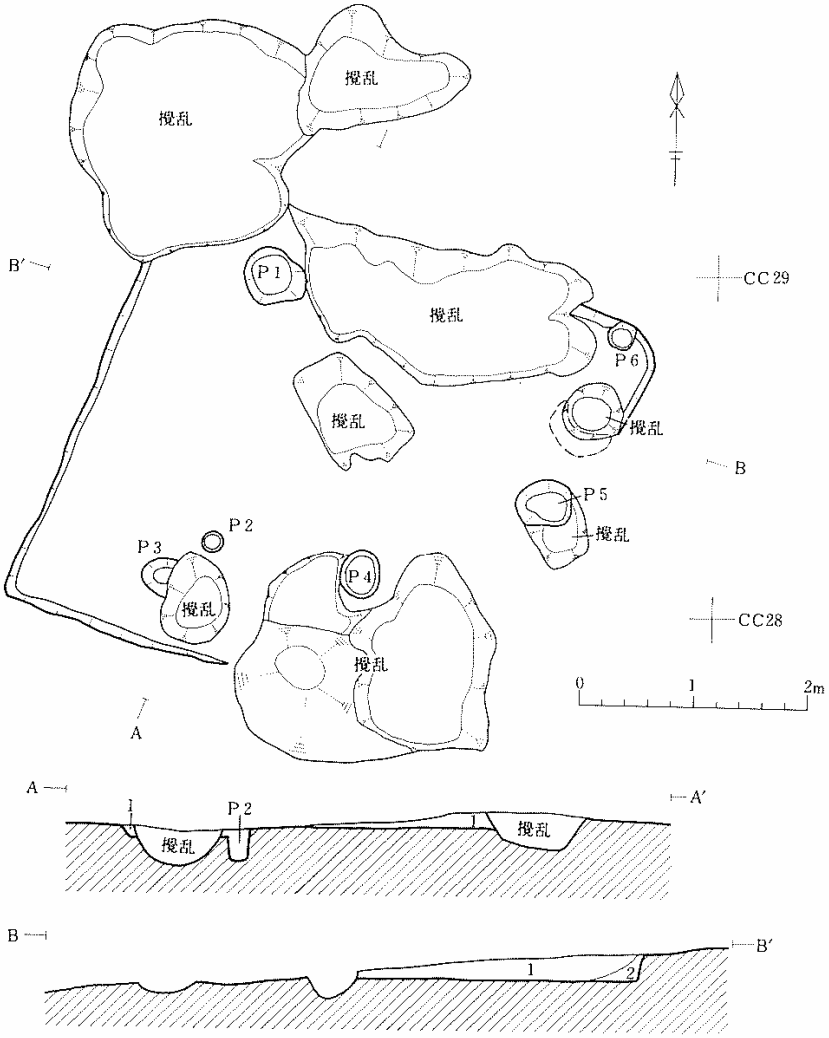
〔壁〕 壁高は最も高い西壁で約15～24cmである。地山を境としており、立ち上りは西壁が急であるがその他はなだらかである。

〔床〕 地山を床としている。床面の状況はしまりがあり平坦である。

〔柱穴〕 住居内から6個のピットが検出されている。しかし、これらは大ききや配置に規則性がみられず柱穴がどうか明らかでない。

〔カマド〕 東壁北寄りに焼面が検出された。焼面は平面形が円形を呈するものと推定されるが約半分ほどは後世の撹乱を受けている。残存部分から径約60cmと推定されるもので軸方向はE－20°－Sと推定される。この焼面は位置関係からカマド底面と考えられる。

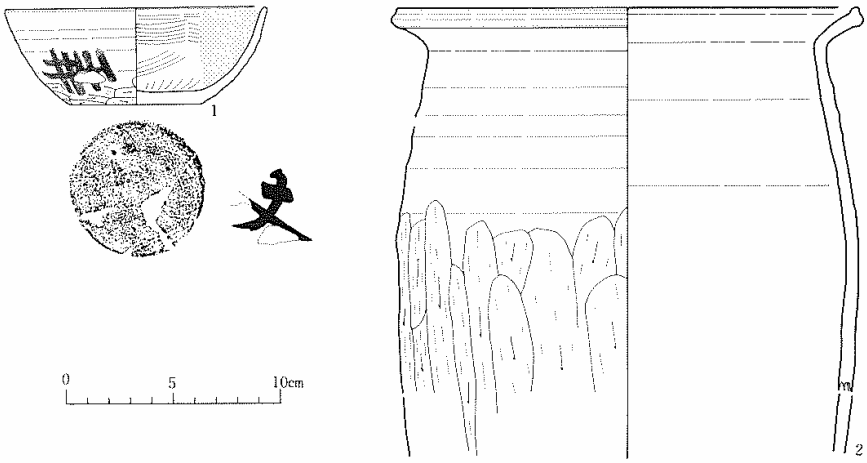
〔出土遺物〕 床面から土師器が出土している。



ピット No	1	2	3	4	5	6
深さ（cm）	12	24	5	28	22	17
土色・土性	10YR3/2シルト	10YR3/2シルト	10YR3/2シルト	10YR3/2シルト	10YR3/2シルト	10YR3/3暗褐色シルト

層 No	土色・土性	備考
1	10YR2/3 褐色シルト	土器を含む
2	10YR4/6 褐色シルト	地山ブロック状に含む

第30図　第20住居跡



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	20 住床	土師器・坏	ロクロ 手持ヘラケズリ黒点(?)	ヘラミガキ黒色処理	ヘラ切り黒点(大)	4.5	12.0		6.3	30
2	20 住床	土師器・甕	ロクロ ケズリ	ロクロ			21.1	21.1		70

層No	土色・土性	備考
1	10YR 2/1 黒色シルト	
2	10YR 3/4 暗褐色シルト	
3	10YR 4/4 褐色シルト	焼土 炭化物を多く含む
4	10YR 2/1 黒色シルト	ややしまり有り、

第31図　第20住居跡出土遺物

第21住居跡

〔位置・確認面・重複〕 D－Ⅳ区・CA－6の第8号住居跡床面下で確認された。

〔平面形・規模〕 方形を呈する。規模は長軸が3.2m、短軸が2.9mである。

〔堆積土〕 住居内堆積土1枚の層からなり部分的に地山混りの暗褐色土で炭化物や焼土を含む層で人為的に埋め戻した可能性がある。

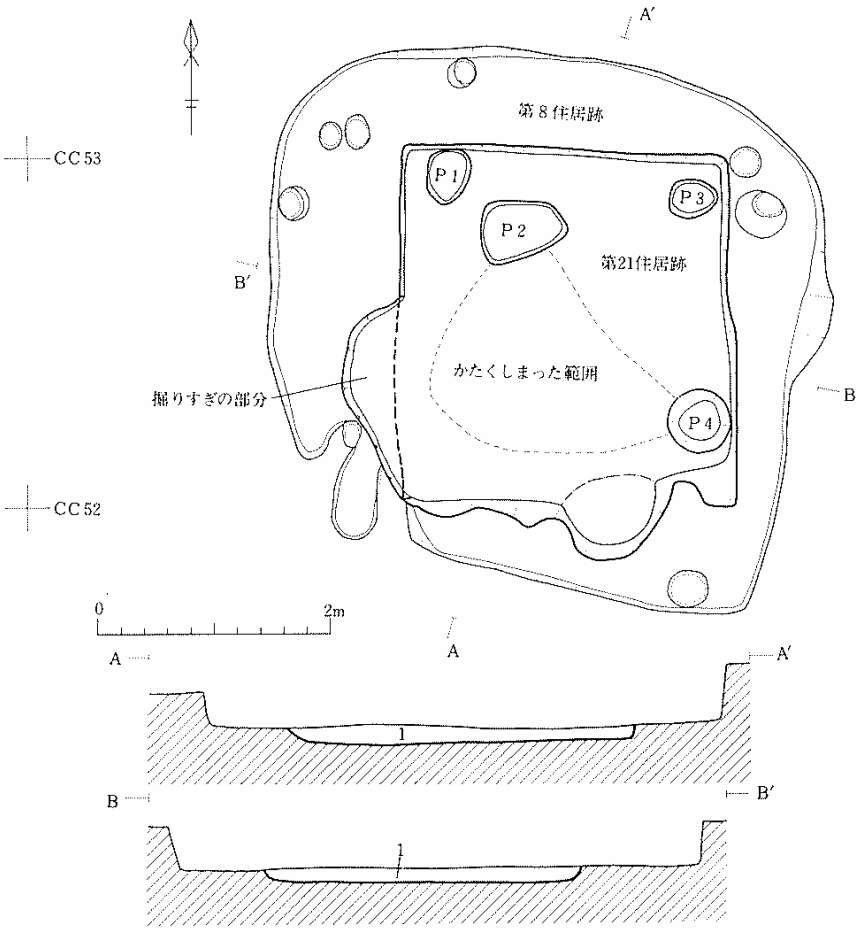
〔壁〕 壁高は最も高い西壁で約10㎝である。地山を壁としており立ち上りはゆるやかである。

〔床〕 地山を床としている。床面の状況はほぼ平坦で中央部はかたくしまっている。

〔柱穴〕 住居内から4個のピットが検出されている。いずれも浅く明瞭な掘り方とはいえず、柱穴かどうか不明である。

〔カマド〕 南壁中央やや東寄りの壁の一部が半円状に外側に張り出しており内側底面は赤変しておりカマドの燃焼部底面と考えられる。この張り出し部は幅約100㎝、奥行きが約60㎝で、軸方向は住居の長軸から推定するとS－0°である。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居の南東隅で検出された（P_4）。カマド左脇に位置しており、軸長約60㎝の円形を呈する。深さは約10㎝で立ち上りはゆるやかである。



層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色シルト	炭化物、焼土粒、地山土を含む

ピットNo.	1	2	3	4
深さ(cm)	5	8	7	10

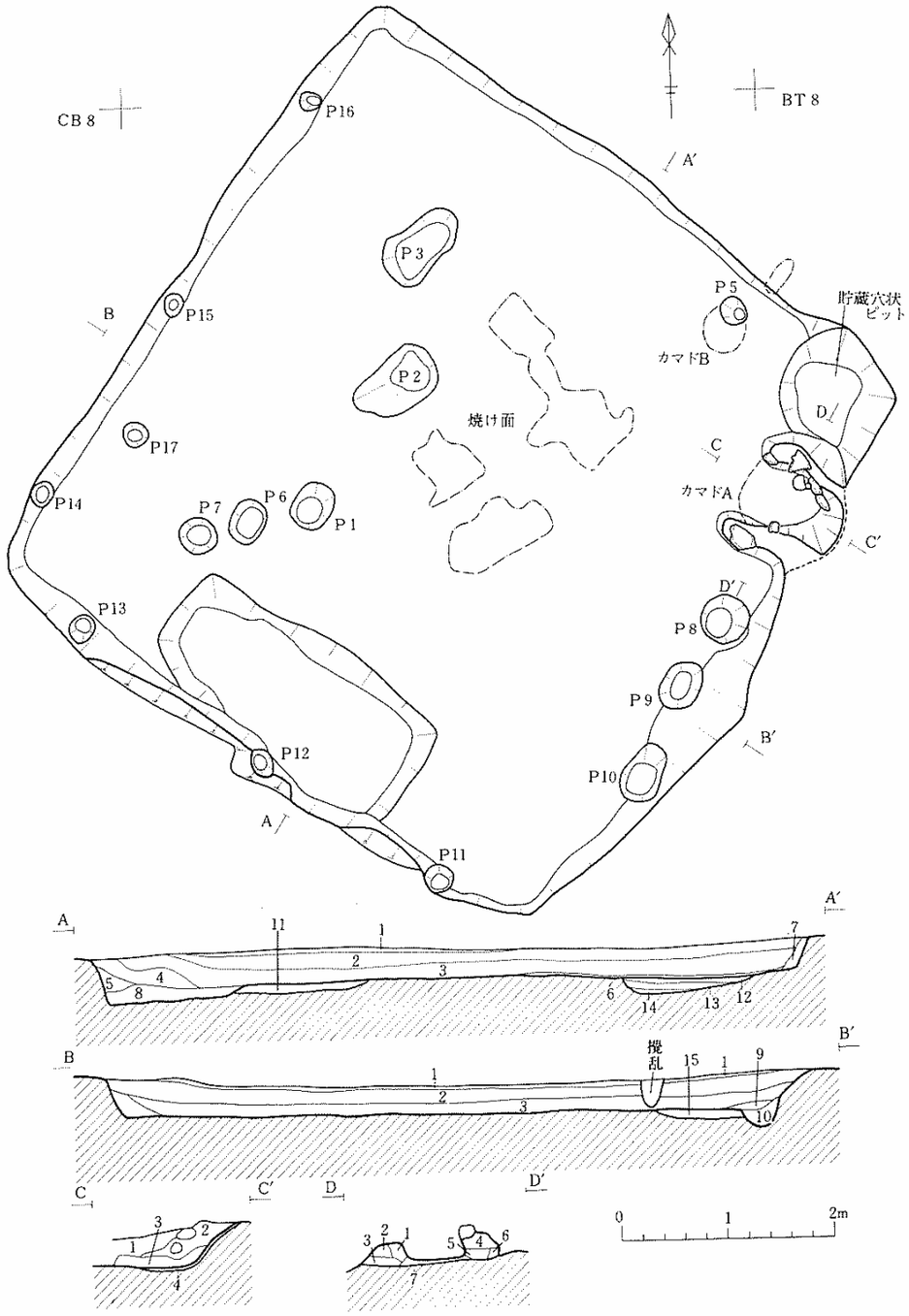
第32図　第21住居跡

第22号住居跡

〔位置・確認面〕 D－Ⅳ区・CA－6の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 ほぼ正方形を呈する。長軸は6.6mである。

〔堆積土〕 住居内堆積土は9枚の層に分かれる。第1層は黒色土、第2・3層は暗褐色土でほぼ全域に水平に堆積している。第4・5・7・8・9層は主に褐色土で住居の壁際に斜めに堆積している。第6層は褐色土で住居の北側の床面上に薄く堆積している。



第33図　第22住居跡

A－A′ B－B′

層No	土色・土性	備考
1	7.5YR3/1 黒色シルト	
2	10YR3/4 暗褐色砂質シルト	
3	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	
4	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	
5	10YR4/4 褐色砂質シルト	
6	7.5YR4/4 褐色砂質シルト	焼土、木炭を多く含む、やや粘性あり
7	10YR3/4 暗褐色砂質シルト	地山崩壊土
8	7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト	木炭、焼土を若干含む
9	10YR4/4 褐色砂質シルト	
10	10YR4/3 黄褐色シルト	にぶい黄褐色
11	10YR4/4 褐色シルト	焼土や黒褐色土(10YR2/3)をブロック状に含む
12	10YR3/3 暗褐色シルト	木炭を含む
13	10YR5/6 黄褐色砂質シルト	
14	7.5YR5/6 黄褐色砂質シルト	

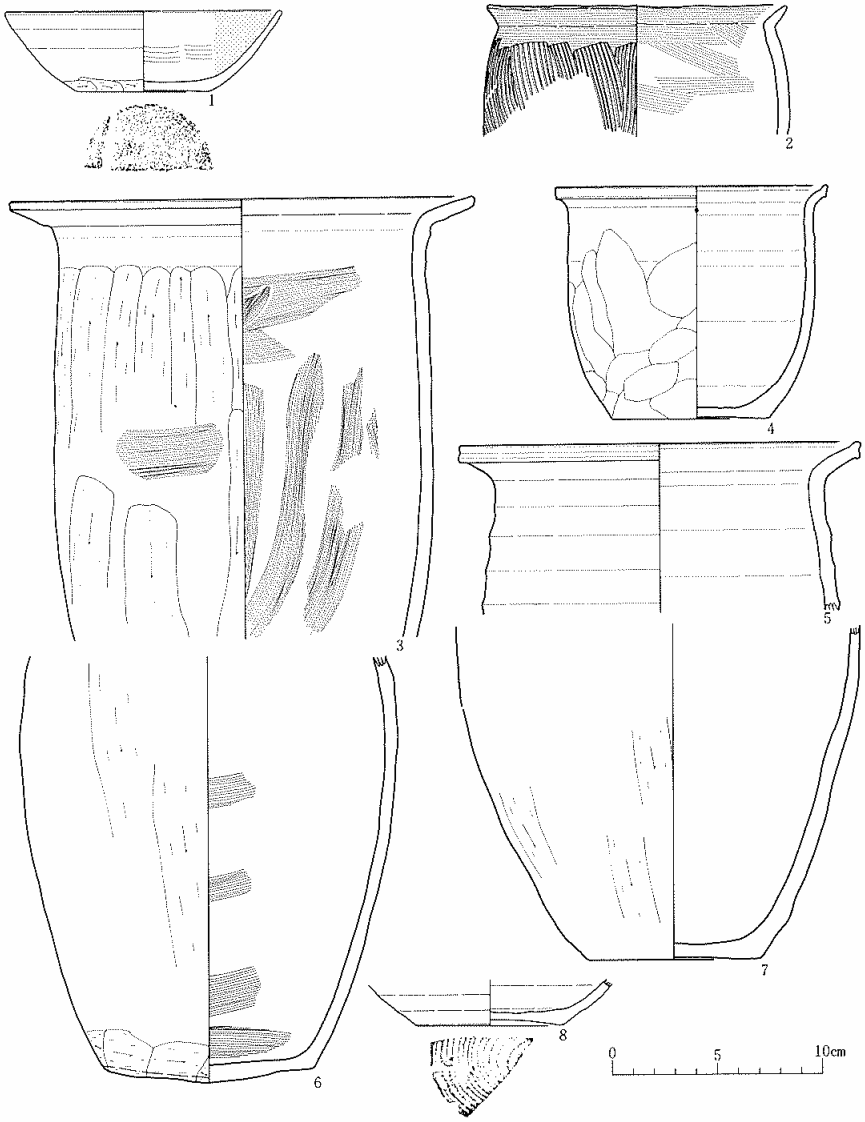
C－C′

層No	土色・土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	住居内堆積土3層
2	10YR7/8 黄橙色砂質シルト	カマド崩壊土
3	7.5YR3/4 暗褐色シルト	焼土(暗赤褐色砂質シルト)を含む
4	7.5YR4/4 褐色シルト	焼土

D－D′

層No	土色・土性	備考
1	7.5YR 5/6 シルト	粘性あり
2	10 YR 5/8 シルト	粘性あり
3	10 YR 4/3 シルト	部分的に焼土を含む 粘性あり
4	10 YR 4/4 シルト	粘性あり
5	10 YR 5/6 シルト	粘性あり
6	10 YR 4/3 シルト	粘性あり
7	7.5YR 4/4 シルト	粘性あり

ピットNo	1	2	3	4
深さ(cm)	36	15	26	
土色・土性	10YR3/3 シルト	10YR3/3 シルト	10YR3/4 シルト	
	5	6	7	8
	11	37	14	29
		10YR3/4 シルト	10YR2/3シルト 焼土ブロックを含む	10YR4/3 シルト
	9	10	11	12
	23	34	36	3
	10YR4/3 シルト	10YR3/3 シルト	10YR3/2 シルト	10YR3/3 シルト
	13	14	15	16
	7	47	24	19
	10YR3/4 シルト	10YR3/4 シルト	10YR3/4 シルト	10YR4/4 シルト



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	22 住 床	土師器・坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ	3.8	12.9		6.2	194
2	22 住 貯蔵穴	土師器・甕	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ナデ			(14.0)	(14.5)		80
3	22 住 カマド内	土師器・甕	手持ヘラケズリ	ナデ			(21.7)	(17.9)		81
4	22 住 埋 3	土師器・甕	ロクロ 火はね	ロクロ	回転糸切り	11.1	12.7	11.7	7.4	77
5	22住カマド側壁内	土師器・甕	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		(18.7)			79
6	22 住 カマド	土師器・甕	手持ヘラケズリ	ナデ	不明			17.9	9.8	133
7	22 住 カマド内	土師器・甕	手持ヘラケズリ	不明					8.2	64
8	22 住 11 層	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				(6.8)	119

第34図　第22住居跡出土遺物(1)

〔壁〕壁高は最も高い西壁で39～49㎝である。地山を壁としており、立ち上りは東壁はゆるやかであるが他の壁は急である。

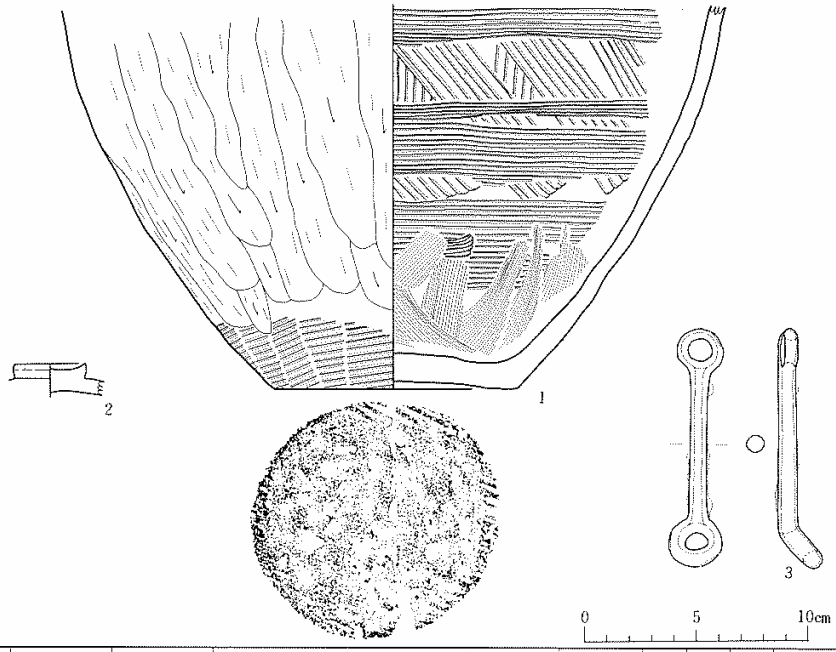
〔床〕地山を床としている。床面の状況はほぼ平坦であり、全体的にかたく特に中央部において著しい。なお床面のほぼ中央部に不整な形の焼面が３ヶ所認められる。

〔柱穴〕住居内から17個のピットが検出されている。これらの内ピット3・6・10は配置関係に対応性があり規模も一定していることから主柱穴の可能性がある。またピット11～16は西辺と南辺の壁際にある小さめのもので、各々の間隔に規則性があることから壁柱穴と考えられる。

〔カマド〕2基検出されている。カマドＡは、東壁の北寄りに付設されており、軸方向はほぼＥ－40°－Ｓで燃焼部の規模は幅が1.2m、奥行きが1.0mである。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積しており、側壁の内側及び燃焼部底面は赤変している。

カマドの構築方法はカマドの付設位置に長軸約140㎝、短軸約90㎝、深さ4㎝の楕円形の掘り方を壁の一部を抉るように掘り込み、その部分に粘土を貼りつけて構築している。

カマドＢは北壁の東寄りにあり燃焼部底面および煙道底面と思われる焼け面が残存したものである。軸方向はほぼＮ－40°－Ｅである。



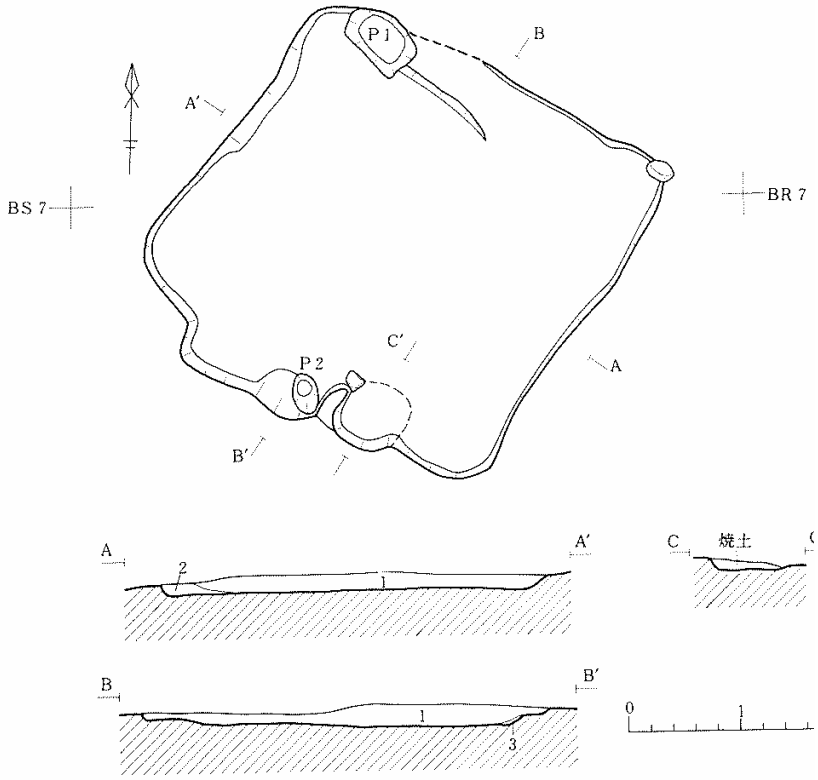
番号	地区	層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	22	住	床	須恵器 甕	ケズリ タタキ	ハケ目 ナデ	不明			10.8	63
2	22	住	11	須恵器 蓋	ロクロ	ロクロ					195
3	22	住	3	鉄製品はみ							169

第35図　第22住居跡出土遺物(2)

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の北東隅から検出された。これはカマドＡの左脇に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸が約150㎝、短軸が約108㎝、深さが約15㎝である。壁の立ち上りはゆるやかで底面は皿状を呈する。中から土師器、須恵器が出土している。
〔その他の施設〕南辺のほぼ中央の壁際に平面に長方形を呈する掘り込みがる。規模は長軸が約3.0㎝、短軸約1.5㎝、深さが0.2㎝である。
〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居掘り方埋土、住居内堆積土から土師器、須恵器、鉄製品が出土している。

第23住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＢＳ－6の地山面で確認された。
〔平面形・規模〕ほぼ正方形を呈する。軸長は3.5㎡である。



A-A′ B-B′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	炭化物を含む
2	10YR2/3 黒褐色	小礫を含む
3	10YR4/3 黄褐色シルト	

ピットNo.	1	2
深さ(cm)	18	11
土色・土性		10YR4/3 黄褐色シルト

第36図　第23住居跡

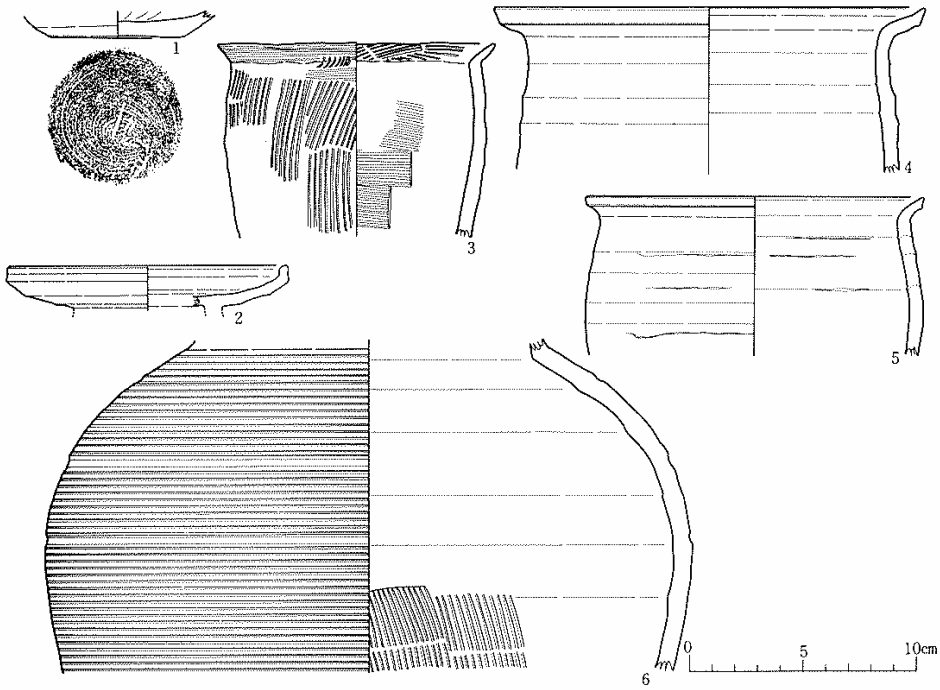
〔堆積土〕住居内堆積土は3枚の層に分かれる。第1層は暗褐色土で住居内の全域に分布している。第2層は黒褐色土で壁際に斜めに堆積している。第3層は壁の崩壊土である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はしまりがありほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居内から2個のピットが検出されているが配置や規模に規則性がなく柱穴かどうか明らかでない。

〔カマド〕南壁中央やや東寄りに検出されている。軸方向はS－30°－Wである。燃焼部の規模は左側壁が失われているため明確ではないが残存状況から幅が約90㎝、奥行き約60㎝と推定される。内部は焼土が堆積しており、右側壁および底面にかけて赤変している。側壁は粘土貼り付けによって構築されている。

〔出土遺物〕床面、カマド内、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土している。



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	23 住 埋 1	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り		(12.1)		5.7	40
2	23 住	土師器台付皿	ロクロ	ロクロ			(12.1)			53
3	23 住 埋 1	土師器 甕	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ヘラナデ			(18.8)	(11.5)		59
4	23 住 埋 1	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(14.7)			57
5	23住カマド崩壊土	土師器 甕	ロクロ	ロクロ						58
6	23 住 埋 1	須恵器 甕	回転ハケ目	ハケ目				(28.5)		60

第37図　第23住居跡出土遺物

第24住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＰ－100の地山面で確認された。

〔重複〕第1掘立柱建物跡の主穴を切っている。（第52図）。

〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が4.4m、短軸が4.0mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は3枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土住居内の中央のレンズ状に堆積している。第2層は暗褐色土で住居内のほぼ全域に堆積している。第3層は褐色土で壁際に流れ込んだように斜めに堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い北壁で9～19cmである。大部分は地山を壁としているが、一部は第1掘立柱建物跡の柱穴埋土を壁としている。立ち上りはやや急である。

〔床〕主に地山を床としているが一部で第1掘立柱建物跡の柱穴の埋土を床としている箇所がある。床面の状況はほぼ平坦で全体的にかたくしまっている。なお、床面の中央部に小規模な焼面5箇所が検出されている。

〔柱穴〕住居内から3個のピットが検出されている。これらのうちピット1・2は住居の対角線上にあって形態・規模にまとまりが認められることから主柱穴と考えられる。ただし、東辺部分に対応する柱穴は検出されていない。なおピット2からは炭化材が出土している。

〔カマド〕東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は軸方向がＥ－40°－Ｓで規模は幅が約110cm、奥行きが約60cmである。燃焼部の側壁内面から底面にかけては加熱のため赤変している。

カマドの構築は長軸が約120cm、短軸が約90cm、深さが約15cm楕円の皿状を呈する掘り方に粘土を貼り付けて成形しており、側壁では河原石を芯として用いている。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の南東隅に検出されており、これはカマドの右脇に位置する。平面形は隅丸方形を呈するもので西側に階段状の張り出しを有する。規模は長軸が117cm、短軸が62cm、深さは床面から36cm、張り出しの底面から16cmで壁の立ち上りはゆるやかである。埋土は3枚の層に分かれ焼土や炭粒を多く含んでいる。

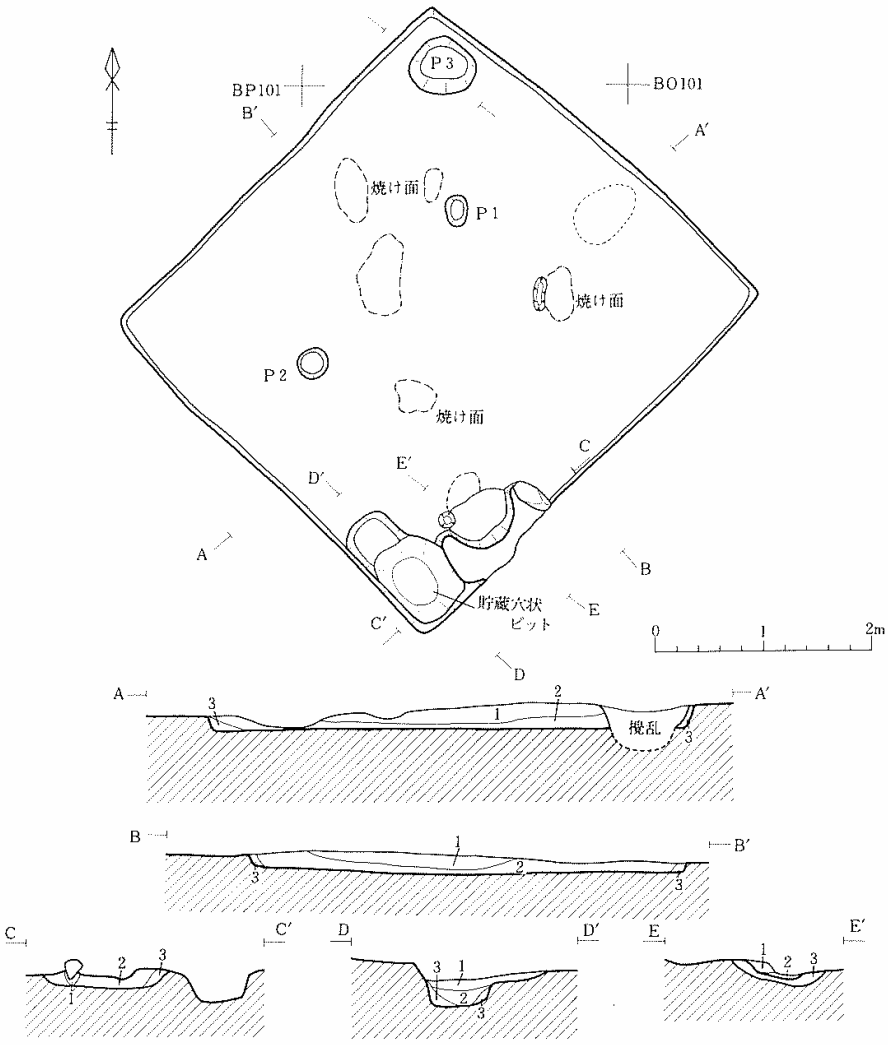
〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土から土師器、須恵器、鉄製品などが出土している。

第25住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＮ－97の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が7.6m、短軸が6.2mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は3枚の層に分かれる。第1章は暗褐色土で住居内の中央部にレンズ状に堆積している。第2層は黄褐色土で住居内の全域に堆積している。第3層は黄褐色土で



ピットNo	1	2	3
深さ(cm)	34	33	19

A-A′ B-B′

層No	土色・土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色シルト	赤色および黄色大山灰微粒子、炭化物を多量含む。粘性は弱く軟弱な土
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘土質地山層および焼土の小ブロック、炭化物を多量に含む。粘性は1より強く、部分的にかたい
3	10YR4/4 褐色粘土・シルト	粘性は1より弱く、しまりがない。いわゆる二角堆積である。

D-D′

層No	土色・土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色シルト	焼土・炭化物を多量に含む
2	10YR3/2 黒褐色シルト	焼土・炭化物を多量に含む
3	10YR5/3 黄褐色粘土・シルト	

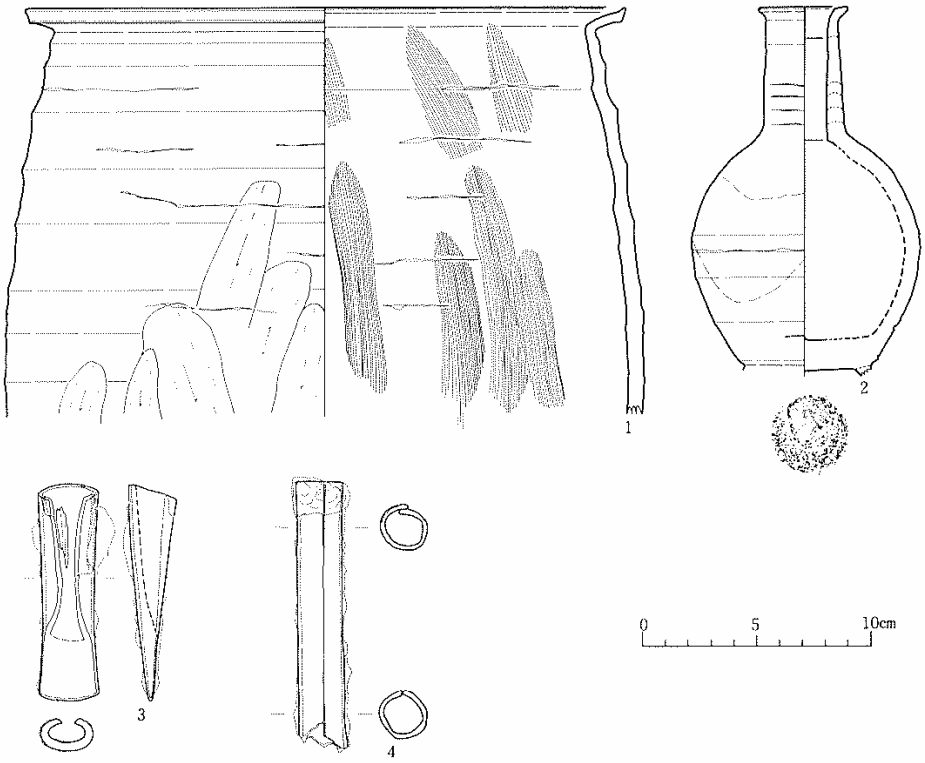
C-C′

1	10YR3/3 暗褐色粘土・シルト	粘性は弱いがしまっている。
2	5YR5/8 明赤褐色粘土	貼付した粘土が焼土化したもの。粘性は弱いがしまっている。
3	10YR5/6 黄褐色砂・シルト	粘性が強い。

E-E′

1	10YR3/4 明褐色シルト	粘土質地山粒、焼土粒を多量含む。粘性はあるが軟弱な土
2	5YR4/8 赤褐色粘土	炭化物を多量に含む。
3	5YR5/8 明赤褐色土・粘土	貼付した粘土が焼土化したもの、粘性は弱いがしまっている。

第38図　第24住居跡



番号	地区 層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	24住 カマド	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ロクロ ナデ			26.0	(27.8)		75
2	24 住 埋 1	須恵器長頸壺	ロクロ	ロクロ			3.7	9.9		51
3	24 住 床	鉄 斧								168
4	24 住 埋 1	鉄 製 品								171

第39図　第24住居跡出土遺物

際に斜めに堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い西壁で25～38㎝である。地山を壁としており、立ち上りは急である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況は全体に平坦であるが部分的にゆるい凸凹もみられる。全体的にしまりがあり特にカマドの周辺から中央部にかけてかたくしまっている。床面の中央やや東寄りには長軸210㎝、短軸100㎝の不整形な焼面が検出されている。

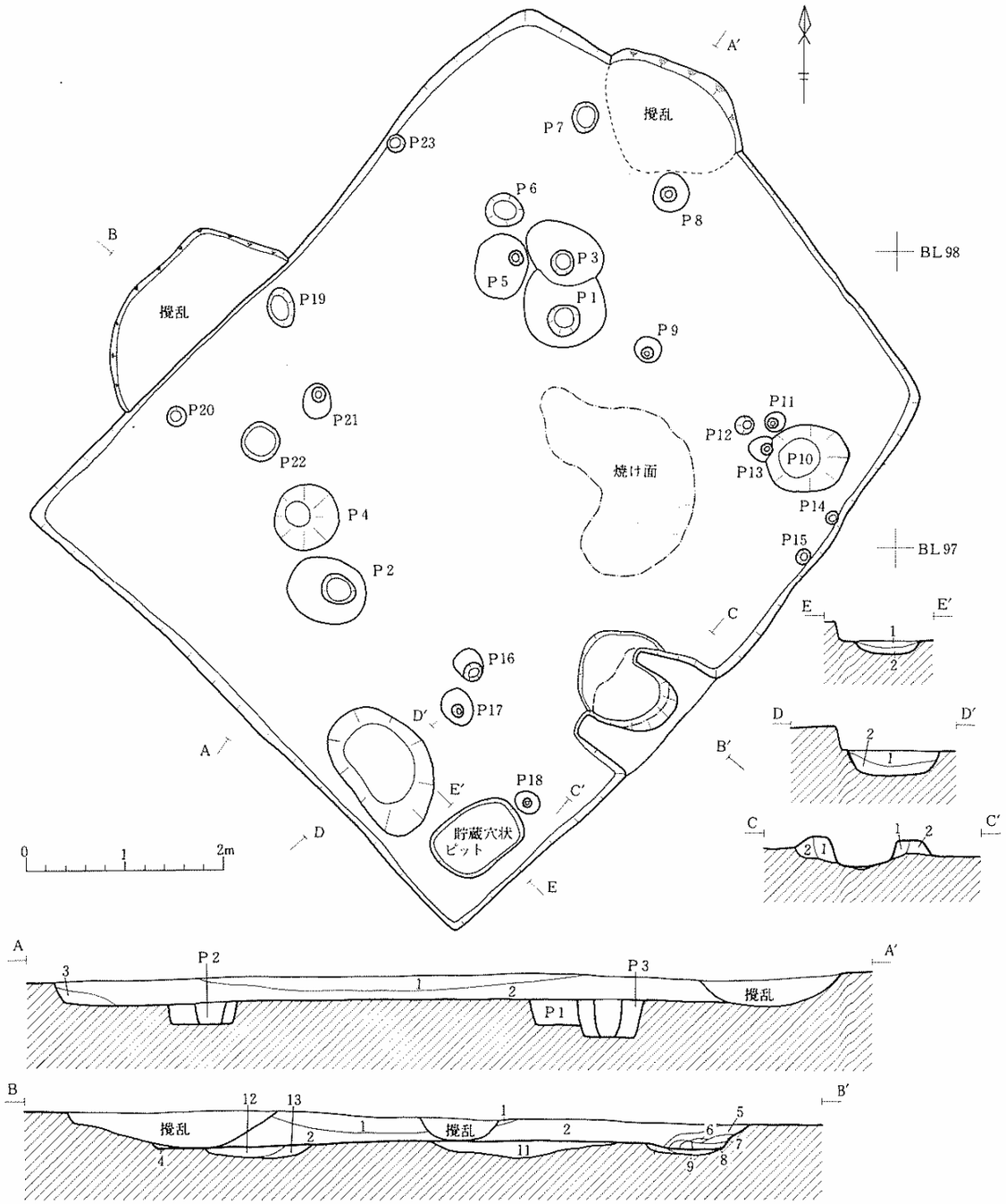
〔柱穴〕住居内から24個のピットが検出された。このうちピット3･4･10はほぼ住居の対角線上にあって、規模も一定しており、また柱痕跡が明瞭なものもあることから主柱穴と考えられる。

このほかピット3・4に近接もしくは重複しているピットに1・2がある。それぞれ位置的にピット3・4に対応しており、形態や規模も一致していることから建てかえを示唆するもう

一組の柱穴と推定され、切り合い関係から古い時期のものと考えられる。
〔カマド〕東壁の中央やや南寄りに付設されている。軸方向はS－45°－Eで燃焼部の規模は幅が130㎝、奥行きが77㎝である。内部は焼上やカマド崩壊土が堆積しており、側壁及び奥壁から底面にかけて赤変している。
　カマドの構築方法はカマド付設位置に長軸が112㎝、短軸が100㎝、深さが13㎝の楕円形の掘り方に粘土を貼り付けて成形している。
　〔貯蔵穴状ピット〕住居内の南東隅で検出されている。カマドの右脇に位置し平面形は不整な楕円形を呈す。規模は長軸が93㎝、短軸が64㎝、深さが13㎝で底面はほぼ平坦になっており壁の立ち上りはゆるやかである。
〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、掘り方埋土、住居内堆積土から土師器、須恵器が出土している。

第26住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＱ－95の地山面で確認された。
〔重複〕後世のピットに切られている。
〔平面形･規模〕方形を呈する。規模は長軸が7.8m、短軸が7.4mである。
〔堆積土〕住居内堆積土は7枚の層に分かれる。第1層は黒色土で住居内中央部やや西寄りに第2層は灰黄褐色土で住居内の中央部全域にレンズ状に堆積している。第3・4・5・6・層はそれぞれ西壁、東壁、北壁際に流れ込んだように斜めに堆積している。第7層は住居内を対角線上に走る溝の堆積土である。
〔壁〕壁高は最も高い北壁で26～37㎝である。地山を壁としており立ち上りはやや急である。
〔床〕地山を床としており、ほぼ平坦でしまりがある。
〔柱穴〕住居内から42個のピットが検出されている。このうちピット1～4は径50～70㎝の円形を呈するもので住居の対角線上にあって、柱痕跡を有し掘り方の形態や規模もほぼ一定していることから主柱穴と考えられる。またピット5～17・19～24は径20～30㎝の円形を呈するもので主柱穴よ小規模なものある。いずれも1.0～1.2㎜の間隔で壁際に並ぶように配置されており位置、形態、規模等に規則性を有することから壁柱穴と考えられる。
〔周構〕カマドと貯蔵穴状ピットの部分を除く四辺も約20㎝の内側を巡る。溝の幅は概して40～60㎝であるが部分的に西壁北寄りの部分のように10㎝ほどにせマークなったり、北壁中央のように100㎝ほどの不正形状に広がる箇所もみられる。底面はゆるやかな凸凹はあるもののほぼ平坦で床面からの深さは約10㎝である。



第40図　第25住居跡

A-A′ B-B′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/4 暗褐色シルト	10mm前後の小礫および火山灰粒を少量含む。粘性は弱いがしまりがある。
2	10YR5/8 黄褐色粘土・シルト	火山灰粒、火山灰微粒子を多量に含む。粘性が強くかたくしまりのある土。粘土質地山粒とシルトの混土。
3	2.5YR6/6 明黄褐色粘土	火山灰粒、シルトを少量含む。粘性は極め強く、ブロック状を呈している。粘土質地山層の崩落土
4		
5	10YR5/6 黄褐色粘土・シルト	焼土粒を多量に含む。粘性が強くしまりがある。粘土質地山粒とシルトの混土。
6	2.5YR6/8 明黄褐色粘土	粘土ブロック。粘性はやより強くしまりがある。熱を受けて軟く変質している。カマド崩壊土
7	7.5YR5/8 明褐色粘土	粘性は非常に強くしまりがある。カマド崩壊土
8	5YR5/8 明赤褐色粘土	炭化物を少量含む。
9	5YR5/8 明赤褐色粘土	粘性は弱いがしまりがある。焼土化して軟くなっている。カマド掘り方
10	10YR6/6 明黄褐色粘土・シルト	焼土粒、炭化物を少量含む。カマド掘り方
11	10YR5/4 黄褐色粘土・砂	
12	10YR5/2 灰黄褐色粘土	
13	10YR5/4 黄褐色粘土・砂	

C-C′

1	5YR4/8 赤褐色粘土	粘性は弱いがしまっている。
2	2.5YR6/6 明黄褐色粘土	粘性が強くしまっている。

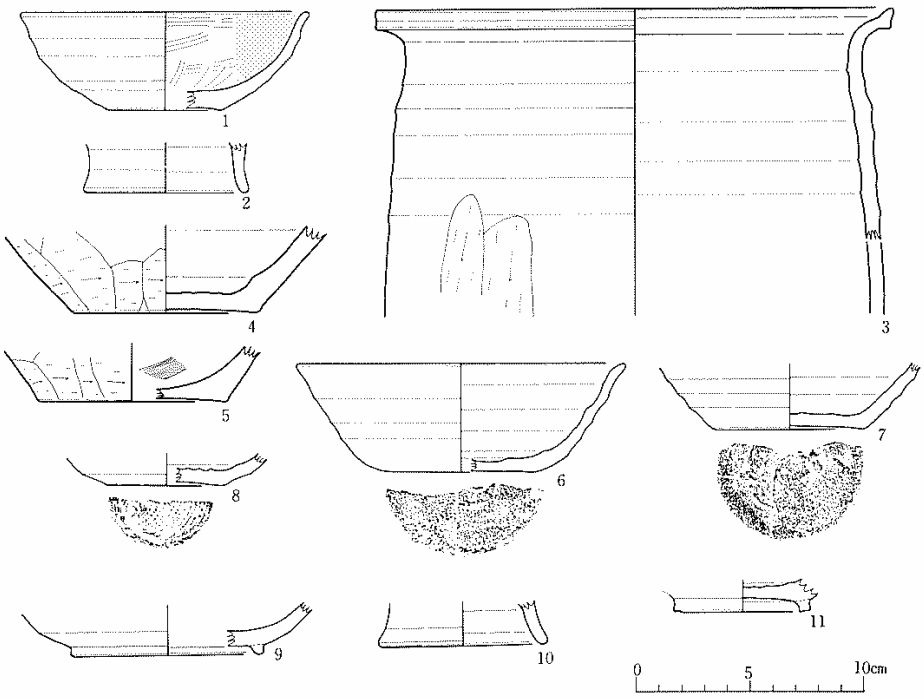
D-D′

1	10YR5/8 黄褐色シルト	炭化物、焼土を少量含む。粘性は弱く軟弱
2	2.5YR5/6 黄褐色粘土・砂	炭化物。焼土を少量含む。

E-E′

1	10YR5/8 黄褐色シルト	粘性は弱く軟弱
2	2.5YR5/6 黄褐色粘土・砂	粘性強い。

ピットNo.	1	2	3	4
深さ（cm）	35	21	38	36
5	6	7	8	9
43	18	10	18	17
10	11	12	13	14
34	16	11	12	7
15	16	17	18	19
11	25	17	22	9
20	21	22	23	24
13	18	6	7	26



番号	地区層位	種別	調 外面	調 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	25住 埋 2	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	回転糸切り	(4.3)	(12.4)		(4.9)	94
2	25住 P24	土師器高台 坏							(6.9)	96
3	25住 P24	土師器 甕	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ			(22.5)			100
4	25住 床	土師器 甕	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	不明				8.2	99
5	25住 P24	土師器 甕	ヘラケズリ	ナデ	回転糸切り				8.2	98
6	25住 埋 2	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	4.7	14.3		6.0	90
7	25住 掲方埋土	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り				6.6	174
8	25住	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り				5.0	92
9	25住 埋 2	須恵器高台坏?	ロクロ	ロクロ	回転ヘラケズリ				(8.1)	91
10	25住 埋 2	須恵器高台坏							7.0	95
11	25住	須恵器高台坏		ロクロ	回転糸切り				5.9	93

第41図　第25住居跡出土遺物

〔カマド〕南壁中央やや西寄りに付設されており、燃焼部及び煙道部の一部と煙出しピットが検出されている。軸方向はＳ－40°－Ｗで燃焼部の規模は幅が約120cm、奥行きが約120cmである。カマドの底面は皿状にくぼみ明瞭であるが、両側壁は住居の壁際にわずかに残存する程度である。内部には焼土とカマド崩壊土が堆積し側壁及び奥壁の内側から底面にかけてはかなり赤変している。煙道部は煙出し側である南半部が失われたもので残存部の最大幅40cm、深さ15cm計り、燃焼部奥壁から煙出しピットへ向ってゆるやかに立ち上っている。煙出しピットはカマド奥壁から約120cmのところにあり後世のピットによって一部切られているが、残存形から

径約25㎝、深さ15㎝の円形を呈するものと推定される。底面には粘土が張り付いておりその上に焼土が堆積している。

カマドの構築方法は燃焼部については長軸約120㎝短軸約100㎝深さ約15㎝の皿状を呈する掘り方に粘土を貼り付けてつくり出している。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の南西隅に検出されている。これはカマドの右脇に位置し平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸が130㎝、短軸が98㎝、深さが33㎝である。底面はほぼ平坦であり、壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土は3枚の層に分かれ、最下層とピット底面から土師器、須恵器が出土している。

〔溝〕南西隅の貯蔵穴状ピットから北東コーナーに向けて、対角線状に伸びる溝が検出されている。この溝は東北隅で周溝と交わり、さらに壁を切って住居外に伸び、住居跡の東方約12.5ｍの地点で小梁川の段丘崖に達している。規模は住居内では幅が35～48㎝、深さは貯蔵穴状ピット寄りでは16㎝、中央部で約18㎝、周溝と交わる部分では19㎝、壁際では22㎝とわずかな傾斜が確認できる。なお、周溝との落差は約17㎝で溝の方が深くなっている。住居外の溝の規模は幅が50～65㎝、深さは30～40㎝で、段丘崖へ向けて除々に傾斜している。

〔出土遺物〕床面、カマド内貯蔵穴状ピット、周溝内、住居内堆積土等から土師器、須恵器が出土している。

第27住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＴ－95の地山面で確認された。

〔重複〕第2掘立柱建物跡によって切られている。

〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が4.2m、短軸が4.2mである。

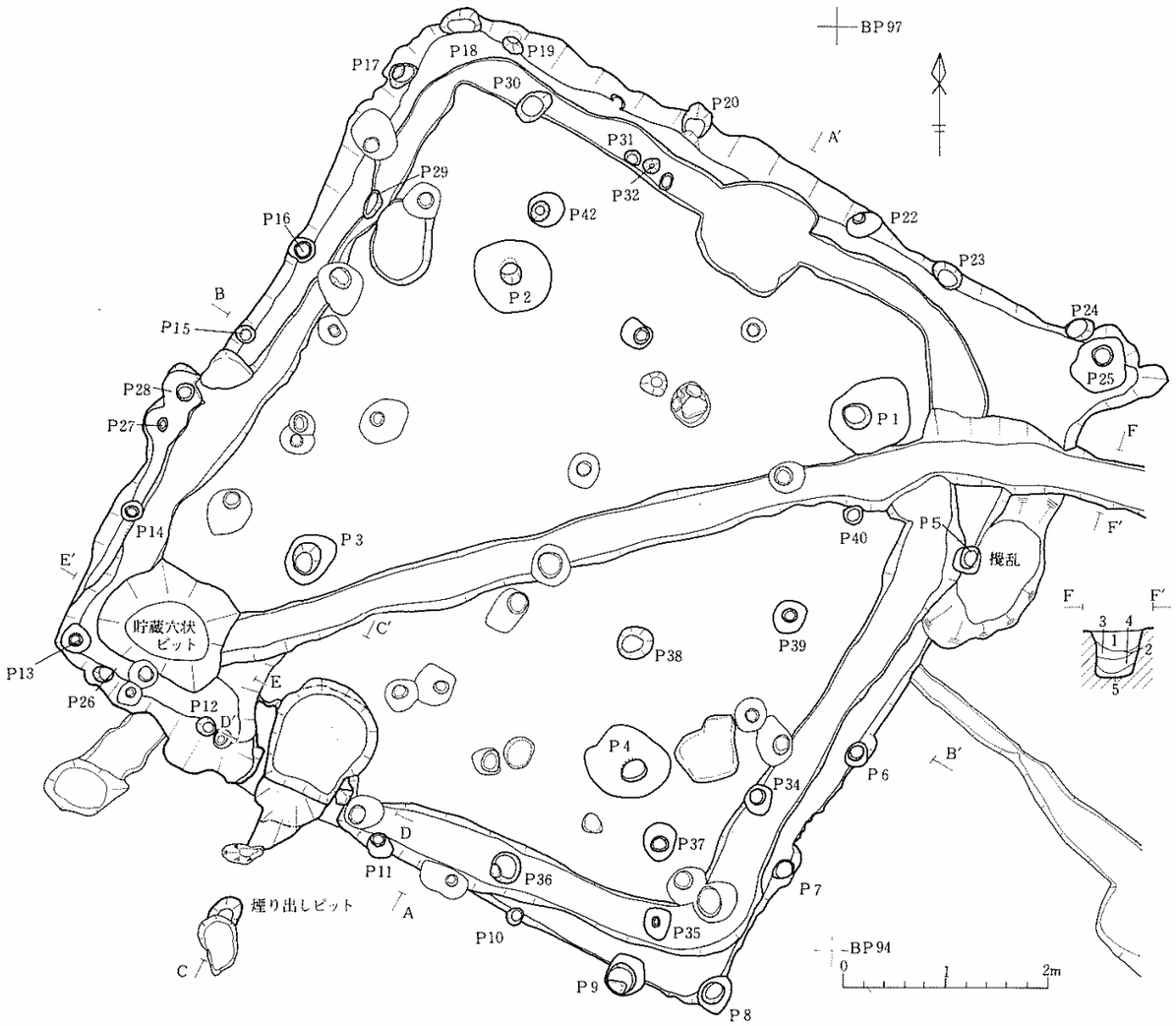
〔堆積土〕住居内堆積上は3枚の層に分かれる。第1層は褐色土で住居内全域に堆積している。第2・3層は暗褐色土で壁際に流れ込んだように斜めに堆積している。

〔壁〕壁高は4辺ともほぼ同じで25～30㎝である。地山を壁としており、立ち上りは、東壁がややゆるやかではあるが他は急である。

〔床〕地山を床としている。床面の状況はかたくしまり平坦である。床面中央部に径約72㎝の平面形を呈する焼面が検出されている。この焼面の南寄りに炭化物が多く分布している。

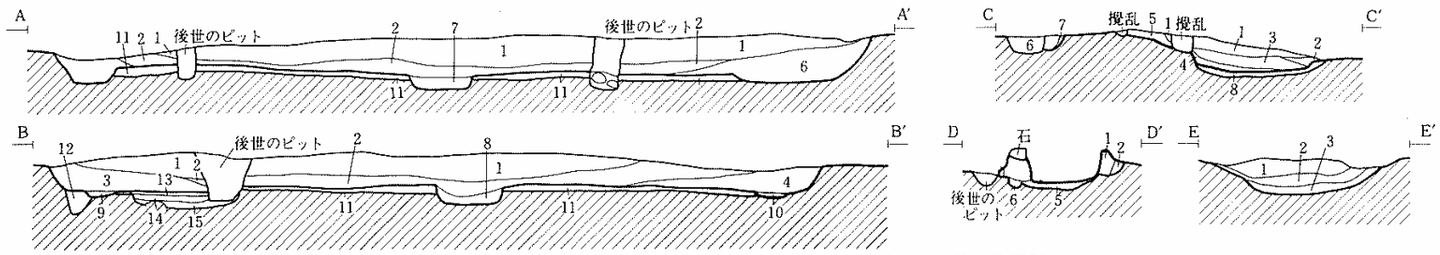
〔柱穴〕住居内から7個のピットが検出されている。これらの内ピット1は柱痕跡が検出されたが他のピットは柱痕跡が確認されず住居の柱穴がどうかは不明である。

〔カマド〕東壁の中央やや南寄りに付設されている。燃焼部と煙道道の一部と思われる焼面が検出されている。軸方向はＥ－40°－Ｓである。燃焼部の規模は幅が102㎝、奥行きが68㎝であ

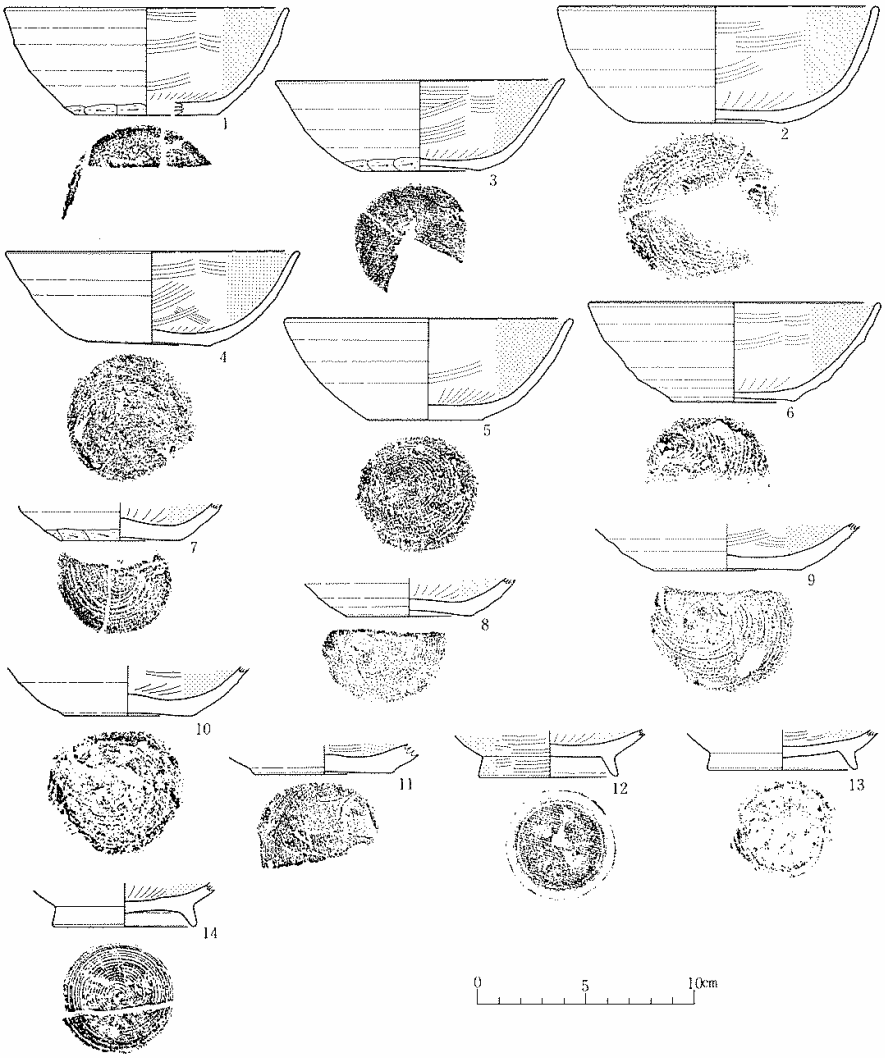


A-A′ B-B′			5	5YR5/8明赤褐色シルト	地山をブロック状に含む。しまりあり、焼土粒を多く含む
層No.	土色・土性	備考	6	5YR4/6赤褐色粘土・シルト	
1	10YR2/1黒色シルト		7	10YR5/4黄褐色粘土・シルト	
2	10YR 4/2灰黄褐色シルト	特に南側では径1～2cmの焼土塊を含む	8		
3	10YR 4/2灰黄褐色シルト	2層に比べて均質	D-D′		
4	10YR 3/4暗褐色粘土・シルト	若干粘質をおびている	1	5YR4/4にぶい赤褐色シルト	
5	10YR 4/3にぶい黄褐色シルト		2	10YR3/4褐色シルト	
6	7.5YR 4/2灰褐色シルト		3	5YR4/6赤褐色シルト	
7	10YR 3/3暗褐色シルト		4	5YR4/4赤褐色土	
8	10YR 3/3暗褐色シルト		5		
9	10YR 4/3にぶい黄褐色シルト		6	5YR4/4赤褐色土	
10	10YR 4/3にぶい黄褐色シルト		E-E′		
11	10YR 4/4褐色シルト		1	10YR4/4褐色シルト	炭化物を含む
12	10YR 3/3暗褐色シルト		2	10YR4/6褐色シルト	
13	10YR 4/4褐色粘土		3	10YR3/4暗褐色粘土	少粒の炭化物を含む。遺物が極めて多い。
14	10YR 3/4暗褐色シルト	地山ブロック(3～5cm)を含む	F-F′		
15	5YR 4/4赤褐色シルト	上面に炭化物を含む	1	10YR4/4褐色シルト	
C-C′			2	10YR6/4にぶい黄橙色粘土	
1	10YR 4/6褐色シルト	焼土粒と炭化物を少量含む。カマド壁崩壊土、土器(土師器)を含む	3	10YR4/3黄褐色シルト	地山ブロック(径1cm程)を含む
2	10YR 4/6褐色粘土・シルト	焼土粒を含む	4	10YR3/3暗褐色シルト	
3	5YR 4/6赤褐色粘土・シルト	骨片、炭化物を含む、カマド内堆積土	5	10YR4/3黄褐色粘土・シルト	やや粘質
4	5YR 5/6明赤褐色粘土・シルト	カマド内堆積土			

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ(cm)	22	55	34	35	31	39	17	36	40
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
20	33	15	42	22		46	5	22	35
20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
30		51	34	27	40			10	8
30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
7	7	4	10	16	18	24	16	8	12
40	41	42							
	15	14							

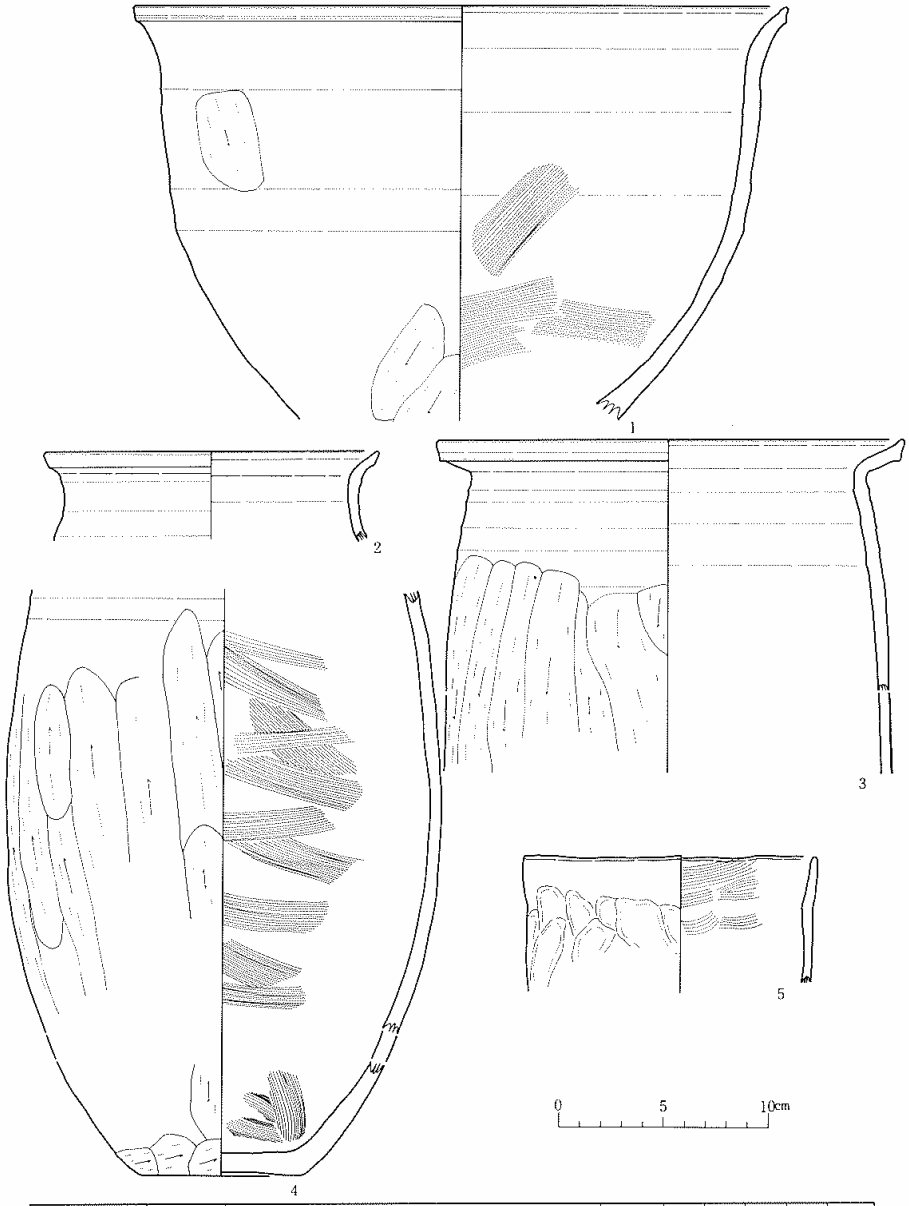


第42図　第26住居跡



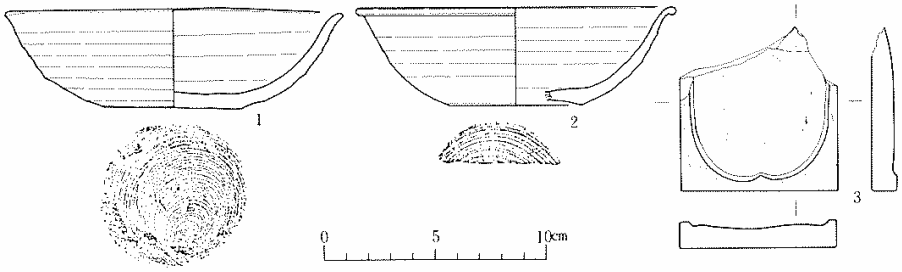
番号	地区層位	種別	調	整	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
			外面	内面						
1	26住埋 3	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	手持ヘラケズリ	5.0	13.0		6.6	9
2	26住埋 3	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り	5.4	14.6		6.6	3
3	26住貯蔵穴	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	手持ヘラケズリ	4.2	13.2		5.4	12
4	26住貯蔵穴	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り	4.3	13.4		5.7	10
5	26住かまど内	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り	4.6	13.3		5.6	1
6	26住 埋3	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り	4.7	13.2		5.3	4
7	26住 埋1	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り				5.5	140
8	26住 埋1	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り				5.8	136
9	26住 埋3	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り				6.8	138
10	26住貯蔵穴	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り				5.9	141
11	26住 埋2	土師器 坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転糸切り				6.4	137
12	26住 周溝	土師器高台坏	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ 黒色処理	不明				6.2	73
13	26住 埋2	土師器高台坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	ナデ				6.7	139
14	26住 床	土師器高台坏	ロクロ	ヘラミガキ 黒色処理	回転ハケ目				6.4	145

第43図　第26住居跡出土遺物(1)



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	26住 埋3	土師器 甕	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ ナデ			31.0	28.4		72
2	26住カマド内	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(15.8)			157
3	26住 埋3	土師器 甕	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ			22.0			71
4	26住 床	土師器 甕	ロクロ ヘラケズリ	ナデ	不明			20.7	7.6	135
5	26住貯蔵穴	筒形土器	指頭状オサエ	ナデ			13.8			74

第44図　第26住居跡出土遺物(2)



番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	26住埋3	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.4	15.0		6.2	23
2	26住埋1	土器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.4	14.2		5.8	2
3	26住撹乱	石 硯								144

第45図　第26住居跡出土遺物(3)

る。内部は焼土とカマド崩壊土が堆積している。焼土内から小量小骨粉が出土している。両側壁の内側及び燃焼部底面の中央部は赤変している。

カマドの構築方法はあらかじめカマド付設位置に長軸約125cm、短軸が約90cm、深さが約14cm楕円形を呈する掘り方に厚さ約10cmほどの粘土を敷き詰めその上面を燃焼部底面としている。側壁は河原石を芯に粘土を貼り付けて構築している。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内の東南隅から検出されている。これはカマドの右脇に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長紬が約70cm、短軸が約60cm、深さが約10cmである。堆積土は暗褐色土1枚で焼土や炭粒を含む土である。ピットの底面から土師器が出土している。他に住居内の北東隅から平面形が楕円形を呈するピット7が検出されている。規模は長軸が約95cm、短軸が約80cm、深さが約15cmであり、堆積土は炭粒を含む暗褐色土1枚で立器の出土はなカッターが、位置的、形態的に見て貯蔵穴状ピットの可能性も考えられる。

〔出土遺物〕床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土から土師器、須恵器、羽口、鉄滓が出土している。住居に伴う遺物は全て細片であるため図示できないが、土師器坏の破片は製作にロクロを使用しており、内面はヘラミガキ・黒色処理を施している。

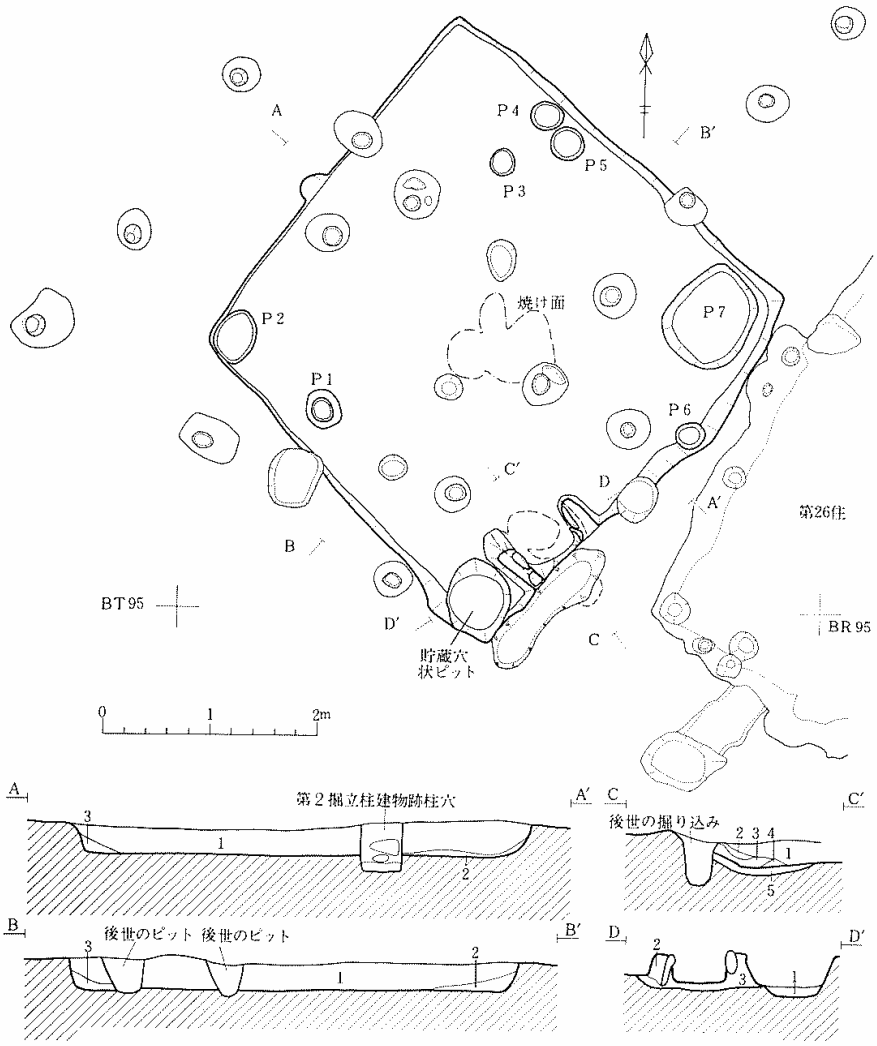
第35住居跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＣＡ－93の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕住居跡の南側約2/3は国道より削平を受けているもので、残存状況から方形を基調とするものと推定される。規模は東西辺が6.4mである。

〔堆積土〕住居内堆堆積土は黒褐色土1枚である。残存部分全域に分布している。

〔壁〕壁高は最も高い北壁で10～12cmである。地山を壁としており、立ち上りはなだらかであ



ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7
深さ(cm)	10	5	4	5	8	5	18
土色・土性	10YR4/4褐色シルト 炭粒、地山粒含む	10YR3/4暗褐色シルト	10YR3/2黒褐色シルト	10YR3/2黒褐色シルト	10YR3/2黒褐色シルト	10YR4/4褐色シルト 焼土、炭粒を含む	10YR3/3暗褐色シルト 地山粒、炭粒を含む

A-A′ B-B′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR4/4 褐色シルト	炭粒を含む。地山をブロック状に含む。
2	10YR3/4 暗褐色シルト粘土	焼土粒を少量含む。
3	10YR3/4 暗褐色シルト	

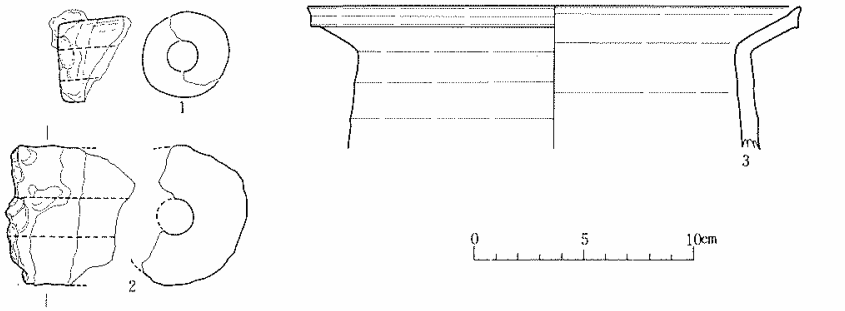
C-C′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR4/4 褐色シルト	炭化物を含む。
2	7.5YR4/4 褐色シルト	焼土を多量に含む。カマド崩壊土
3	7.5YR4/6 褐色シルト	骨片を含む
4	7.5YR4/4 褐色シルト	焼土がブロック状に含む。カマド崩壊土
5	10YR7/6 明黄褐色粘土	

D-D′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色シルト	焼土と炭粒を含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土	カマド壁、円礫
3	2.5Y6/4 にぶい黄色粘土	カマド壁、粘土で構築

第46図　第27住居跡



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	27住埋2	フイゴ羽口								179
2	27住埋1	フイゴ羽口								178
3	27住埋1	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(22.3)			177

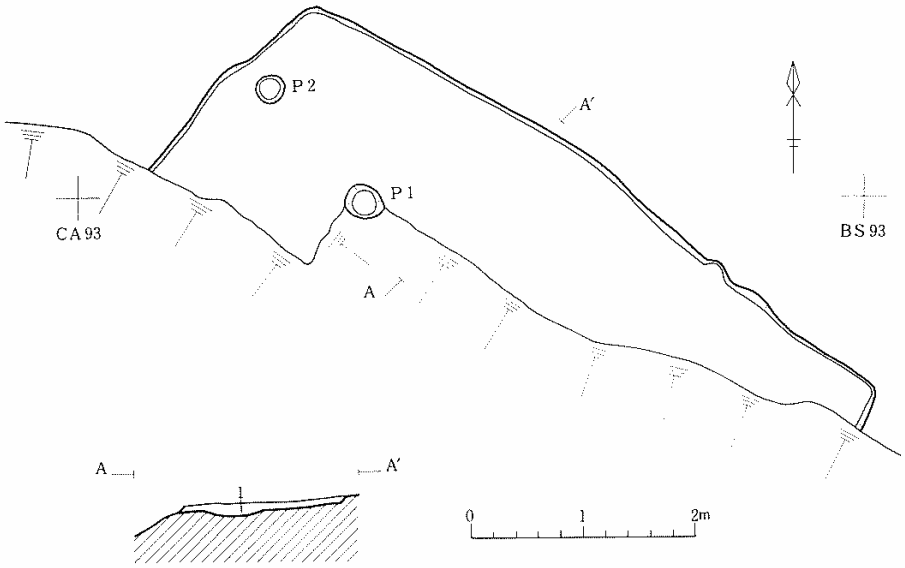
第47図　第27住居跡出土遺物

る。

〔床〕地山を床としている。床面の住居はしまりがあるが凸凹がみられる。

〔柱穴〕住居内から2個のピットが検出されているが配置関係が不明であり、柱穴と考えられるものはない。

〔出土遺物〕床面、堆積土から土師器の細片が出土しているが図示できるものはない。



A-A′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色シルト	

ピットNo.	1	2
深さ(cm)	20	6
土色・土性	10YR3/3 黒褐色シルト	10YR3/3 黒褐色シルト

第48図　第35住居跡

第49住居跡

〔位置・確認面〕 D－Ⅳ区・ＡＦ－49の地山面で確認された。

〔重複〕縄文時代の住居跡（第51住居跡）を切って構築されている。

〔平面形・規模〕大部分が削平等によって失われているが、残存形は方形を基調とするものである。規模は不明である。

〔堆積土〕住居内堆積土黒色褐色土1枚である。住居の残存部分全域に堆積している。

〔壁〕北壁の一部と北東コーナーだけが残存している。壁高は最も高い北壁で約8～10㎝である。地山を壁としており、立ち上りはなだらかである。

〔床〕地山を床としている。床面の状況は平坦で壁際を除いた部分がかたくしまっている。

〔柱穴〕住居内から4個のピットが検出されているが柱穴と考えられるものはない。

〔カマド〕東壁中央北寄りに焼面が検出された。規模は平面形が楕円形を呈し、長軸が約90㎝短軸が約60㎝、厚さが8㎝である。これは位置関係からカマド燃焼部の底面と考えられる。

〔貯蔵穴状ピット〕住居跡の北東隅から検出されている。これはカマドの左脇に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が約70㎝、短軸が約65㎝、深さが約20㎝である。壁の立ち上りはゆるやかで底面は皿状を呈する。堆積土は黒色土1枚である。底面から土師器片が出土している。

〔出土遺物〕床面、貯蔵穴状ピットから土師器、須恵器が出土している。これらはすべて細片であるため図示できないが、土師器坏の底部破片は2点とも製作時にロクロを使用し内面はミガキ黒色処理が施され、外面は体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリの調整が施されるものである。

第50住居跡

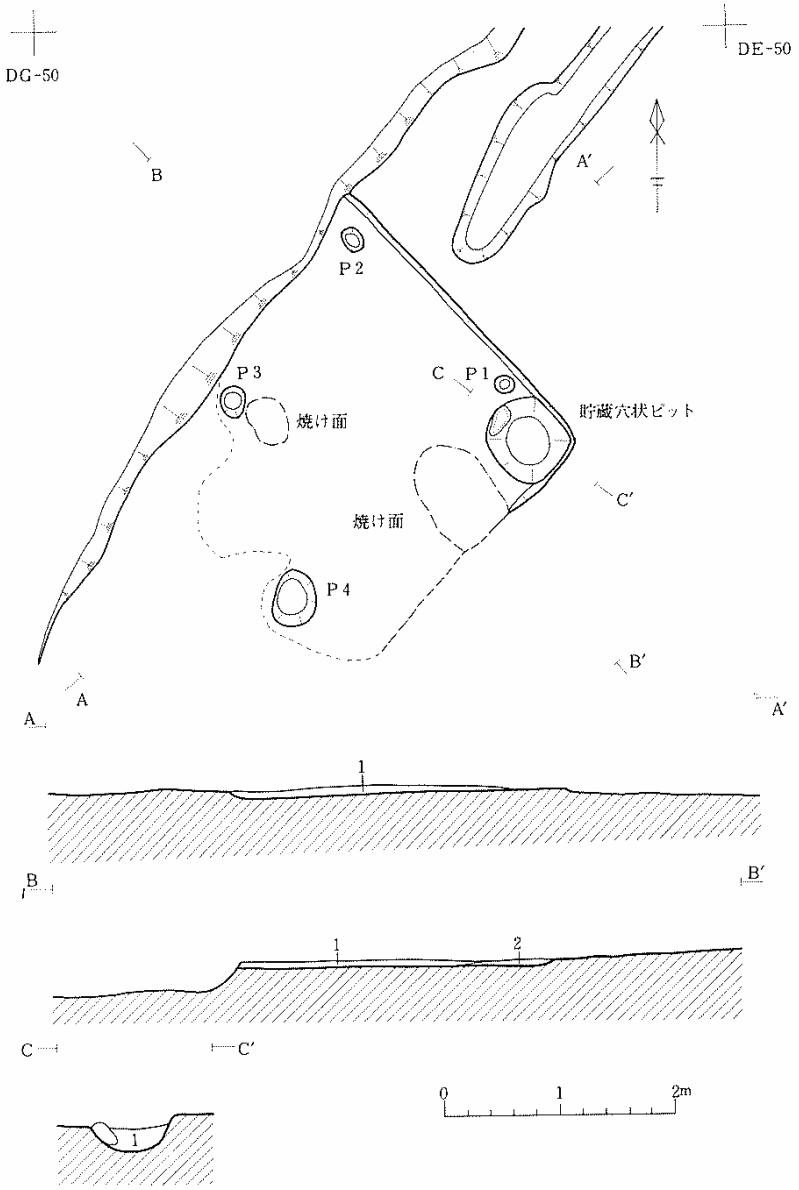
〔位置・確認面〕 D－Ⅳ区・ＡＥ－50の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕方形を呈する。規模は長軸が3.8m、短軸が3.6mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は6枚の層に分かれる。第1～4層は黒褐色のシルト層で住居の中央部をレンズ状に堆積している。第5層は黄褐色、第6層はシルト層で壁際に流れ込んだ状態で斜めに堆積している。

〔壁〕壁高は最も高い北壁で35～39㎝である。地山を壁としており、立ち上りは南壁がややゆるやかであるが他は急である。

〔床〕地山を床としている。中央は平坦でしまりがある。床面上には、多量の炭化部材、炭粒が散布し、炭化材は北西隅に顕著である。焼面は中央部に２ヶ所、南西壁寄りに１ヶ所検出さ



A-A′　B-B′

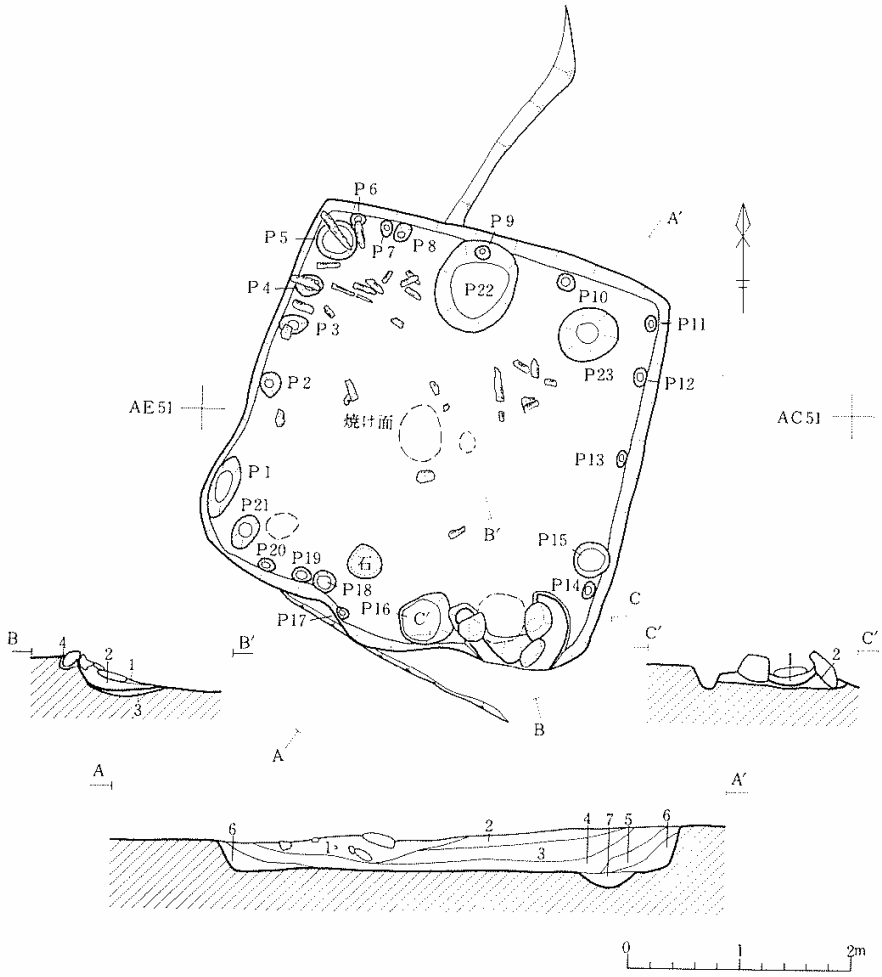
層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色シルト	炭化物を少量含む
2	赤褐色シルト	焼土

C-C′

層No.	土色・土性	備考
1	10YR 2/3 黒褐色シルト	焼土・炭化物を含む

ピットNo.	1	2	3	4
深さ(cm)	10	14	13	15
土色・土性	10YR 2/2 黒褐色シルト	10YR 2/2 黒褐色シルト	10YR 2/2 黒褐色シルト	10YR 2/2 黒褐色シルト

第49図　第49住居跡



A-A

層No.	土色・土性	備考
1	10YR2/1 黒色シルト	礫を含む
2	10YR3/4 暗褐色シルト	
3	10YR2/2 黒褐色シルト	礫を含む
4	10YR3/3 暗褐色シルト	炭、炭粒を含む
5	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	地山粒を含む
6	10YR2/2 黒褐色シルト	
7	10YR3/3 暗褐色シルト	焼土を含む

B-B′

層No.	土色・土性	備考
1	5YR4/4 にぶい赤褐色シルト	
2		
3	10YR6/6 明黄褐色粘土	
4	3 層に同じ	

C-C′

層No.	土色・土性	備考
1	5YR5/8 明赤褐色シルト	
2	10YR6/6 明黄褐色粘土	粘性あり

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深さ(cm)	23	12	8	8	8	8	12	13			
12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
10	5		7	4	4	10	7	3	9	19	15

第50図　第50住居跡

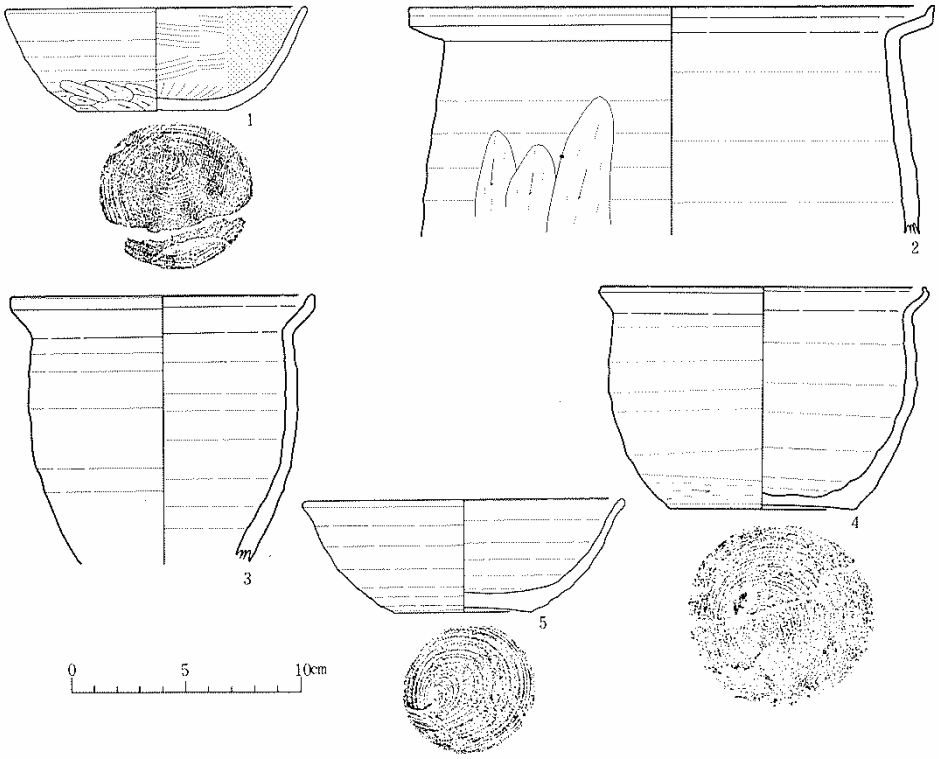
れている。

〔柱穴〕住居内から23個検出されている。これらのうちピット2～15と17～21は壁際に位置しており配置関係から壁柱穴と考えられる。

〔カマド〕南壁の東隅に燃焼部が検出されている。軸方向は推定S－10°－Wである。燃焼部の規模は幅が約100㎝、奥行きが約80㎝である。内部は赤変した河原石を含む黒色土が堆積している。側壁の内側及び底面中央部は赤変している。

カマドの構築方法はあらかじめカマド付設位置に長軸が約110㎝、短軸が約80㎝、深さが12㎝の楕円形を呈する掘り方を掘り、底面に粘土を敷き、側壁は礫を芯にして下部から外側にかけて粘土で固定している。

〔貯蔵穴状ピット〕南壁の中央東寄りに検出されている。これはカマドの右脇に位置する。平



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	50住貯蔵穴	土師器・坏	ロクロ　手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ	4.5	(13.1)		6.6	184
2	50　住　床	土師器・甕	ロクロ　手持ヘラケズリ	ロクロ			(22.7)			180
3	50　住　床	土師器・甕	ロクロ	ロクロ			(13.2)	(11.6)		181
4	50　住　床	土師器・甕	ロクロ　回転ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切り	9.7	14.0	13.4	8.1	183
5	50　住　P1	須恵器・坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.9	14.0		6.0	182

第51図　第50住居跡出土遺物

面形は円形を呈し、規模は径が42㎝、深さが4㎝である。壁の立ち上りはゆるやかで底面は皿状を呈する。堆積土は焼土を含む暗褐色土1枚である。ピット底面から土師器坏が出土している。
〔出土遺物〕床面、カマド、貯蔵穴状ピット、ピット1から土師器、須恵器が出土している。

2、掘立柱建物跡

第1掘立建物跡

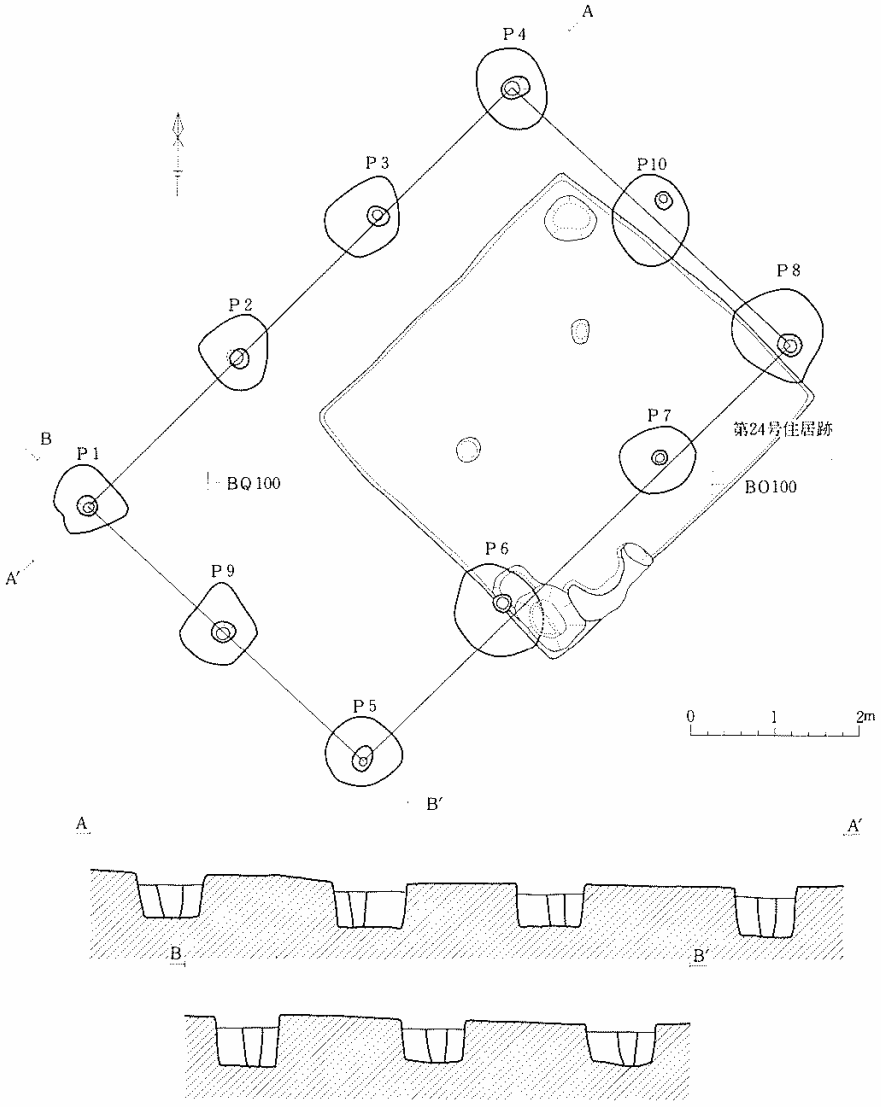
〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＱ－100の地山面で確認された。
〔重複〕柱穴が第24住居跡に切られている。
〔規模・方向〕桁行3間×梁間2間、棟方向N－45°－Ｅの建物跡である。総間は桁行が7.1m、梁間が4.5mになり、柱間寸法は桁行が東側柱列で南から2.5m+2.5m+2.1m、西側柱列で南から2.5m+2.4m+2.2m、梁間は両側柱列で東から2.3m+2.2mである。柱掘り方は不整な楕円形を呈し長軸が90～117㎝、深さは約44～60㎝、柱痕は円形を呈し径が20～25㎝である。
〔柱穴内堆積土〕柱穴の掘り方の埋土ははいずれも明黄褐色土で地山粒を多く含み礫まじりでかたくしまっている。柱痕跡内は暗褐色土でやわらかくしまりがない。
〔出土遺物〕主穴の堆積土内から土師器、須恵器の破片が出土している。

第2掘立柱建物跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＳ－96の地山面および第27住居跡内堆積土で確認された。
〔重複〕第27住居跡を切っている。
〔規模・方向〕桁行6間×梁間2間で棟方向はN－40°－Ｅの建物跡である。ただし西側柱列では東側柱列のピット3と5に対応する柱穴が認められない。建物の総間は桁行が東側柱列で6.7m、西側柱列で7.0m、梁間が北妻柱列で4.3mになり、南妻柱列で4.0mになり、柱間寸法は桁行が明確な東側柱列で北から1.0m+1.2m+1.1m+1.3+1.0m、梁間が北妻柱列で東から1.9m+2.4m、南妻柱列で東から2.2m+1.8mになる。柱掘り方は円形ないし楕円形で軸長30～50㎝、深さは30～40㎝になり、柱痕跡は円形で径約15㎝である。
〔柱穴内堆積土〕柱穴の掘り方の埋土はいずれも暗褐色土で、地山粒を含みかたくしまっており、柱痕跡内は黒褐色土でやわらかくしまりがない。

第3掘立柱建物跡

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＢＴ－96の地山面で確認された。第2掘立柱建物跡の西隣にあり、



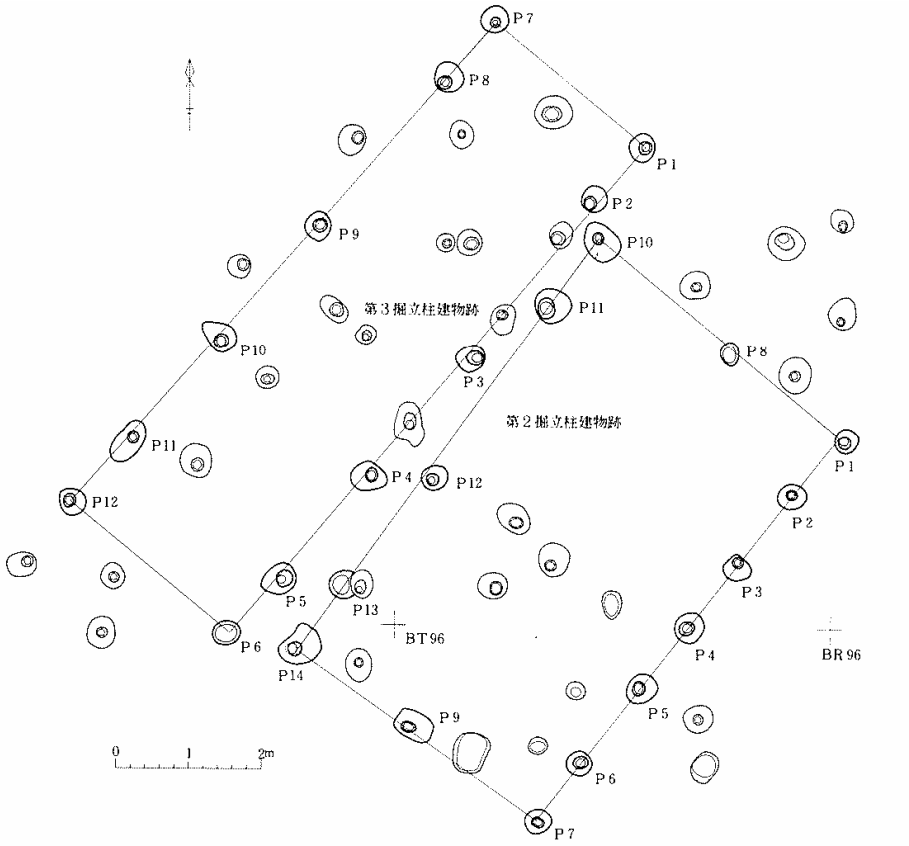
ピット No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深さ(cm)	61	59	56	59	56	47	43	59	51	54

第52図　第１掘立柱建物跡

最も近接している部分で30㎝である。

〔規模・方向〕桁行5間×梁間1間で棟方向がN－45°－Eの建物跡である。総間は桁行が8.8m、梁間が2.7～2.8mになり、柱間寸法は東側柱列で北から1.1m+2.6m+2.2m+1.8m+1.1m、西側柱列で1.1m+2.6m+2.1m+2.1m+1.8m+1.2mである。柱掘り方は円形ないし楕円形で軸長は30～60㎝、深さは30～45㎝に集中し、柱痕跡は円形で径約15㎝になる。

〔柱穴内堆積土〕柱穴の掘り方の埋土は褐色土や暗褐色土で地山粒を含みかたくしまっており、柱痕跡内は黒褐色土でやわらかくしまりがない。



第2掘立柱建物跡

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
深さ(cm)	29	41	37	45	41	48	30	8	33	46	39	33	39	38

第3掘立柱建物跡

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深さ(cm)	34	58	30	12	50	17	44	47	30	35	25	26

第53図　第2第3掘立柱建物跡

3.方形周溝状遺構

第1方形周溝状遺構

〔位置・確認面〕 D－III区・CA－99の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 方形に巡る溝状遺構で長軸が約4.5m、長軸方向がN－45°－Eである。溝は幅が65～45㎝、深さが22～26㎝で断面形は「U」字形を呈している。

〔堆積土〕 周溝内堆積土は2枚の層に分かれる。第1・2層とも暗褐色土で各辺とも主に西方向から流れ込んだ様子がうかがえる。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器の破片が出土している。細片のため図示できるものはないが、土師器坏の破片には製作にロクロを使用し、内面はミガキ黒色処理が施され外面は体部下半に手持ちヘラケズリ調整の観察ができるものもある。

第2方形周溝状遺構

〔遺構・確認面〕 D－IV区・CH－8の地山面で確認された。

〔重複〕 土壙366に切られている。

〔平面形・規模〕 長方形に巡る溝状遺構である。長軸が約4.4m、短軸が約3.1mで長軸方向はN－45°－Wを示す。溝は幅が40～60㎝、深さが15～35㎝で断面形は「U」字形を呈す。底面はほぼ平坦で、南西溝から北東隅へ向かって除々に傾斜をしている。落差は約32㎝である。

〔堆積土〕 方形周溝内堆積土は2枚の層に分かれる。第1層は極暗褐色土で周溝内全体に堆積している。第2層は黒色土で西片の底面に堆積している。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器、須恵器の破片が出土している。破片のため図示できるものはないが、このうち土師器坏には製作にロクロを使用し内面はミガキ黒色処理が施されており底部切り離し技法は回転糸切りでのち体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整のあるものが9点含まれている。土師器甕体部破片は製作にロクロを使用している。

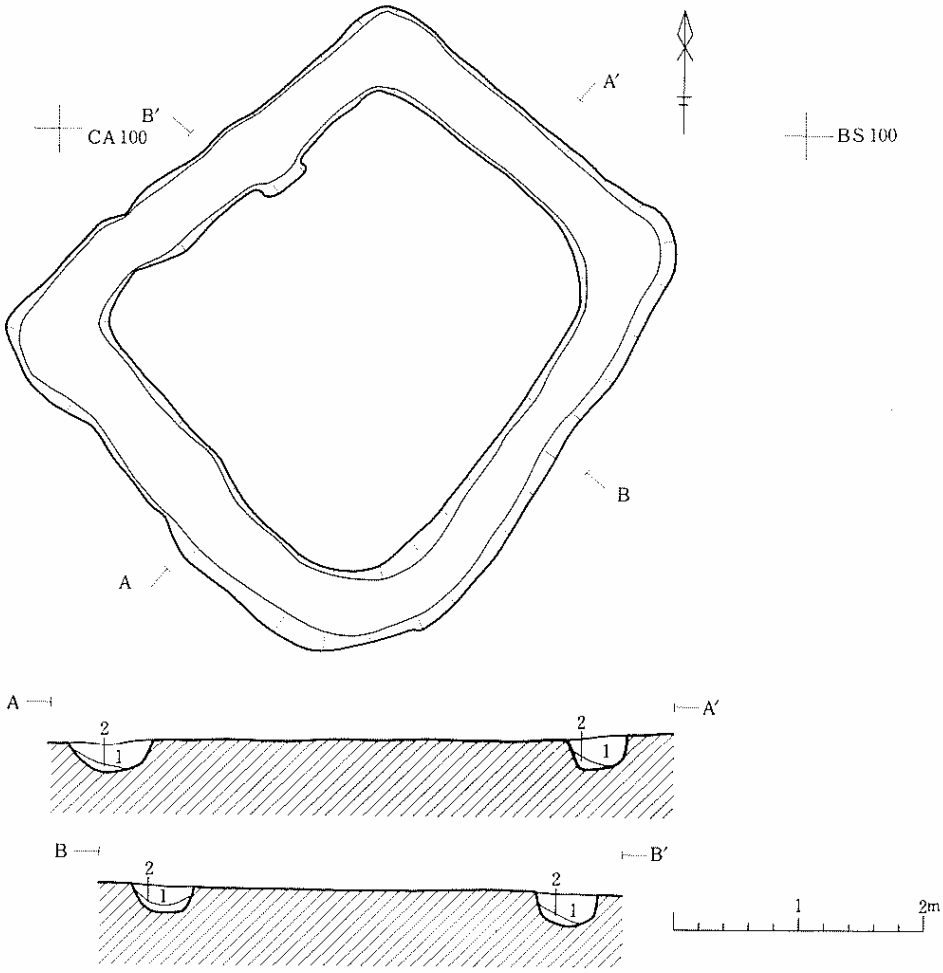
4. 土　壙

第1土壙

〔位置・確認面〕 D－IV区・BK－5の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 ほぼ円形を呈するもので、規模は長軸が約4.1m、短軸が約3.7mである。

〔堆積土〕 土壙内堆積は暗褐色土1枚で炭化物、焼土、礫を含む。



層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/4暗褐色シルト	炭化物を少量含む。土師器片出土。
2	10YR3/3暗褐色シルト	明黄褐色10YR6/6の地山を含む。

第54図　第１方形周溝状遺構

〔壁・底面〕地山を壁としており、壁高は約20㎝、立ち上りはゆるやかである。底面は地山で皿状をなしている。

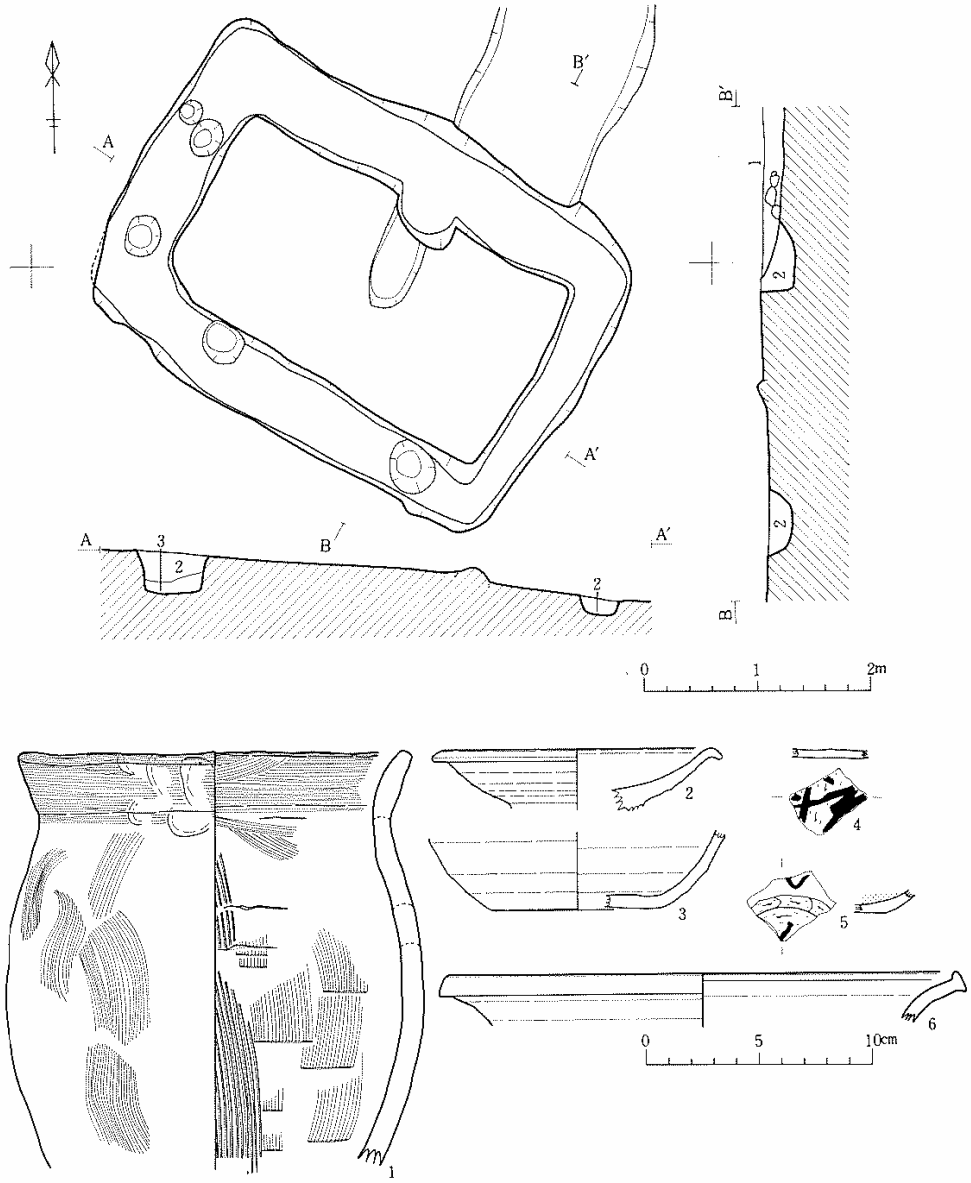
〔出土遺物〕土師器、須恵器が出土している。

第2土壙

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅳ区・ＢＳ－48の地山面で確認された。

〔重複〕第５住居跡を切っている。

〔平面形・規模〕不整な楕円形を呈する。規模は長軸が約2.6m、短軸が約2.3m、深さが約0.4



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	第2方形周溝理土	土師器甕	ヨコナデ ナデ 指頭状圧痕	ヨコナデ ナデ ヘラナデ ハケ目			(16.5)	(18.4)		191
2	第2方形周溝理土	須恵器高台付坏	ロクロ	ロクロ			(11.7)			187
3	第2方形周溝理土	須恵器坏	ロクロ	ロクロ					(7.3)	186
4	第2方形周溝理土	土師器坏		ヘラミガキ 黒色処理	手持ヘラケズリ墨書					189
5	第2方形周溝理土	土師器坏	ロクロ 手持ヘラケズリ墨書	ヘラミガキ 黒色処理	手持ヘラケズリ墨書					188
6	第2方形周溝理土	須恵器甕	ロクロ	ロクロ			(22.3)			190

第55図　第２方形周溝状遺構と出土遺物

mである。

〔堆積土〕土壙内堆積土は褐色土1枚である。

〔壁・底面〕地山を壁としている。立ち上りは南側壁は急であるが、他はややゆるやかである。底面は中央が皿状に凹んでいる。

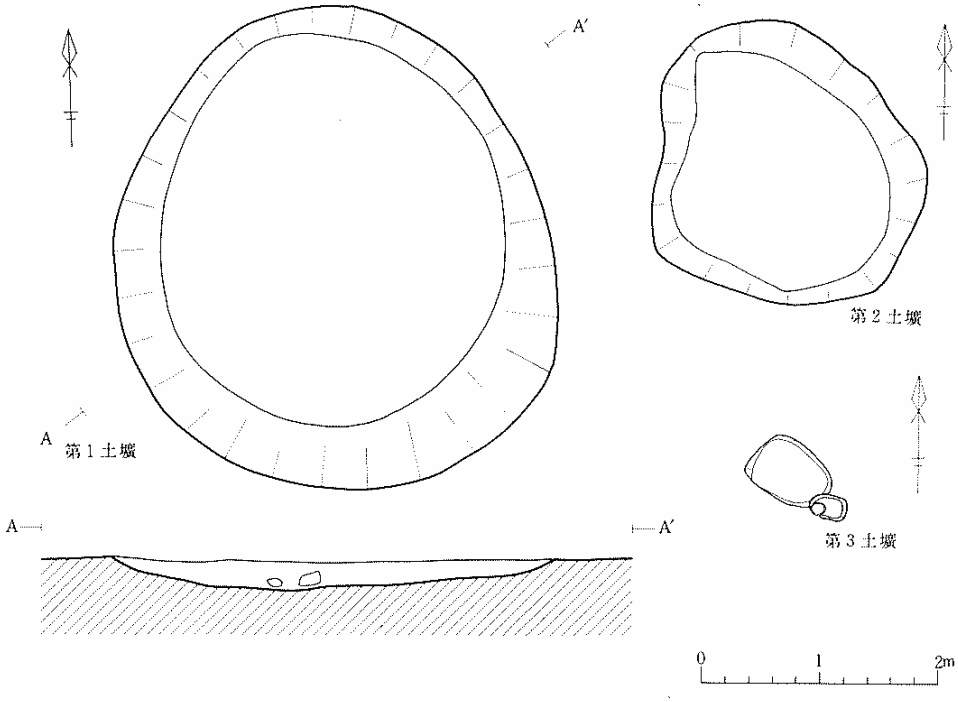
〔出土遺物〕土壙底面から須恵器坏が１点出土している。

第3土壙

〔位置・確認面〕Ｄ－Ⅲ区・ＣＫ－54の地山面で確認された。

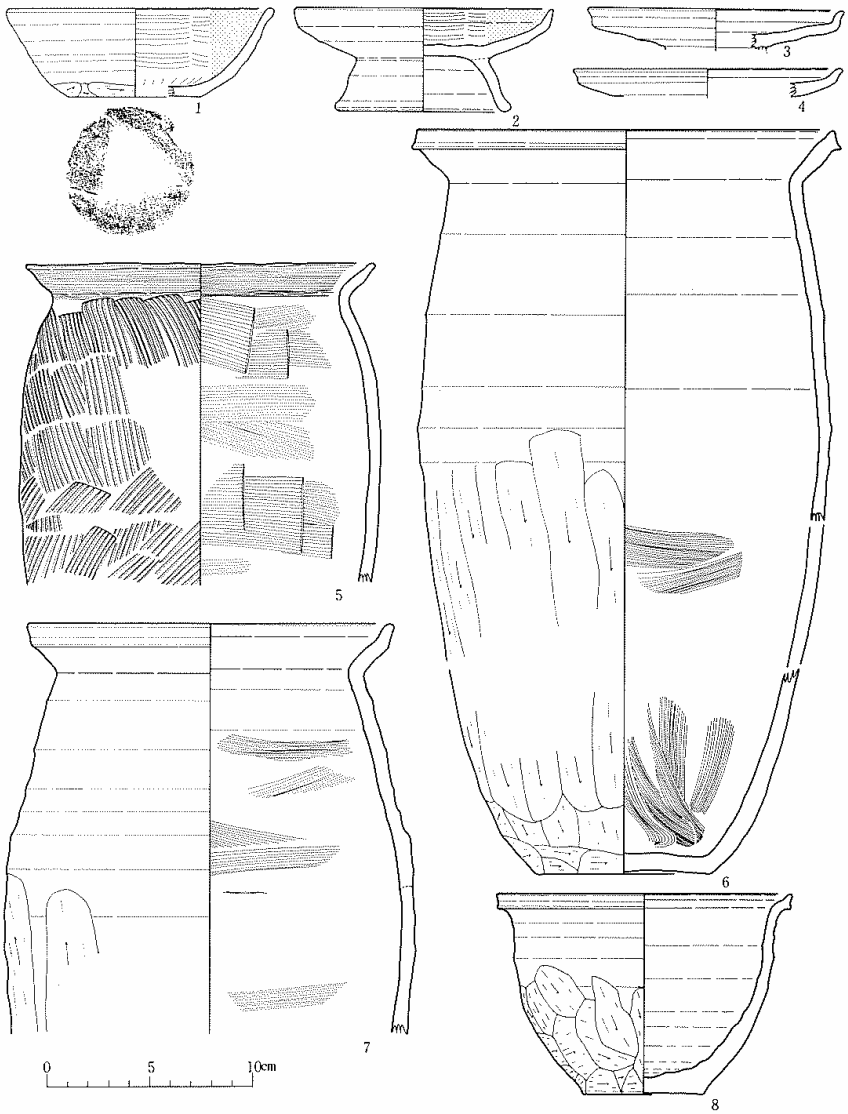
〔平面形・規模〕楕円形を呈するもので。規模は長軸が約0.3m、短軸が約0.2m、深さが約5cmである。

〔出土遺物〕台付碗が１点正位の状態で出土している。



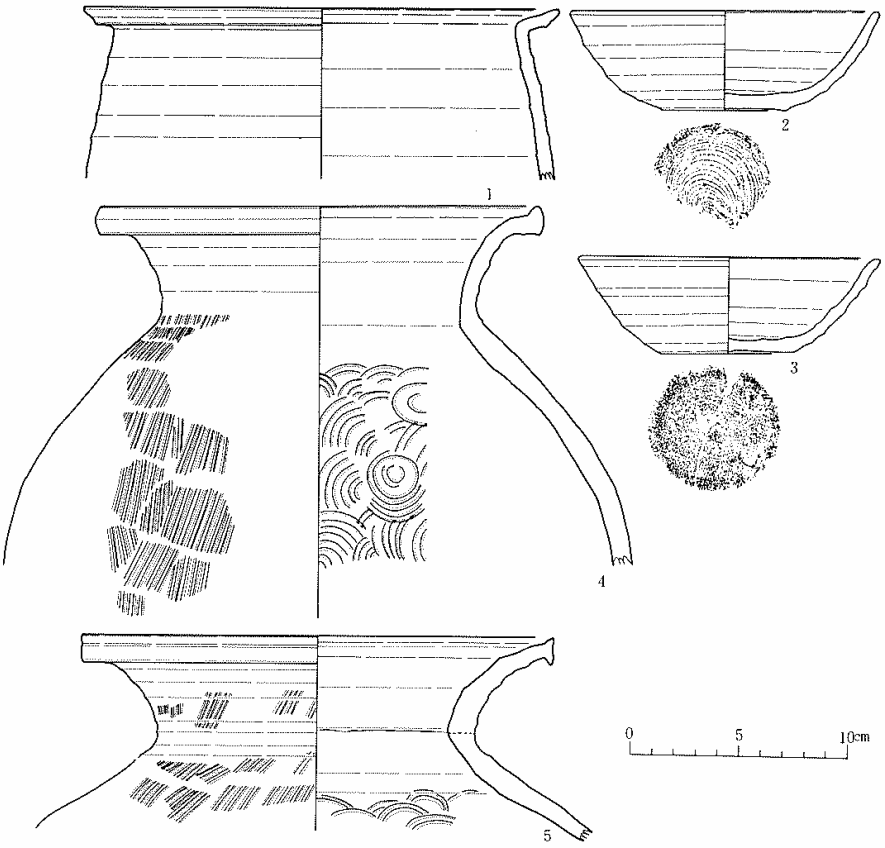
層No.	土色・土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色シルト	地山ブロック、礫、焼土、炭化物を含む

第56図　土　　壙



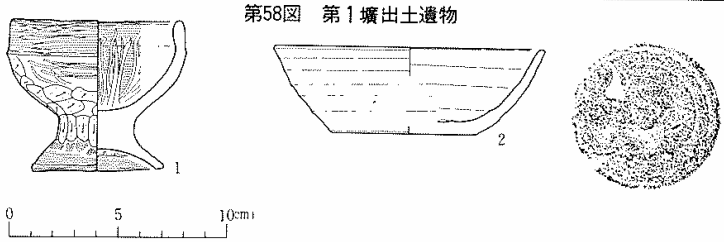
番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	第1土壙埋1	土師器 坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ黒色処理	手持ヘラケズリ	4.4	12.7		6.4	37
2	第1土壙埋1	土師器台付皿	ロクロ	ヘラミガキ黒色処理	不明	5.0	12.3		8.0	48
3	第1土壙埋1	土師器台付皿	ロクロ	ロクロ			(12.1)			101
4	第1土壙埋1	土師器台付皿	ロクロ	ロクロ			(12.8)			102
5	第1土壙埋1	土師器 甕	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ヘラナデ			(16.7)	(17.4)		104
6	第1土壙埋1	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ロクロ ナデ	不明	(38.3)	19.9)			108
7	第1土壙埋1	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ロクロ ナデ			(17.3)	(19.8)		112
8	第1土壙埋1	土師器 甕	ロクロ 手持ヘラケズリ	ロクロ	手持ヘラケズリ	9.7	14.1	12.6		103

第57図　第1土壙出土遺物(1)



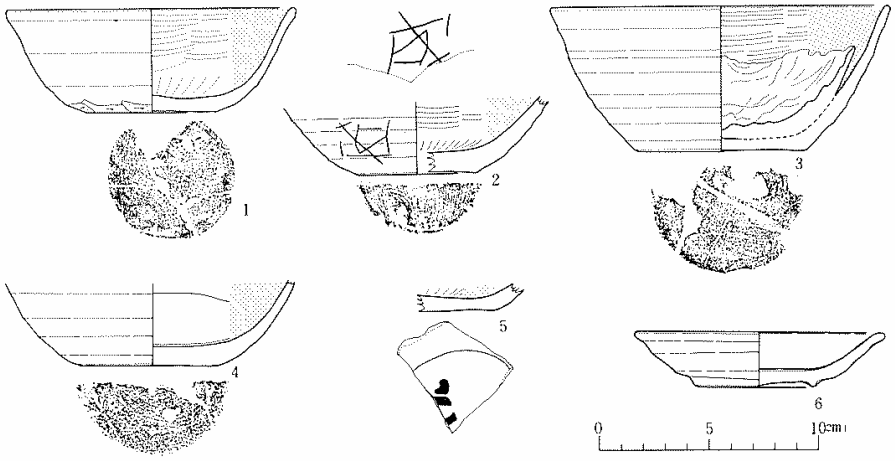
番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	第1土壙埋1	土師器 甕	ロクロ	ロクロ			(21.6)			113
2	第1土壙埋1	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	4.6	14.0		5.1	36
3	第1土壙埋1	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	4.5	13.5		6.0	25
4	第1土壙埋1	須恵器 甕	ロクロ　タタキ	ロクロ　青海波			20.0			50
5	第1土壙埋1	須恵器 甕	ロクロ　タタキ	ロクロ　青海波			21.6			49

第58図　第1壙出土遺物



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	分類記号	登録番号
1	第3土壙	土師器 台付椀	ヨコナデ　ケズリ　ミガキ	ヨコナデ　ミガキ	ナデ　オサエ	6.9	7.6		5.8		121
2	第2土壙	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	4.0	12.2		6.7		29

第59図　土　壙



番号	地区層位	種別	調整 外面	調整 内面	底部	器高	口径	体径	底径	登録番号
1	x - x	土師器坏	ロクロ 手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ケズリ	4.8	13.1		5.8	6
2	DⅣ-81	土師器坏	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り				5.3	173
3	CA-K	土師器坏	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ケズリ	6.6	15.4		7.5	26
4	x - x	土師器坏	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り				6.2	199
5	CL-18	土師器坏	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り					43
6	CE~CT	近世陶器皿				2.5	11.3		5.1	159

第60図　表土出土の遺物

Ⅳ 考　　察

1.土器の分類

本遺跡の土器は竪穴住居跡・方形周溝状遺構・土壙・表土などから出土したもので、器種には土器師坏・高台坏・台付皿・甕・小形鉢・羽釜・筒形土器・台坏埦・須恵器坏・高台坏・甕・壺・蓋がある。

土師器

〔坏〕いずれも製作にロクロを使用しているのである。器形は概ね体部下端から口縁部にかけて内彎ぎみに外傾するが、内彎の度合いには強いものと弱いものとがある。法量からみると、個々の口縁部に対する底部の大きさの占める割合は1：0.40～0.53の範囲のなかにおさまる。器面調整は、底部外面に手持ちヘラケズリの再調整が加えられているものと、回転糸切り痕を残し再調整が加えられていないものと二者があり、前者では再調整が体部下端まで及ぶことが多い。口縁部から体部にかけての外面はいずれもロクロ目が明瞭である。内面はすべてヘラミガキ・黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけて横方向、底部は放射状になっている。

〔高台坏〕いずれも体部上半が失われており、全体の器形は明らかでない。高台についてみるとすべて短く外方に張り出し端部は丸くおさまる。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されており、なかにはそれが外面にも加えられるものもある。

〔高台坏〕口縁部が上方につまみ出されるもので、高台は長く外方に張り出す。内外面ともロクロ調整が主であるが、なかには皿部内面にヘラミガキ、黒色処理が施されるのもみられる。

〔甕〕製作のロクロを使用したものと使用しないものとがある。

A.製作にロクロを使用したもの

ロクロを使用したものには長胴形を呈するものや鉢形のものおよび小形でもしくは球形もしくは紡錘形を呈するものとがある。長胴形のものは体部中央がわずかにふくらみ口縁部が外傾するもので、器形は外面がロクロ調整ののちヘラケズリが加えられ、内面は主にナデ調整される。鉢形のものは体部がやや丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反もしくは屈曲して外傾する。器面は外面がロクロ調整ののち体部下端にヘラケズリは加えられ、内面はナデ調整される。小形のものはいずれも口縁部が短く外傾し、口縁端部がやや上方につまみ出される。内外面ともロクロ調整されるが、外面にヘラケズリが加えられるものや内面にナデ調整されるものもある。

B.製作にロクロを使用しないもの

ロクロを使用しないものに長胴形を呈するものと小形で球形もしくは紡推計を呈するもの

とがある。長胴形のものは体部中央がわずかにふくらみ口縁部が短く外傾するもので、器面調整は、口縁部においては内外面とも横ナデが施されるが体部は外面がヘラケズリされ内面にナデが施されるものと内外面とも刷毛目が施されるものとがある。小形のものは体部がふくらみ口縁部が短く外形するもので口縁部は内外面とも横ナデが施され体部は外面に刷毛目・内面にナデが施される。

〔小形鉢〕2点出土している。ともに体部から口縁部にかけて外形するもので、ロクロの使用痕跡は認められない。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がケズリ、内面はナデになっている。

〔羽釜〕1点出土している。製作にロクロを使用したもので、体部中央にややふくらみをもって立ち上がり、口縁部に至ってほぼ直立する。鍔は口縁下1.5㎝にあり釜本体から水平に1㎝ほど張り出す。器面は内外ともロクロ調整されている。

〔筒形土器〕１点出土している。製作にロクロを使用していないもので、体部から口縁部にかけて直立する。薄手で器面は凸凹が著しく、外面にヘラケズリ、内面にナデが施されるが、ともに雑な調整である。かなり火熱を受けている。

〔台付埦〕1点出土している。製作にロクロを使用していない。埦部は体部が丸味をもって立ち上がり口縁部でやや内傾しており、台部は内彎ぎみに外方に張り出す。埦部の外面は口縁部がヘラミガキ、体部がヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。外面のヘラケズリは台部との境のくびれまで及ぶ。台部は内外面とも横ナデが施される。

須恵器

〔坏〕坏には底部の切り離しがヘラ切りによるものと回転糸切りによるものとがある。いずれも内外面はロクロ調整で再調整は認められない。

A.ヘラ切りのものいずれも体部下端から内彎気味に外傾するもので、総じて内彎の度合いは弱くかなり直線的なものもある。個々の口径に対する底径の法量比は1：0.42～0.55の範囲内にある。

B.回転糸切りのもの

いずれも体部下端から口縁部にかけて内彎ぎみに外傾するが、内彎の度合いに強弱が認められる。個々の口径に対する底径の法量比は1：0.36～0.62の範囲内にあり、へら切りのものと比較するとその分布範囲は広い。

〔高台坏〕いずれも坏部が失われていく、高台についてみると、台が長く外方に張り出し端部が丸くおさまるものと、台が短く端部が平坦になるものとがある。

〔甕〕器形を推定できるものは1点である。それによれば体部中央に強くふくらみ、頸部でく

びれ口縁部が外反する。口縁端部は短く上方につまみ出される。口縁部は内外面ともロクロ調整が施され、体部は外面に平行叩き目、内面に同心円状のアテ目が認められる。

〔壺〕徳利形をなす長頸壺が1点ある。体部は中央がふくらみ、頸部は円筒状に直線的に立ち上がっており、口縁部で短く外反し、端部は丸くおさまる。器面は内外面ともロクロ調整で体部に自然釉がみられる。

〔蓋〕リング状につまみの破片が1点ある。全体の形状は不明である。

第1表　図示土器集計表

				8住	9住	10住	11住	12住	13住	15住	16住	17住	18住	19住	20住	21住	22住	23住	24住	25住	26住	27住	35住	49住	50住
土師器	坏			1	1	1(1)				1		1	1(2)	(1)	1		1			1	3(3)				1
	高台坏											1									1				
	台付皿																	(1)							
	甕	A ロクロ	長胴	1		1		2	5		1		1	1			2	(1)	1	1	1(1)	(1)			1
			鉢形						(1)												(1)				
			小形							1			(1)					1							2
		B ナデ	長胴	3									1		1		2								
			小形										(1)					(1)							
	小形鉢			1		1																			
	羽釜					1																			
	筒形土器																				1				
	台付埦																								
須恵器	坏	A ヘラ切				1				1										(1)					
		B 糸切		1		2	(1)			1			(1)				1			(1)	(2)				(1)
	高台坏																								
	甕																1	(1)							
	壺					1								1					(1)						
	蓋																1								

坏については復元実測したものについて扱った。（ ）は堆積土出土

2. 土器の年代

以上各種の土器について器形・調整等による主な特徴を述べた。これらは主に住居跡から出土したもので、その伴出関係を示したのが第1表である。次にこのような出土状況をふまえた土器の編年的位置づけについてふれてみることにする。

まず、土師器についてみると。器種には坏・甕（A・B）・高台坏・台付皿・小形鉢・羽釜・筒形土器・台付埦があり、このうち坏・甕（A）・高台坏・台付皿・羽釜はいずれも製作にロクロを使用しているものである。このような特徴を有する土師器は東北地方南部における土師器の編年のなかでいわゆる表杉ノ入式（氏家：1957）に位置づけられるもので、またロクロを使用しないもののうち甕（B）・小形鉢・筒形土器についても住居跡の床や貯蔵穴状ピット等において坏や甕（A）と共伴しており　さらに他の遺跡についても同様の共伴例が認められることからほぼ同一時期のものと考えられる。ただし台付埦について出土状況が地点的にこれらと異なり、土壙において単独に出土したもので、現在のところ他の遺跡にも例を見ないことから時期を限定できない。

須恵器には坏・高台坏・甕・壺がある。これらはその多くが住居跡において表杉ノ入式

の土師器と共伴しているものでその時期は明らかであり、そうでないものについても付近から出土する土師器のあり方からみてほぼ同時期に属するものと考えられる。

ところで表杉ノ入式の土器については近年坏を中心に製作技法や器形の点から細分が試みられている。（阿部：1968　桑原：1969　丹羽：1983他）。すなわち技法的には再調整のあるものから再調整のない回転糸切り痕を残すものへと変化し、器形的には口径に対する底径の占める割合が大きいものから小さいものへと変化するというものである。[註]　こうしたなかで本遺跡の土器はさらにどのように位置づけがなされるのか、以下数量的にややまとまりのある第26住居跡の坏を中心に若干の検討をくわえてみたい。

第26住居跡においては坏類は土師器6点、須恵器2点ある。土師器坏はカマドや貯蔵穴状ピット等ほか、堆積土中の床に近い部分から出土したものでその特徴はいずれも共通している。すなわち体部下端から口縁部にかけて内彎ぎみに外傾しており、内彎の度合いは強い。口径に対する底径の比率（底径/口径）は0.51が1点あるが他は0.41前後に集中する。器面はロクロ目が比較的シャープで、底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリの再調整が施されるものと回転糸切りのまま再調整が施されないものとがあり混在している。このような特徴は本遺跡の周辺では刈田郡蔵王町東山遺跡（真山：1981）、白石市家老内遺跡（真山：1981）、亘理郡亘理町宮前遺跡ⅣB郡土器（丹羽：前掲）に類例が求められ、さらに体部の内彎が強いことや回転ヘラ削りのものが含まれないことなどから新しい様相を示すとみられる後二者に近いとみることができる。須恵器坏についてこれらの2遺跡からは出土していないため比較できないが、東山遺跡のものと比較すると、本遺跡の場合体部の内彎の度合いが強く底径が小さい傾向にあり、またいずれも回転糸切りによるものでヘラ切りによるものでヘラ切りのものはみられないという後出の様相がうかがえる。

これらのことから同住居跡出土土器の実年代を推定すると、上限については9世紀中葉とされる東山遺跡よりは遡らないと思われ、下限について泉市鹿島竹ノ内遺跡（佐々木：1984）において。器形や法量では本遺跡にものに類似するが、回転糸切りのまま再調整が施されない点で新しい様相を示すとみられる土器（同遺跡第1住）の下限が10世紀前半とされることから9世紀後葉を中心とする年代が考えられる。

第26住居後以外のものでは第10住居後床面出土の土師器坏・須恵器坏のように体部の内彎度が小さく直線的で、口径/底径が0.53前後にあり、また須恵器坏なかにはヘラ切りのものも含まれていることからやや古い傾向がうかがえるものもあるが、数量に乏しく十分な検討ができなカッターため、ここではその可能性を指摘するにとどめることにする。その他の住居跡のものについては明確な点が多いが、その特徴が上記のものと大きく異なるものではなく、したがってほぼ9世紀後葉とした年代のなかにおさまるものと推定される。

なお第10住居跡から土師器羽釜が出土している。体部上半から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上り鍔が水平に張り出すもので、その年代は伴出する土師器坏等からほぼ9世紀前葉に位置づけることが可能である。類似するものとして仙台市中田畑中遺跡第1号住居跡出土のもの（青沼・長島：1983）がある。その他羽釜については仙台市安久遺跡（阿部：1984）、同市山口遺跡（田中他：1984年）、本吉郡津山町柳津館山館跡（阿部：1984）に出土例があるが、いずれも体部のふくらみが強い点で本遺跡のものと異なっており、これらの年代は判明するものでは10〜11世紀とされ、本遺跡のものより新しい時期に位置づけられる。

註.丹羽氏によれば9世紀については宮前遺跡第20住→青木遺跡第21住→東山遺跡時溜→家老内遺跡第2住といった変遷が指摘されている。

3．竪穴住居跡

竪穴住居跡は22軒検出されている。いずれも小梁川右岸の段丘上にあって、段丘崖に近くゆるやかに南へ傾斜する地点に立地する。これらの年代についてはすでに述べたように住居跡の伴出土器が概ね9世紀後葉を中心としたものであることから、ほぼそれに併行した時期が想定される。明確な年代決定の資料を伴わなカッター住居後について直接時期を限定することはできないが、住居跡周辺において上記の土器と明らかに相違するものがみられないという遺跡のあり方からすればやはり同一の時期に属する可能性が強いと考えられる。以下これらの住居跡の形態的特徴についてふれ、さらに集落としての若干も問題点を指摘しておきたい。

まず住居跡の平面形についてみるといずれも方形を基調としており規模は長軸が4.0m前後のものが多いが、なかには6.0〜7.5のやや大形のものが5軒ほどある。方向は第8・21住を

第２表　小梁川遺跡　平安時代住居跡

	平面形	規模	方向	床	柱穴	カマド	方向	貯蔵穴	カマド構築
8住	方形	4.6×4.5	N-20°-E	平坦	不明	南壁西寄り	S-20°-W	なし	粘土＋石
9住	方形	4.6×4.0	N-30°-E	やや東へ傾斜	不明	南壁東寄り	S-30°-W	カマド右脇	河原石＋粘土
10住	方形	5.9×5.6	N-30°-E	レキ(平坦)	4本(主)	東壁北寄り	E-30°-S	カマド左脇	河原石＋粘土
11住	方形	5.4×5.2	N-40°-E	平坦	4本(主)	東壁中央	E-40°-S	なし	粘土、掘り方
12住	方形	3.7×3.1	N-30°-E	平坦	不明	南壁西寄り	S-30°-W	なし	粘土、削り出し(外側)
13住	方形	4.0×3.9	N-30°-E	レキ(平坦)	(2)?	東壁南寄り	E-30°-S	なし	粘土
15住	方形	4.7×4.6	N-30°-E	平坦	3本(主)	東壁南寄り	E-30°-S	カマド左脇	粘土、掘り
16住	方形	4.7×4.6	N-30°-E	平坦	不明	東壁北寄り	E-30°-S	不明	不明
17住	方形	4.6×4.3	N-30°-E	平坦	3(4)本(主)	東壁南寄り	E-40°-S	カマド右脇	石＋粘土、掘り方
18住	方形	7.0×6.8	N-30°-E	平坦	4本(主)＋2	東壁南寄り	E-20°-S	カマド右脇	粘土、掘り方
19住	方形	5.9×5.5	N-30°-E	平坦	2(3)本(主)	東壁南寄り	E-40°-S	なし	粘土
20住	方形	4.3×4.0	N-30°-E	レキ(平坦)	不明	東壁北寄り	E-30°-S	なし	不明
21住	方形	3.2×2.9	N-0°-	平坦	不明	南壁東寄り	S-0°	カマド左脇	削り出し、不明
22住	方形	6.6×6.6	N-40°-E	平坦	3本(主)6本(壁)	東壁北寄り	E-40°-S	カマド左脇	粘土、掘り方
23住	方形	3.5×3.5	N-40°-E	平坦	不明	南壁東寄り	S-30°-W	なし	粘土
24住	方形	4.4×4.0	N-40°-E	平坦	2本(主)	東壁南寄り	E-45°-S	カマド右脇	粘土＋石、掘り方
25住	長方形	7.6×6.2	N-40°-E	平坦	3本(主)建てかえ	東壁南寄り	E-45°-S	カマド右脇	粘土、掘り方
26住	方形	7.8×7.4	N-30°-E	周溝等	4本(主)18(壁)	南壁西寄り	S-40°-W	カマド右脇	粘土　掘り方
27住	方形	4.2×4.2	N-40°-E	平坦	不明	東壁南寄り	E-40°-S	カマド右脇	石＋粘土、掘り方
35住	(方形)	6.4×X	N-40°-E	やや凹凸	不明	不明	不明	不明	不明
49住	(方形)	不明	N-40°-E	平坦	不明	東壁北寄り	E-40°-S	カマド左脇	不明
50住	方形	3.8×3.6	N-30°-E	平坦	19本(壁)	南壁東寄り	S-10°-W	カマド右脇	石＋粘土、掘り方

除いたものでは長短いずれかの軸が北より30～40°東に偏れた角度にあり、その偏れ幅は小さくかなり斉一性が認められる。この傾向は隣接しかつ時期的に関りの深い小梁川東遺跡(真山・菊地：本書収録)の不規則なあり方と比較するとやや異ったものといえる。

柱穴は11軒の住居跡から検出されており、その配置関係は大きく3つのタイプに分けることができる。まず第1として主柱穴のみを有するもので8例ある。主に4個からなるものが多くいずれも住居跡のほぼ対角線上に位置する。他にカマド付近の柱穴を欠き、2～3個で構成されるものもあるが、その配置は4個のものに共通しており、主柱穴に類似するものと考えられる。
第2は壁柱跡のみを有するもので1例ある。かなり小さめの掘り方が40～60㎝の間隔で並び、カマド部分を除いて四辺に巡る。第3は主柱穴と壁柱穴からなるもので2例あり、ともに大形に属する住居跡の見られるタイプである。

柱穴についてみると1軒（26住）4個が住居の対角線上にあるのに対し、他（22住）は3個からなるもので、そのうち2個が対角線上にあり。1個は壁際に寄っている。壁柱穴はいずれも等間隔で並ぶが、前者では4辺に巡るのに対し、後者は西辺から南辺にかけての2辺に巡る。

主　柱　穴	第10・11・15・17・18・19・24・25住居跡
壁　柱　穴	第50住居跡
主＋壁柱穴	第22・26住居跡

周溝は第26住居跡1軒にのみ検出されている。カマド・貯蔵穴状ピットを除く4辺にあり、壁の20㎝ほど内側を巡る。幅は40～60㎝、深さは10㎝前後である。同住居跡ではまた周溝とは別に貯蔵穴状ピットを起点に住居跡を対角線上に横切るように走る1本の溝が検出されている。幅40㎝前後、深さ16～22㎝である。一部周溝と重複するがそれより深く、除々に傾斜しながら住居外にのび、近くの段丘崖まで達するもので、その形態から排水溝のような性格のものと推定された。この溝と周溝との関係については明らかでないが、周溝については溝との重複部分に向けて必ずしも傾斜しているわけではなく、その点で性格を異にするものかも知れない。

カマドは21軒の住居跡から検出されている。その付設場所は東壁にあるものが14軒、南壁にあるものが7軒あり、東壁に集中する傾向がみられる。壁における位置は中央にあるのが1軒のみで、他はいずれも辺端側に寄るのが特徴である。その構築方法はすべて粘土貼り付けによるもので、側壁には河原石を芯として使用される場合もある。カマドの脇には径約80㎝の楕円形を呈する貯蔵穴状ピットが併設される場合が多く、13軒の住居跡から検出されている。ピット内堆積土からは焼土や木炭に混じって土師器坏等の土器が出土している。このような特徴は、青木遺跡や家老内遺跡等宮城県南部の表杉ノ入式期の住居跡において一般的に認められるものであり、本遺跡の場合もこのような傾向性のなかに位置づけられることができる。

ところですでに述べたようにこれらの住居跡は9世紀後葉を中心とする比較的限定された年

代が与えられるが、その間にあってこれらすべてが同時に存在したわけではない。第8・21住居跡における重複の例や、直接の切り合いはないもののかなり近接した位置にあることから上部構造が併存しえないと推定される第26・27住居跡の例などの重複関係が認められており、何回かの時期差が考えられる。一定期間内における構成軒数については明らかではないが、より小規模な単位の集落であったろうことが指摘される。

本遺跡の周辺において表杉ノ入式の集落とされるものには小梁川をはさんで隣接する小梁川東遺跡（前掲）がある。同遺跡からは6軒の住居跡が検出されており、その年代は9世紀前葉から中葉のかけての時期に位置づけられている。したがって本遺跡の住居跡の年代はおよそこれらの後続することになり、第1図に示したように付近に同期にかかわる遺跡が全く認められないことからすれば、一つの集落が小梁川東遺跡から小梁川遺跡へと移動してゆく「場」の変遷が想定される。

4．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3軒検出されている。いずれも住居跡の分布範囲内にあり、そのなかでも南寄りの部分に位置するもので、建物の方向は住居跡のそれにほぼ一致する。その形態について第1建物跡が3間×2間なのに対し、第2・3建物跡はそれぞれ6間×2間、5間×1間と細長く、柱掘り方についても第1建物跡が長軸約1mなのに対し、第2・3建物は0.5mと異なったあり方を示している。

年代については必ずしも明確とはいえないが、建物の方向に住居跡との関連性がうかがえることや、周辺から出土する土器が9世紀後葉中心という限定された年代幅にあることからみて、ほぼ同様の時期に位置づけられるものと推定される。なお第1建物跡および第2縦建物跡については住居後との間に重複が認められているが、それは上記の年代幅内においてのことと考えられる。

このような建物跡、特に第1建物跡のような3間×2間のものについて近年、集落跡のなかにおいても発見例が増加しており、倉庫や特別な住居跡といったような性格が想定されている（加藤・佐藤：1980、阿部・千葉：1980）。住居跡の一種とみた場合、第1建物跡においては柱掘り方や柱痕跡の大きさからみて有力者の建物を想定させるが、本遺跡の住居跡では第26住居跡にみるようにすでに規模や内部施設等において他のものを上回るものが存在することからすれば、むしろ別な性格のものとする方が妥当かも知れない。小梁川東遺跡において同様の3間×2間の建物跡が検出され、その配置から住居跡（第5住）のセットとして把握することが可能である。このことからすれば、その性格は住居跡以外の施設とりわけ倉庫のようなものと推定され、第2・3建物跡についてその細長い形態からみて住居跡とは認め難く、やはり同様のものと考えられよう。

5．方形周溝状遺構

方形周溝状遺構は2基検出されてあり、いずれも住居跡の分布範囲内にある。その形態は方形周溝墓に類似しており、軸方向はN－40°－Eで住居跡のそれにほぼ一致している。年代は出土遺物から同時期とみられるもので、類例として仙台市燕沢遺跡（佐藤・渡部：1984）や岩手上里遺跡跡（嶋・高橋：1983）等に同様のものが認められ、それぞれ「墓跡」「墳墓」といった性格は指摘されている。本遺跡において遺構のあり方や遺物の出土状況などからこのような性格を裏付ける根拠はえられなカッターが、仮にそれが上記のようなものであるとすれば、不明な点の多い同期の集落における埋葬形態を究明する上での重要な遺構と考えられるものである。今後の検討課題としておきたい。

6．土　　壙

土壙はいずれも平面形が円形や楕円形を基調としたもので、浅い皿状のものが多い。年代は土壙内から出土した遺物から古代に属し、さらに第1～3土壙ロクロ使用の土師器から表杉ノ入式に限定しうるものと思われる。その性格は不明な点が多いが、このなかで第4土壙については特殊な器種とみられる台付埦が土壙内から正位の状態で検出されており、何らかの宗教的な性格が想定される。

Ⅴ　ま　と　め

1.小梁川遺跡は白石川・小梁川両河川によって形成された河岸段丘上に立地している。

2.古代の遺構として竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡3軒、方形周溝状遺構2基、土壙4基が検出され、土師器、須恵器等の遺物が出土している。遺構のうち年代が判明するものは出土遺物からいずれ平安時代（9世紀後葉）に位置づけられるものである。

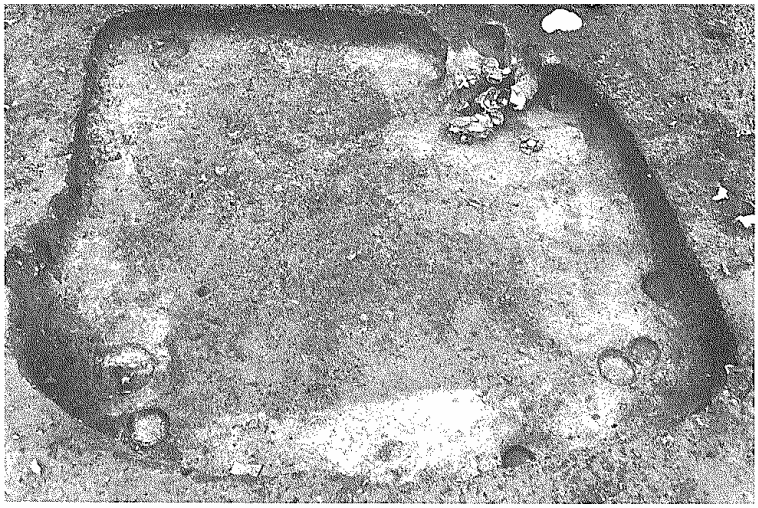
3.住居跡や掘立柱建物跡に時期差が確認されるものもあることから、一時期の集落としてはより小規模なものであったと考えられる。掘立柱建物跡はそのあり方から倉庫に類するものと推定される。

引用・参考文献

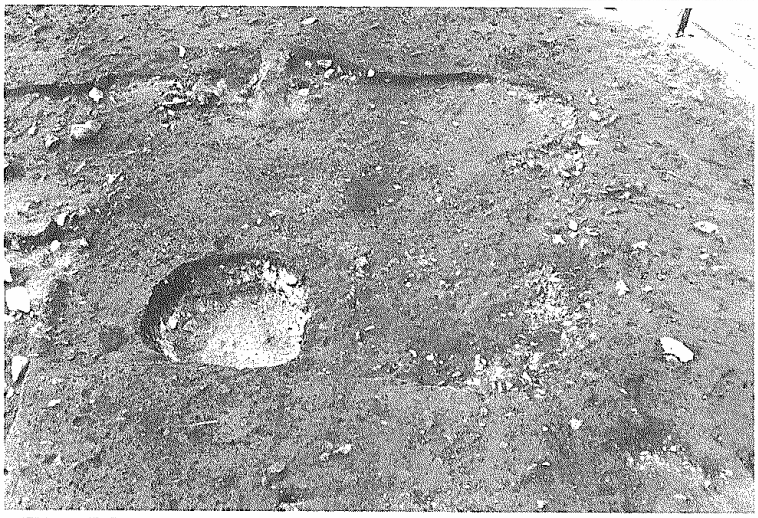
阿部博志・千葉宗久（1980）：「台ノ山遺跡」宮城県文化財調査報告書第62集
阿部　義平（1968）：「東国の土師器と須恵器」帝塚山考古学
阿部　恵　（1984）：「柳津館山館跡」宮城県文化財調査報告書第102集
青沼一民・長島栄一（1983）：「中田畑中遺跡」仙台市文化財調査報告書第53集
伊東信雄他（1975）：「安久遺跡発掘調査概報」
氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
小川　淳一（1980）：「青木遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集
加藤道男・佐藤好一（1980）：「藤屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集
桑原　滋郎（1970）：「ロクロ土師器坏について」歴史代39輯
佐々木和博（1984）：「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集
佐藤　庄一（1972）：「家老内遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集
佐藤裕・渡部弘美（1984）：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集
嶋千秋・高橋与右エ門（1983）：「上里遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集
新庄屋元晴（1982）：「小梁川遺跡」宮城県文化財調査報告書第90集
田中則和他（1984）：「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集
土岐山　武（1980）：「安久東遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集
丹羽・阿部・小野寺（1981）：「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集
丹羽　茂　（1983）：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
藤沼　邦彦（1972）：「青木脇・青木後遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集
真山　悟　（1981）：「家老内遺跡」宮城県文化財調査報告書第81集
真山　悟　（1981）：「東山遺跡」宮城県文化財調査報告書第81集
真山悟・菊池淳一（1985）「小梁川東遺跡」本書収録
宮城県教育委員会（1973）：「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書第33集
宮城県教育委員会（1975）：「宮前遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書第38集
宮城県教育委員会（1981）：「宮城県遺跡地図・地名表」宮城県文化財調査報告書第73・74集

図　　版

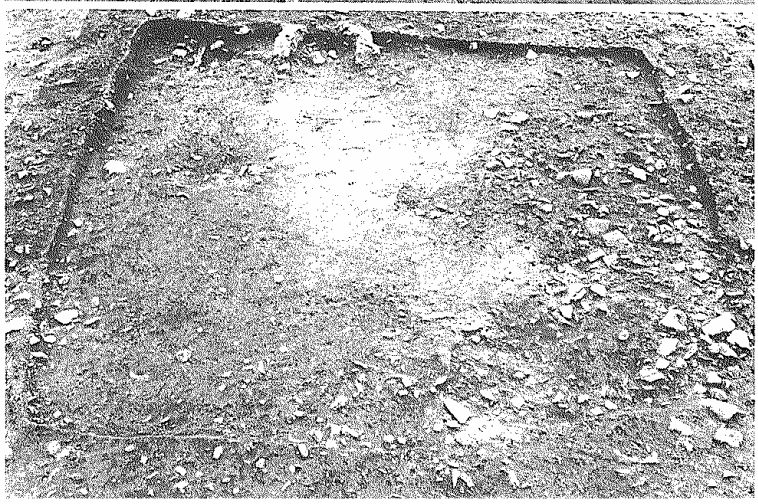
第８住居跡



第９住居跡



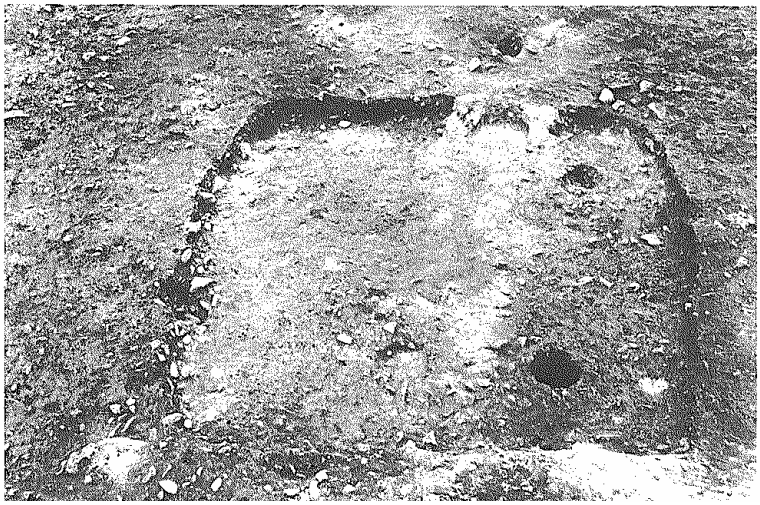
第10住居跡



図版 1

第11住居跡

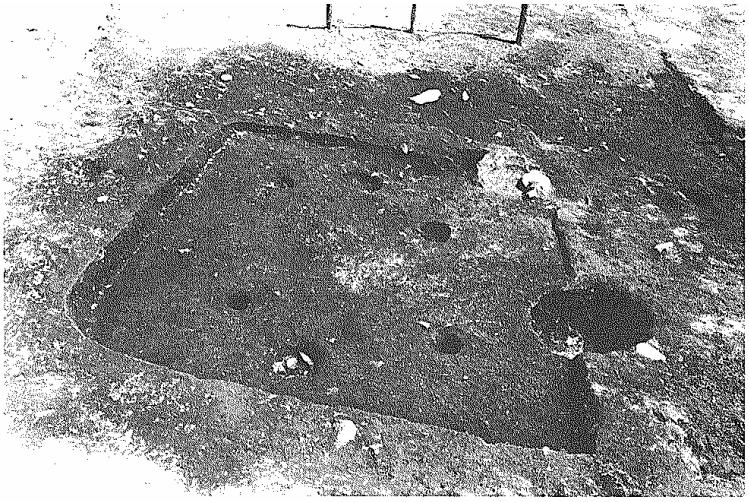
第12住居跡



第13住居跡

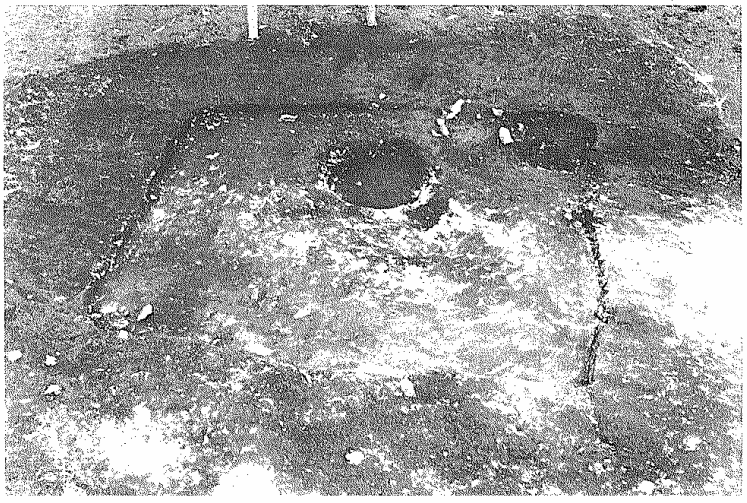
図版 2

第15住居跡

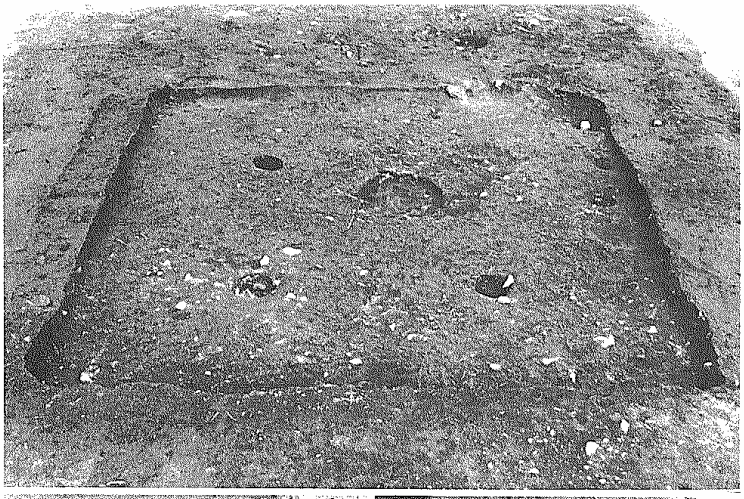


第16住居跡

第17住居跡

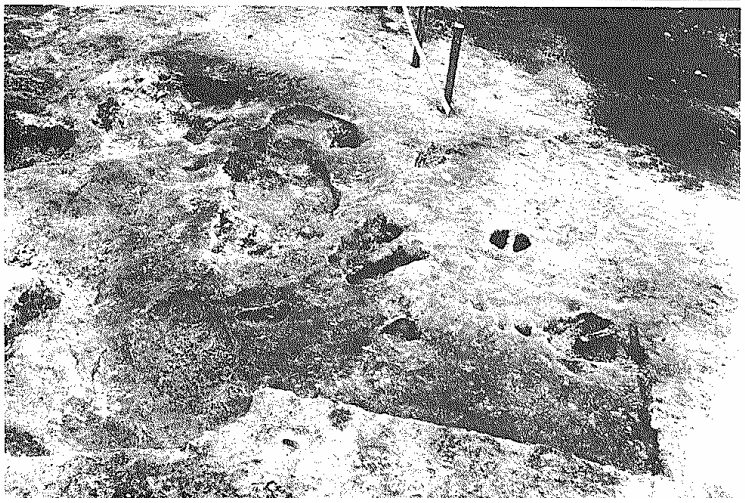


図版 3



第18住居跡

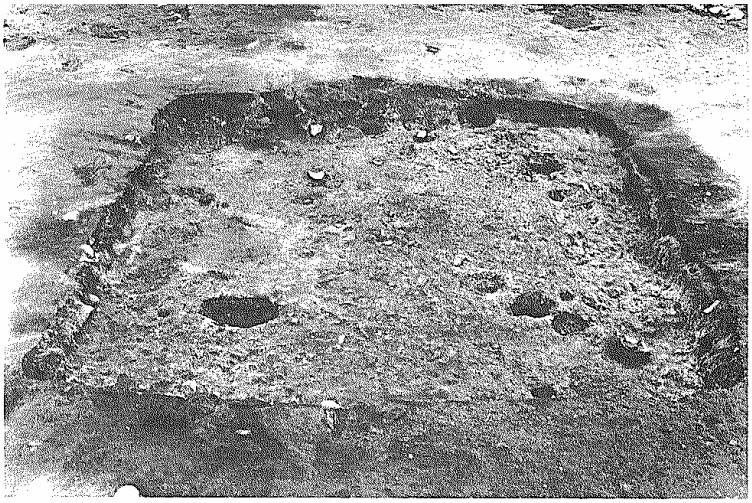
第19住居跡



第20住居跡

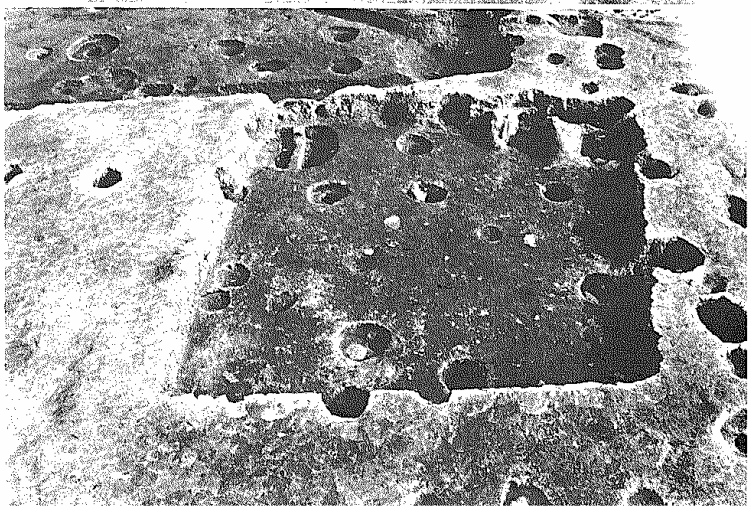
図版４

第22住居跡

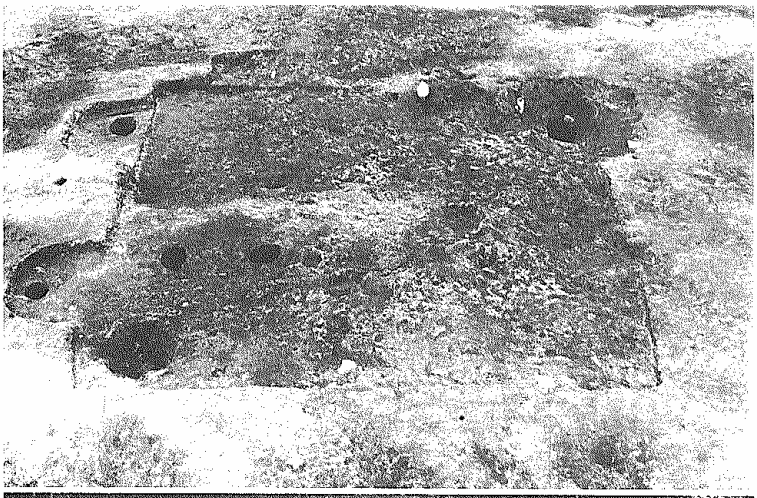


第23住居跡

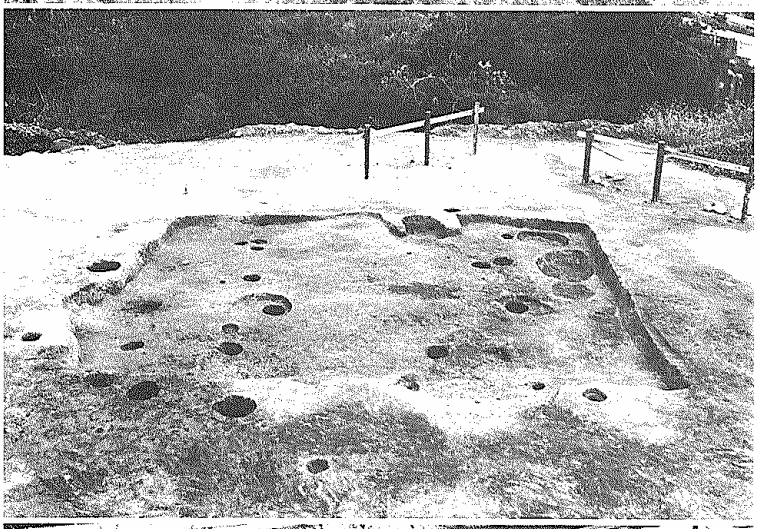
第27住居跡



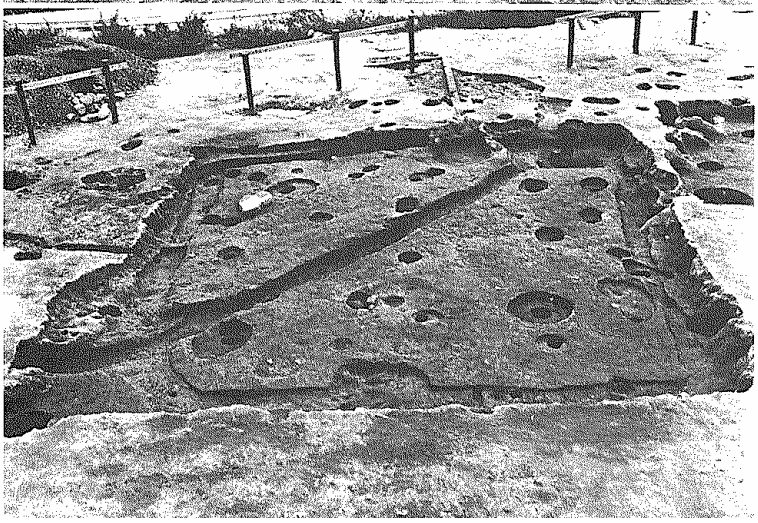
図版 5



第24住居跡



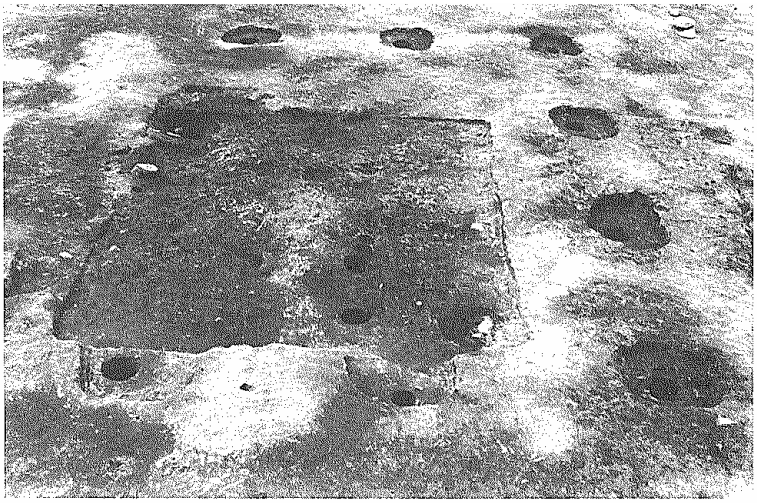
第25住居跡



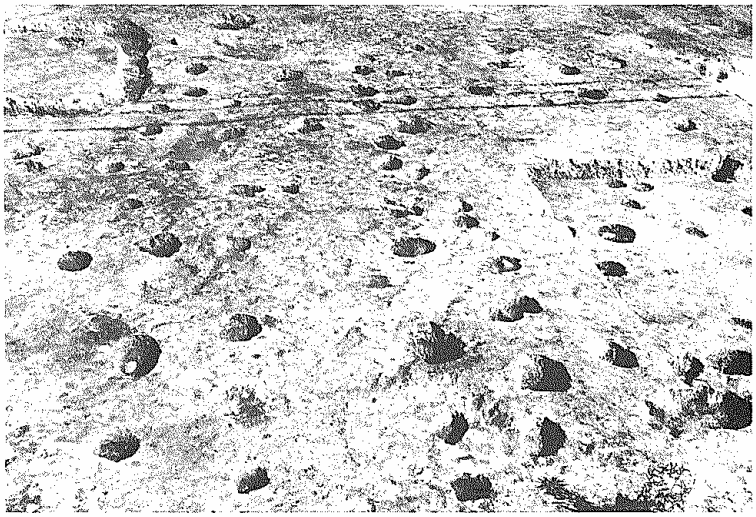
第26住居跡

図版 6

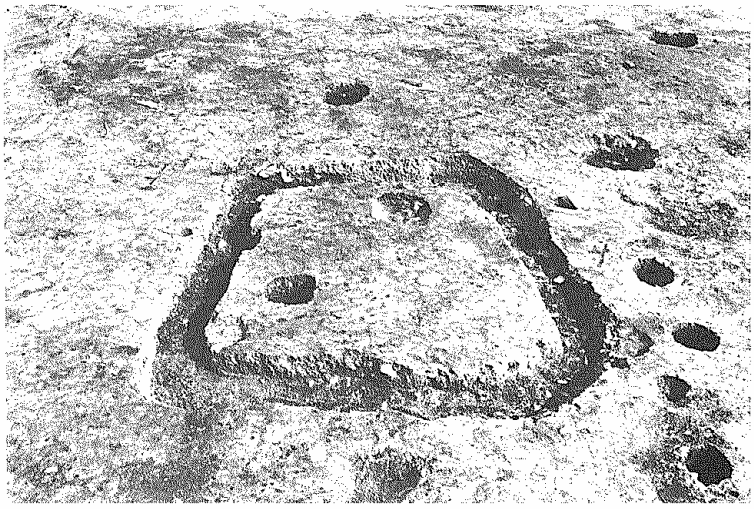
第１掘立柱建物跡



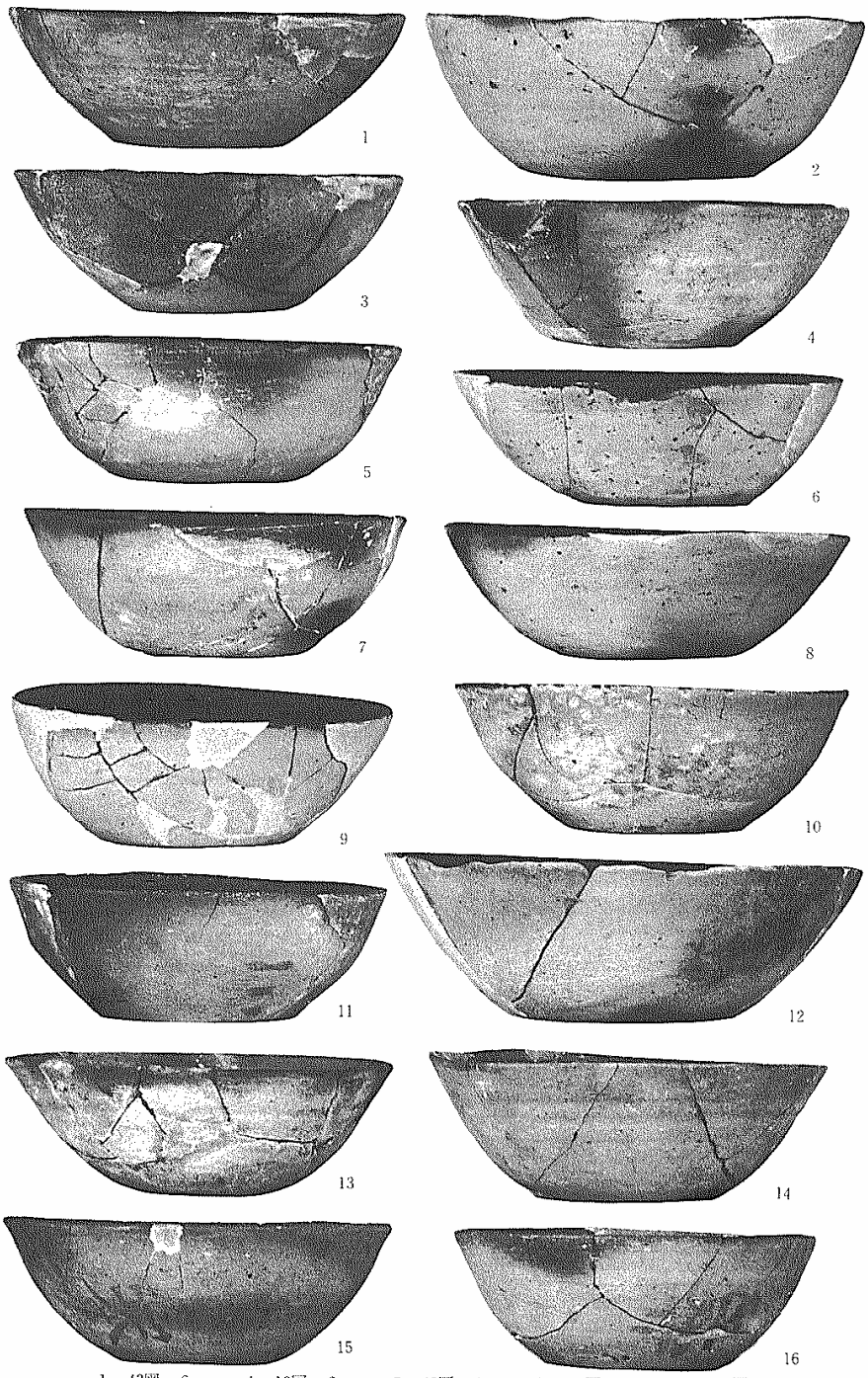
第２・３掘立柱建物跡



第１方形周溝状遺構

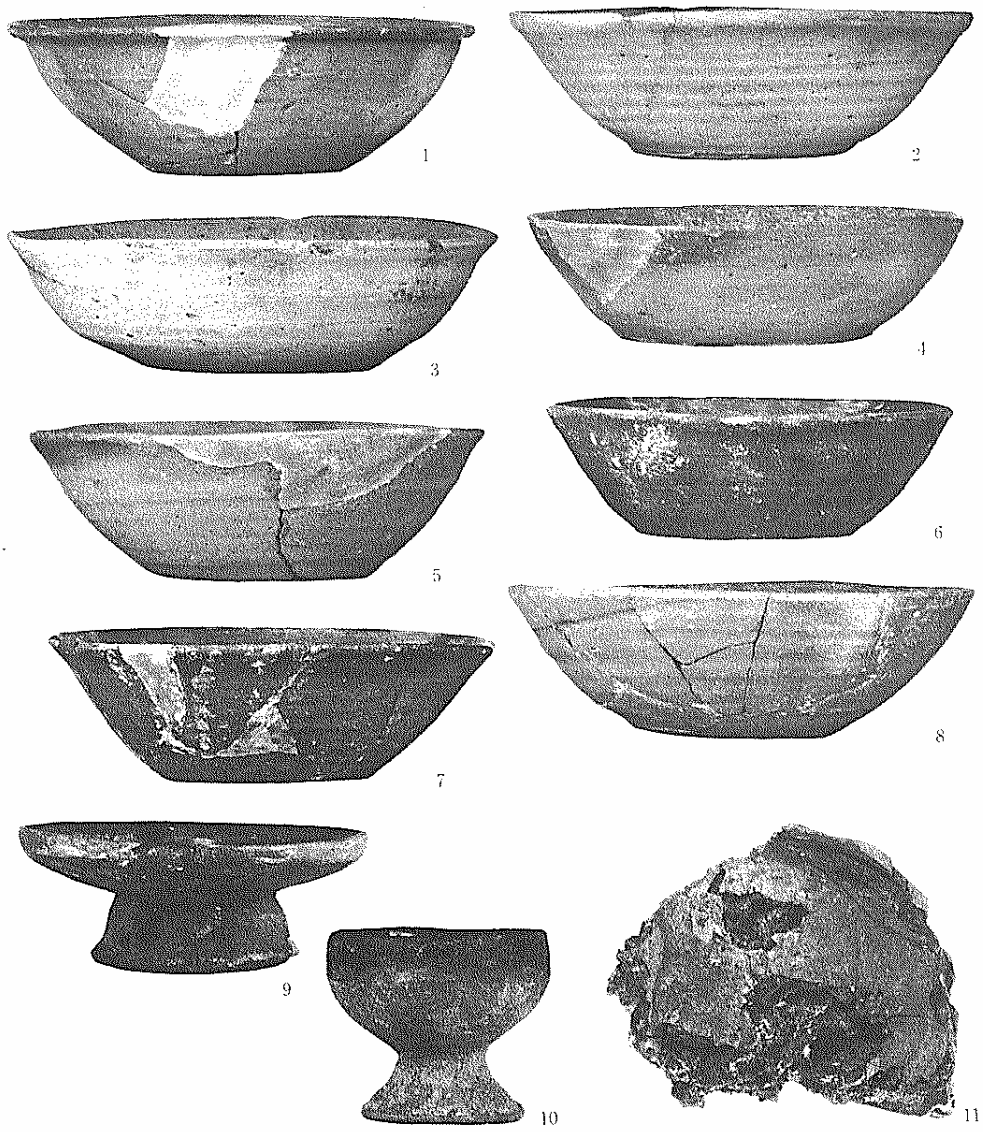


図版７



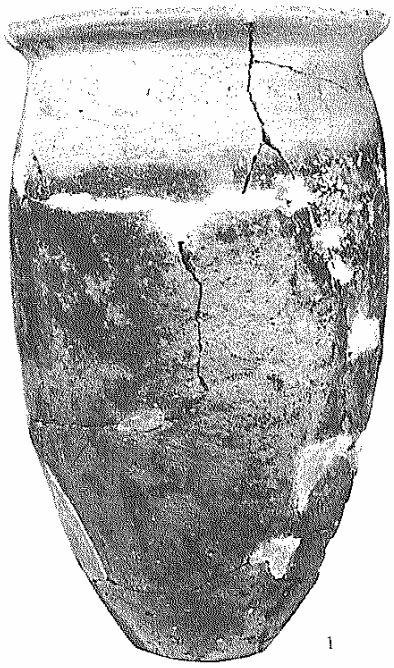
1．43図－6
2．43図－2
3．43図－5
4．10図－2
5．60図－1
6．43図－3
7．43図－1
8．43図－4
9．26図－2
10．20図－1
11．10図－1
12．
13．26図－1
14．5図－1
15．24図－1
16．31図－1

図版8



1．45図－2　3．45図－1　5．58図－3　7．10図－8　9．57図－2
2．6図－1　4．27図－7　6．59図－2　8．58図－2　10．59図－1

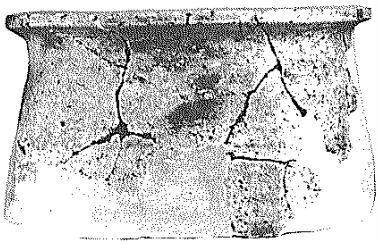
図版9



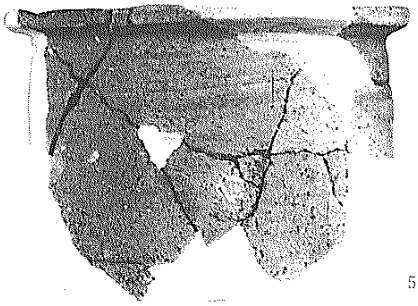
1

2

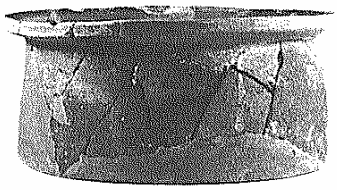
3



4



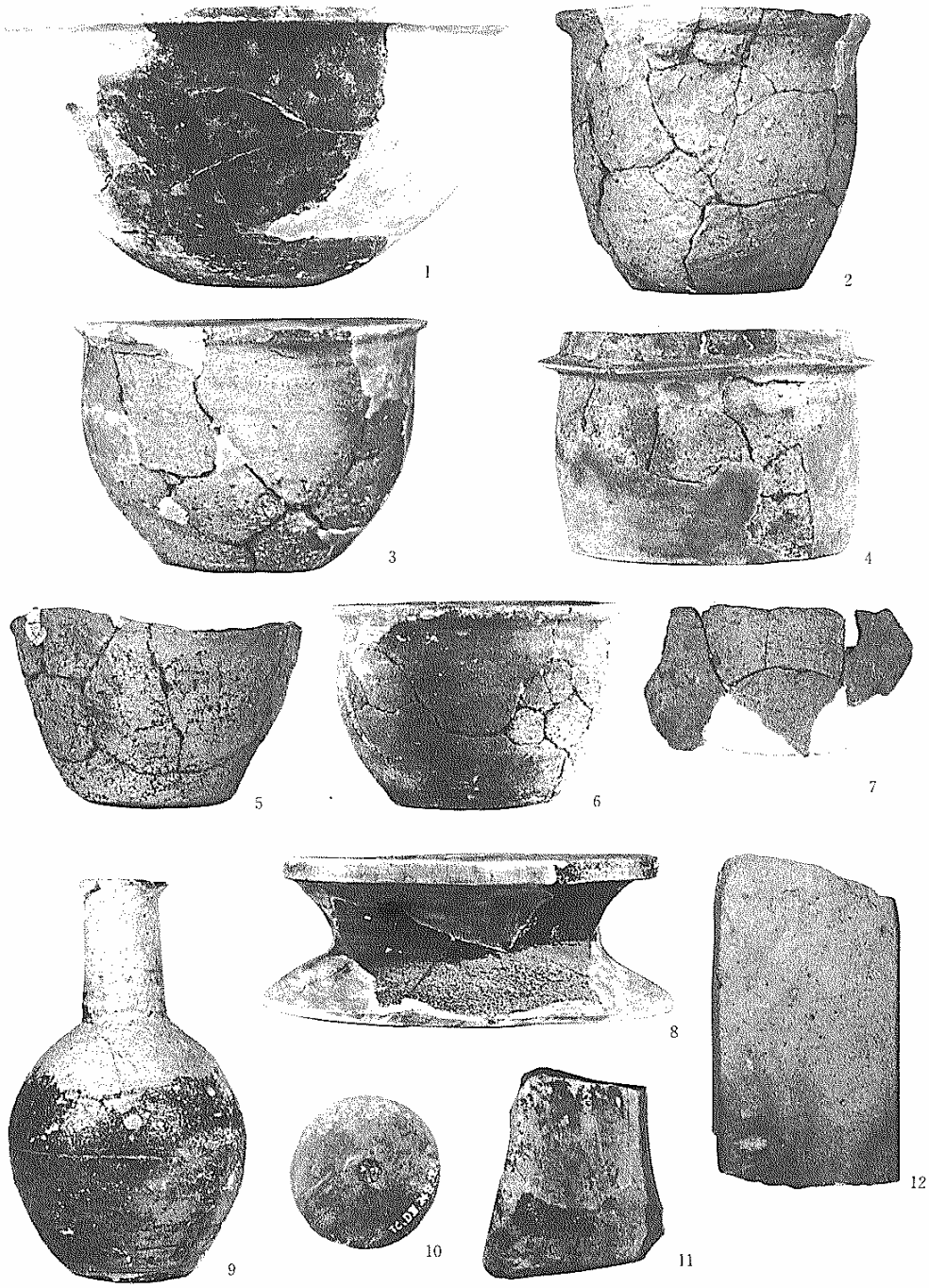
5



6

1．6図－1　　3．31図－2　　5．41図－3
2．5図－2　　4．29図－4　　6．51図－2

図版11



1．17図－7　3．51図－4　5．5図－5　7．44図－5　9．39図－2
2．34図－4　4．10図－6　6．51図－4　8．58図－5

図版12

小梁川東遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地形……101
Ⅱ　調査の経過……101
Ⅲ　発見された遺構と遺物……103
　1．縄文時代……103
　2．古　　代……137
Ⅳ　考　　察……157
　1．縄文時代……157
　　（1）出土土器……157
　2．古代の遺構と遺物……164
　　（1）．土器の分類……164
　　（2）．土器の年代……165
　　（3）．竪穴住居跡……166
Ⅴ　ま　と　め……169

調 査 要 項

遺跡記号：ＪＤ（宮城県遺跡地名表登載番号 04033）
遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町小梁川
調査期間：昭和 57 年 4 月 8 日～10 月 14 日
調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員：佐々木茂槙・新庄屋元晴・真山悟・菊地淳一・相原淳一・佐々木和博・村田晃一
調査対象面積：約 45,000m^2
発掘面積：約 35,000m^2

Ⅰ　遺跡の位置と地形

小梁川東遺跡は刈田郡七ヶ宿町の小梁川地内にあり、町の中心地である関から東へ約5km離れた地点に位置している。白石川の支流である小梁川の左岸に形成された標高約260mの河岸段丘上に立地するもので、小梁川に沿って南北に細長く伸びた遺跡である。

周辺の地形をみると、東側は標高約400mの丘陵がせまり、北～西側は小梁川に面する河丘崖となっている。段丘は遺跡付近において三段に発達しており、各段とも平坦かもしくはゆるやかに南西へ傾斜している。現状は大部分が桑畑等の畑地として利用されており、一部が墓地となっている。なお遺跡の西側には小梁川遺跡、東側には大倉遺跡がそれぞれ隣接している。

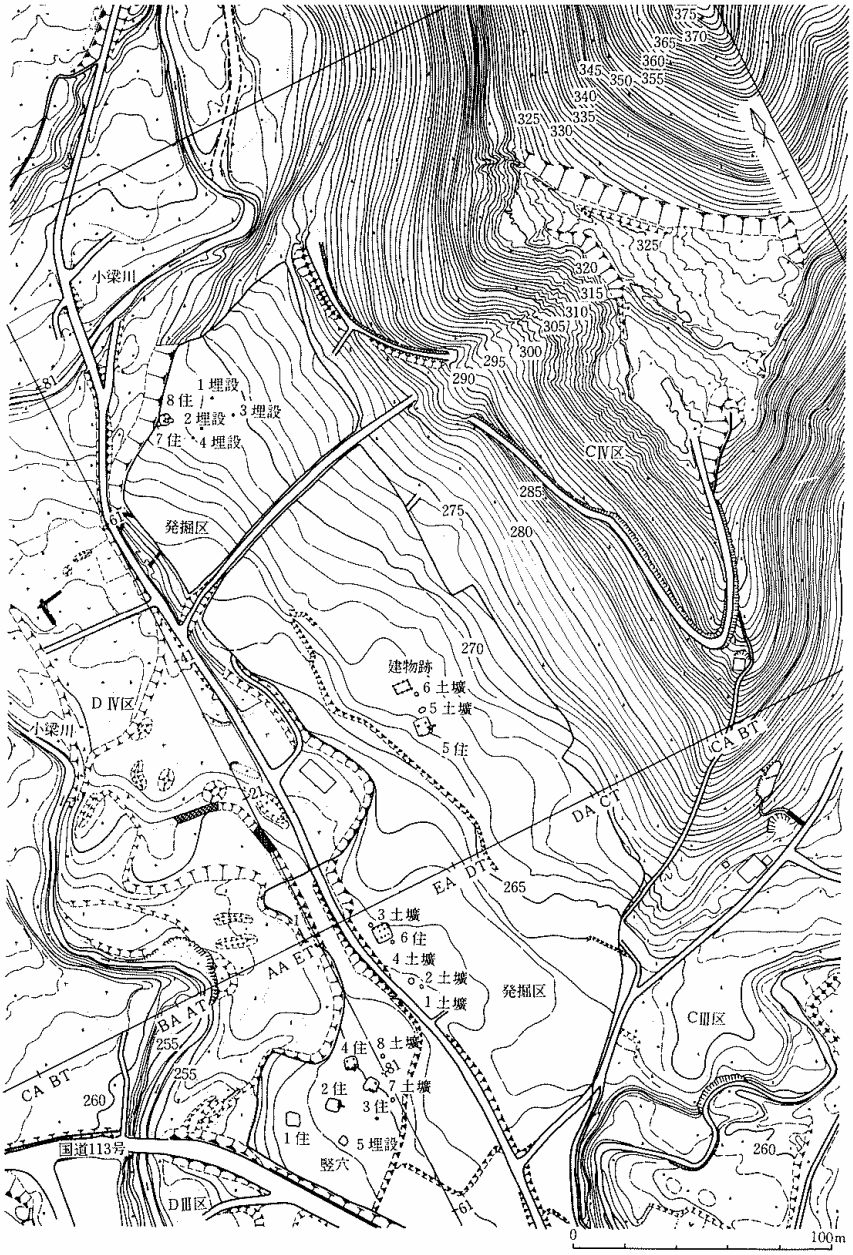
※位置と環境については「小梁川遺跡」の第Ⅰ章を参照されたい。

Ⅱ　調査の経過

調査を開始したのは昭和57年4月8日からである。遺跡の南部から遺構の確認作業を行った結果、段丘下段の部分において、古代の竪穴住居跡4軒（第1～4・6号）および竪穴遺構1基、縄文時代の敷石遺構1基、埋設土器遺構1基（第5号）等を検出した。その間、隣接する小梁川遺跡の遺構確認作業も併行して行っており、縄文時代の遺構が多数検出されている。

遺跡南部における古代の住居跡等の精査に入ったのは6月9日からで、掘り上げた後、遺構は平面図・断面図作成や写真撮影等を行ない、6月23日同地区の精査を一旦終了する。その後は小梁川遺跡の精査に入り、再び本遺跡の調査、すなわち遺跡の中央部から北部にかけての遺構確認に着手したのは9月下旬からである。検出された遺構は遺跡中央部から古代の竪穴住居跡1軒（第5号）、掘立柱建物跡等、北部から縄文時代の竪穴住居跡2軒（第7・8号）、埋設土器遺構4基（第1～4号）等で、9月28日から精査を開始し、平面図作成、写真撮影等を含め、一切の調査を終了したのは10月14日である。なお10月16日には小梁川遺跡の調査成果と合わせ、一般公開のため現地説明会を開催している。

※調査の方法についてはすべて「小梁川遺跡」での方法に準じており、同遺跡第Ⅱ章を参照されたい。


小梁川
1埋設
8住
2埋設
3埋設
7住
4埋設
発掘区
DⅣ区
小梁川
建物跡
6土壙
5土壙
5住
CⅣ区
DA CT
CA BT
EA DT
3土壙
6住
4土壙
2土壙
1土壙
発掘区
AA ET
BA AT
CA BT
4住
8土壙
7土壙
2住
3住
1住
5埋設
竪穴
国道113号
DⅢ区
CⅢ区
0
100m

第1図　遺構配図

Ⅲ　発見された遺構と遺物

今回の調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土壙4基、敷石遺構1基、埋設土器遺構基および古代の竪穴住居跡6軒、竪穴遺構1基、掘立柱建物跡1軒、焼土遺構2基、土壙2基が検出され、縄文土器、土師器等の遺物が出土した。

1．縄文時代

⑴ 竪穴住居跡

第7号住居跡

〔位置・確認面〕遺跡の北端に位置するCⅣ－ＥＧ－71区の地山面で確認された。

〔重複〕第8号住居跡によって切られており、同住居跡より古いことが知られる。

〔平面形・規模〕段丘崖の崩落と耕作による撹乱のため壁と床の大部分が失われており、平面形・規模は明らかでない。

〔堆積土〕炉の周辺に黄褐色土が堆積している。

〔床〕土器埋設部と石組部からなるもので、全体形は土器埋設部一部が失われているため明確ではないが、ほぼダルマ形をなすものと推定される。規模は長軸が残存長で4.1m、最大幅は1.5mで、長軸方向はＳ－30°－Wである。

土器埋設部は深鉢が1個埋められている。口縁部が失われているため深さは明らかでない。土器の内部には炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、また土器の周縁の土層は赤変している状況から、かなり熱を受けたものと思われる。

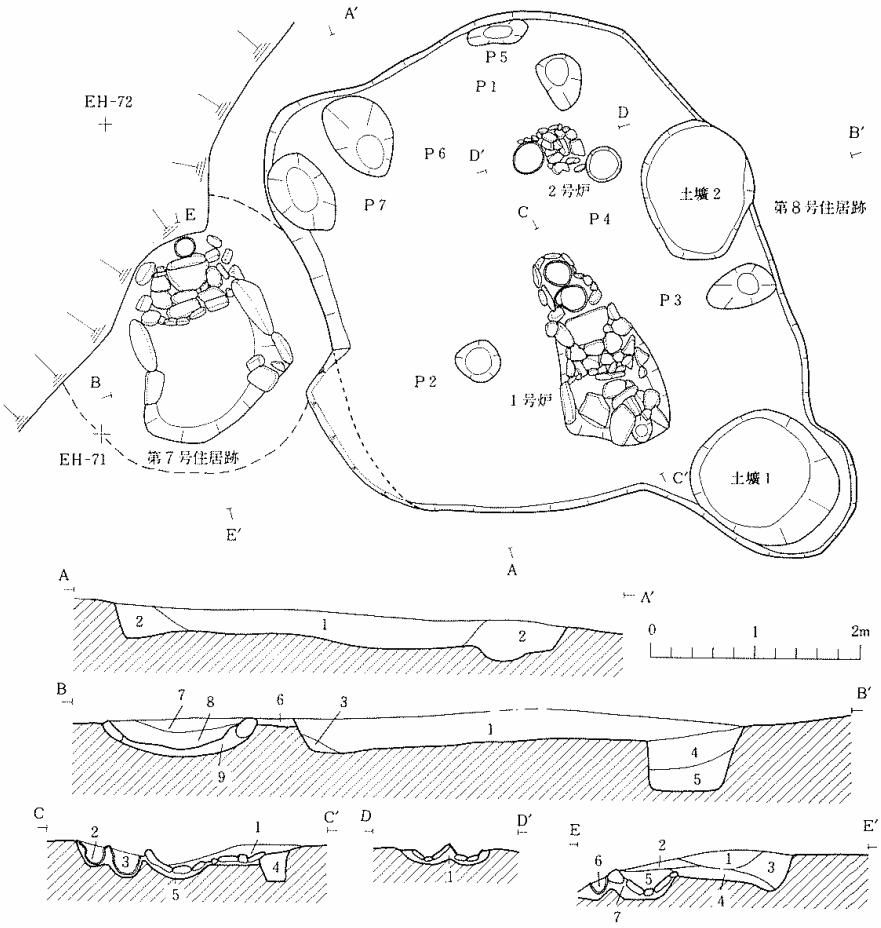
石組部は丸味をおびた長方形の掘り方のなかに平たい河原石を敷きつめたもので、段を境に二つに分けられる。このうち土器埋設部と接する部分は河原石が底面から側面にかけて全面に用いられており、その断面は半円系形を呈し住居床面からの深さが35㎝ほどになる。他の石組み部は側面にのみ石が用いられるもので、断面図は逆台形を呈し底面は平坦である。

出土土器（炉出土）

〔口縁部資料〕（第3図1～3・8～11）

01～3は胴部が丸みをもって立ち上り胴上位でくびれ口縁部が外傾する深鉢である。文様は幅の広い沈線によって胴部から口縁部にかけて施されており、構成がほぼ明らかな1では「ヲ」状文になる。

8～11は地文のみが施される深鉢である。口縁部形態は8が内彎、9・10が外傾、11は直立しており、このうち10では口縁部外面が磨消され無文化されている。



A－A′　B－B′

層No.	土色・土性	備考
1	黄褐色シルト（10YR5/6）	炭化物を多く含む
2	黄褐色シルト（10YR5/8）	炭化物を含む
3	明褐色シルト（10YR6/8）	炭化物を含む
4	褐色シルト（10YR4/4）	炭化物を多く含む
5	黄褐色シルト（10YR5/6）	炭化物を含む
6	明黄褐色シルト（10YR6/6）	炭化物を含む 子住埋土
7	黒褐色シルト（10YR3/2）	炭化物を含む
8	褐色シルト（10YR4/6）	炭化物を含む
9	明黄褐色粘土（10YR6/6）	炭化物を含む

C－C′

層No.	土色・土性	備考
1	褐色シルト（10YR4/6）	炭化物を多く含む
2	黒色シルト（10YR2/3）	炭化物を多く含む
3	黒色シルト（10YR2/1）	炭化物を多く含む
4	明黄褐色粘土（10YR6/8）	炭化多を含む
5	褐色シルト（10YR4/6）	炭化物・焼土を含む 炉の掘り方埋土

D－D′

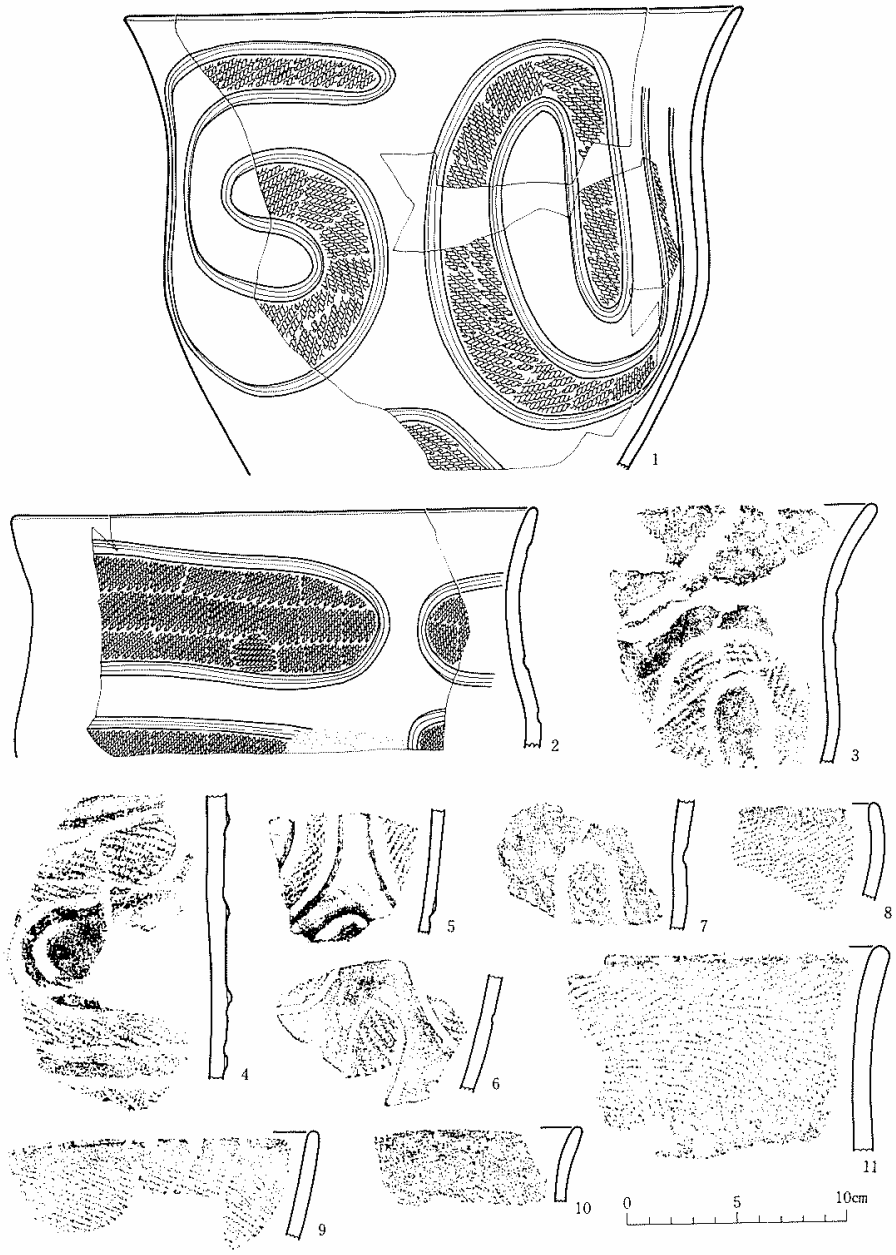
層No.	土色・土性	備考
1	褐色シルト（10YR4/6）	炉の掘り方埋土

E－E′

層No.	土色・土性	備考
1	黒褐色シルト（10YR3/2）	炭化物を多く含む
2	褐色シルト（10YR4/6）	炭化物を含む
3	褐色シルト（10YR4/4）	炭化物を含む
4	明黄褐色シルト（10YR6/8）	
5	黒色シルト（10YR2/1）	炭化物を多く含む
6	黒色シルト（10YR2/1）	炭化物を含む
7	褐色シルト（10YR4/4）	炭化物を含む、炉の掘り方埋土

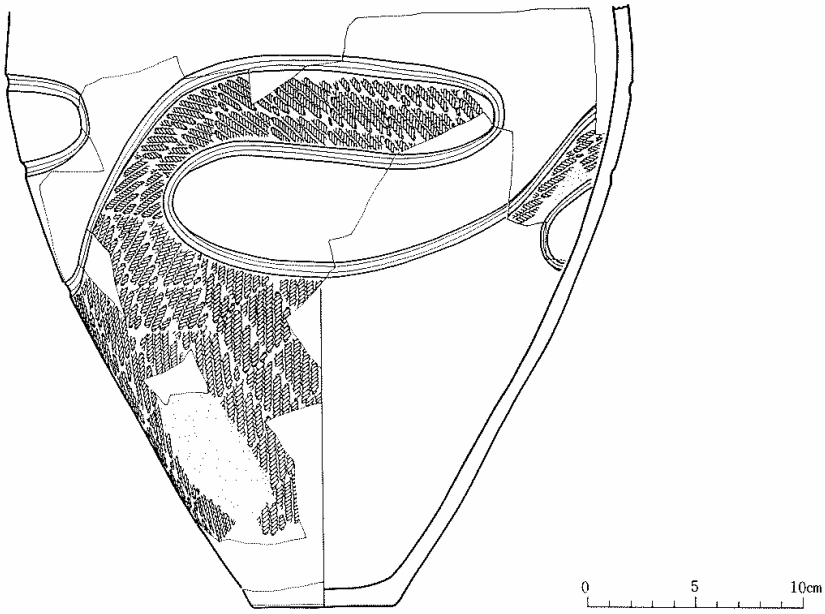
ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7
深さ(cm)	44	56	28	35	32	34	35

第2図　第7・8号住居跡



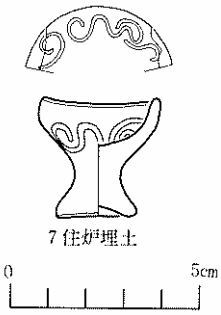
番号	地区・層位	文様の特徴	分類	器形	図版	6	7住ｶﾞ一埋土	〃 沈線文 縄文LR充塡	A	105	14-5
1	7住ｶﾞ一埋土	「e」状沈線文 縄文LR充塡	AⅢbイ	8	10-2	7	7住ｶﾞ一埋土	〃 沈線文 縄文LR充塡	A	249	14-4
2	7住ｶﾞ一底面	区画沈線文 縄文LR充塡	AⅢb	9	10-1	8	7住ｶﾞ一埋土	縄文LR	B	251	14-6
3	7住ｶﾞ一底面	〃 沈線文 縄文RL充塡	AⅢbイ	100	14-1	9	7住ｶﾞ一底面	縄文LR	B	103	14-7
4	7住ｶﾞ一底面	〃 隆沈線文 縄文LR充塡	A	106	14-2	10	7住ｶﾞ一埋土	撚糸文R	B	250	14-8
5	7住ｶﾞ一底面	〃 隆沈線文縄文RLR充塡	A	102	14-3	11	7住ｶﾞ一底面	縄文LR	B	101	14-9

第３図　第７号住居跡出土遺物



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	7住炉埋設土器	波状沈線文、 縄文L 0段3条充填	A類b	10	7－2

第４図　第７号住居跡炉埋設土器



第５図　袖珍土器

＜胴部資料＞（第3図４～７・第４図）

第４図は胴部がやや丸みをもって外傾し胴部でくびれる深鉢で、口縁部は失われており形状は明らかでない。胴部には幅の広い沈線によって波状文があらわれる。

第３図４～７は深鉢の胴部破片で、４・５は隆沈線、６・７は沈線によって区画文様が施される。

＜袖珍土器＞（第５図・図版16－20）

台付鉢である。台部は「ハ」字状に短く開き、胴部から口縁部にかけては内彎ぎみに立ち上がる。胴部外面には沈線によって「ヨ」状の文様が施される。

第８号住居跡

〔位置・確認面〕 CⅣ－ＥＦ－７１区の地山面で確認された。

〔重複〕 第７号住居跡をこわして構築されており、同住居跡より新しいことが明らかである。

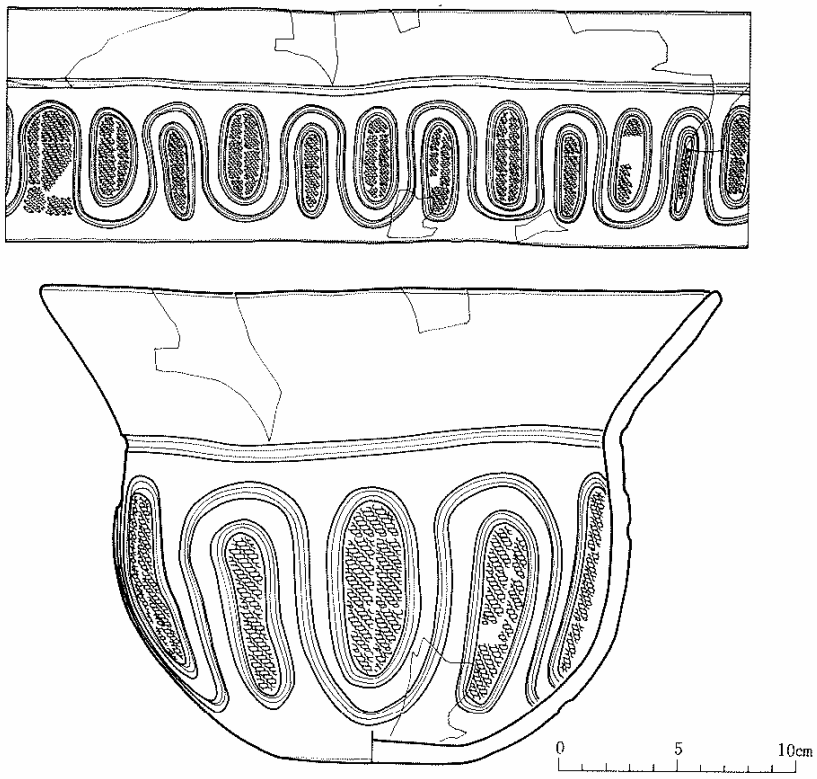
〔平面形・規模〕 円形を基調とするもので、住居の南東縁に円形の張り出し部を有する。規模

は長軸が4.7m、短軸が4.3mである。
〔堆積土〕堆積土は3枚の層に分かれる。第1層は黄褐色土で住居の中央に厚く堆積し、第2・3層はそれぞれ黄褐色・明褐色土で住居の壁際に流れ込むように堆積しており、各層とも自然流入の状況を呈している。
〔壁〕地山を壁とする。壁高は保存のよい部分で35㎝を測り、立ち上りは急角度である。
〔床〕地山を床とするが、張り出し部においては掘り方の埋土を床としている。
〔柱穴〕床面において4個のピットが検出された。径30～40㎝の円形を呈し、深さは30～50㎝である。このうちピット１～３は１号炉を中心に三角形をなすように配されており、規模も一定していることから主柱穴と考えられる。
〔１号炉〕１号炉は住居の中央から南寄りにかけての位置で検出された。ダルマ形を呈するもので、土器埋設部と石組部から構成されている。規模は長軸が2.04m、最大幅が1.05mで、長軸方向はN－30°－Wである。
土器埋設部は器高20～30㎝の深鉢を同一の掘り方のなかに正位の状態で埋め込んだもので、周囲には河原石が巡らされている。土器の内部には炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、また土器の周縁が赤辺していることからかなり加熱を受けたものと思われる。
石組部は卵を呈する掘り方のなかに底面から側面にかけて平たい河原石を敷きつめたもので、段を境に二つの部分に分かれる。このうち土器埋設部と接する部分は断面が半円形を呈して床面からの深さが約20㎝ほどになる。他方は底面が平坦で断面が逆台形を呈しており、前者に比して浅く底面からの深さは約10㎝である。石の組み方は前者よりやや粗雑である。
〔２号炉〕２号炉は住居の中央やや北寄りの深鉢を部分で検出された。ダルマ形を呈し、土器埋設部と石組部から構成されている。規模は長軸が0.9m、最大幅が0.6mで長軸方向はS－60°－Wである。
土器埋設部は胴部下半を欠落させた深鉢を埋設させたもので、深さは約10㎝を測り底面に河原石を敷いている。
石組部は円形の掘り方のなかに平たい河原石を敷いたもので、断面が半円形を呈しており、床面からの深さは約10㎝である。

出土土器

１号炉出土土器（第6・7図）

ともに炉に埋設された深鉢である。器形は両者とも胴部が丸みをもって立ち上り、胴上位でくびれ口縁部が外傾する。文様は胴部にあって広い沈線によって描かれており、口縁部は横位の沈線によって胴部と区画され無文帯となっている。文様構成は第６図では大波状沈線と



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	8住1号炉埋設土器A	口縁部－無文(ミガキ)、頸部－横位沈線、胴部－大波状沈線、縦位楕円沈線文 縄文LR充填	AⅢa イ	1	5－1

第６図　８号住居跡１号炉埋設土器A

縦位楕円文が組み合い楕円のなかに縄文が充填されており、第７図は円文をはさんだ形の「U」状文が５単位で構成され、「∩」状のなかに縄文が、円文のなかには刺突がそれぞれ充填される。

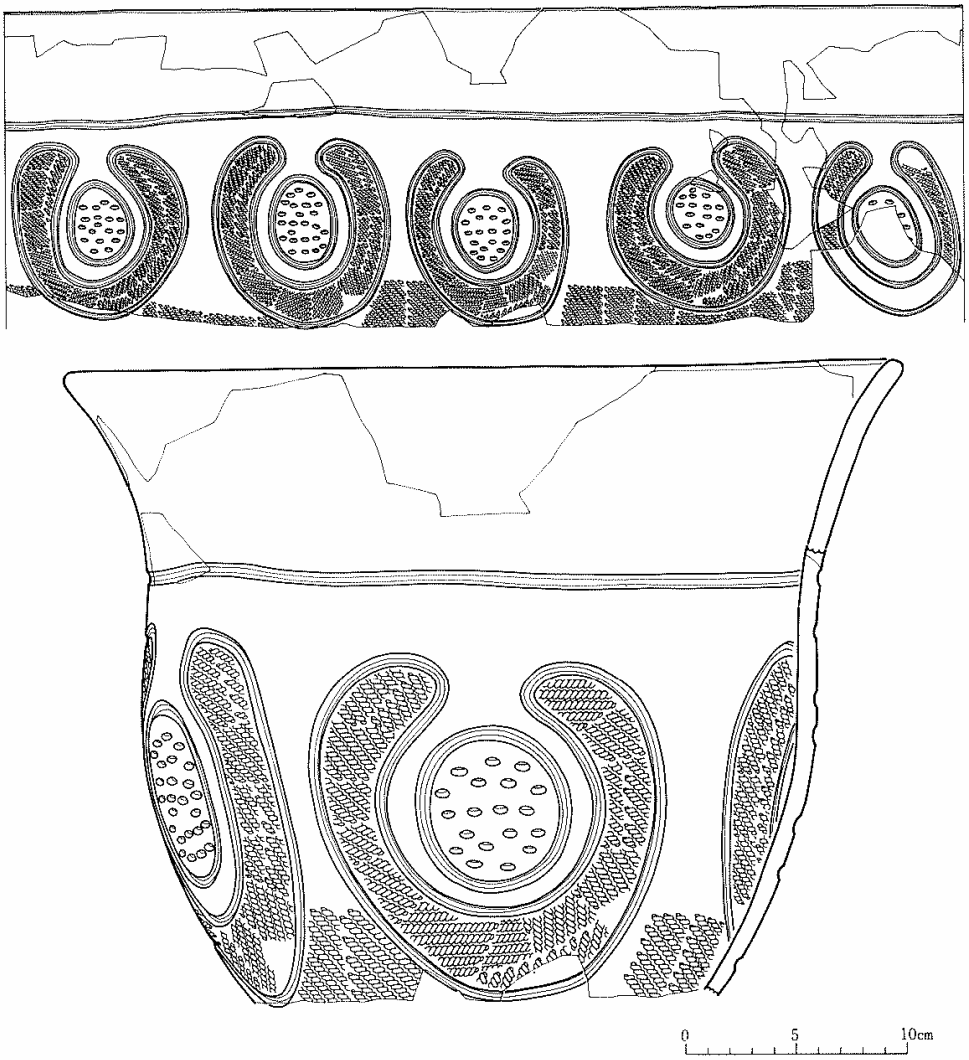
2号炉出土土器（第8図）

１は炉の埋設土器、２は炉底面出土の土器である。このうち１は胴部が丸味をもち胴上位でくびれ、口縁部は外傾する深鉢である。文様は沈線によって胴部から口縁部にかけて「U」状文や「S」字状文などが描かれ、各文様のなかに縄文が充填される。

２は浅鉢と推定されるもので、器形は胴部が直線的に外傾し胴上位でふくらみ口縁部が内彎する。文様は沈線によって施され、逆三角形の文様を中心に「C」字状文が向い合う構成になっている。充填縄文である。

床面出土土器

１は深鉢である。器形は胴部がやや丸味をもって立ち上り胴上位でくびれ、口縁部は欠損す

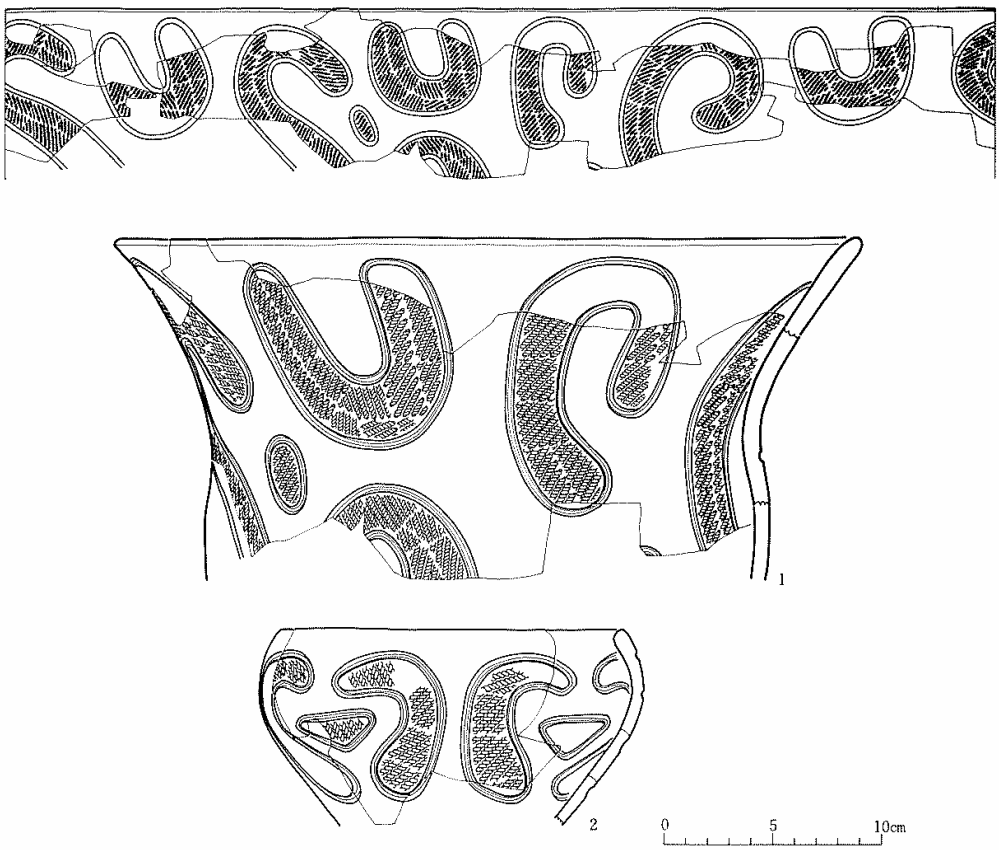


番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	8住1号炉埋設土器B	口縁部－無文、頸部－横位沈線、胴部－玉抱き「U」状沈線文、刺突、縄文LR充塡	AⅢa○	2	5－2

第７図　第８号住居跡１号炉埋設土器B

るが外傾もしくは外反するものが推定される。文様は胴部中央から口縁部にかけて幅の広い沈線によって描かれており、波状文の変形したものと推定される。

2～4は口縁部破片である。２は胴上位でくびれ口縁部が外反する深鉢と推定される。口縁部と胴部とは横位の隆線によって区画され胴部の沈線の文様が描かれるもので、口縁部は無文化される。3は口縁部が内彎するもので、口縁部は無文、胴部は縄文が施される。４は口縁部



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	8住2号炉埋設土器	「U」状沈線文、「S」?状沈線文、縄文RL充塡	AⅢbイ	3	6－1
2	8住2号炉底面	「ɔ」状沈線文、三角状沈線文、縄文RL充塡		5	6－2

第８図　第８号住居跡２号炉埋設土器

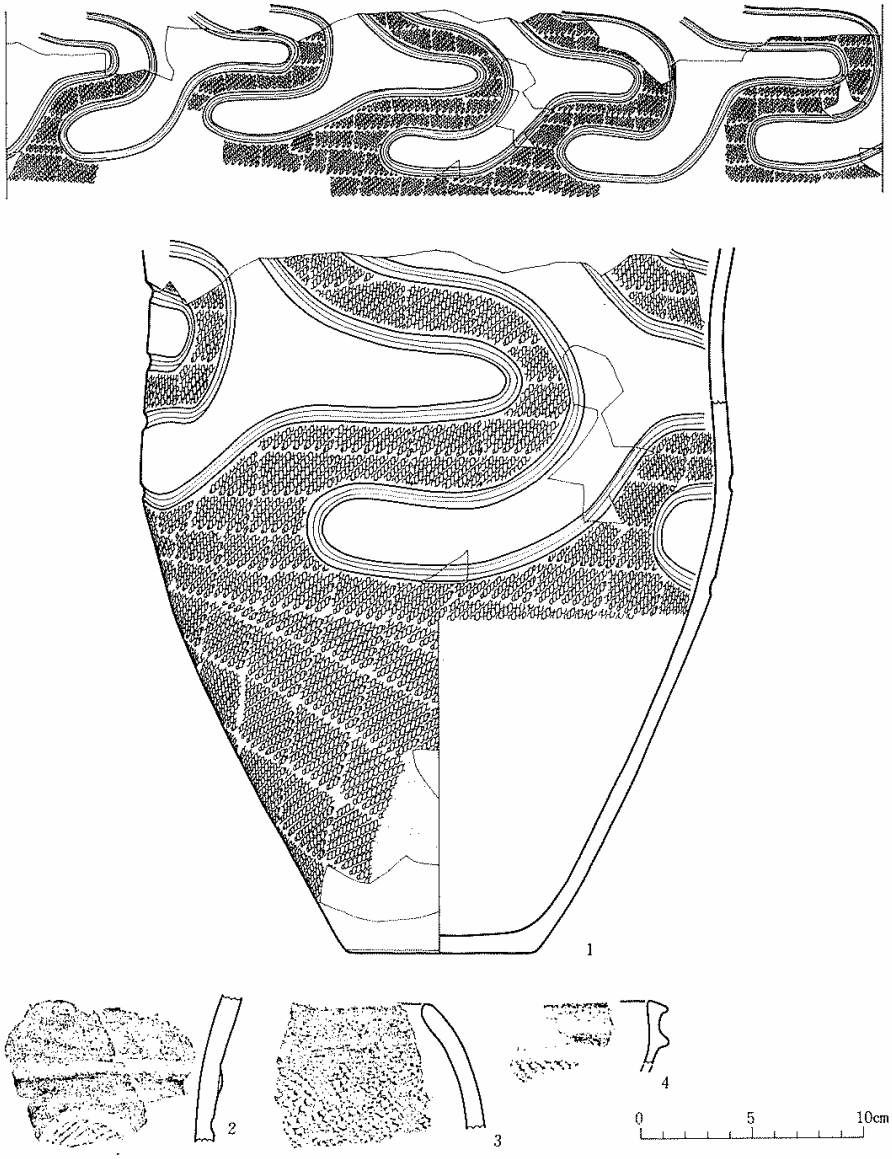
がやや内彎するもので浅鉢かも知れない。口縁端および口縁下に隆線、胴部に縄文がみられる。

住居内堆積土出土土器

〔口縁部資料〕（第10図～第11図10）

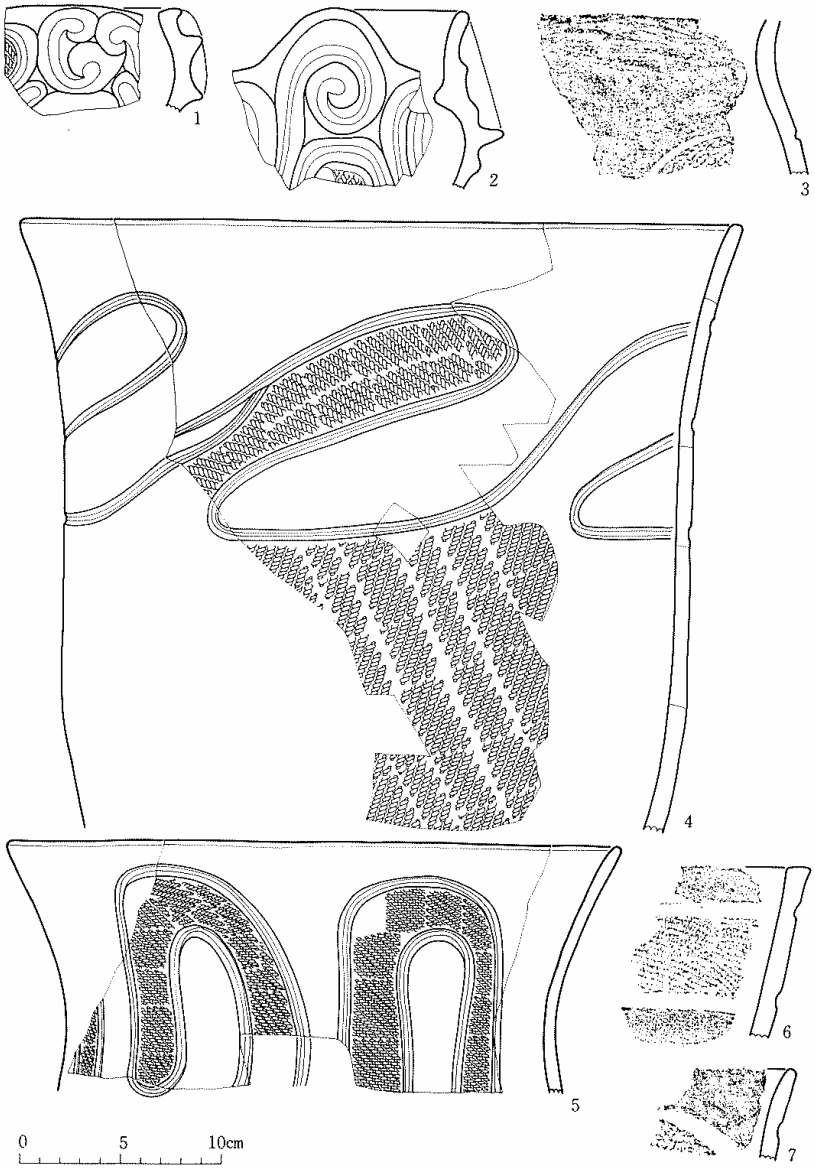
第10図1・2は口縁部が内彎する深鉢である。このうち1はキャリパー形を呈するものと思われ、口縁部には隆沈線による渦巻文や横位楕円文等の文様帯が形成される。2は口縁部から胴部にかけて連続して下垂する文様で、隆沈線よる渦巻文がみられる。

第10図4～7は胴部がやや丸味をもって立ち上り、胴上位でくびれ口縁部が外傾する深鉢である。いずれも幅の広い沈線によって描かれ、そのうち構成が明らかな４では波状文になる。



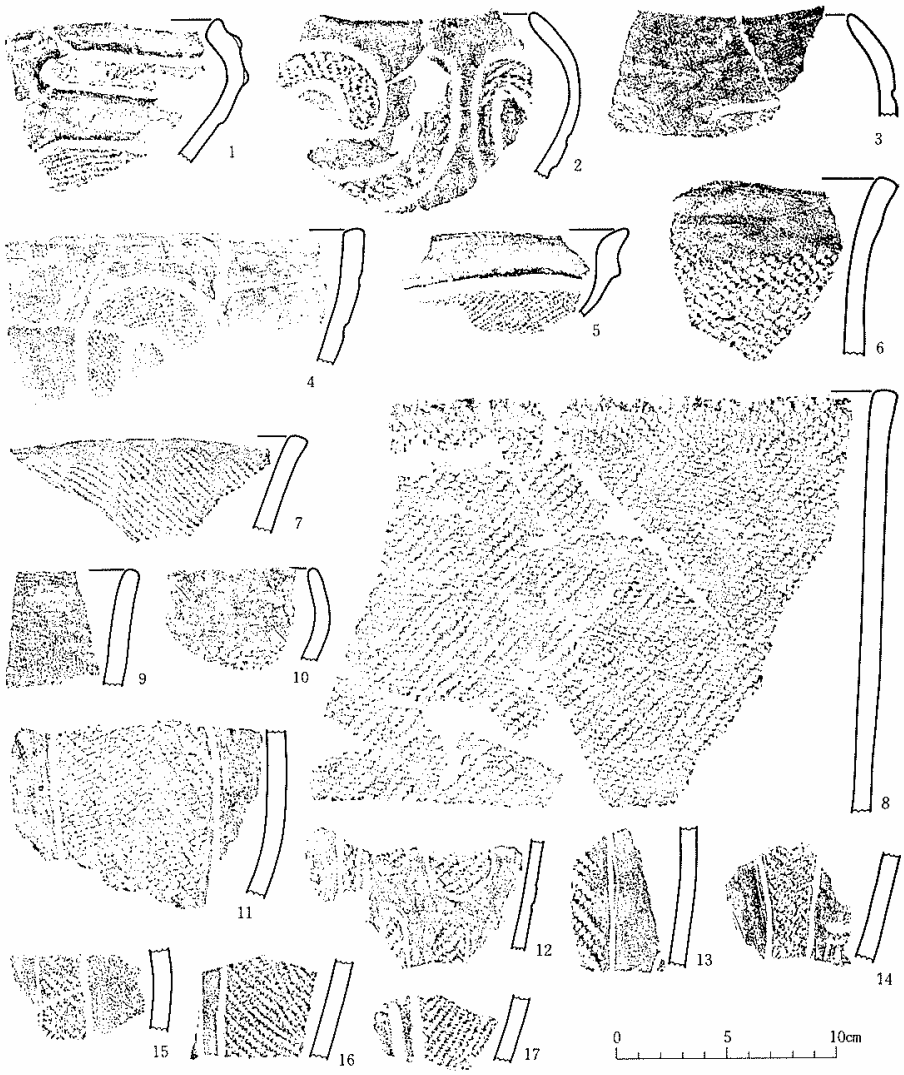
番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	8 住 D ― 床	沈線文、縄文LR充填	AⅢbⅱ	4	7 - 1
2	8 住 B ― 床	口縁部―無文(ミガキ)、頸部―横位隆線、胴部―沈線、縄文LR充填	A	57	8 - 1
3	8 住 A ― 床	口縁部―無文(ミガキ)、胴部―縄文LR	B	247	8 - 2
4	8 住 A ― 床	口縁部―無文(ミガキ)、胴部―縄文RL		252	

第９図　第８号住居跡床面出土遺物



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版	4	8住 B－1層	波状沈線文、 縄文RL充塡	AⅢb[2]	6	8-10
1	8住AorB－2層	渦巻隆線文、横位楕円沈線文、縄文RL充塡	Ala	21	8－3	5	8住土壙1－1層	区画沈線文、 縄文LR充塡	AⅢb[4]	7	8-8
2	8住AorB－2層	渦巻隆線文、横位楕円沈線文、縄文RL充塡	Alla	22	8－4	6	8住土壙2－2層	〃 沈線文、 縄文LR充塡	AⅢb	70	8-6
3	8住 D －1層	渦巻隆線文、縄文LR充塡	A	55	8－5	7	8住AorB－2層	〃 沈線文、 縄文LR充塡	AⅢb	78	8-7

第10図　第８号住居跡出土遺物



番号	地区一層位	文様の特徴	分類	基準	図版	9	8住土壙2－2層	条線文	B	72	8-18
1	8住C－1層	区画隆沈線文　縄文LR充塡		56	8-11	10	8住A－2層	口縁部・無文(ミガキ)縄文LR	B	77	8-19
2	8住－1層	「ə」状線文　縄文RL充塡		54	8-12	11	8住土壙2－2層	口縁部・無文(ミガキ)縄文RLR	A	68	9-2
3	8住D－1層	沈線文　縄文LR充塡		62	8-13	12	8住CorD－2層	口縁部・無文(ミガキ)縄文LR充塡	A	23	9-4
4	8住－1層	沈線文　縄文LR充塡	A	73	8-14	13	8住土壙1－1層	「○」状沈線文　縄文RL充塡	A	97	8-21
5	8住土壙2－1層	隆沈線文　縄文LR充塡		248	8-15	14	8住B－1層	「○」状沈線文　縄文LR充塡	A	89	9-15
6	8住C－1層	口縁部・無文(ミガキ)縄文LR	B	61	8-16	15	8住土壙1－1層	「○」状沈線文　縄文LR充塡	A	96	8-20
7	8住	縄文LR	B	58	8-17	16	8住土壙1－1層	「○」状沈線文　縄文LR充塡	A	95	
8	8住C－床直上	縄文LR	B	99	9-1	17	8住B－1層	「○」状沈線文　縄文LR充塡	A	90	9-5

第11図　第８号住居跡出土遺物

番号	地区・層位	文様の特徴	分類	器形	図版	12	8住D－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	126	9-20
1	8住C－1層	⌒状沈線文　縄文LR充填	A	53	9-6	13	8住B－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	136	9-17
2	8住A－1層	⌒状沈線文　縄文RL充填	A	59	9-10	14	8住B－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	76	9-16
3	8住D－1層	⌒状沈線文　縄文RLR充填	A	64	9-14	15	8住C－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	136	
4	8住A－2層	⌒状沈線文　縄文RLR充填	A	81	9-7	16	8住B－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	82	
5	8住C－2層	渦巻隆沈線文　縄文RLR充填	A	52	9-11	17	8住A－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	24	9-21
6	8住B－2層	区画沈線文　縄文LR充填	A	91	9-3	18	8住B－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	88	9-19
7	8住B－1層	区画沈線文　縄文RLR充填	A	84	9-8	19	8住土壙1－1層	条線文	B	93	9-23
8	8住土壙2－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	51	9-13	20	8住土壙2－2層	ミガキ		35	
9	8住D－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	60	9-18	21	8住AorB－2層	ミガキ		36	
10	8住土壙2－1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	71	9-9	22	8住AorB－2層	補修土器、⌒状沈線文　縄文LR充填		34	
12	8住D－2層	区画沈線文　縄文LR充填	A	63	9-12	23	8住AorB－1層	補修土器、渦巻沈線文		65	9-22

第12図　第８号住居跡出土遺物

第11図1～3は胴上位でふくらみ口縁部が内彎するものである。文様は１が隆沈線、2・3が沈線によるもので、２では「∂」状の文様があらわされている。

第11図6～10は地文のみ施される深鉢である。口縁部形態には外傾（6・7・9）、直立（8）、内彎（10）があり、このうち6・9・10については口縁部が抹消され無文化されている。

〔胴部資料〕（第11図～第12図19）

いずれも深鉢の破片である。

第11図11～17、第12図1～5は沈線によって「∩」状文や縦位楕円文が描かれるもので、なかには「∩」状文が反転するもの（第11図12）や隆沈線による渦文が渦巻文が添加されるもの（第12図5）などもある。

第12図6～18断片的なため文様構成が明らかでないが、「∩」状文以外の区画文様が施されもので、幅の広い沈線によって描かれるものが多い。

〔底部資料〕（第12図20・21）

ともに平底で、体部は外傾する。外面は無文である。

〔袖珍土器〕（第12図22・23）

22は胴上部が直立ぎみに立ち上り、口縁部が短く外反する。胴部には沈線による文様がみられるが、破片のためその構成は明らかでない。

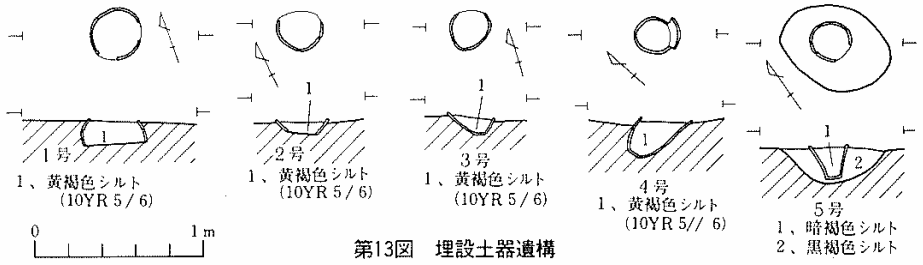
23は胴部破片で細い沈線による渦巻文が施されている。

(2) 埋設土器遺構

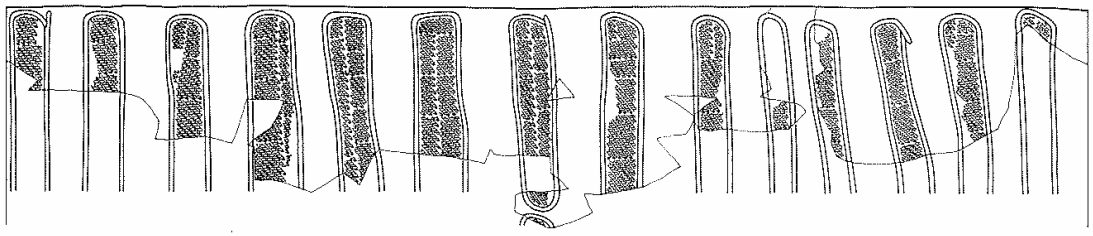
総数5基の埋設土器遺構が検出された。このうち第1～4埋設土器遺構は遺跡の北部にあたる第7・8住居跡周辺にまとまって位置するのに対し、第5設土器遺構はそれらからかなり離れた遺跡の南部ＡＤ－76区に位置している。

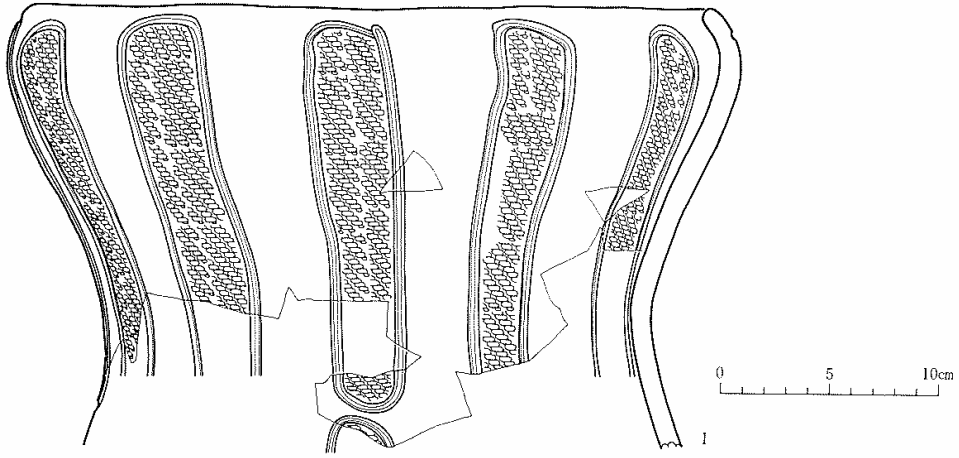
第1号埋設土器遺構

ＣⅣ－ＡＡ－67区の地山面で確認された。深鉢の口縁部が倒立した状態で埋設されるもので胴部の大半は失われている。掘り方は確認できなカッター。土器内の堆積土は黄褐色土で炭化物が少量混入している。



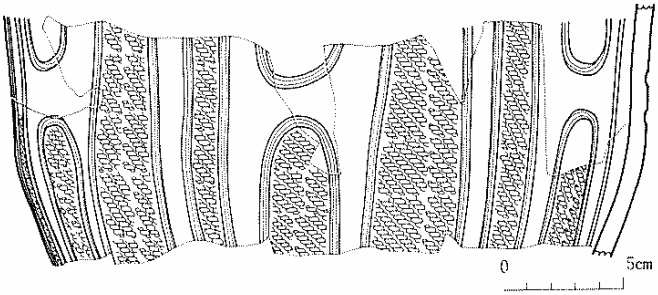
第13図　埋設土器遺構





番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	埋設土器遺構	「∩」状縦位楕円沈線文、縄文LR充塡	AIb	11	11-1

第14図　第1号埋設土器



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	埋設土器遺構	「∩」状沈線文、縄文LR充填	A	12	

第15図　第２号埋設土器

埋設土器（第14図）

胴上位が強くくびれ口縁部が内彎する深である。文様は沈線を用いて口縁部から胴部にかけ縦位楕円文や「∩」状文があらわされており、区画された文様内にはLR縄文が充填される。

第2埋設土器遺構

CⅣ－ＥＤ－66区の地山面で確認された。深鉢の胴部が正位の状態で埋設されるもので、掘り方は確認できなカッターがほぼ土器面に沿うものと推定される。土器内の堆積土は黄褐色土で炭化物が少量混入している。

埋設土器(第15図)

深鉢の胴中央部分である。文様は沈線によって反転する「∩」状文が施され、文様の内部にＬＲ縄文が充填される。

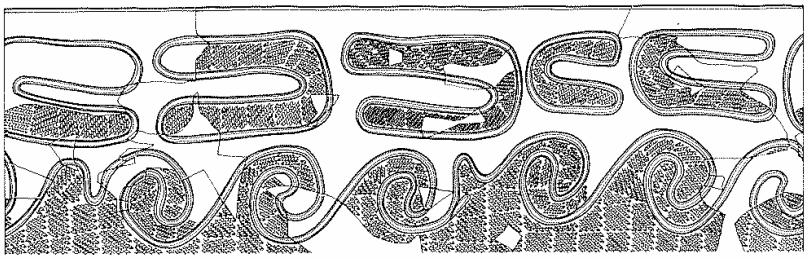
第3号埋設土器

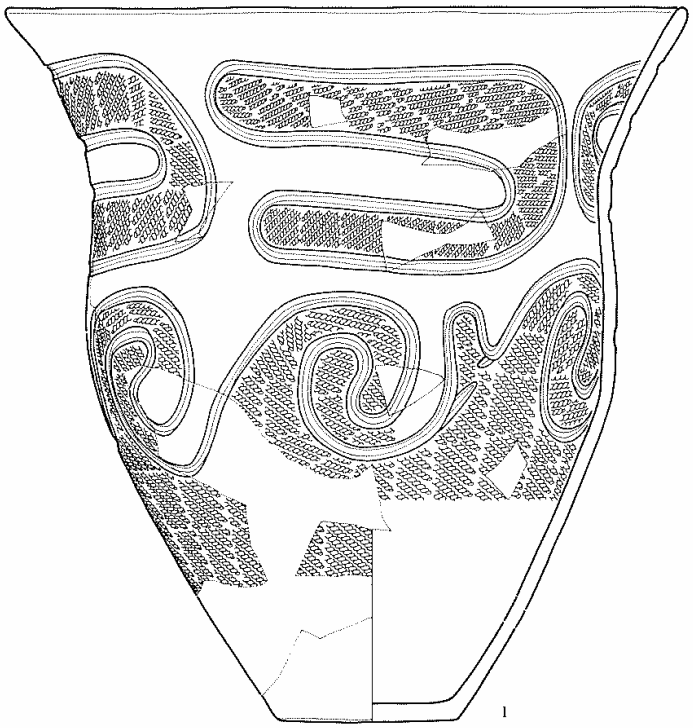
CⅣ－ＤＴ－65区の地山面で確認された。深鉢に胴下部が正位ではあるが西に傾いた状態で埋設されている。掘り方は確認されなカッターが、土器面に沿うものと推定される。土器内の堆積土は黄褐色土で、炭化物が少量混入している。

註：土器は整理の際に確認できなカッター。

第4号埋設土器遺構

CⅣ－ＥＦ－66区の地山面で確認された。深鉢が正位ではあるが東に傾いた状態で埋設されている。掘り方はほぼ地山面に沿うものと推定され、土器内の堆積土は黄褐色土で炭化物は少量混入している。

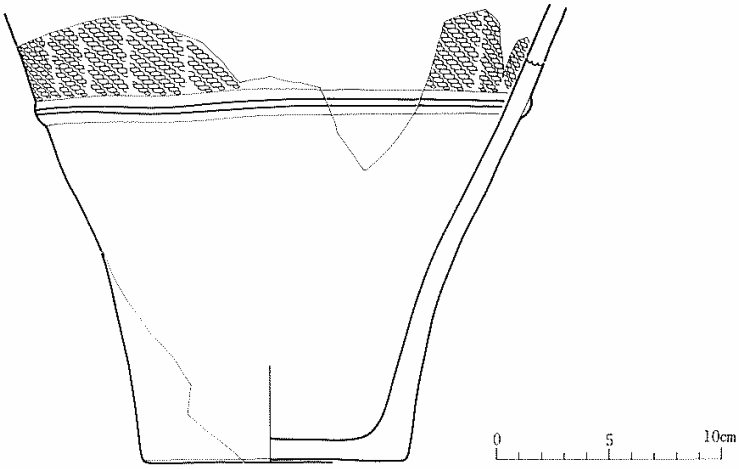




0　5　10cm

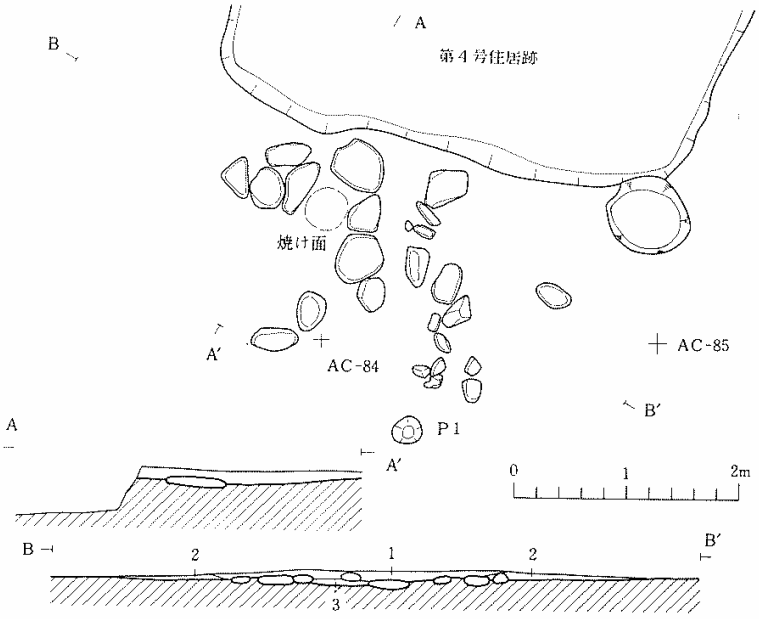
番号	地区・特徴	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	埋設土器遺構	口頸部―「つ」状沈線文、胴部―波状沈線文、縄文LR充填	A Ⅲbハ	13	11-2

第16図　第４埋設土器



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	埋設土器遺構	隆帯　縄文LR		15	15-2

第17図　第５埋設土器



層No.	土色・土性	備考
1	黄褐色シルト(10YR5/6)	
2	褐　色シルト(10YR4/6)	
3	褐　色シルト(10YR4/6)	

層No.	土色・土性	備考
1	褐　色シルト(10YR4/6)	敷石遺構堆積土

ピットNo.	1
深さ(cm)	9

第18図　敷 石 遺 構

埋設土器（第16図）

器形は底部から胴部にかけてやや丸味をもって外傾し、胴上位でくびれ口縁部が外傾する。文様は幅の広い沈線によって施され、胴部中央には波状文、胴上位から口縁部にかけては「コ」状文があらわる。文様単位は波状文が6単位なのに対し「コ」状文は5単位で構成される。文様の内部にはＬＲ縄文が充填されている。

第5埋設土器遺構

ＤⅢ－ＡＤ－76区の地山面で確認された。掘り方は長軸約60㎝の楕円形で、断面は深さ約20㎝の半円形を呈する。土器は深鉢の胴部下半の部分でほぼ正位の状態で埋設されている。堆積土は掘り方の部分が暗褐色土、土器内部が黒褐色土で、いずれも混入物は認められなカッター。

埋設土器（第17図）

低部から胴部にかけてわずかにくびれながら外傾する深鉢で、胴部に1本の横位の隆線が巡っている。隆線の上部はＬＲ縄文が施される。

(3) 敷石遺構

ＤⅢ－ＡＣ－84区で検出されたもので、遺構の上面の堆積土が第4号住跡によって切られていることから同住居跡より古い時期の遺構と考えられる。

敷石は40㎝前後の扁平な河原石を同一レベルで配したもので、焼け面を中心に約2m×2mの範囲に分布する。ただし付近からは原位置を失ったとみられる同様の扁平な石が多量に検されていることから、本来は敷石がより広い範囲に分布したものと推定される。焼け面は約40×40㎝の円形状になっており炉の可能性が考えられる。遺物は敷石上面の堆積土中から縄文土器が出土しているが、細片で図示できるものはない。

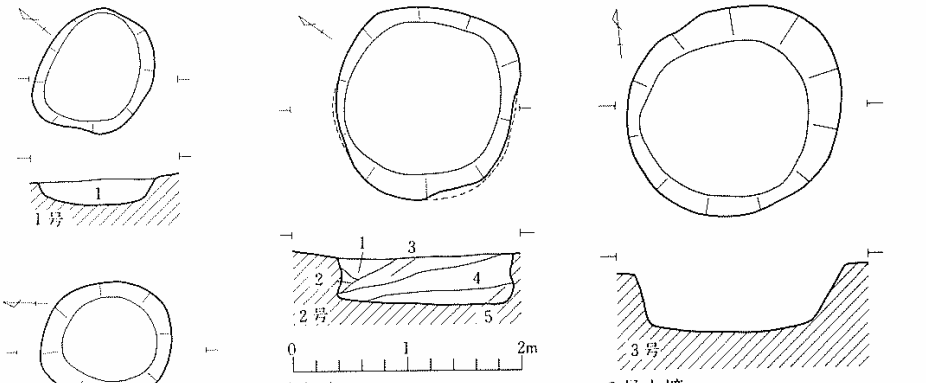
(4) 土　　壙

第1号土壙

ⅢＣ－ＥＪ－89区の地山面で確認された。土壙は径約1.1mの円形を呈し、深さは約20㎝である。底面はほぼ平坦で壁の立ち上りはゆるやかである。埋土は大小の礫を含む褐色のシルト層で、層中からは一個体の縄文土器がバラバラにこわれた状態で出土している。

出土土器（第20図）

深鉢の一括品である。器形は底部から胴中央の屈曲部にかけて直線的に外傾し、屈曲部から上はややくびれながら立ち上り口縁部が外反する。文様は胴上半にあり、縦位の連鎖状隆線



1号土壙

層No.	土色・土性	備考
1	暗褐色シルト(10YR3/3)	縄文土器片出土

2号土壙

層No.	土色・土性	備考
1	黒褐色シルト(10YR2/3)	
2	黄褐色砂レキ	地山崩壊土
3	黒褐色シルト(10YR2/2)	
4	暗褐色シルト(10YR3/4)	地山粒を含む
5	黒褐色シルト(10YR2/1)	地山粒を若干含む

4号土壙

層No.	土色・土性	備考
1	黒褐色シルト(10YR2/3)	土器片出土
2	黒褐色シルト(10YR3/2)	土器片出土
3	黒褐色シルト(10YR2/2)	

第19図　土　　壙

よび屈折部に施された横位の隆線によって方形に区画されるもので、その区画は4単位で構成される。区画された内部には沈線による蕨手文やジグザグ文等が施される。地文はＬＲ縄文である。

第2号土壙

ＣⅢ－ＥＬ－90区の地山面確で確認された。土壙は径約1.6mの円形を呈し、深さは約40㎝である、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上りは急である。埋土は礫を含んだ黒褐色や暗褐色のシルト層中からは縄文土器片が1点出土している。

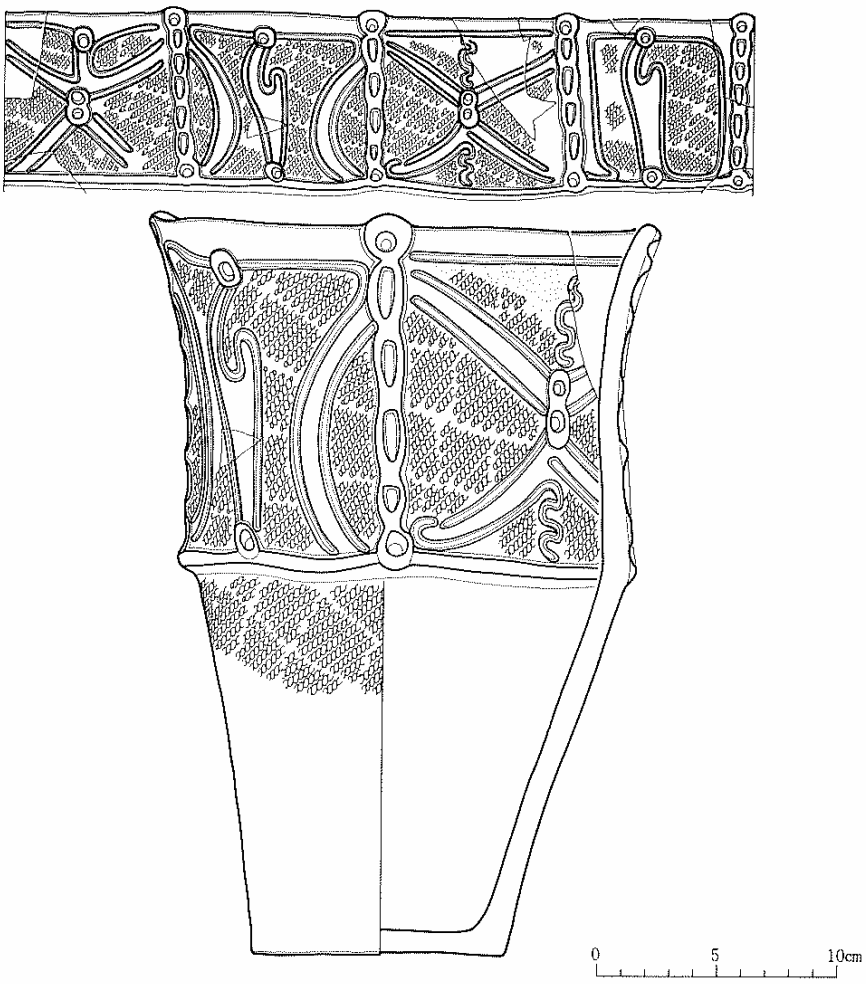
第3号土壙

ＣⅣ－ＥＮ－96区の地山面で確認された。土壙は径約2.0mの円形を呈し、深さは約30㎝である。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上りはゆるやかである。埋土中からからは縄文土器が出土している。

出土土器（第21図1～5）

2・3は深鉢の口縁部資料である。ともに口縁部に直立ぎみになるもので、口縁部外面は沈線や隆線によって胴部と区画された無文帯となる。

1・4・5は深鉢の胴部資料でいずれも沈線による文様が描かれており、このうち4はジグザグ文、5は蕨手文があらわされる。



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	1号土壙－1層	方形区画文・鉤状文・ジグザク文・連鎖状隆線・縄文LR充塡		14	15-1

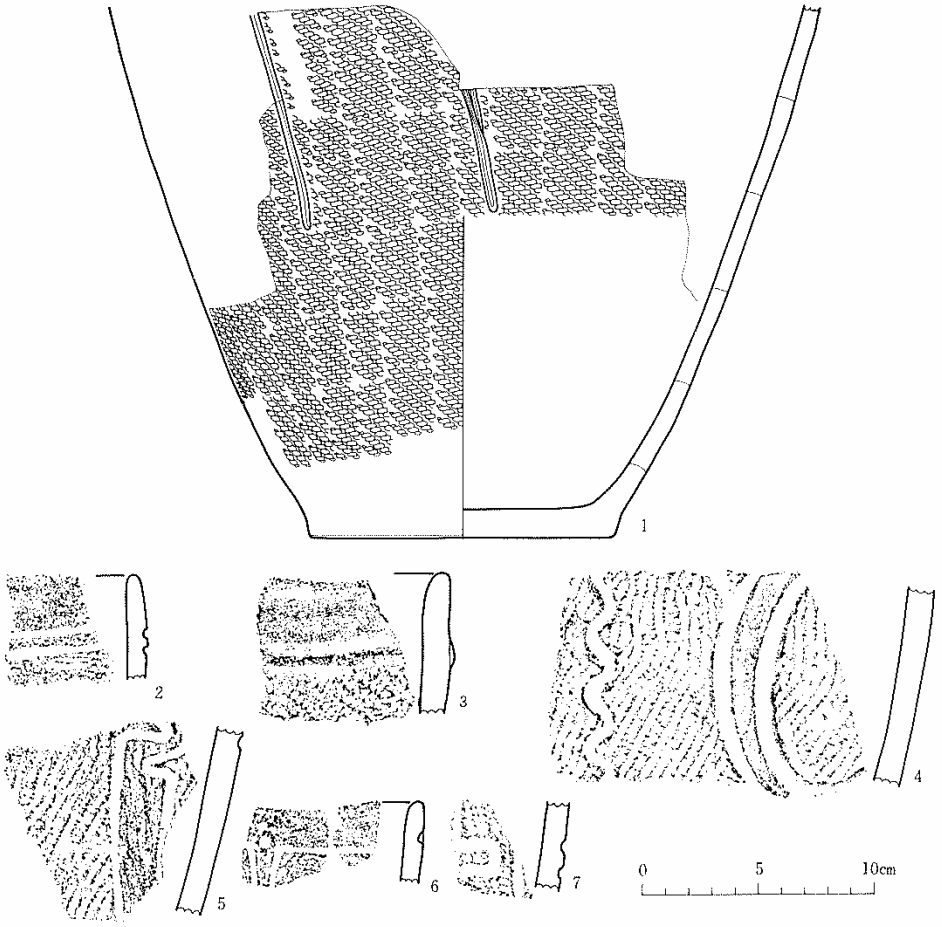
第20図　第１号土壙出土遺物

第4号土壙

CIII－ＥＬ－96区の地山面で確認された。土壙は径約１．１mの円形を呈し、深さは約40cmである。底面は平坦で、壁の立ち上りはゆるやかである。埋土は礫を含む黒褐色シルトで3枚の層に細別されるが、壁際から除々に堆積しており自然流入の状況を呈する。層中からは縄文土器が出土している。

(4) 堆積層出土の遺物

堆積層から出土した土器は遺跡の北部にあたる第7・8号住居跡周辺から出土したものが大半を占めている。これらの多くは器形・文様とも同住居跡出土のものに類似しており、一定の



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版	4	3号土壙－1層	ジグザグ文、磨消縄文LR		159	14-18
1	3号土壙－1層	沈線、縄文LR		16	14-16	5	3号土壙－1層	蕨手文、磨消縄文LR		162	14-17
2	3号土壙－1層	口縁、無文（ミガキ）、横位沈線、縄文RL		166	14-13	6	4号土壙－1層	口縁、無文（ミガキ）、沈線、穿孔、縄文（不明）		163	14-12
3	3号土壙－1層	口縁、無文（ミガキ）、横位隆線、縄文LR		160	14-14	7	4号土壙－1層	蕨手文？　縄文LR		165	14-15

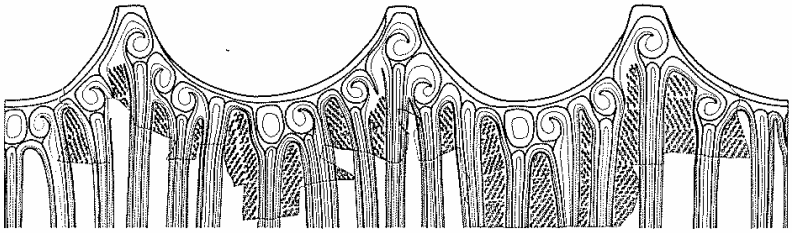
第21図　第３・４号土壙出土遺物

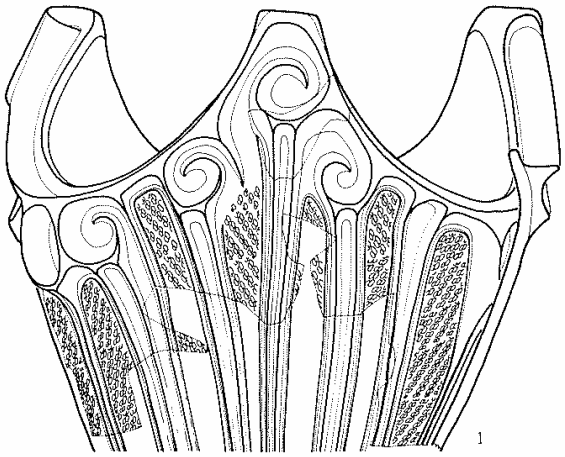
まとまりを有する一群として考えることができる。以下説明するにあたってはこれらの土器を「第7・8号住居跡周辺の土器」として一括し、それ以外の土器については「その他の土器」として扱うことにする。

第7・8号住居跡周辺出土の土器

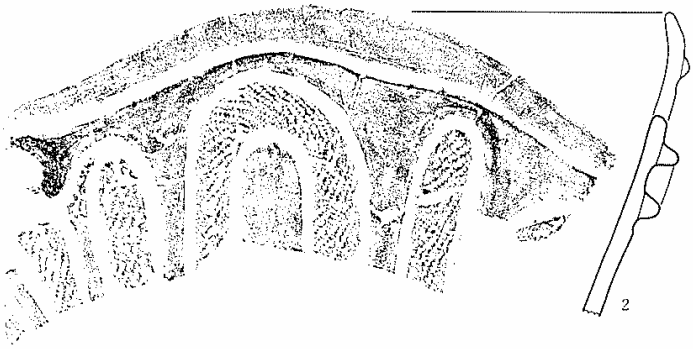
＜口縁部資料＞（第22図～第24図6）

第22図1・2は胴部から口縁部にかけて連続的に外傾する深鉢で、口縁部は大波状をなす。このうち1は文様が口縁直下から胴部にかけて垂下するもので、隆線による渦巻文や隆沈線のよる「∩」状文が施される。2は段によって画され口縁部が無文帯となるもので、胴部には幅





1

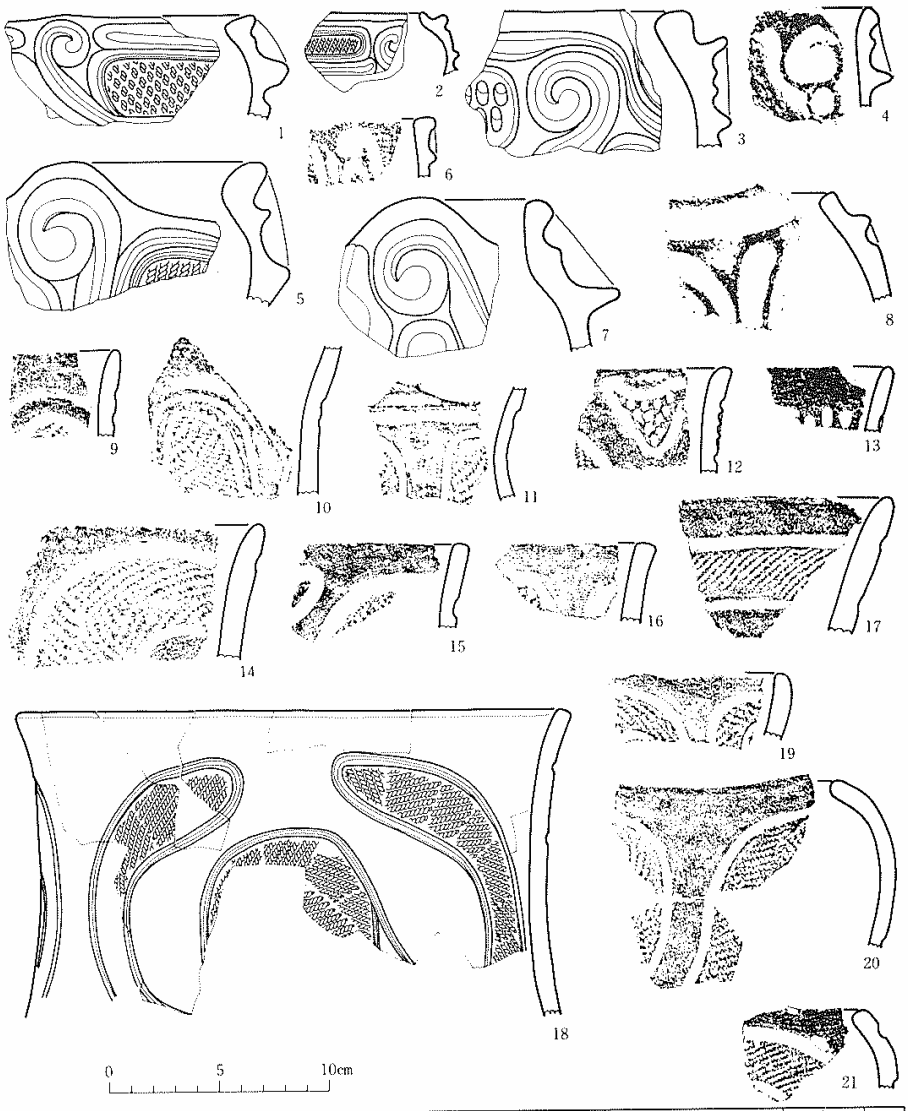


2

0 5 10cm

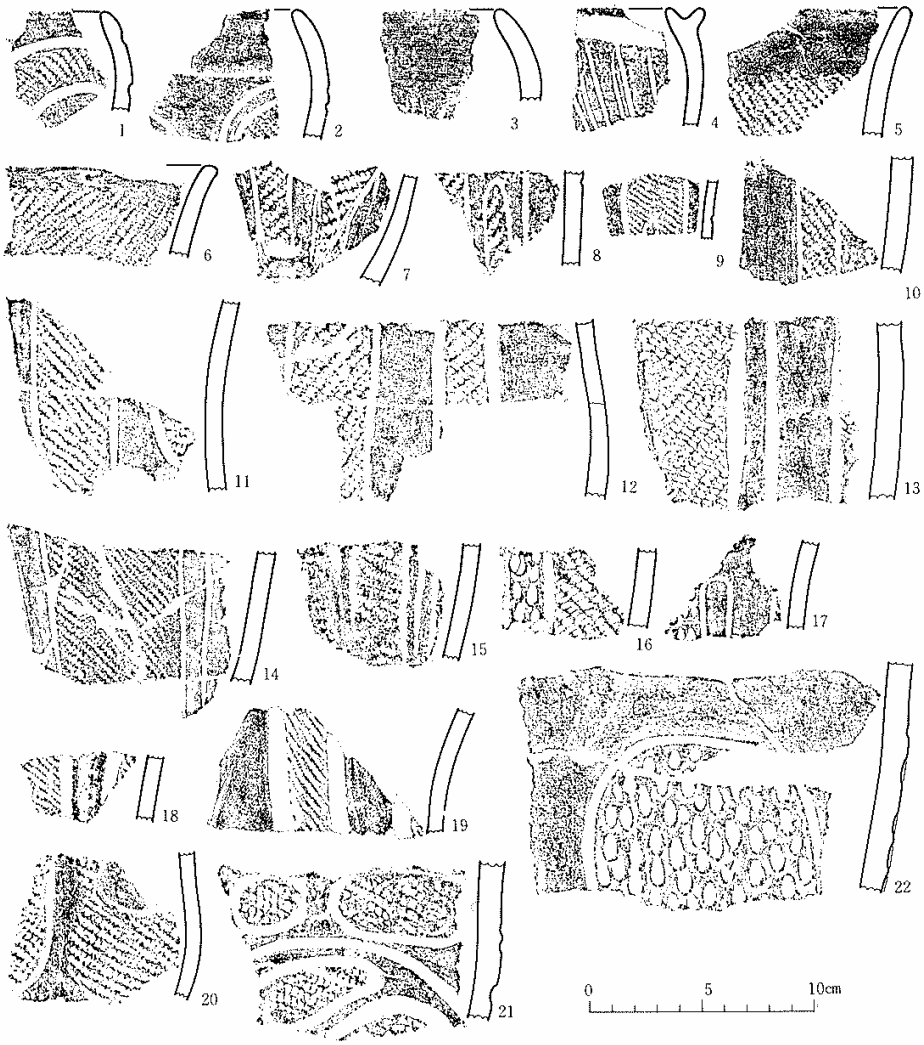
番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	CⅣ・EG−65−1層	渦巻・「○」状隆沈線文、 維文RLR塡	AⅡa	17	4−1
2	CⅣ・DR−69−1層	渦巻・「○」状隆沈線文、 維文RL充塡	AⅡb	18	12−1

第22図　堆積層出土遺物①



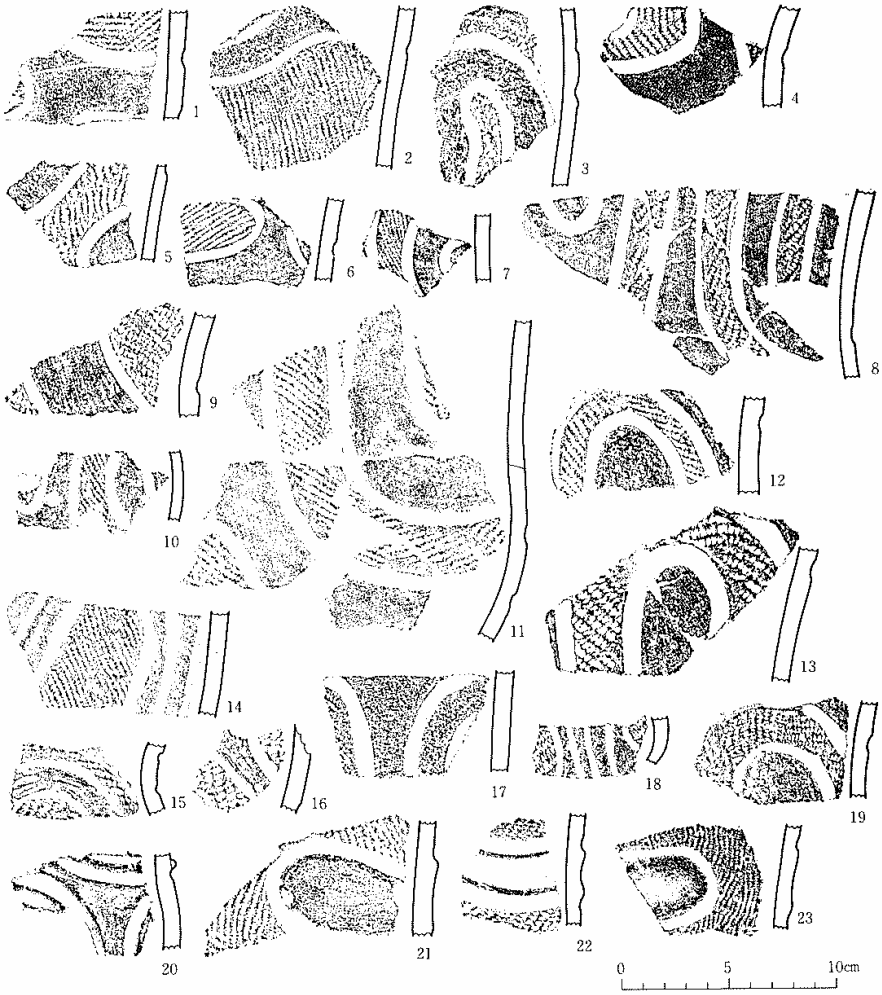
番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版	11	CⅣ・EF 60～70・1層	縦位・横位楕円for[ ]状沈線文、沿形・横位沈線、縄文RL充填	A	129	12-11
1	CⅣ・EF 70～73・1層	渦巻隆線文、横位楕円隆沈線文、縄文RL充填	Ala	25	12-2	12	CⅣ・EA EE 65～70・1層	三角形状沈線文、剣突充填	A	236	12-14
2	CⅣ・X・X	渦巻隆線文、横位楕円隆沈線文、縄文LR充填	Ala	26	12-3	13	CⅣ・EA EE 75・1層	剣　突	A	119	12-13
3	CⅣ・DJ EA 60～70・1層	渦巻隆沈線文、剣突	Ala	27	12-4	14	CⅣ・EC EF 70～73・1層	区画沈線文　縄文LR充填	A	112	12-15
4	CⅣ・EC EF 67～70・1層	渦巻隆線文、	A	240	12-5	15	CⅣ・DM 70・1層	区画沈線文　縄文RL充填	A	207	
5	CⅣ・EE 70・1層	渦巻隆線文、横位楕円隆沈線文、縄文RL充填	A	28	12-8	16	CⅣ・DJ EA 60～70・1層	区画沈線文　縄文RL充填	A	227	12-16
6	CⅣ・EC ED 63・1層	渦巻隆線文	A	242	12-7	17	CⅣ・EA EF 60・1層	区画沈線文　縄文LR充填	AⅢ	134	12-20
7	CⅣ・DM EE 60～70・1層	渦巻隆線文	A	29	12-9	18	CⅣ・EA EG 70・1層	区画沈線文　縄文LR充填	AⅢ	19	
8	CⅣ・EF 70～73・1層	隆線文	A	210	12-10	19	CⅣ・EC EF 70～73・1層	区画沈線文　縄文RL充填		150	12-18
9	CⅣ・EA EE 75・1層	縦位楕円for[ ]状沈線文 縄文RL充填	A	117	12-6	20	CⅣ・EA EE 65・1層	区画沈線文　縄文RL充填		30	12-22
10	CⅣ・DM EA 70～80・1層	縦位楕円for[ ]状沈線文	A	203	12-12	21	CⅣ・EC EF 70～73・1層	区画沈線文　縄文RL充填		115	12-17

第23図　堆積層出土遺物②



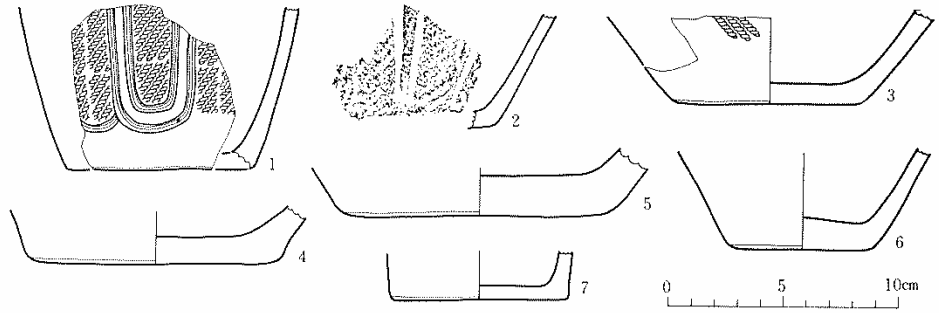
番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版	12	CⅣ・EE～70・1層	「∩」状沈線文　縄文RL 充填	A	31	12・33
1	CⅣ・EG・70・1層	区画沈線文　縄文RL 充填		190	12・19	13	CⅣ・EF～EG・60～70・1層	「∩」状沈線文　縄文RL 充填	A	202	13・1
2	CⅣ・EA～EE・75・1層	区画沈線文　縄文LR 充填		114	12・23	14	CⅣ・EF・65・1層	「∩」状沈線文　縄文LR 充填	A	232	13・4
3	CⅣ・EA・72・1層	口縁部・無文(ミガキ)、沈線、縄文(不明)		243	12・24	15	CⅢ・EG・99・1層	「∩」状沈線文　縄文LR 充填	A	151	12・34
4	CⅣ・EL～EF・68～70・1層	沈(条)線		241	12・29	16	CⅣ・EA～EF・60～70・1層	「∩」状沈線文　刺突　縄文LR 充填	A	147	12・32
5	CⅣ・DM～DS・68・1層	口縁部・無文(ミガキ)、　縄文RR	B	110	12・25	17	CⅣ・DM～EA・70～80・1層	「∩」状沈線文？刺突　縄文	A	132	13・5
6	CⅢ・EG・70・1層	口縁部・無文(ミガキ)、　縄文RL	B	185	12・26	18	CⅣ・DM～EA・70～80・1層	「∩」状沈線文　縄文LR 充填	A	118	12・35
7	CⅣ・EA～EF・60・1層	「∩」状沈線文　縄文RL 充填	A	139	12・27	19	CⅣ・DS～EA・65・1層	区画沈線文　縄文LR 充填	A	107	12・36
8	CⅣ・EC～EH・65～67・1層	「∩」状沈線文　縄文RLR 充填	A	142	12・28	20	CⅣ・DM～DS・68・1層	区画沈線文　縄文RL 充填	A	109	13・2
9	CⅣ・EC～EF・70～73・1層	「∩」状沈線文　縄文LR 充填	A	125	12・21	21	CⅣ・EF～70・73・1層	区画沈線文　縄文RLR 充填	A	204	13・6
10	CⅣ・EF～ET・60・1層	「∩」状沈線文　縄文LR 充填	A	238	12・30	22	CⅣ・EE・70・1層	区画沈線文　刺突　縄文	A	230	13・3
11	CⅣ・DM～DR・69・1層	「∩」状沈線文　縄文LR 充填	A	135	12・31						

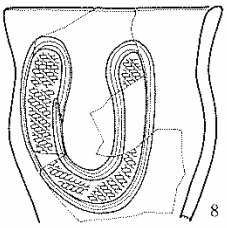
第24図　堆積層出土遺物③



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版	番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	CⅣ・EA～EB～65～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	140	13-10	12	CⅣ・EF～FG～60～70～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	33	13-19
2	CⅣ・DL～EA～70～75～1層	区画沈線文・縄文RL充填	A	108	13-9	13	CⅣ・EE～73～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	234	13-17
3	CⅣ・EA～EE～70～80～1層	区画沈線文・縄文RL充填	A	124	13-7	14	CⅣ・EA～EF～60～70～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	145	13-22
4	CⅣ・EA～EE～75～1層	区画沈線文・縄文RL充填	A	113	13-11	15	CⅣ・DJ～EA～60～70～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	221	13-16
5	CⅣ・DM～EE～60～70～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	138	13-8	16	CⅣ・EG～70～1層	区画沈線文・縄文RLR充填	A	180	
6	CⅣ・EA～EF～60～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	140	13-12	17	CⅣ・EA～EE～60～70～1層	縦位楕円沈線文？　縄文LR充填	A	237	13-20
7	CⅣ・EF～70～73～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	216		18	CⅣ・DM～EA～70～1層	区画沈線文・縄文RL充填	A	246	13-14
8	CⅣ・DR～69～1層	区画沈線文・縄文RL充填	A	187	13-13	19	CⅣ・DM～EE～60～70～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	231	13-21
9	CⅣ・DM～DR～69～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	206	13-18	20	CⅣ・DM～EE～60～70～1層	区画降線文	A	133	13-23
10	CⅣ・EF～60～70～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	127		21	CⅣ・DM～EA～70～80～1層	区画沈線文・縄文RL充填	A	131	13-24
11	CⅣ・CA～82～1層	区画沈線文・縄文LR充填	A	32	13-15	22	CⅣ・DM～72～1層	区画降沈線文・縄文RL充填	A	244	
						23	CⅣ・DM～EA～70～1層	区画降沈線文・縄文RL充填	A	245	13-25

第25図　堆積層出土遺物④





番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版
1	CⅣ・EA－70～75－1層	縦立楕円沈線文？　縄文RL充填		37	
2	CⅣ・EA－70～75－1層	「∩」状沈線文　縄文RL充填		38	
3	CⅣ・EA～EF－60～70－1層	底部・ミガキ		39	
4	CⅢ・EQ－85－1層	底部・ミガキ		40	
5	CⅣ・EC～EM－60～1層	底部・ミガキ		41	
6	CⅣ・DR－69－1層	底部・ミガキ		42	
7	CⅣ－EA～EE－65～70－1層	底部・ミガキ		43	
8	CⅣ－ED－72－1層	地珍土器、「∩」状沈線文、縄文LR充填		20	16・19

第26図　堆積層出土遺物⑤

の広い沈線によって反転する「∩」状文が施され、一部口縁部直下に隆線による渦巻文が認められる。

第23図1～3は胴上位でくびれ口縁部が内彎すると推定される深鉢である。いずれも口縁部文様帯を有しており、それは隆沈線による渦巻文や横位楕円形文等で構成されている。楕円部分には縄文や刺突が充填されている。

第23図4～7は口縁部が直立もしくは内彎する深鉢である。隆沈線によって渦巻文が施されもので、このうち5・7は渦巻文の位置する部分が山形突起状になる。

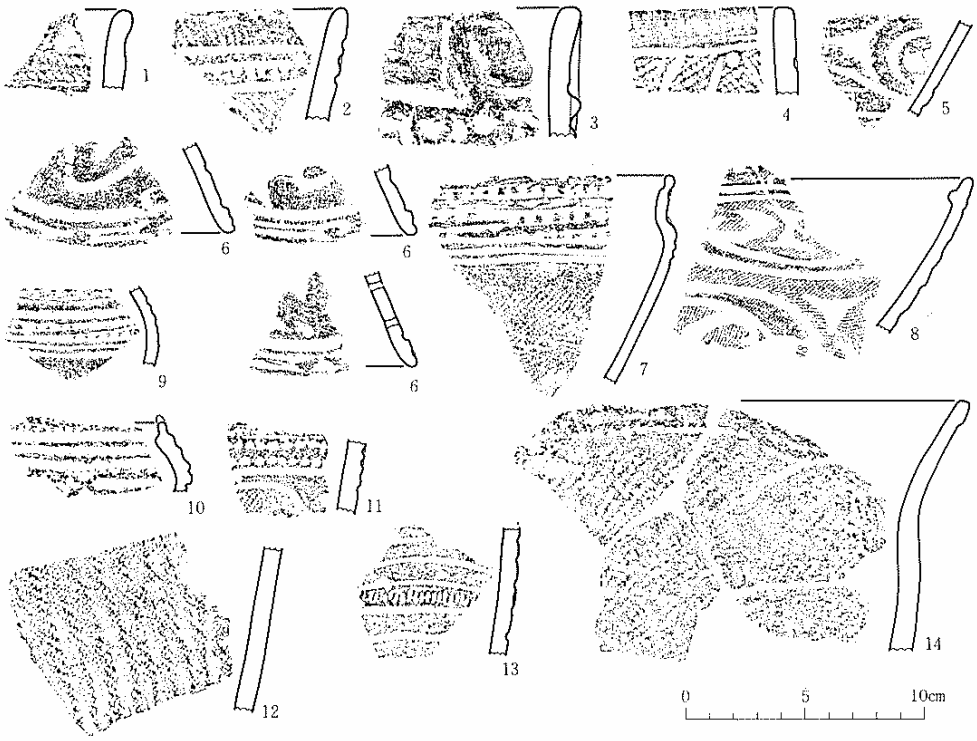
第23図9～19は口縁部が外傾する深鉢で、10・11・18では胴上位にくびれを有する。文様はいずれも沈線によって施されており、このうち9～11は縦位楕円文もしくは「∩」状文になるものと推定される。また11は胴部と口縁部の間が横位の沈線によって区画され、口縁部が無文帯となるものである。これらの多くは文様の内部に縄文が充填されるが、なかには12のように刺突が充填されるものもある。

第23図20～第24図2は口縁部が内彎するもので、沈線によって文様が施されるが、器種や文様構成は明らかでない。

第24図3・5・6は地文のみのものである。口縁部形態は3が内彎、5・6が外傾となっており、3・5は口縁部が無文化されている。

＜胴部資料＞(第24図7～第25図)

いずれも深鉢の胴部破片である。



番号	地区・層位	文様の特徴	分類	登録番号	図版	8	CⅢ－ES－89－1	雲形文　縄文LR		51	16-10
1	X－DM－ER－1	押圧縄文LR		44	16-1	9	CⅣ－DL－DM－63－65－1	半歯状文		52	16-9
2	CⅣ－EA－70－75－1	沈線文、交互刺突、不明縄文		45	16-2	10	CⅢ－ES－99－1	工字文		53	16-12
3	CⅢ－EQ－85－1	口縁・ミガキ・「ノ」字状隆線 縄文LR		46	16-3	11	CⅢES－97－1	沈線文、刺突、縄文LR		54	16-13
4	CⅣ－AA－AD－55－1	口縁・ミガキ、胴・沈線・盲孔 縄文LR		47	16-4	12	CⅢ－ES－99－1	縄文LR		55	16-14
5	CⅢ－ES－89－1	人組三叉文			16-5	13	CⅢ－EC－99－1	横位沈線、スリット		56	16-15
6	CⅢ－ES－89	沈線文		49	16-6~8	14	DⅣ－AA－AC－62－63－1	口縁 肥厚・ミガキ 胴・不明縄文		57	16-16
7	CⅢ－AC72－1	半歯状文　縄文LR		50	16-11	15					

第27図　その他の土器

第24図7～17は沈線によって「∩」状文が施され、第24図21・22は楕円文が施される。多くの区画内に縄文が充填されるが、16・17・22のように区画内外に刺突が充填されるものもある。

第24図18・19、第25図は断面的なため文様構成は明らかでないが、上記のような「∩」状文や楕円文以外の区画文様が施されるもので、幅の広い沈線によって描かれる。なお第25図21～23では無文部分が肥厚し隆沈線化している。

＜低部資料＞（第26図1～7）

いずれも平低で底部から胴部にかけては1～6が外傾して立ち上がるのに対し7は直立に近い。1・2の外面には沈線による文様がみられる。

＜袖珍土器＞（第26図8）

胴部がやや丸味をもって立ち上がり、胴上位でくびれ口縁部が外傾する深鉢形の土器である。

胴部の幅の広い沈線によって「∪」字状文が施され、内部にはＬＲ縄文が充填されている。

その他の土器（第27図）

1・2は口縁部が外傾する深鉢の口縁部である。外面には1ではＬＲの縄文押圧による横位の文様、2では横位沈線間に交互刺突が施される文様がみられる。

3・4は胴部から口縁部にかけて直立する深鉢の破片で、このうち3では口縁部付近が外反ぎみになる。外面は口縁部がともにミガキによって無文帯化されるもので、3では一部に「ノ」字状の隆線が施される。また両者とも胴部には沈線による文様や盲孔などがみられる。

5・8は胴部が直線的に外傾する浅鉢である。文様は5が入組三叉文が施され、8は口縁部には2本の横位沈線、胴部に浮彫的な雲形文が施される。7は胴部が外傾し、胴上位で屈曲をもちながら口縁部が外反する深鉢である。口縁端部に粗い刻目を有するもので、口縁部外面に羊歯状文が施される。器形は明確ではないが、同様の文様をもつものとして9の資料がある。6は台付鉢の台部破片である。台中央部から裾部にかけて直線的に開くもので、円形の透しを有する。文様は沈線によってあらわされ、裾部が独立した文様帯になると思われるが、全体の構成は明らかではない。10は口縁部にかけて内彎する浅鉢である。口縁端部はゆるやかな波状を呈しており、外面には工字文が施される。

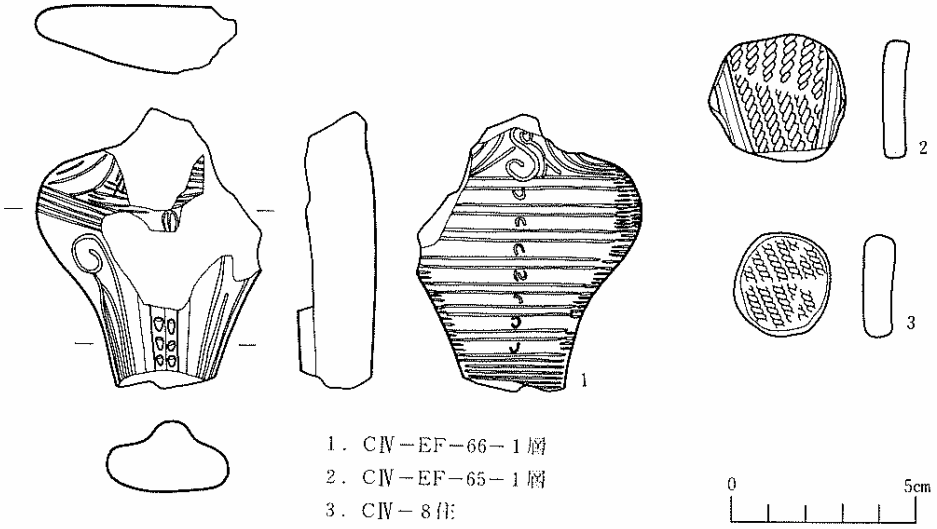
14は頸部がややくびれ口縁部にかけて外傾する深鉢である。口縁部は外面が肥厚しその部分にミガキが加えられる。口縁下は地文のみが施される。

11～13は深鉢の胴部破片である。このうち11・13は沈線による文様がみられるがその構成は不明である。

土製品

土偶（第28図1・図版16－22）

板状の土偶である。頭部・左腕部・胴下部が失われているため全体形は明確でないが、残存部分の形態についてみると、胸部は逆三角形を呈するもので腕部は短く突き出し先端が丸くおさまる。正面の文様は幅の広い隆線によって正中線が形成され、その線上には2列縦位に刺突が施されている。また胸部から腕部にかけては横位の平行沈線、胸部の腹部にかけては縦位の平行沈線が施されている。背面は頭部に近い部分では「Ｓ」字状沈線を中心とした曲線文があらわされており、他の部分では横位の平行沈線とともに正中線に対する位置に「Ｕ」字状の刺突が施される。



第28図　土　製　品

円盤状土製品（第28図2・3・図版17－15・16）

2点出土している。いずれも土器の胴部破片を打ち欠いて整形したもので平面形は円を呈する。なお第28図３では打ち欠いた後研磨を加え周縁を平滑に仕上げている。

石 製 品

石鏃（第19図1・2）

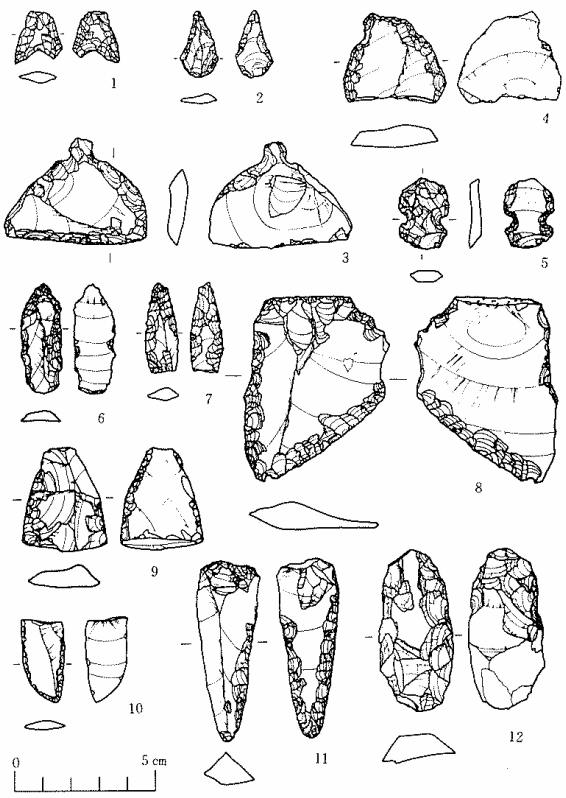
石鏃は2点出土している。１は凹基のもので先端部及び基部の片方が欠損している。薄手の剥片を素材とし入念な二次加工が施されるものである。２は平基のもので側縁はほぼ直線的になる。１に比べ成形・調整とも粗雑である。

石匙（第29図3）

石匙は１点出土している。横長の剥片を素材としており、形状は三角形に近い。刃部調整はａ面にのみ施される。

不定形石器(29図4～12)

4～6、8～11は両側縁に刃部をもつものである。このうち4・8・9は形状が三角形を呈しており、4はａ面に、8・9は両面に刃部調整が施されている。5は抉りが入りつまみ状の



※左-a面　右-b面

層号	地区・層位	登録	図版	層号	地区・層位	登録	図版	層号	地区・層位	登録	図版
1	CⅣ-DM-40-1層	S-1	17-1	5	CⅣ-ES-89-1層	S-5	17-5	9	CⅣ-DS-68-1層	S-9	17-10
2	x-x	S-2	17-2	6	CⅣ-ED-72-1層	S-6	17-6	10	CⅣ-EA-70-1層	S-10	17-9
3	8住-床	S-3	17-3	7	8住-埋土	S-7	17-7	11	CⅣ-EA-65-1層	S-11	17-11
4	CⅣ-DM-70-1層	S-4	17-4	8	3住-埋土	S-8	17-8	12	敷石遺構-埋土	S-12	17-12

第29図　剥片石器

ものが作り出されるもので、刃部の大部分が失われ形状は明らかでないが、石匙の可能性もある。刃部調整には両面なされる。6・10・11は細長い剥片を素材としたもので、刃部調整は6・10が背面になされ、11は一辺が両面に他辺はB面に施される。

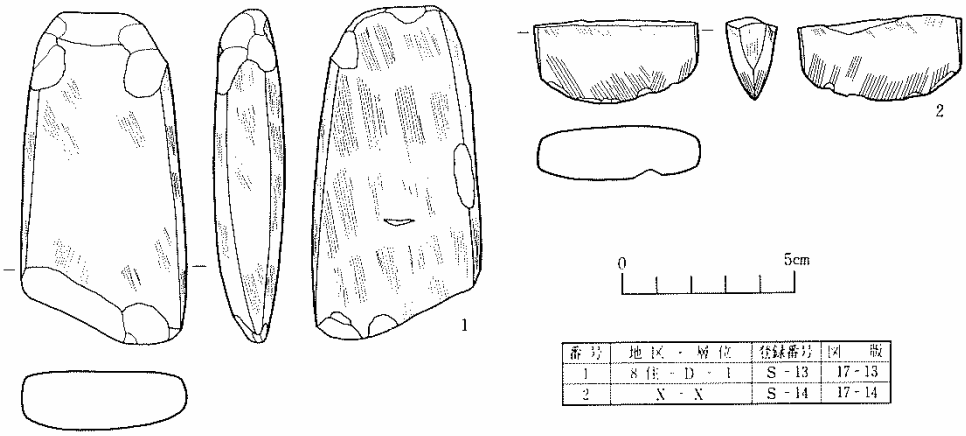
7は鋭い先端部をもつもので、細長い剥片を素材とし両面に二次加工が行われる。

12は明瞭な刃部をもたないものである。縦長の剥片を素材とし形状が楕円形を呈するもので、両面に粗い剥離が加えられる。

磨製石斧（第30図）

1は刃部と基部が失われているため全体形は明らかでないが、基部から刃部にかけてゆるやかに広がる形態のもので、側面は左右対象をなし横断面は隅丸長方形を呈する。刃部はやや膨らみをもたせながら作り出されており、刃部表面には縦方向に走る研磨痕が観察される。

2は刃部のみ残存するものである。刃部形態はやや膨らみを有する外彎刃で横断面は隅丸長方形を呈する。刃部表面には製作の際の研磨痕がみられるほか、刃縁付近には使用痕と考えられ



番号	地区・層位	登録番号	図版
1	8住－D－1	S－13	17－13
2	X－X	S－14	17－14

第30図　磨製石斧

れる線条痕や刃こぼれが観察される。線条痕の方向は刃に対して斜行する。

凹石（第31～33図1）

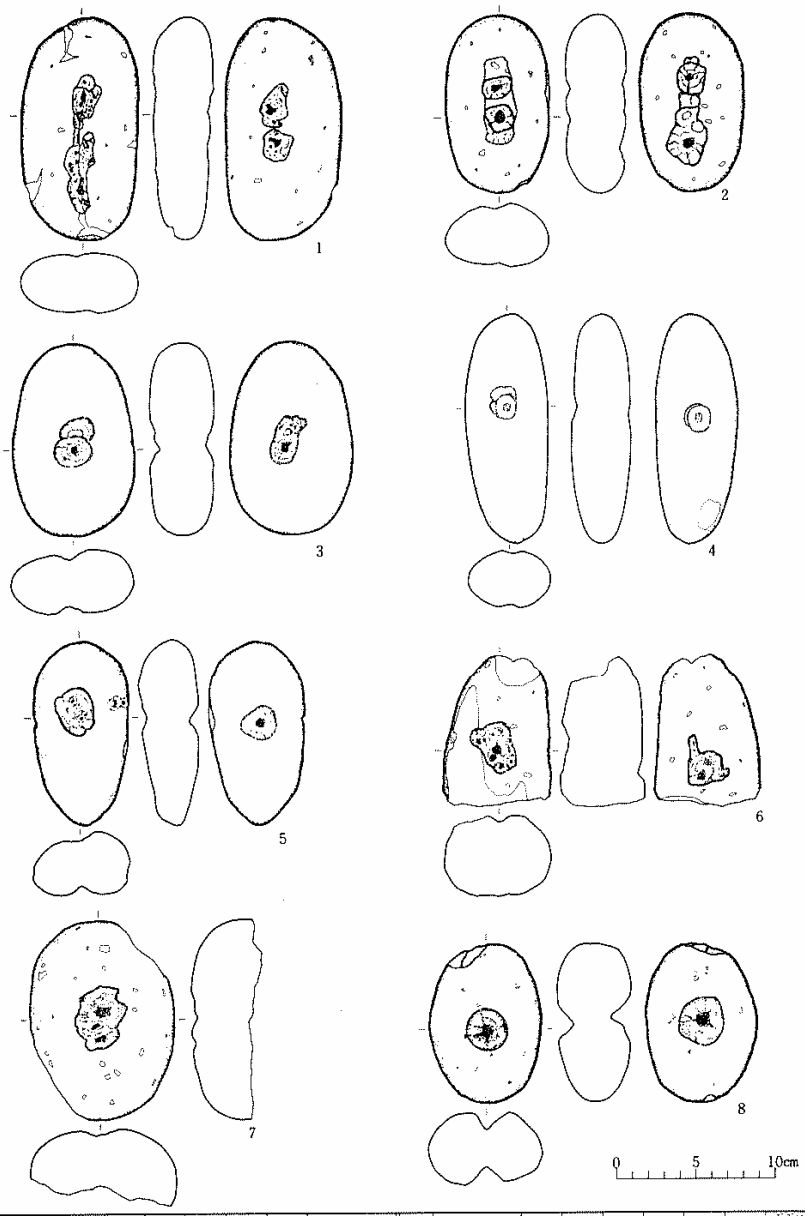
計26点出土している。このなかには研磨痕や縞打痕を併せもつものがあるが、ここでは形態的特徴からそれらを一括して凹石に含めることにする。

第31図および第32図6～8は平面形が楕円形を呈するものである。このうち第31図では欠損のため不明な7を除くといずれも両面に凹みがみられる。凹みの平面形はほぼ円形を呈するものと不規則な形をなすものとがあり、その断面形は前者が「V」字状を呈するのに対し、後者は凹凸の激しい不整形をなすものが多い。第32図6～8は片面もしくは両面に痕跡が認められるもので、凹みは6・8が両面に、7は片面にのみみられ、その平面形・断面形は不規則な形状をなす。なお以上の使用痕跡のほか第31図7、第32図7・8の側面には敲打痕が認められる。

第32図1～4、第33図1は平面形がほぼ円形を呈するものである。凹みは第32図2が片面に、他は両面にみられ、その平面形・断面形は第33図1が円形・「V」字形の明確な形状を示すほかはいずれも不規則な形状である。この他の痕跡として第32図４の片面および第33図1の両面には磨痕がみられ、また、第32図１・２では側面に敲打痕がみられる。

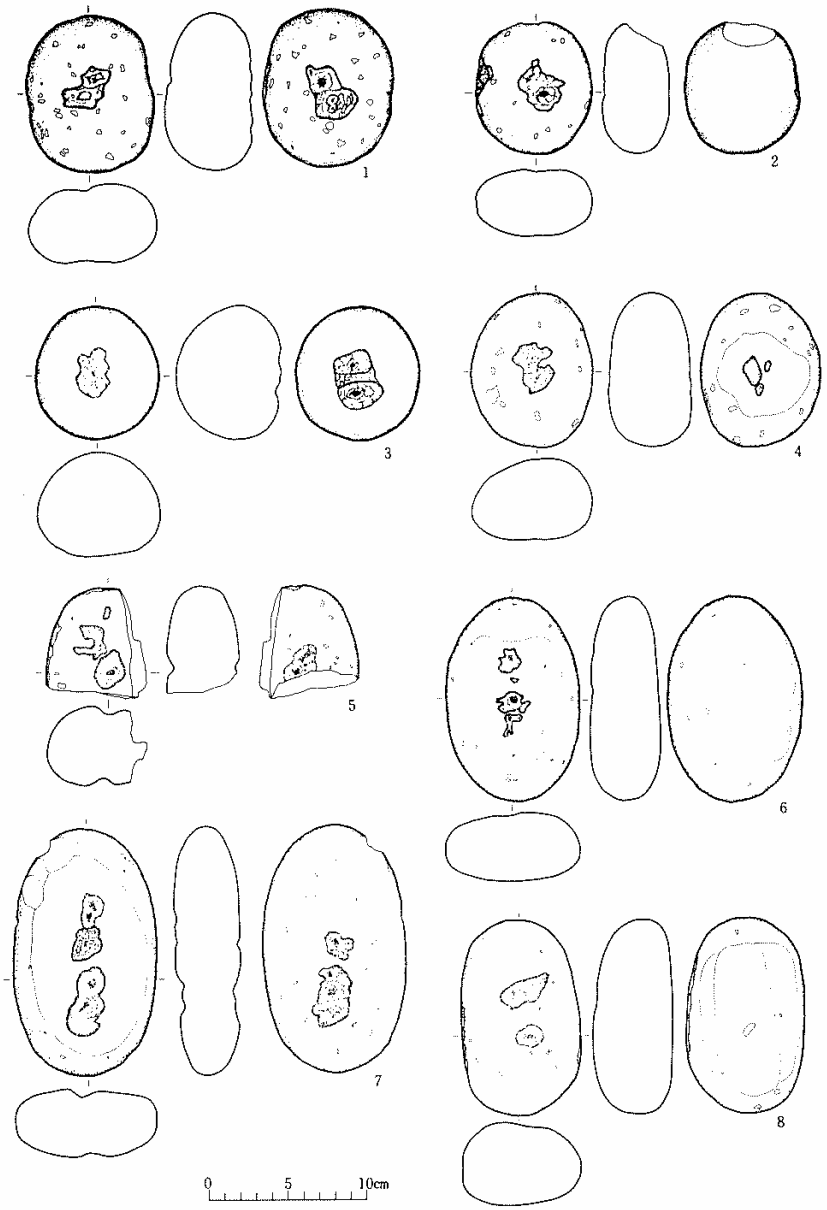
磨石（第33図2・3）

2・3とも平面形はほぼ円形をなすもので、形態・大きさとも凹石に類似する。磨痕はいずれも片面にのみみられる。



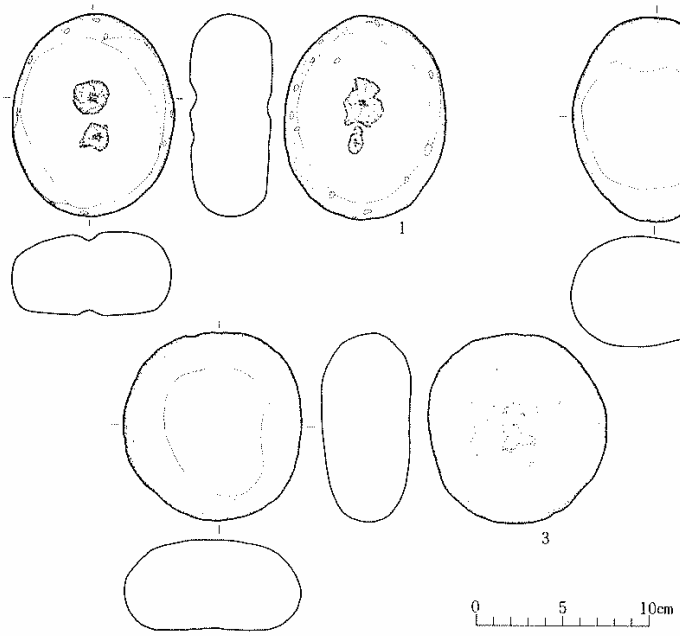
番号	地区・層位	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	登録番号	図版	備考
1	8住1号炉	14.1	7.4	3.8	540	S-15	18-18	両面に凹み
2	DⅣ－X－X	11.3	6.5	3.8	410	S-16	18-14	両面に凹み
3	CⅣ－DM～EE－70－1層	12.3	7.7	4.1	470	S-17	18-12	両面に凹み
4	CⅣ－EC～EE－70－1層	14.5	5.2	3.8	350	S-18	18-10	両面に凹み
5	CⅣ－DK～EA－70－1層	11.7	6.0	3.7	300	S-19	18-4	両面に凹み、側面に敲打痕
6	CⅣ－DK～EA－70－1層	(7.6)	6.8	5.3	300	S-20	18-3	両面に凹み
7	CⅣ－EC～EE－70－1層	12.7	9.2	(4.2)	360	S-21	18-6	残存面に凹み
8	CⅣ－EA－70－1層	10.1	7.2	4.7	550	S-22	18-2	両面に凹み

第31図　凹　石①

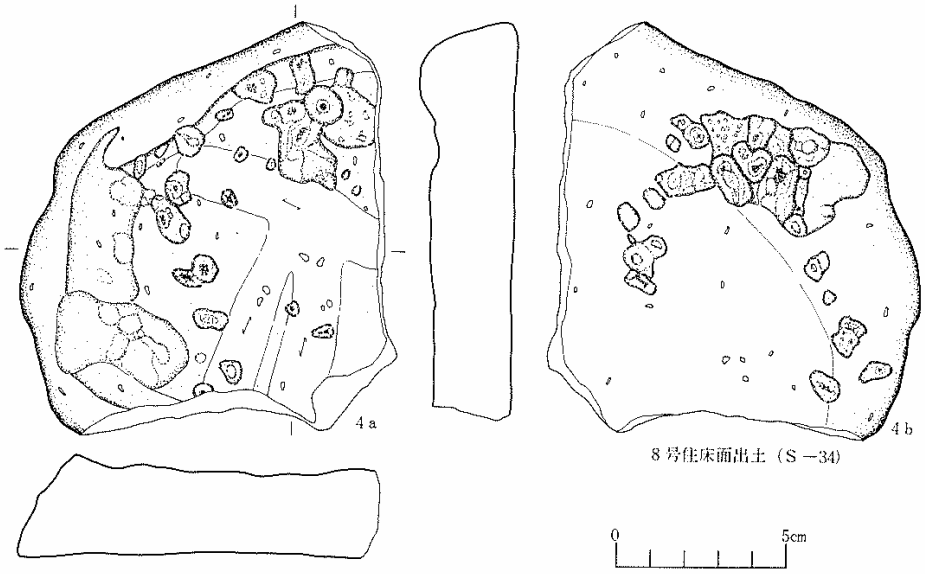


番号	地区・層位	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	登録番号	図版	備考
1	CⅣ～EA－66 － 1 層	10.1	8.1	5.6	600	S-23	18-13	両面に凹み、側縁に敲打痕
2	CⅣ－DM～EA－70－1層	8.4	7.4	4.3	330	S-24	18-1	a面に凹み、側縁に敲打痕
3	8 住 － 1 層	8.5	7.9	6.7	540	S-25	18-15	両面に凹み、
4	CⅣ－EC～EE－70～1層	9.8	7.7	5.3	580	S-26	18-7	両面に凹み、b面に磨痕
5	8 住～B －床	(7.1)	(6.4)	5.0	(270)	S-27	18-17	両面に凹み、側縁に敲打痕
6	8 住－D －床	13.1	8.5	4.5	840	S-28	18-5	a面に凹み、両面に磨痕
7	CⅣ－DS～66 － 1 層	15.8	9.1	4.3	800	S-29	18-19	両面に凹み、a面に磨痕、側縁に敲打痕
8	CⅢ－EC～68 －70－1層	12.5	7.5	5.3	710	S-30	18-8	a面に凹み、b面に磨痕、側縁に敲打痕

第32図　凹　石②



番号	地区・層位	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	登録番号	図版	備考
1	CⅣ－DM～EA－1層	11.8	9.4	4.8	810	S－31	18－9	両面に凹み、磨痕
2	DⅢ－85～90－1層	11.9	9.2	6.4	840	S－32	18－11	片面に磨痕
3	CⅣ－EE－73－1層	11.0	10.3	5.2	930	S－33	18－16	片面に磨痕



8号住床面出土（S－34）

第33図　凹石・磨石・砥石

砥石（第33図4・図版18－20）

扁平な石材を使用したもので、平面形は欠損部分が多く明らかでない。大きさは残存長が約25㎝、厚さが５㎝である。使用痕跡が両面あり、ａ面では単位幅が約3㎝の帯状の研磨面が3ヶ所重複してみられ、Ｂ面には周縁を除く広い範囲に平坦な研磨が認められる。この他ａ・Ｂ両面には数多くの凹み痕がある。

2. 古　　代

第1号住居跡

〔平面形・規模〕隅丸の正方形を呈するもので一部南東隅に1m×60㎝の張り出しがある。規模は4.6×4.7mである。

〔堆積土〕3層は認められた。1層は住居跡全体に、2層は1層の下で住居跡中央部に皿状に堆積している。3層は壁際では厚く中央部では薄く床面まで堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。残存する壁高は高い所で40㎝、低い所で30㎝である。床からの立ち上りは急である。

〔床〕地山を床としほぼ平坦である。

〔柱穴〕東壁の中央部、2号カマドの南側にピットが1個検出された。配置に規則性がなくまた柱痕跡も認められないことから柱穴かどうかは不明である。

〔カマド〕東辺の北寄りと南寄りに２ヶ所付設されている。南側を1号カマド、他方を2号カマドとする。

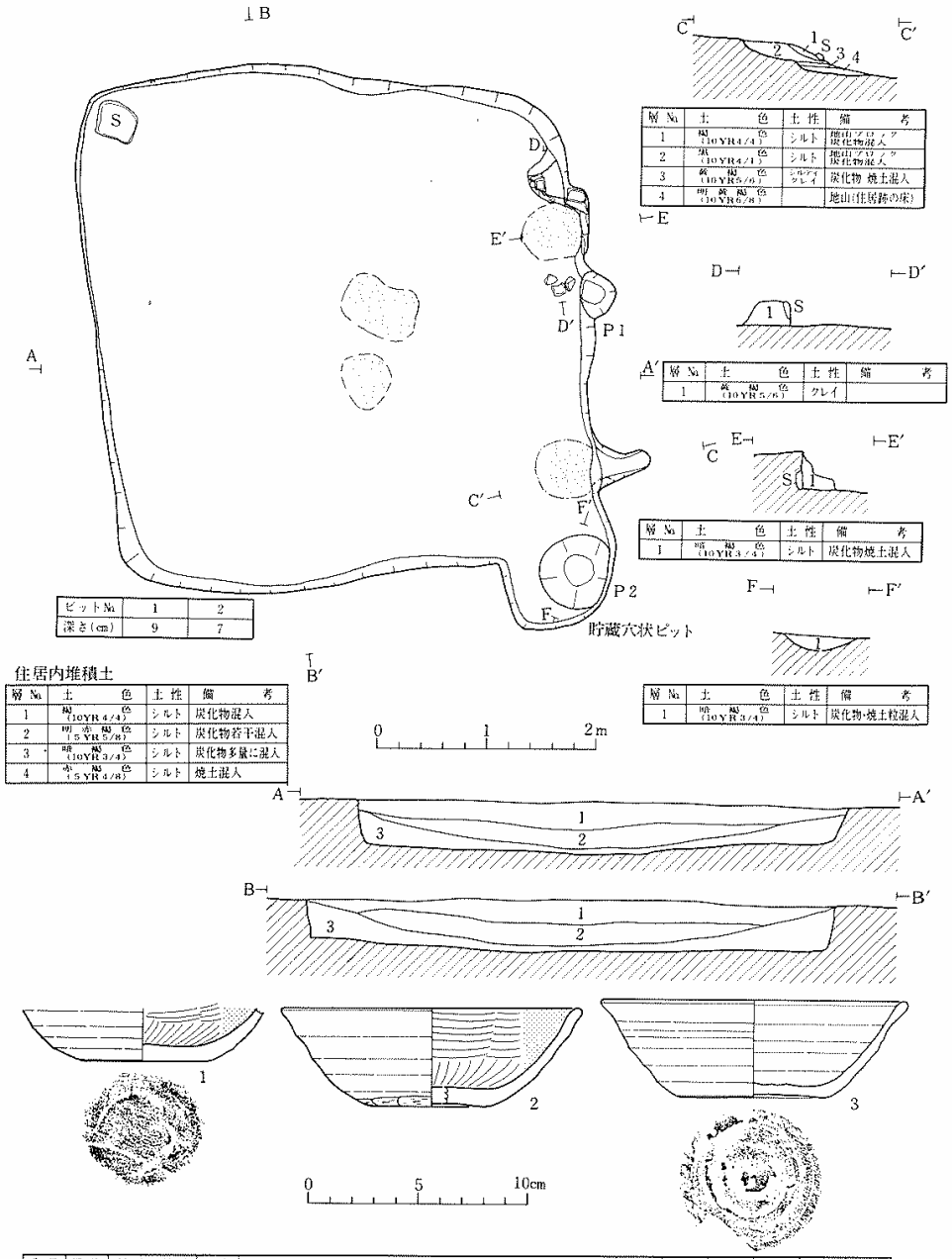
1号カマドは燃焼部と煙道からなる。燃焼部は両側壁が失われており、低面が径50㎝の範囲で焼けているのみである。煙道は、長さ48㎝、幅20㎝である。燃焼部との境に10㎝ほどの段をつけて構築している。煙道底部は先端に向かってゆるやかに立ち上がっている。

2号カマドは燃焼部のみで煙道は検出されていない。燃焼部は左側壁のみ残存しており、側壁内面から底面にかけて焼けが及んでいる。構築方法は粘土貼り付けを主体としており、他に礫を素材の一部としている。

カマドの機能時期については1・2号両者にカマド内の堆積層と思われる木炭や焼土を含んだ層が燃焼部分に堆積していることから両者とも住居廃絶期まで同時に機能していた可能性が考えられる。

〔貯蔵穴状ピット〕1号カマドの南側、張り出し部にあり径65㎝、深さ13㎝の不整円形を呈している。底面はほぼ平坦で立ち上りはゆるやかである。堆積土には焼土・炭化物がまじる。

〔遺物穴状ピット〕カマドから土師器坏、須恵器坏、堆積土から土師器坏が出土している。



層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック 炭化物混入
2	黒色 (10YR4/1)	シルト	地山ブロック 炭化物混入
3	暗褐色 (10YR5/6)	シルティクレイ	炭化物 焼土混入
4	明黄褐色 (10YR6/8)		地山(住居跡の床)

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR5/6)	クレイ	

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物焼土混入

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・焼土粒混入

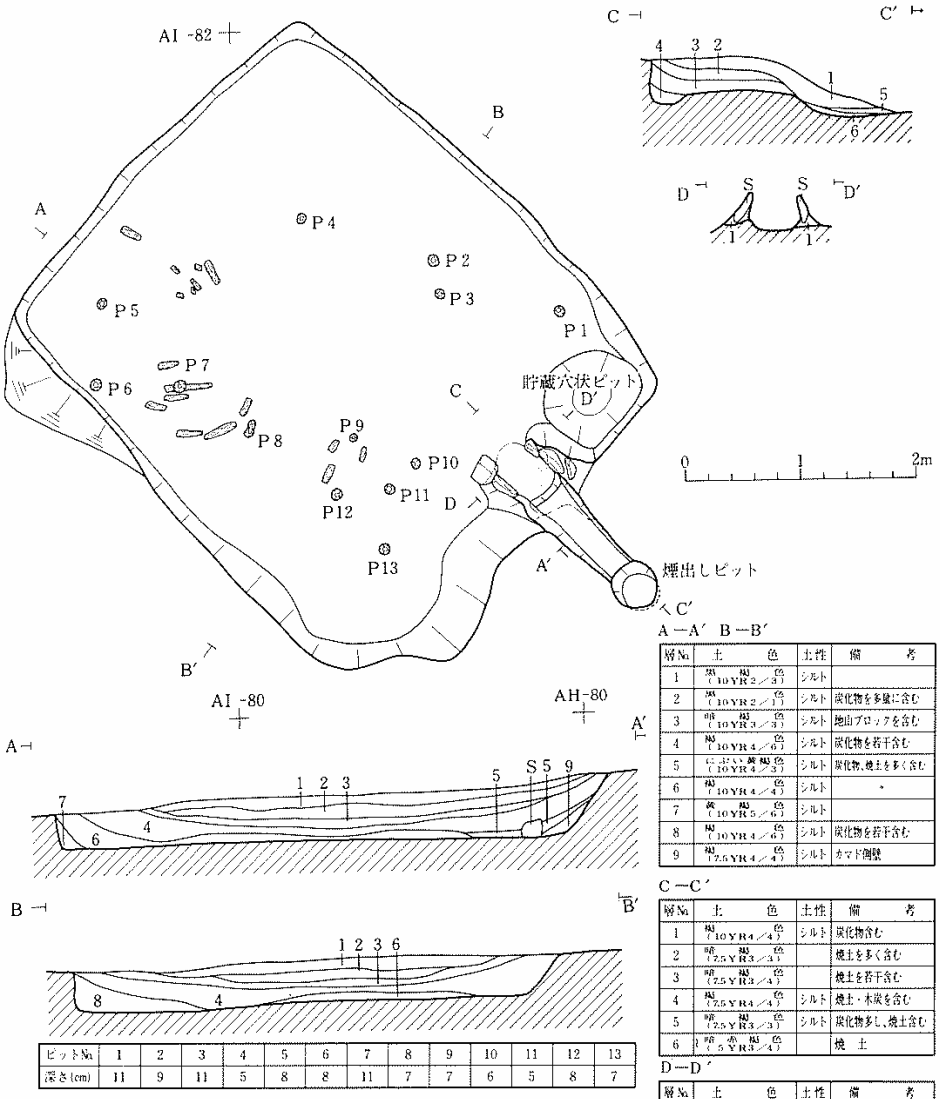
ピットNo	1	2
深さ(cm)	9	7

住居内堆積土

層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物混入
2	明赤褐色 (5YR5/8)	シルト	炭化物若干混入
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物多量に混入
4	赤褐色 (5YR4/8)	シルト	焼土混入

番号	層位	種別・器形	分類	調	整	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	カマド	土師器・坏		外面:ロクロナデ	内面:ヘラミガキ・黒色処理 底部:回転糸切り			5.6		1住-3	1/4
2	1層	土師器・坏	B	外面:ロクロナデ・手持ヘラケズリ	内面:ヘラミガキ・黒色処理 底部:回転糸切り	13.5		5.5	4.5	1住-2	1/3
3	カマド	須恵器・坏	A	外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	13.8		6.7	4.4	1住-1	1/2

第34図　第1号住居跡と出土遺物



A－A′　B－B′

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR2／3）	シルト	
2	黒色（10YR2／1）	シルト	炭化物を多量に含む
3	暗褐色（10YR3／3）	シルト	地山ブロックを含む
4	黒褐色（10YR4／6）	シルト	炭化物を若干含む
5	にぶい黄褐色（10YR4／3）	シルト	炭化物、焼土を多く含む
6	黒褐色（10YR4／4）	シルト	〃
7	黒褐色（10YR5／6）	シルト	
8	黒褐色（10YR4／6）	シルト	炭化物を若干含む
9	黒褐色（7.5YR4／4）	シルト	カマド側壁

C－C′

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR4／4）	シルト	炭化物含む
2	暗褐色（7.5YR3／4）		焼土を多く含む
3	暗褐色（7.5YR3／4）		焼土を若干含む
4	黒褐色（7.5YR4／4）	シルト	焼土・木炭を含む
5	暗褐色（7.5YR3／3）	シルト	炭化物多し、焼土含む
6	暗赤褐色（5YR3／4）		焼土

D－D′

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色（7.5YR4／4）	シルト	

ピットNo	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
深さ(cm)	11	9	11	5	8	8	11	7	7	6	5	8	7

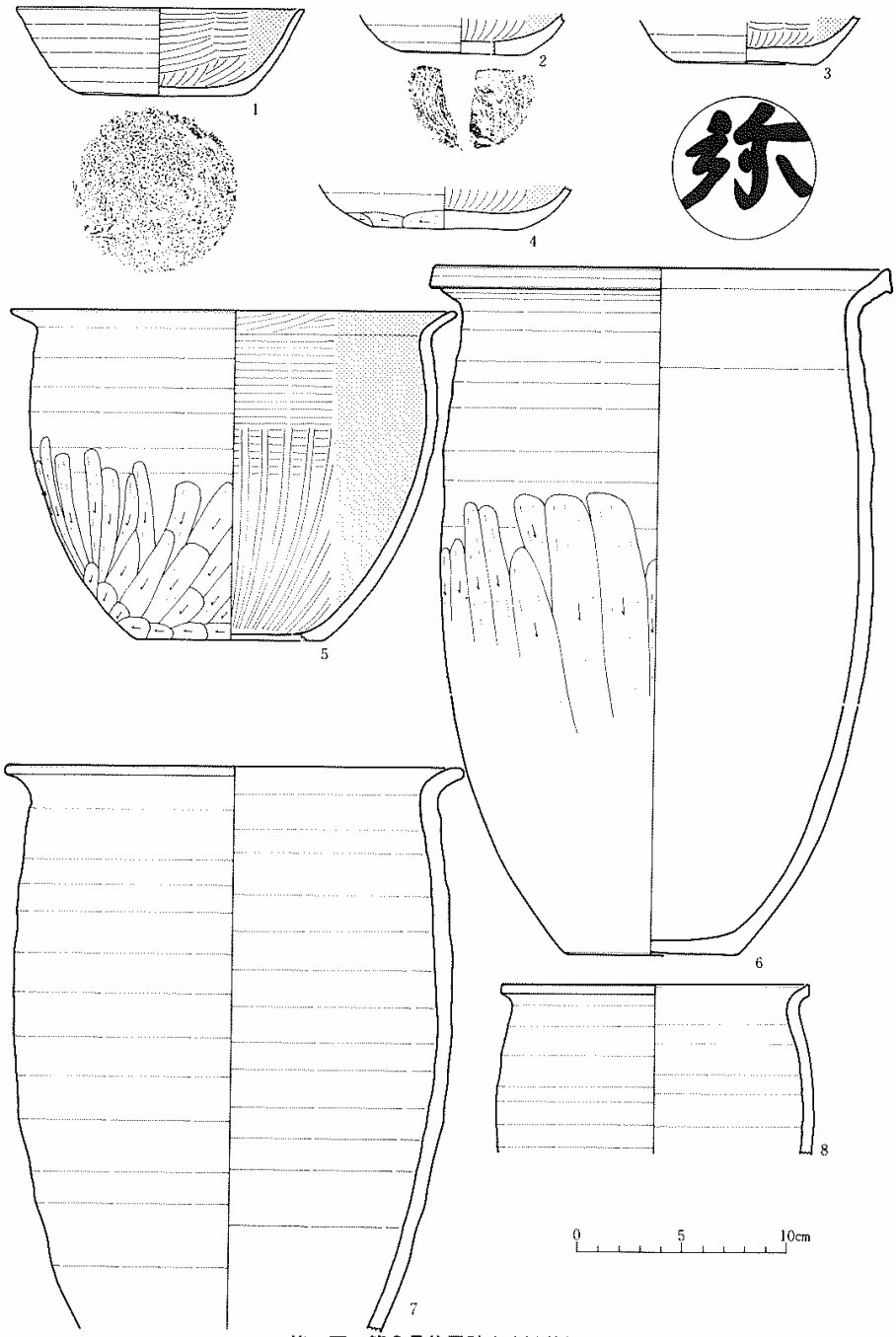
第35図　第２号住居跡

第2号住居跡

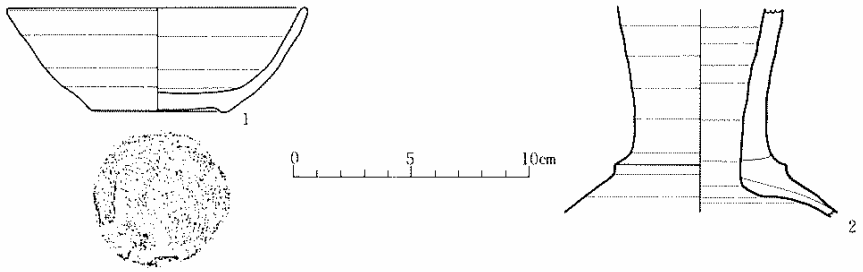
〔平面形・規模〕隅丸の長方形を呈するもので、規模は4.1×4.8mである。

〔堆積土〕8層認められた。1～4層は中央部に厚く堆積し、5・6層は壁際から床にかけて堆積しており、特に床に面する部分では多量の木炭や焼土が混入している。7・8層は壁側に堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。残存する壁高は、高い所で60㎝、低い所で30㎝である。床面から



第36図　第２号住居跡出土遺物(1)



番号	層位	種類・器形	分類	調整			口径	体径	底径	器高	登録	残存
第36図1	貯蔵穴	土師器・坏	A	外面:ロクロナデ	内面:ヘラミガキ・黒色処理	底部:回転糸切り	13.6		7.7	4.2	2住−3	2/3
2	貯蔵穴	土師器・坏		外面:ロクロナデ	内面:ヘラミガキ・黒色処理	底部:回転糸切り			5.9		2住−5	1/3
3	5～8層	土師器・坏		外面:ロクロナデ	内面:ヘラミガキ・黒色処理	底部:回転糸切り			6.8		2住−2	1/3
4	2～3層	土師器・坏		外面:ロクロナデ→手持ヘラケズリ	内面:ヘラミガキ・黒色処理	底部:手持ヘラケズリ,墨書「券」			7.1		2住−6	1/3
5	床	土師器・甕	AⅡ	外面:ロクロナデ→手持ヘラケズリ	内面:ヘラミガキ・黒色処理	底部:不　明					2住−9	3/4
6	貯蔵穴	土師器・甕	AⅠ	外面:ロクロナデ→ケズリ	内面:ロクロナデ	底部:不　明	21.5	20.6	8.0	(33.0)	2住−11	1/2
7	カマド	土師器・甕	AⅠ	外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ		21.5	20.9			2住−10	1/2
8	カマド	土師器・甕		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ		14.5	15.6				
第37図1	5～8層	須恵器・坏	BⅡ	外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ	底部:回転糸切り	12.5		5.4	4.4	2住−1	3/4
2	1層	須恵器・甕		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ						2住−7	破片

第37図　第２号住居跡出土遺物(2)

の立ち上りは急である。

〔床〕地山を床として、ほぼ平坦である。住居中央部及びカマド付近はかたくしまっている。なお、床上面を焼土、木炭を多量に含んだ層が覆い、炭化材も多く認められことから、火災に遭遇した住居跡と考えられる。

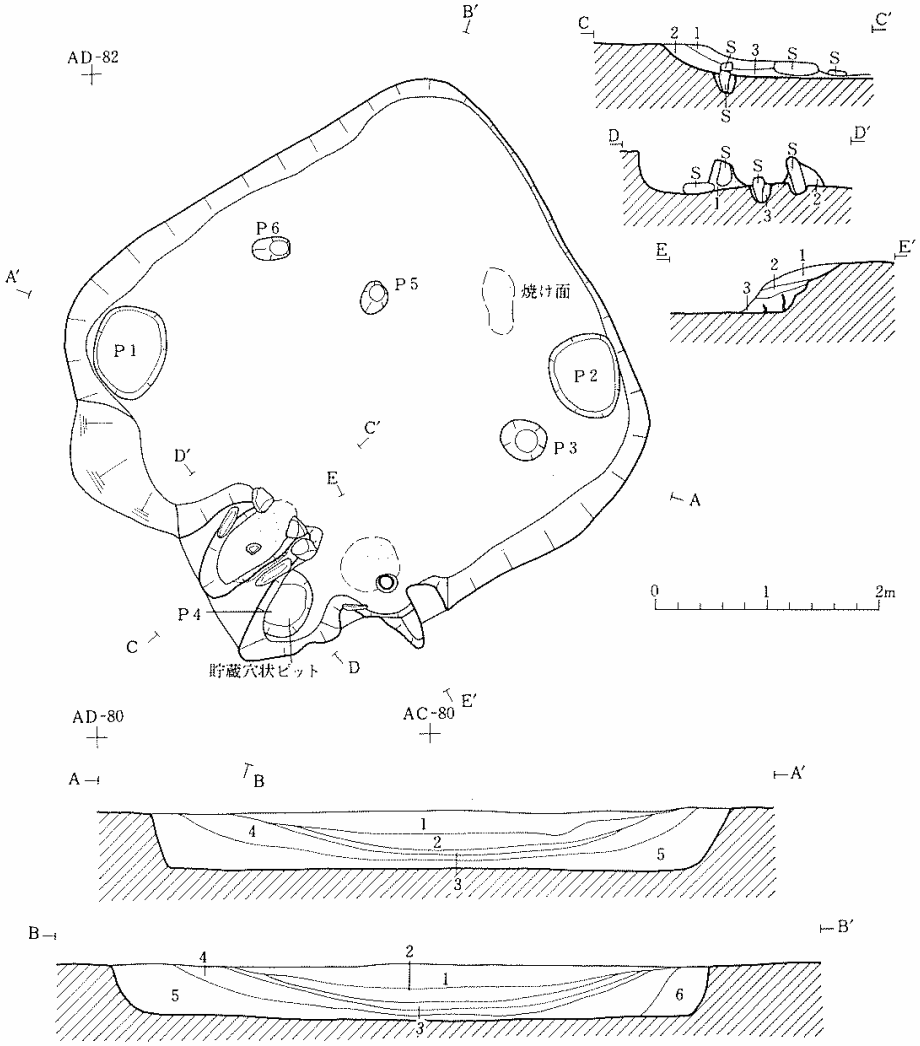
〔柱穴〕12個検出された。径はいずれも10㎝位の小さなピットである。各ピットの中から炭木材が検出されている。これらは部分的に集中し、かつ不規則な柱穴になり得るかどうか不明である。

〔カマド〕南東辺のやや東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部からなる。
燃焼部の底面は中央部がややくぼんだ状態で、40×45㎝の不整円形に焼けており、側壁の内側まで及んでいる。側壁は不定形の石を芯とし粘土の貼り付けによって構築されている。

煙道部は、煙道と煙り出しピットからなり、前者は長さ90㎝、幅30㎝であり、後者は径40㎝、深さ40㎝である。煙道底部はほぼ平坦で煙り出しピットへと続いていく。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの左脇で検出された。不整円形を呈し、規模は径80㎝、深さ約15㎝である。床面は平坦である。堆積土は1層で炭化物を含む層である。土師器坏、甕が出土している。

〔遺物出土状況〕床、カマドから土師器坏、貯蔵穴から土師器坏、甕が堆積土から土師器坏、須恵器長頸壺が出土している。



A－A′　B－B′

層No.	土　色	土性	備　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	土師器、須恵器片少量含む
2	黒　色(10YR2/1)	シルト	ブロック状に少量含む。土師器片少量含む。
3	黒褐色(10YR3/1) 褐　色(10YR4/4)	シルト	ブロック状に多量に含む。炭粒を含む。
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
5	褐　色(10YR4/6)	シルト	炭粒を少量含む。粘性あり
6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	粘性あり

C－C′

層No.	土　色	土性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭粒を含む
2	赤褐色(5YR4/6) 黄褐色(10YR5/6)	シルト	粘性あり。シルティークレイをブロック状に含む
3	明赤褐色(5YR5/8)	シルト	焼土、カマド壁崩落土

D－D′

層No.	土　色	土性	備　考
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	カマド側壁
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	カマド側壁
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	

E－E′

層No.	土　色	土性	備　考
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	焼土少量含む
2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	
3	赤褐色(5YR4/6)	シルト	炭粒を含む

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ(cm)	14	11	15	20	18	15	13	14	12

第38図　第３号住居跡

第3号住居跡

〔平面形・規模〕隅丸正方形を呈し、規模は一辺が4.4mである。

〔堆積土〕6層から認められた。1～4層は中央部に皿状に堆積し特に4層は河原石を多く含んでいる。5層は壁際では厚く中央部では薄く床まで堆積し、6層は北東壁際にのみ堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。残存する壁高は高い所で52㎝、低い所で44㎝である。床からの立ち上りは急である。

〔床〕地山床とし、平坦でかたくしまっている。

〔柱穴〕6個検出された。いずれも配置に規則性がなく規模も一定でないため柱穴かどうか不明である。

〔カマド〕西辺の南寄りに１ヶ所、南辺の西寄りに１ヶ所の２ヶ所付設されている。西辺のものを1号カマド、他方を2号カマドとする。

1号カマドは燃焼部のみで煙道部は検出されない。底面はほぼ平坦で40×50㎝の円形に焼けており、中央には石を利用した支脚が検出されている。側際は不定形の石を芯とし、粘土を貼り付けて構築されているもので、内面は熱のため赤変している。

2号カマドは燃焼部と煙道からなる。燃焼部底面はほぼ平坦で径30㎝の円形に焼けている。底面中央には倒立の土師器甕を利用した支脚が検出されている。側壁は粘土貼り付けによって構築されており一部内面に焼け及んでいる。煙道は長さ30㎝で燃焼部との境に8㎝ほどの段をつけて構築されている。底面は平坦で、先端に向かってゆるやかに立ち上がる。

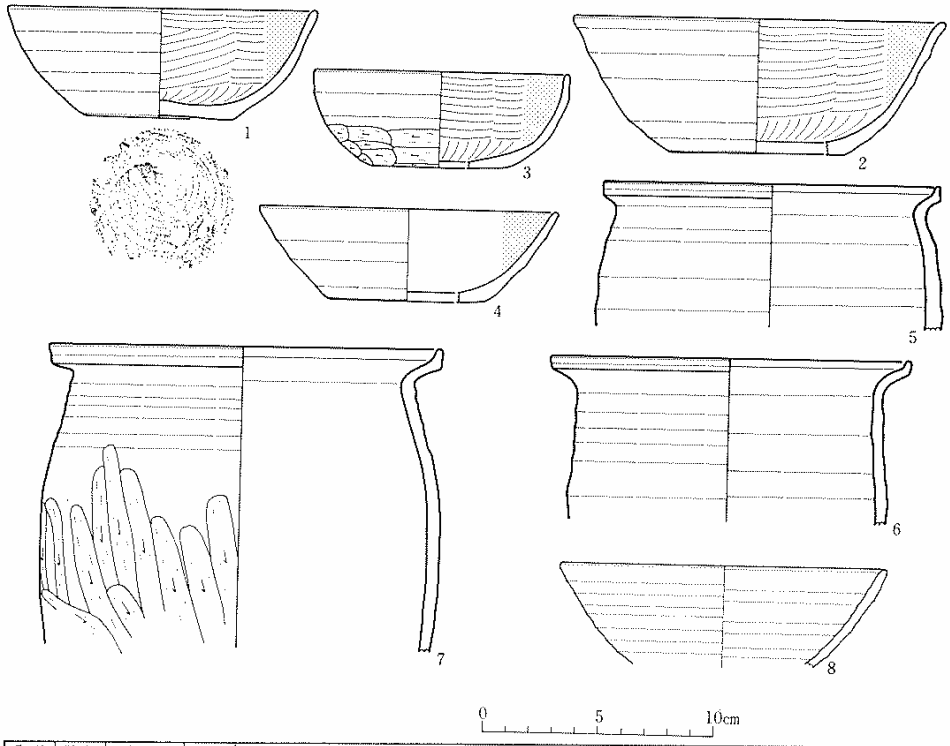
新旧関係は、１号カマドが貯蔵穴状ピットを埋めて構築していることや、２号カマドの側壁の大部分が壊されていること等から、1号カマドが新しく2号カマドが古いカマドと考えられる。

〔貯蔵穴状ピット〕2号カマドの南西で検出されたもので、楕円形を呈している。1号カマドを構築する際に埋られているため、2号カマドに伴うものと考えられるものである。規模は60×80㎝で深さ20㎝、床面はほぼ平坦で立ち上がりはゆるやかである。

堆積土は3層認められ、いずれの層にも焼土・炭化物が混入している。堆積土中から土師器坏甕が出土している。

〔その他の施設〕北西隅に70㎝×90㎝、深さ9㎝の不整円形を呈するピットが検出された。また南東隅に60㎝×68㎝、深さ10㎝の不整円形を呈するピット、さらに住居跡中央部より北東寄りに60×15㎝の楕円形の焼け面が検出されている。

〔遺物で出土状況〕カマドから土師器甕、貯蔵穴状ピットから土師器坏、甕が出土し、堆積土から須恵器坏が出土している。



番号	層位	種類・器形	分類	調整	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	貯蔵穴	土師器・坏	BI	外面:ロクロナデ　内面ヘラミガキ・黒色処理　底部:回転糸切り	13.0		6.2	4.8	3住－1	完
2	貯蔵穴	土師器・坏	BI	外面:ロクロナデ　内面ヘラミガキ・黒色処理　底部:不　明	15.7		7.5	5.8	3住－4	1/2
3	貯蔵穴	土師器・坏	BII	外面:ロクロナデ→手持ヘラケズリ　内面ヘラミガキ・黒色処理　底部:手持ヘラケズリ	10.8		5.7	4.2	3住－2	1/4
4	貯蔵穴	土師器・坏	A	外面:ロクロナデ　内面ヘラミガキ・黒色処理　底部:不　明	12.7		6.8	4.0	3住－3	1/2
5	カマド	土師器・甕		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	14.3	(14.8)			3住－6	1/2
6	カマド	土師器・甕		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	15.3	13.7			3住－7	1/2
7	カマド	土師器・甕	AI	外面:ロクロナデ→手持ヘラケズリ　内面:ロクロナデ	16.8	17.2			3住－8	1/2
8	4　層	須恵器・坏		外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	13.8				3住－5	1/3

第39図　第３号住居跡出土遺物

第4号中住居跡

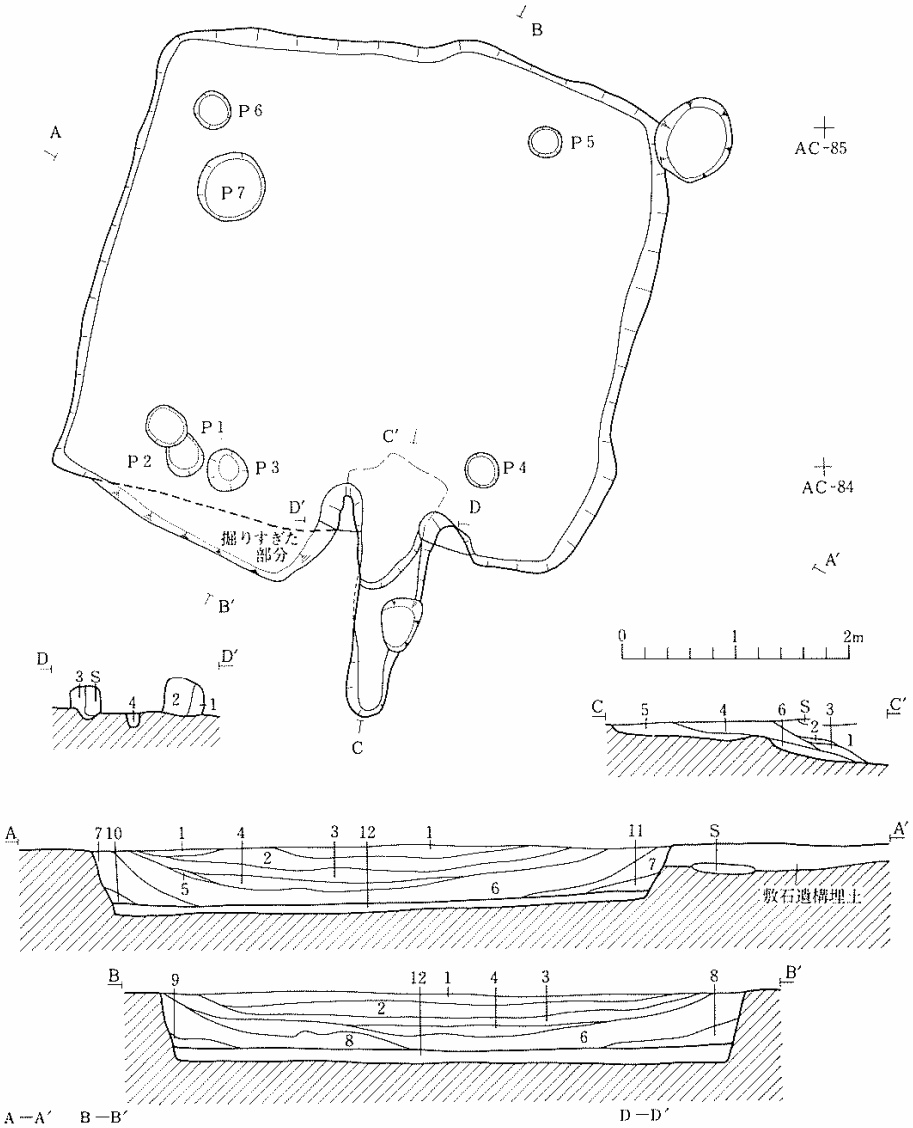
〔重複・平面形・規模〕東辺で敷石遺構を切って構築されている。長方形を呈するもので規模は4.2×4.8mでる。

〔堆積土〕12層認められた。1～4層は中央部に皿状に、6層は全体で壁高に厚く堆積しており、7～11層までは壁際に堆積している。12層は住居掘り方の埋土である。

〔壁〕地山を壁としている。残存する壁高は高い所で60㎝、低い所で50㎝である。床からの立ち上がりは急である。

〔床〕掘り方埋土を床としておりほぼ平坦である。住居の中央部がかたくしまっている。

〔柱穴〕7個検出されいずれも柱痕は認められない。P_1・P_4・P_5・P_6は形態・規模に規則性があり、対角線上にあることから、柱穴と考えられる。



A－A′　B－B′

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物少量含む
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物，焼土粒を少量含む
4	褐　色(10YR4/6)	シルト	
5	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	若干の木炭を含む
7	黄褐色(10YR5/6)	シルト	軟質
8	黄褐色(10YR5/8)	シルト	軟質
9	褐　色(10YR4/6)	サンディシルト	
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	サンディシルト	軟質
11	褐　色(10YR4/4)	サンディシルト	
12	褐　色(10YR4/4)	シルト	

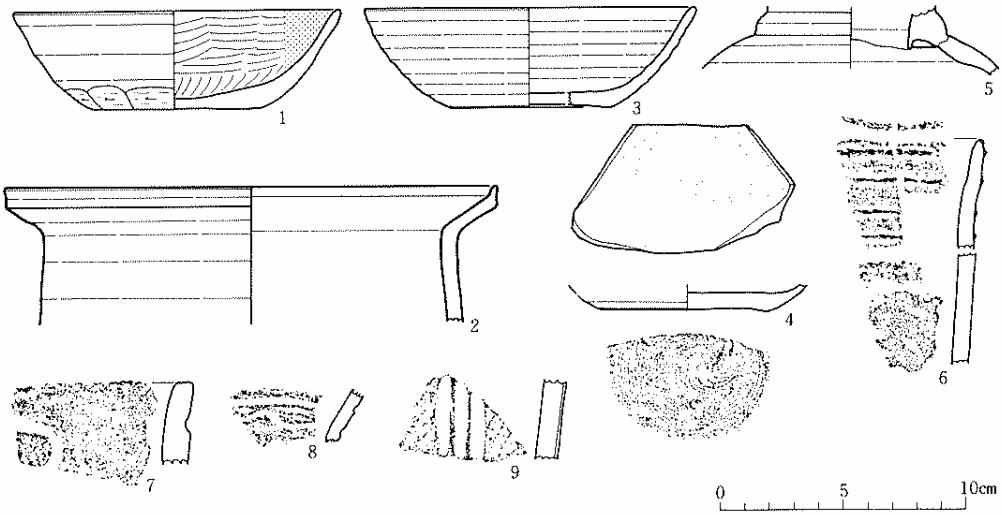
層No.	土色	土性	備考
1	褐　色(10YR4/6)	シルト	
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物を多く含む
4	褐　色(10YR4/6)	シルト	焼土を含む
5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	
6	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	焼土を多く含む

D－D′

層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	
3	黄褐色(10YR5/6)		
4	赤褐色(5YR4/6)	シルト	

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7
深さ(cm)	15	16	33	12	19.5	18.5	20

第40図　第４号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	調	整	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	床	土師器・坏	A	外面:ロクロナデ→手持ヘラケズリ	内面:ヘラミガキ・黒色処理　底部:回転糸切り→手持ヘラケズリ	(13.0)		(6.7)	(4.0)	4住－2	1/8
2	床	土師器・甕		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ	(19.8)				4住－5	1/8
3	床	須恵器・坏	B1	外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ　底部:回転糸切り	13.2		6.4	4.1	4住－1	1/3
4	1層	須恵器・坏 転用硯		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ　底部:回転糸切り			6.5)		4住－4	1/4
5	煙道	須恵器・壺		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ					4住－3	破片
6	2層	縄文土器									破片
7	3層	縄文土器									破片
8	床	縄文土器									破片
9	3層	縄文土器									破片

第41図　第４号住居跡出土遺物

〔カマド〕南辺の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道からなる。

燃焼部は長軸120㎝×短軸70㎝である。底面はほぼ平坦で赤変しており側壁の内側にまで及んでいる。壁側は不定形の礫を部分的に含んだ粘土を貼り付けて構築されている。燃焼部のほぼ中央に径60㎝、深さ10㎝の支脚の捉え方が検出されている。

煙道は長さ120㎝、最大幅40㎝、底面は平坦で先端部でゆるやかに立ち上がる。

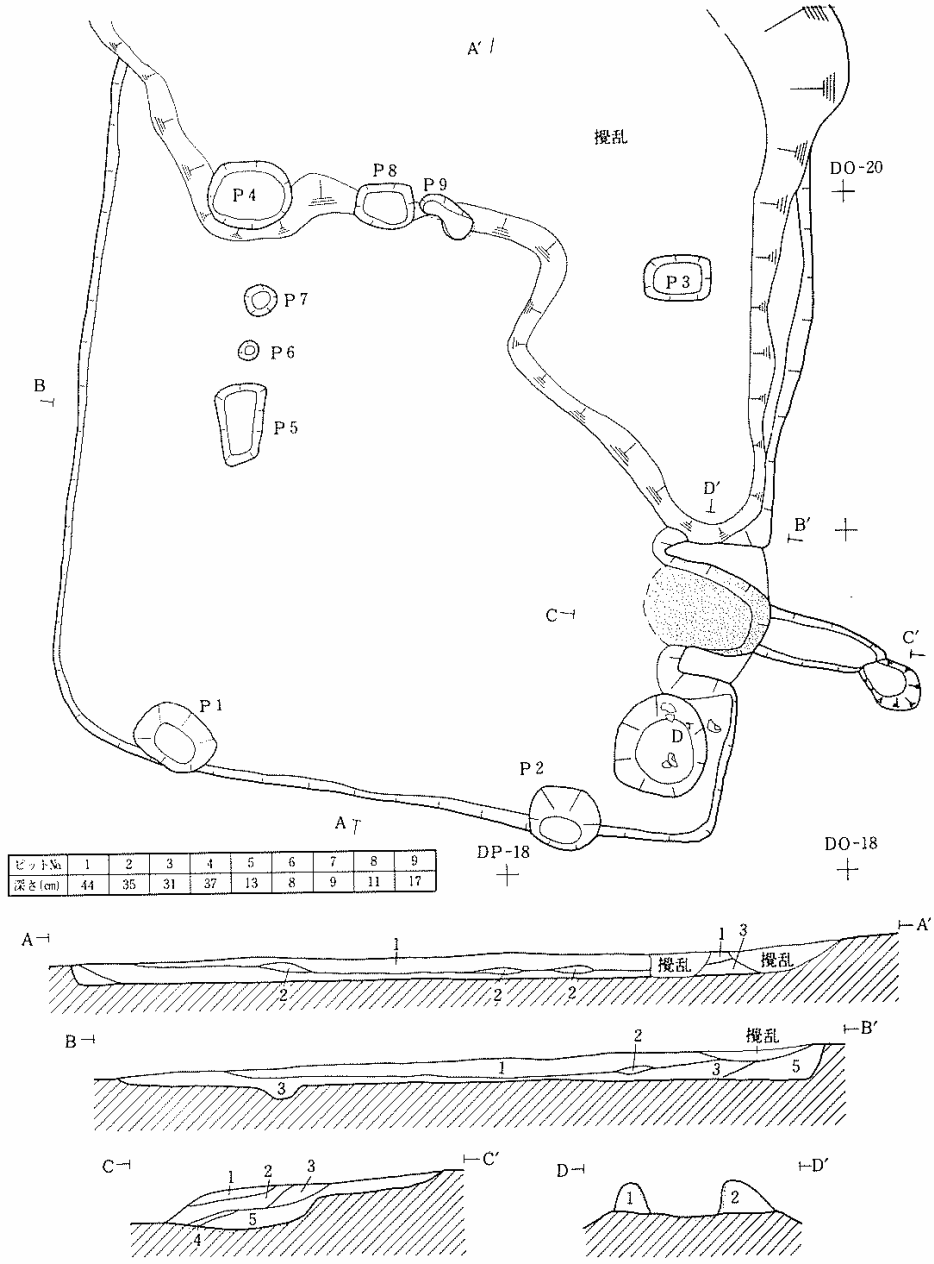
〔遺物出土状況〕床から土師器坏、須恵器坏、カマドから須恵器長頸壺、掘り方埋土から土師器甕が出土し、堆積土から縄文土器、須恵器坏（転用硯）が出土している。

第5号住居跡

〔平面形・規模〕北辺と煙道部の先端が攪乱によって壊されているが、残存状況から長方形を呈すると思われる。規模は判明する東西軸で6.2mである。

〔堆積土〕2層認められた。1層は中央部、2層は壁際から床にかけて堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。1残存する壁高は高い所で30㎝低い所で20㎝である。床からの立ち上がりは急である。



ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ(cm)	44	35	31	37	13	8	9	11	17

A－A′　B－B′

層No.	土　色	土性	備　考
1	黒　色(10YR3/2)	シルト	しまりがなくボサボサした感じ
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	部分的に混入
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	
4	黒褐色(10YR3/3)	シルト	
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック4%に含む

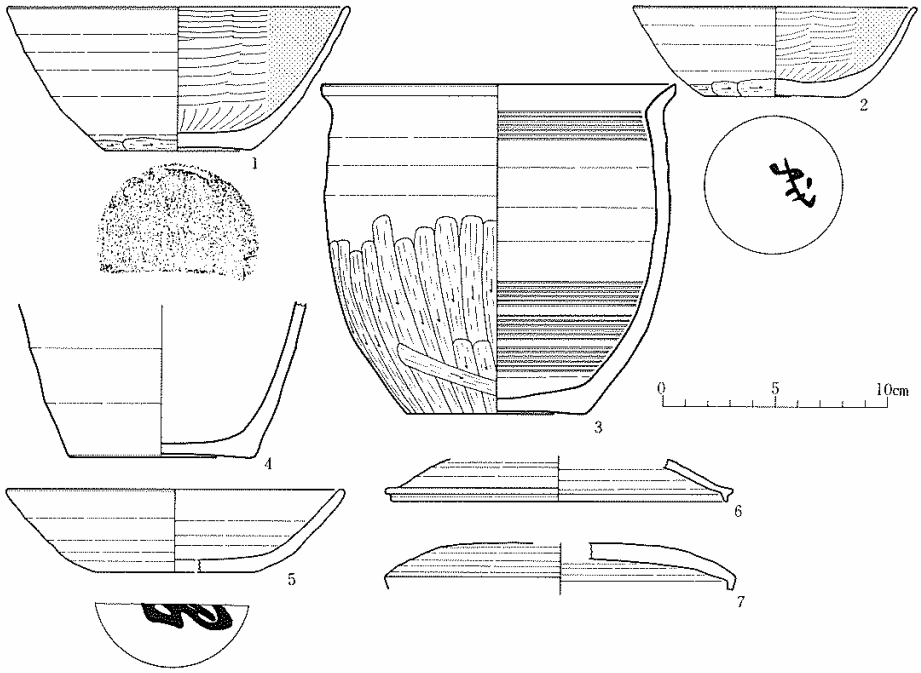
C－C′

層No.	土　色	土性	備　考
1	黒　色(10YR3/2)	シルト	しまりがなくボサボサした感じ
2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	部分的に混入
3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	カマド崩壊土
4	褐　色(10YR4/4)	シルト	カマド崩壊土
5	暗赤褐色(5YR3/2)	シルト	焼　土

D－D′

層No.	土　色	土性	備　考
1	黄褐色(10YR5/6)	粘土	カマド側壁
2	黄褐色(10YR5/6)	粘土	カマド側壁

第42図　第５号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	調整	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	床	土師器・坏	BI	外面:ロクロナデ・手持ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ・黒色処理 底部:手持ヘラ	15.1		6.4	6.4	5住－2	1/2
2	貯蔵穴	土師器・坏	A	外面:ロクロナデ・手持ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ・黒色処理	12.4		6.2	4.0	5住－9	3/4
3	カマド	土師器・甕	AII	外面:ロクロナデ・手持ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ・回転磨毛目 底部:不明	14.7	15.3	8.0	14.7	5住－3	1/2
4	カマド	土師器・甕		外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ 底部:手持ヘラケズリ			8.2		5住－5	1/2
5	貯蔵穴	須恵器・坏	AI	外面:ロクロナデ 内面:不明 底部:手持ヘラケズリ	14.9		(7.0)	3.7	5住－1	1/2
6	2層	須恵器・蓋		外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り無調整	14.9				5住－7	1/8
7	2層	須恵器・蓋		外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ					5住－8	1/8

第43図　第５号住居跡出土遺物

〔床〕地山を床とし、ほぼ平坦でありかたくしまっている。北側の床面は攪乱によって壊されている。

〔柱穴〕住居内から6個検出された。このうちP_1・P_2は南側に、P_3・P_4北側の攪乱部分に認められるもので、柱痕は認められないが、配置関係に規則性を有し、規模もほぼ一定していることから主柱穴と考えられる。

〔カマド〕東辺の南寄りには付設され燃焼部と煙道からなる。

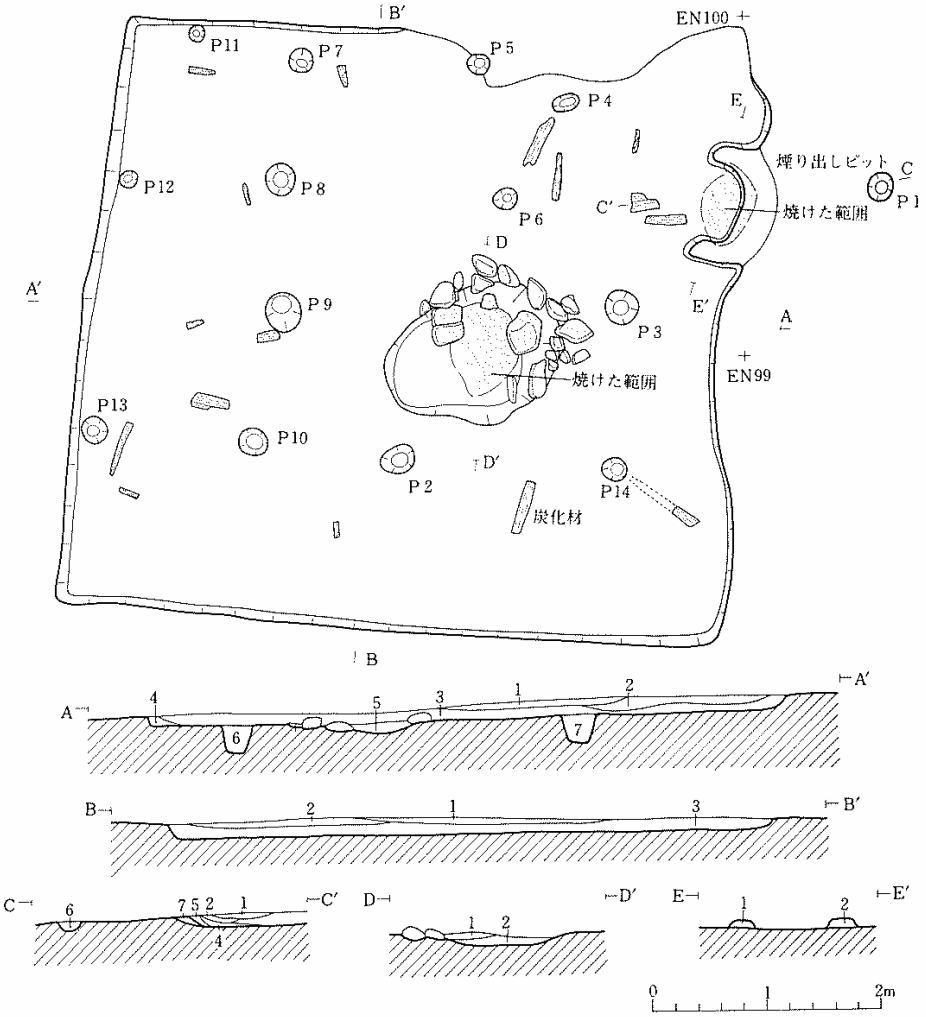
燃焼部は110㎝×80㎝の長方形を呈し底面はほぼ平坦で熱のため赤変しており、焼けは側壁の内側にまで及んでいる。側壁は粘土の貼り付けによって構築されている。

煙道部は長さ100㎝、最大幅44㎝、底面はほぼ平坦で先端に向かってゆるやかに立ち上がる。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの南側で検出されたもので径90㎝、深さ10㎝の不整円形を呈する。ピット内部は焼土や木炭層が堆積しており底面からは土師器坏が出土している。
〔遺物出土状況〕床から土師器坏、カマドから土師器甕、貯蔵穴状ピットから土師坏、堆積土から須恵器蓋が出土している。

第6号住居跡

〔平面形・規模〕長方形を呈するもので規模は5.3×5.6mである。
〔堆積土〕3層認められた。1・2層は皿状に堆積し、3層は全体に広がるが特に壁際に厚く堆積している。
〔壁〕地山を境としている。残存する壁高は高い所で18㎝、低い所で8㎝であり、床からの立ち上がりは急である。北辺東辺は削平により失われている。
〔床〕地山を床としほぼ平坦である。床面には長さ40～50㎝、太さ10㎝内外の炭化材が在しており焼失家屋と考えられる。
〔柱穴〕住居内からピットが14個検出された。いずれも柱痕跡は確認されない。このうちP_2・P_3・P_5・P_7~P_{10}・P_{14}を結んだ線はほぼ長方形になり、各ピットの規模も一定していることから柱穴と考えられる。また、P_6・P_{11}～P_{13}も東西の柱列の延長線上にあることからあるいは柱穴の可能性がある。
〔カマド〕東辺の北寄りに付設されている。燃焼部と煙り出しピットが検出された。燃焼部は規模が50×60㎝で底面は赤変しており、側壁の内側にまで及んでいる。側壁は粘土を貼り付けて構築されている。
　煙り出しピットは燃焼部から東に約1mのところにあるが、それをつなぐ煙道は削平により失われている。ピットは径約20㎝の円形を呈しており、深さは約10㎝で、なかに焼土や木炭が堆積している。
〔炉〕住居跡中央部東寄りに検出された。150×130㎝の楕円形を呈しておりその北半の周縁には大小の礫が不規則に配されている。底面は皿状に掘りくぼめられており、その中央部から配石の部分にかけてかなり焼けが及んでいる。炉の底面からは破損した土師器甑4個固体が一括して出土している。
〔遺物出土状況〕床から土師器坏・甕・カマドから土師器甕、炉から土師器甑、堆積土から土師器甕が出土している。



A -A′・B −B′

層No.	土　色	土性	備　考
1	黒　色(10YR2/1)	シルト	中央部に風状に堆積している
2	褐　色(10YR4/6)	シルト	北側全体に分布
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭、炭粒を多量に含む
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	南壁ぎわに分布
5	黒褐色(10YR3/4)	シルト	炭粒を多く含む
6	黒褐色(10YR2/3)	シルト	ピット3
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	ピット4

C −C′

層No.	土　色	土性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	赤褐色(5YR4/6)	シルト	
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	
4	橙　色(5YR6/8)	シルト	
5	明赤褐色(5YR5/8)	シルト	
6	明赤褐色(5YR5/8)	シルト	
7	淡青色	シルト	

D −D′

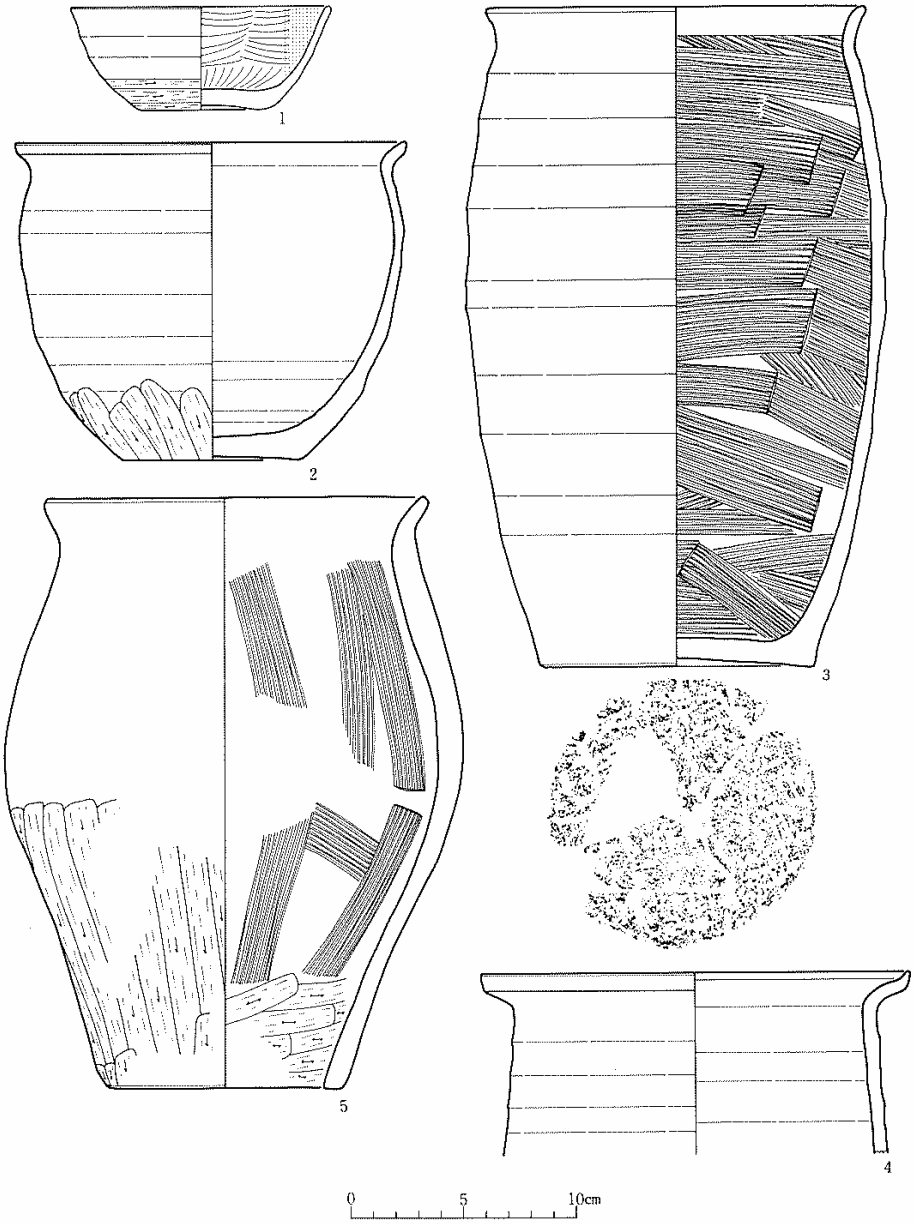
層No.	土　色	土性	備　考
1	黒褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物
2	橙　色(2.5YR6/8)	シルト	

E −E′

層No.	土　色	土性	備　考
1	淡　青(2.5YR8/4)	シルト	
2	褐　色(10YR4/4)	シルト	炭粒を含む、土師器を含

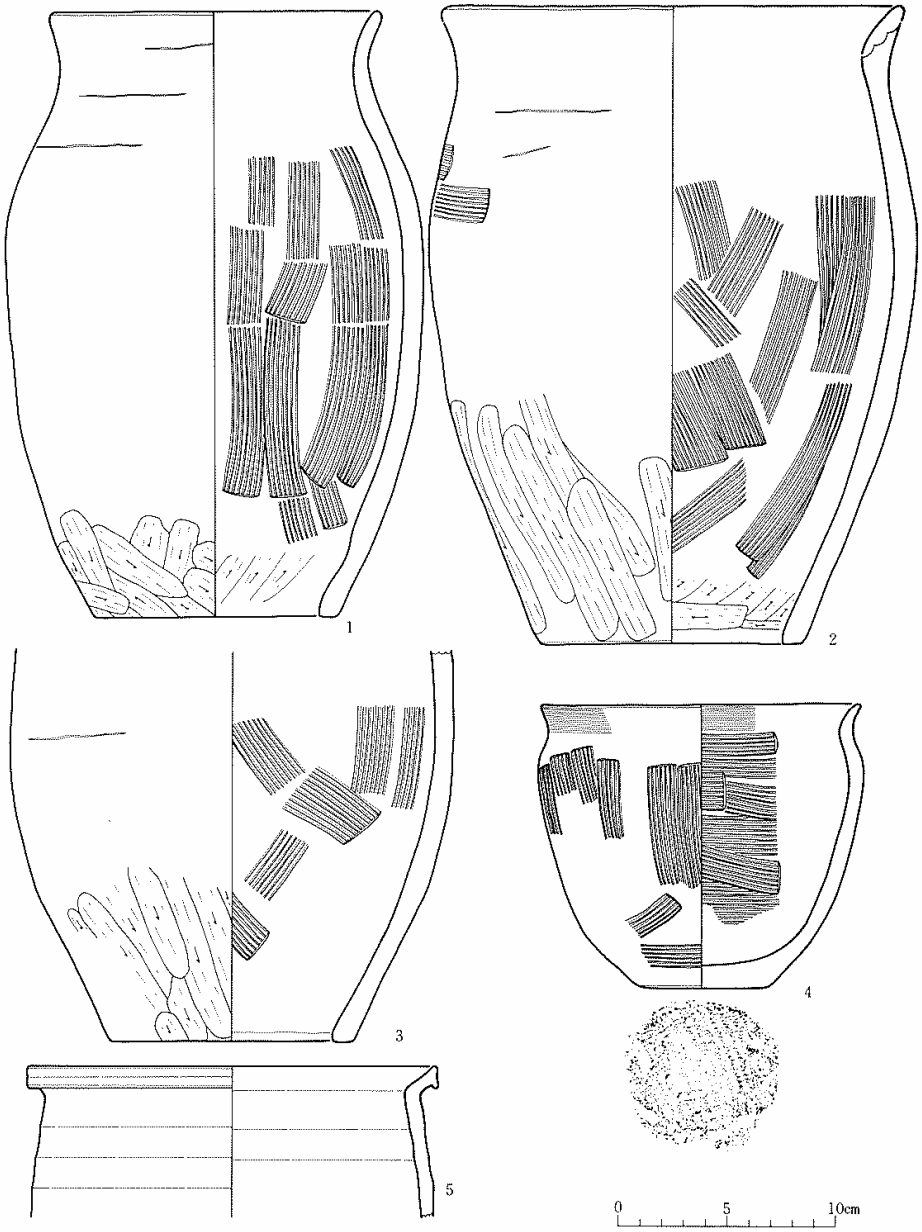
ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
深さ(cm)	10	8	22	12	10	8	14	26	22	30	10	4	7	5

第44図　第6号住居跡



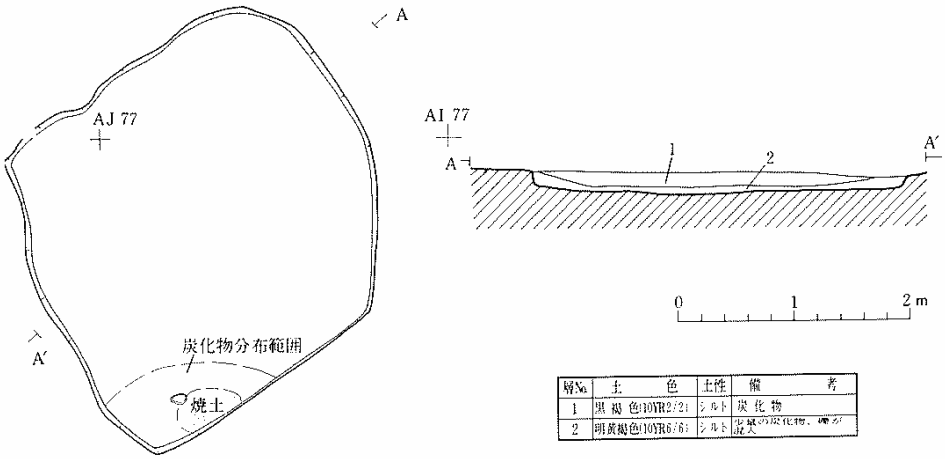
番号	層位	種類・器形	分類	調	整	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	床	土師器・坏	B1	外面:ロクロナデ・回転ケズリ 底部:回転ケズリ	内面:ヘラミガキ・黒色処理	11.4		5.1	4.6	6住－1	2/3
2	床	土師器・甕	A1	外面:ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	内面:ロクロナデ	17.3	17.0	7.8	14.1	6住－2	1/3
3	床	土師器・甕	A1	外面:ロクロナデ 底部:むしろ状圧痕	内面:ハケメ	16.7	18.5	12.1	29.3	6住－4	1/3
4	カマド	土師器・甕		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ	18.8				6住－3	1/5
5	石囲い炉	土師器・甑		外面:ロクロナデ・ナデ・ケズリ 底部:ナデ・木葉痕		16.9	20.2	10.3	26.2	6住－5	2/3

第45図　第６号住居跡出土遺物(1)



番号	層位	種類・器形	分類	調	整	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	石囲いが	土師器・甕		外面:ナデ・ケズリ　底部:木葉	内面:ナデ・ハケメ・ケズリ	15.1	19.1	11.0	28.0	6住－7	1/3
2	石囲いが	土師器・甕		外面:ハケメ・ナデ・ケズリ　底部:ケズリ・木葉	内面:ハケメ	(21.0)	22.3	11.9	(29.0)	6住－8	1/3
3	石囲いが	土師器・甕		外面:ナデ・手持ちケズリ　底部:木葉	内面:ハケメ・ナデ		20.3	11.1		6住－6	1/3
4	2層	土師器・甕	B	外面:ハケメ　底部:ムシロ状圧痕	内面:ハケメ	14.1	14.9	5.7	13.0	6住－9	1/4
5	4層	須恵器・甕		外面:ロクロナデ	内面:ロクロナデ	18.7				6住－10	1/2

第46図　第６号住居跡出土遺物(2)



層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色10YR2/2	シルト	炭化物
2	明黄褐色10YR6/6	シルト	少量の炭化物、礫が混入

第47図　第１号竪穴遺跡

第1竪穴遺構

〔平面形･規模〕北東辺がゆるやかにふくらむ方形を呈する。規模は3.2×3mである。

〔堆積土〕2層認められる。1層は中央部に皿状に、2層は壁際が暑く、床面全体に堆積している。

〔壁〕地山を壁としており残存する高さは約10㎝である。床からの立ち上がりは急である。

〔床面〕地山を壁とし、ほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕堆積土から土師器坏・甕が出土している。

第1建物跡

5号住居跡の北隣りに検出された。

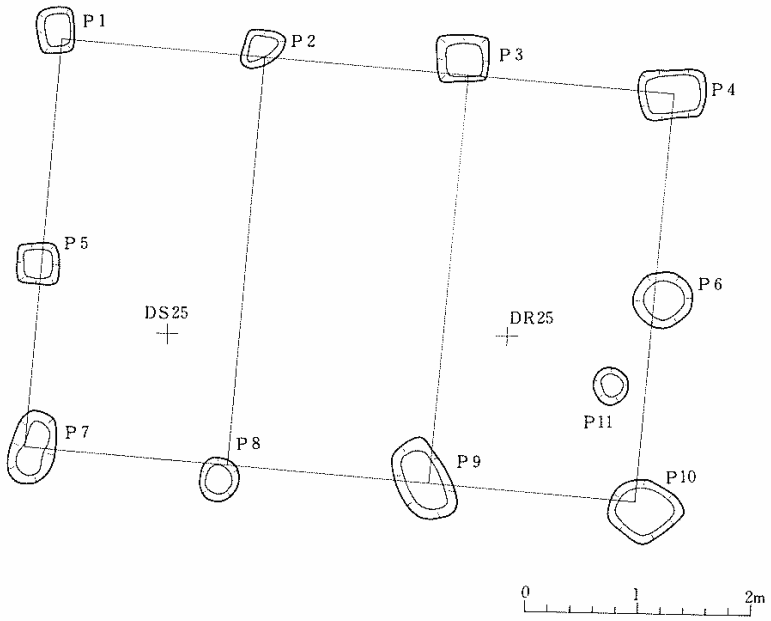
桁行3間×梁間2間の東西棟である。棟方向はN－70°－Wで、柱間寸法は桁行、梁間とも1.8m等間である。

柱掘り方は円形もしくは方形を呈し規模は長軸が40～60㎝、深さは10～20㎝となっており、いずれも柱痕跡は確認されなカッター。

第1土壙

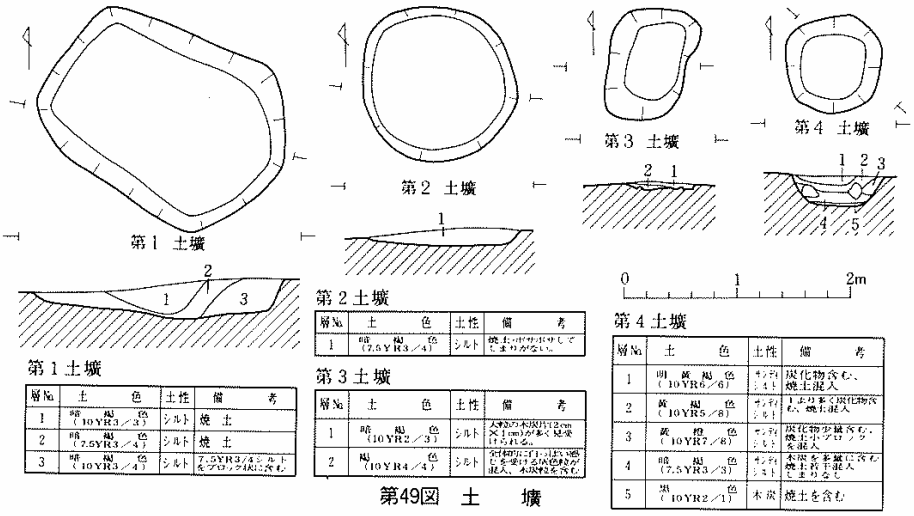
〔平面形・規模〕不整な隅丸の五角形を呈するもので規模は170×220㎝である。

〔堆積土〕3層認められた。1層は、中央部に厚く、床近くまで堆積し、2層は中央から西壁にかけて床を覆っている。1・2層はどちらも焼土である。3層は東壁に厚く堆積して



ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深さ(mm)	9.0	11.0	15.5	17.0	8.0	17.0	21.0	17.0	18.0	16.0	11.0

第48図　掘立柱建物跡



第1土壌

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3／3）	シルト	焼土
2	暗褐色（7.5YR3／4）	シルト	焼土
3	暗褐色（10YR3／4）	シルト	7.5YR3/4シルトをブロック状に含む

第2土壌

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色（7.5YR3／4）	シルト	焼土がボサボサしてしまりがない。

第3土壌

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR2／3）	シルト	大きめの木炭片(2cm×1cm)が多く見受けられる。
2	褐色（10YR4／4）	シルト	全体的に白っぽい感じを受ける灰色粒が混入、木炭を含む。

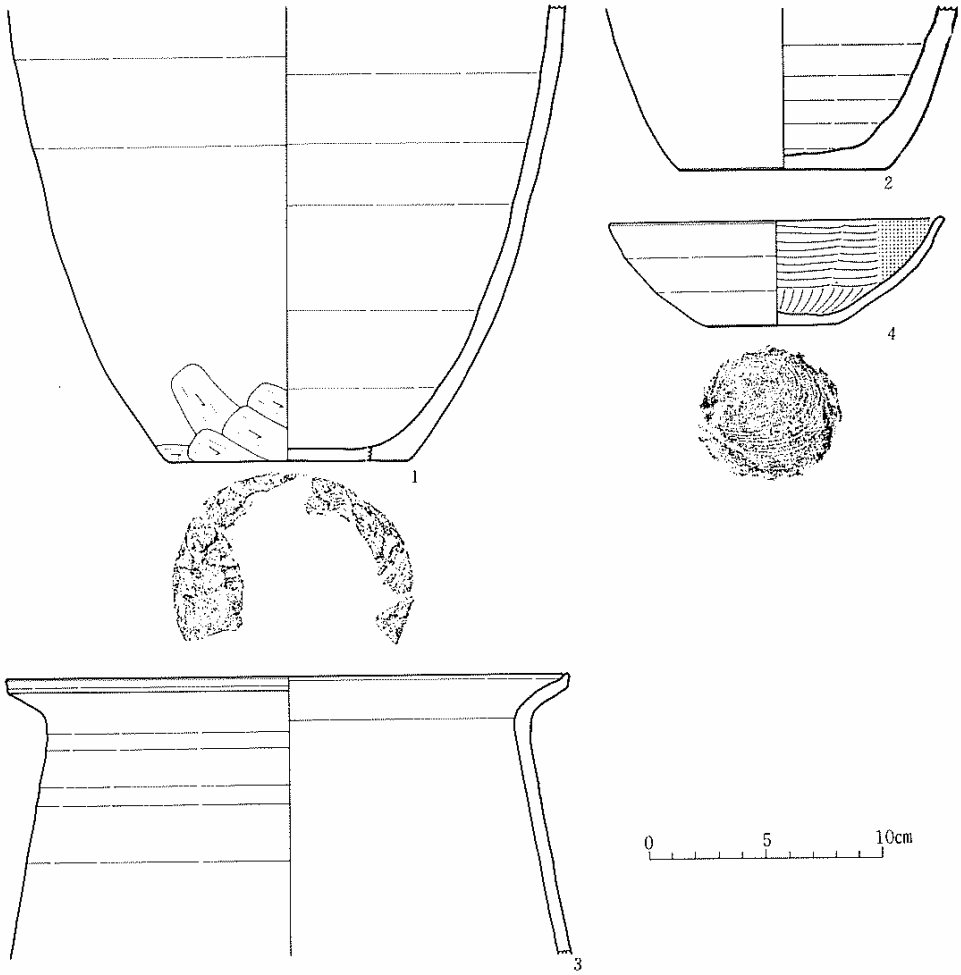
第4土壌

層No.	土色	土性	備考
1	明黄褐色（10YR6／6）	サンディシルト	炭化物含む、焼土混入
2	黄褐色（10YR5／8）	サンディシルト	1より多く炭化物含む、焼土混入
3	黄橙色（10YR7／8）	サンディシルト	炭化物少量含む、焼土小ブロックを混入
4	暗褐色（7.5YR3／3）	サンディシルト	木炭を多量に含む焼土粒子混入しまりなし
5	黒（10YR2／1）	木炭	焼土を含む

第49図　土　壌

いる。1～3層はボサボサした層である。

〔壁〕地山を壁としている。壁高は深い所で30㎝、浅い所で7㎝で、床からの立ち上がりは東側は急であるが西側がゆるやかである。



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	口径	体径	底径	器高	登録	残存
1	第14地点遺構2層	土師器・甕		外面:ヘラケズリ　内面:ロクロナデ　底部:手持ヘラケズリ			10.2		1	1/4
2	2 層	土師器・甕		外面:不 明　内面:ロクロナデ　底部:不 明			8.2		2	1/4
3	土壙2床	土師器・甕		外面:ロクロナデ,ナデ　内面:ナデ	23.8				3	1/4
4	DP25 1層	土師器・坏	B1	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ,黒色処理　底部:回転糸切り	14.0		5.2	4.5	4	完

第50図　土壙その他の出土遺物

〔床〕地山を床としている。中央部ではややくぼみが、ほぼ平坦である。
〔遺物出土状況〕土器甕が2層から出土している。

第2土壙

〔平面形・規模〕円形を呈し、規模は径140㎝である。壁高は深い所で10㎝、浅い所で50㎝で床からの立ち上がりは急である。
〔堆積土〕焼土全面に堆積している。

〔壁〕地山を壁としている
〔床〕地山を床としてほぼ平平坦である。

第3土壙

〔平面形・規模〕楕円形を呈し、規模は60×100㎝である。検出面からの深さ10㎝である。
〔堆積土〕自然堆積で2枚の層に分かれる。
〔壁〕地山(砂礫層)を壁とし、床からの立ち上がりはゆるやかである。
〔床〕地山を床としているが、砂礫層のため凹凸が激しい。

第4土壙

〔平面形・規模〕楕円形を呈し、規模は90×80㎝である。検出面からの深さ54㎝である。
〔壁〕地山を壁とし、床からの立ち上がりは急である。
〔底面〕地山を地面とし、中央部が少しくぼむが、ほぼ平坦である。

Ⅳ 考　　察

1.縄文時代

(1) 出土土器

本遺跡における縄文土器は前項でも述べたように、その大半が遺跡内でも北部に位置する第7・8号住居跡や第1・2・4埋設土器遺構および周辺の堆積土から出土したもので、それらは時期的にみて一定のまとまりをもつものと考えられる土器群である。この他、やや離れた遺跡の南部において第5埋設土器遺構や第1・3号土壙から出土したおよびその周辺から出土した「その他の土器」があるが、数量は少なく、期時的にも北部のものとは明らかに異なるものである。したがって、以下分類するにあたって第7・8号住居跡出土土器を中心とした北部の土器群について行うことにし、第1・3号土壙や「その他の土器」について遺跡南部の土器と別項で扱うことにする。

土器の分類

土器には深鉢・袖珍土器がある。このうち深鉢については器形および文様の特徴が明らかなものを主な対象として分類し、袖珍土器については数量が少ないため、その特徴を述べるにとどめることにする。

＜深鉢＞

深鉢には文様をもつものと地文のみのものとがある。このうち文様をもつものについてはその器形的特徴からⅠ～Ⅲに分類することができる。

A．文様をもつもの

Ⅰ類　胴部上位でくびれ口縁部が内彎するもので、文様構成からａ・Ｂの2者に細分される。

ａ.口縁部に文様帯をもつもので、隆沈線による渦巻文や横位の楕円文から構成される。楕円文の内部には縄文や刺突が充填される。胴部文様については欠損しているため明らかでない。

Ｂ.口縁部から胴部にかけて縦位に連続する文様をもつもので、沈線による縦位の楕円文および「U」状文から構成され、その区画内に縄文が充填される。

Ⅱ類　胴部から口縁部にかけて外傾し口縁部付近がやや内彎するもので、口縁部形態が明瞭なものは大波状を呈する。これは文様構成からａ・Ｂの2者に細分される。

ａ.口縁部から胴部にかけて縦位に連続する文様をもつもので、隆線による渦巻文や楕円文と隆沈線による「∩」状文から構成されている。「∩」状文の内部には縄文が充填される。

Ｂ.口縁部が段によって胴部と区画され無文帯となるものである。文様は胴部にあり、幅の

広い沈線によって「∩」状文が施され、その一部は反転する。また一部口縁直下に隆線による渦巻文が添加される。

Ⅲ類　胴部が丸味をもって立ち上がり、胴上位でくびれ、口縁部が外傾するもので、文様構成からａ・Ｂの2者に細分される。

ａ.口縁部が横位の沈線によって区画され、無文帯となるものである。文様は胴部にあって幅の広い沈線によって施されており、大波状沈線と縦位楕円文が組み合ったもの（イ）や円文をはさんだ形の「U」状文（ロ）などが表わされている。楕円文や「U」状文の内部には縄文が、円文の内部には刺突がそれぞれ充填される。これらはＢに比較すると、口径に対して器高が低い傾向がうかがえる。

Ｂ.いずれも口縁部から胴部にかけて沈線による文様が施されるもので、沈線は幅の広いものが大半を占める。文様には「C」字、「U」字、「S」字状文等が組み合ったもの（イ）や波状文のもの（ロ）、波状文と「⊃」状文が組み合ったもの（ハ）などがある。波状文としたもののなかには第9図1のように波状の一部が変形したと推定されるものもある。各々区画された文様内には縄文が充填される。

Ⅰ～Ⅲ類の他に胴部が開きぎみに外傾し、口縁部が内彎するものがある。器形から浅鉢の可能性もあるが胴下半を欠いているため明確ではない。文様は沈線によって施され、逆三角形を対称に「C」字状文が向い合う構成になっている。文様内部には縄文が充填される。

Ｂ.地文のみのもの

いずれも破片資料のため器形は明確でない。口縁部形態について内彎・外傾・直立の3形態がみられ、内彎・外傾のものでは口縁部が無文帯となる場合が多い。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＲＬＲ縄文やＲ撚糸・条線文等がある。

＜袖珍土器＞

袖珍土器は4点あり、器形が判明するものでは深鉢と台付鉢がある。深鉢には胴部が直立し口縁部が短く外反するもの（第12図22）と胴上位がくびれ口縁部が外傾するもの（第26図8）がある。文様はともに沈線によって施され、明確な第26図8では「U」字状文になる。台付鉢（第5図）は台部が「ハ」字状に短く開き、胴部から口縁部にかけて内彎ぎみに立ち上がるもので、胴部に沈線による「∂」状の文様が施される。他に胴部破片で沈線による渦巻状の文様が施されるものがある。(第12図23)。

土器の共伴と編年的位置付け

遺跡の北部において出土した縄文土器は深鉢の文様をもつもの（A）を中心に9類された。これを出土状況からみると以下の表のようになり、そのいくつかは第8号住居跡において共伴関係にあることが指摘される。

すなわち同住居跡炉埋設土器$AIII_{a\text{ロ}}$、$AIII_{a\text{ロ}}$、2号炉埋設土器$AIII_{B\text{イ}}$、同炉底面出土の（浅鉢）、底面出土の$AIII_{B\text{ロ}}$かなるもので、厳密に1号炉、2号炉・床面といった検出状況の違いから多少の時間差も想定されるが、概ね住居が機能した一定期間内に共存したものとして、時間的に限定された一群として把握することができるものである。

ところで、重複関係から第8号住居跡より古いものとされる大7号住居跡の土器について若干ふれてみると、同住居跡からは炉埋設土器AIIIB類が出土している。口縁部が失われていることからすれば、若干の時間差はあるもののそう大きく異ならないものと推定される。したがって土器に変化をきたさない程度のものという点からこれを第8号住居跡出土土器群に含めて考えておきたい。

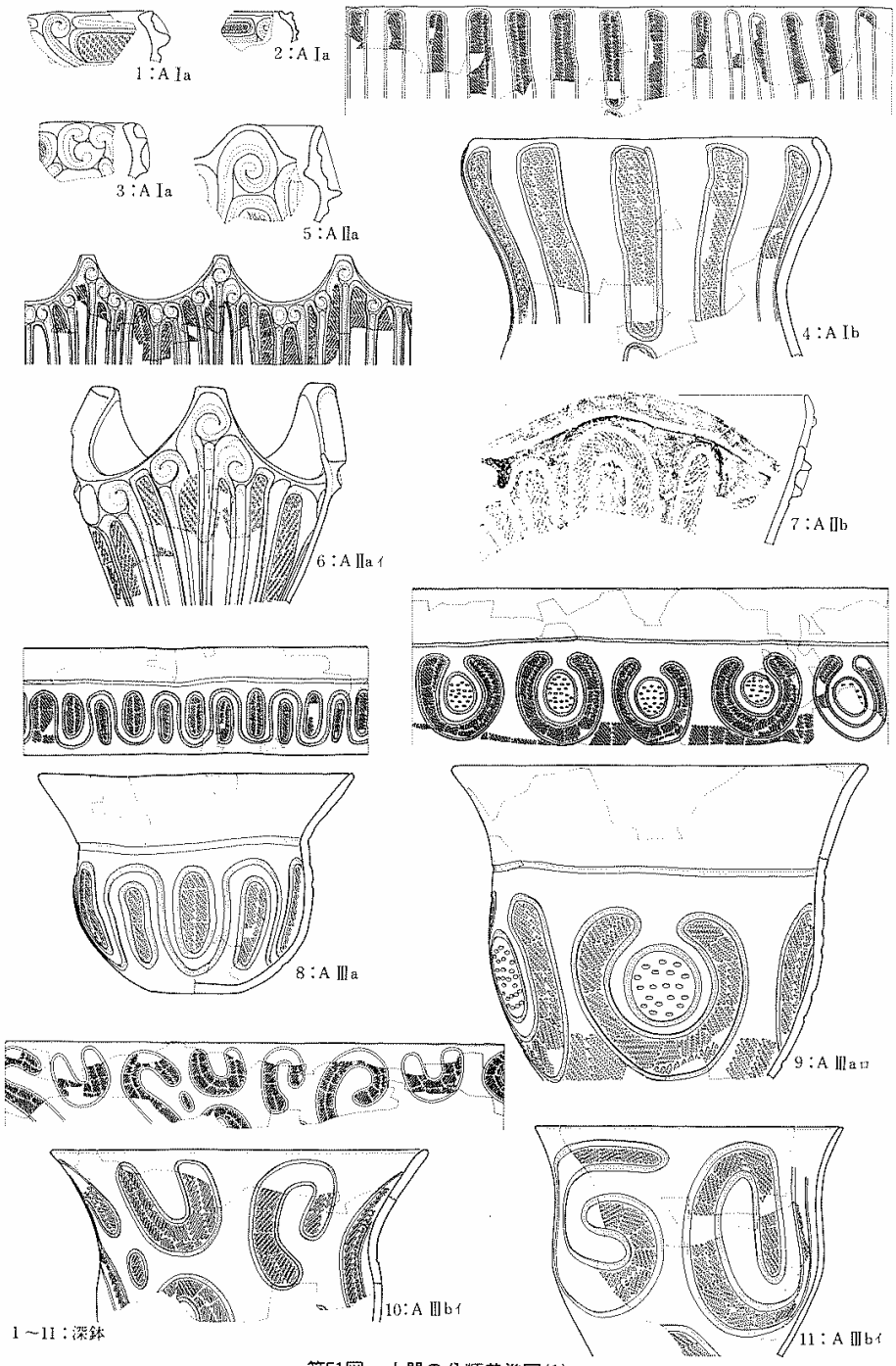
この他、単独で出土した類としてＡＩａ・ＡIIａ・AIIIBハがある。このうちAIIIＢｈｓについて器形・文様からみて上記の土器群との間に共通性が認められることから、ほぼ同一群に含まれる可能性が強い。

7 住	炉-AⅢb・埋(AⅢbイ)
8 住	1号炉-AⅢaイ・AⅢaロ・2号炉-AⅢbイ・浅鉢、床-AⅢbロ・埋(AⅠa・AⅡa・AⅢbイ・AⅢbロ)
1 埋 設	AⅠb
4 埋 設	AⅢbハ
堆 積 層	(AⅠa・AⅡa・AⅡb・AⅢb)

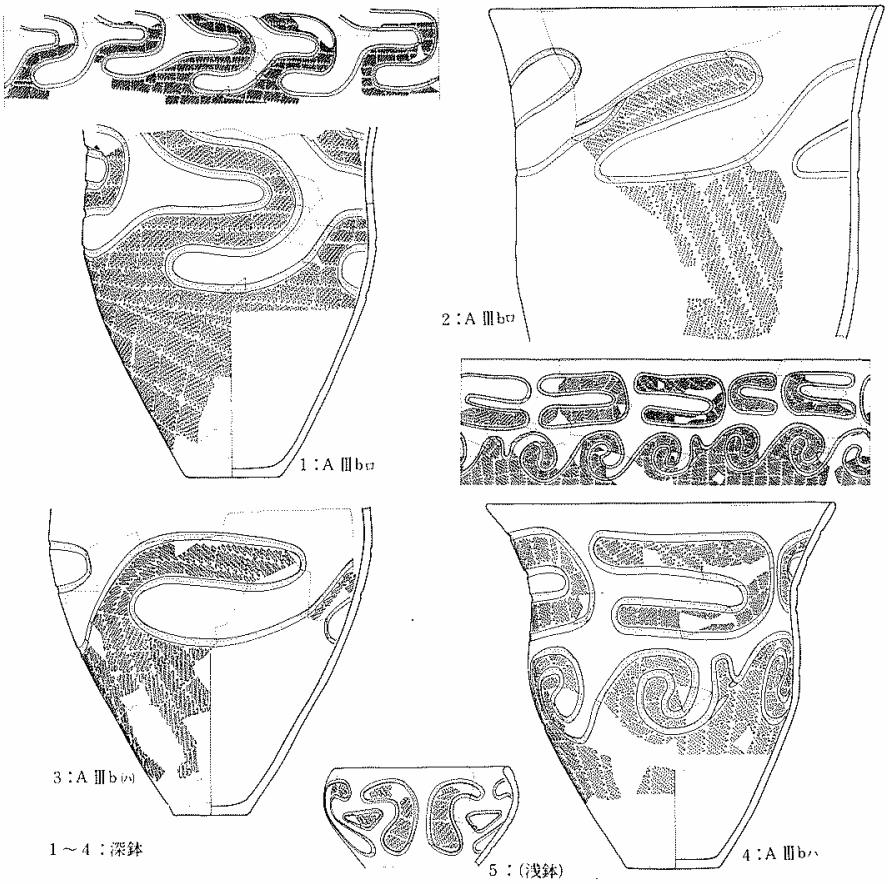
（ ）は遺構に伴わないもの

これらの編年的位置について検討してみると、まず第8号住居跡でまとまりをもつ土器群は深鉢では器形的には胴部上位でくびれ口縁部が外傾し、文様は「S」字状文・「U」字状文・波状文等から構成されるもので、このような特徴をもつものは刈田郡蔵王町二屋敷遺跡（加藤・阿部小徳：1984）、石巻市南境貝塚（後藤：1968、伊東他：1981）等において類例がみられ、縄文時代中期大木10式のなかの第Ⅰ段階（丹羽：1981）に位置つけることができる。

つぎに上記の群と組み合わない単独の類についてみると、ＡＩａ・ＡＩＢは胴部上位でくびれ口縁部が内彎するいわゆるキャリパー形を呈し、ＡIIａ・ＡIIＢは胴部から口縁部にかけて外傾する大波状口縁のもので、文様はいずれも渦巻文や楕円文・「∩」状文等でなど構成される。このような特徴は黒川郡大衡村上深沢遺跡（宮教委：1978）、南境貝塚（前掲）等に類例があり、縄文時代中期大木9式に比定されるものである。ただし、同型式については近年、器形や文様的特



第51図　土器の分類基準図(1)



土器の分類基準

深鉢A　文様をもつもの

- Ⅰ．胴部上位でくびれ口縁部内彎
  - a．口縁部に文様帯をもつもの ―― 渦巻文・横位楕円文
  - b．口縁～胴部に連続する文様をもつもの ―― 縦位楕円文「∩」状文
- Ⅱ．胴部～口縁部が外傾口縁端内彎
  - a．口縁～胴部に連続する文様をもつもの ―― 渦巻文・楕円文・「∩」状文
  - b．口縁部無文帯、胴部に文様をもつもの ―― 渦巻文、「∩」状文
- Ⅲ．胴部上位でくびれ口縁部外傾
  - a．口縁部無文帯、胴部に文様をもつもの ―― イ．大波状沈線＋縦位楕円文、ロ．「U」状文
  - b．口縁部～胴部に文様をもつもの
    - イ．「S」、「C」字状文
    - ロ．波状文
    - ハ．波状文＋「⊃」状文

深鉢B　地文のみのもの

(浅鉢)　胴部外傾・口縁部内彎 ― 逆三角文、「C」字状文

第52図　土器の分類基準図(2)

徴から細分が試みられており(林：1966、丹羽：前掲)、こうした観点を考慮すればキャリパー形を呈し口縁部文様帯をもつＡＩａおよび隆線による渦巻文様が多く施されるＡⅡａ類は大木9式でも古い様相がうかがえ、単調な「∩」状文や楕円文からなるＡＩＢ類はより後出的なものと考えられる。

地文のみの深鉢Ｂ類については、第7･8号住居跡で共伴関係にあるもの以外はいずれも時期を限定できるものであるが、出土地点からみて深鉢Ａ類と関連性が強く大木9～10式第段階のものとしておきたい。

袖珍土器も上記の理由から同様の年代幅におさまるものと思われるもので、このなかでは第5図および第26図はその文様直的特徴から大木10式第Ⅰ段階に限定しうるものと推定される。

第8号住居跡出土土器群について

第8号住居跡においてまとまりをもつとした土器群は前述したように、その特徴から大木10式第Ⅰ段階に位置づけることができる。次にこれらの土器群の住居内における検出状況から生ずる若干の問題点にふれてみたい。

まず、土器群の内容については器形的には器高が高いものと低いものとの違いはあるものの、胴部上位でくびれ口部が外傾する深鉢が主体を占める点はほぼ共通している。しかし文様については大波状沈線と縦位楕円文が組み合う$AIII_{a イ}$、「Ｕ」状文の$AIII_{aB}$、「Ｓ」字、「Ｃ」字等からなるアルファベット状文の$AIII_{B イ}$、波状文系の$AIII_{BB}$があり、ややバラエティが認められる。

これを出土状況からみると$AIII_{a イ}$・$AIII_{aB}$は1号炉埋設、$AIII_{B イ}$は2号炉埋設、$AIII_{BB}$は床面出土となり、それぞれ検出状況が異っている。このうち5楕円文様である1号炉の$AIII_{a イ}$と波状文系である床面出土の$AIII_{B ロ}$との関係に着目した場合、1号炉＝住居構築時、床面＝住居廃棄時といった関係が想定されることから、楕円文様の$AIII_{a イ}$がやや古いものとも考えられるが、一方で、すでに述べたように1号炉より古いことが明らかな第7号住居跡の炉埋設の土器が波状文系であることからすれば、縦位楕円文および波状文の両者はやはり一定期間内に組み合わせをもつものとみるべきであろう。

また「Ｓ」字「Ｃ」字状文様である2号炉の$AIII_{B イ}$と1号炉の$AIII_{a イ}$との関係にしても、他遺跡である二屋敷遺跡第4号住居跡において「∩」状文をもつものと「Ｓ」･「Ｃ」字状文のものとが同一炉の埋設土器として共伴している。いわゆる「∩」状文と縦位楕円文はともに先行する大木9式における特徴的な要素であることからすれば、縦位楕円文および「Ｓ」･「Ｃ」字状文の両者の同時性を裏付けるものとみることができる。

以上のことから、縦位楕円文、「Ｓ」･「Ｃ」字状文、波状文系等からなるこれらの土器群は大

木10式としながらも、大木9式の文様要素を一部に残す第I段階の特徴的な様相を示すものとして位置付けられる。

なお県内においてこのような特徴をもつものは二屋敷遺跡、南境貝塚のほかに小牛田町彫堂遺跡（辺見：1970）があり、また県外では福島県塩沢上原遺跡(目黒他：1975他)同県田地ケ岡遺跡(梅宮他：1975)、山形県清水北C遺跡(手塚：1975)、秋田県内村遺跡(畠山：1981)等に出土例がある。これらは胴部上位でくびれ口縁部が外傾する深鉢が多く、いずれも幅の広い沈線によって波状文、「Ｓ」・「Ｃ」字状文等が施されており、器形、文様、文様表現技法は大筋において共通するようである。

この段階はまとまった資料に乏しく、また比較するに充分とはいえないが・文様や文様表現技法等において地域差が認められると指摘される第II段階(丹羽・阿部：1982)とは異なり、地域差のいまだ生じない前段階のあり方を示すものとして把握することが可能である。今後の類例の増加を待ちたい。

遺跡南部の土器

遺跡南部の土器としたものは前述したように第1・3号土壙その周辺から出土した「その他の土器」である。以下年代について検討してみることにする。

第1号土壙から出土したものは細部中央に屈曲部をもち、口縁部にかけてややくびれながら立ち上がる深鉢で、隆線による方形区区画文の内部に蕨手文・ジグザグ文が施されるものである。このような文様をもつものは,二屋敷遺跡・菅生田遺跡等に類例がみられ後期初頭に位置付けられている。第3号土壙出土のものもその特徴から同様の時期のものと思われる。

その他の土器(第27図)のうち1・2は押圧縄文による文様や横位沈線間に交互刺突が施される文様が施されるもので、小梁川遺跡に類例がみられ、中期前葉に位置づけることができる。

3・4は胴部に沈線による文様や盲孔等が施されるもので、第1・3号土壙のものに類似しており同様の時期のものであろう。

5〜9は三叉文・羊歯状文・雲形文等がみられるもので晩期前〜中葉に、10は工字文が施されていることから晩期後葉に位置付けられる。

以上の他に第2号住居跡埋土中から微隆起線文土器（第41図6）が出土している。胎土中に砂粒が多く含まれ、色調は暗褐色を呈するもので、類例としては県内では座散乱木遺跡(石器文化談話会：(1978)のほか、山形県高畠町日向洞穴、一ノ沢岩陰等がある。

2．古代の遺構と遺物

1．土器の分類

古代の土器に土師器坏・嚢・甑・須恵器坏・蓋・長頸壺があり、その多くは第1～6号住居跡から出土したものである。以下分類にあたっては住居内から出土したものを対象に器形の明らかなものを中心に行った。

土師器

〔坏〕いずれも製作にロクロを使用するもので、内面がヘラミガキ・黒色処理されている。これらは浅い皿状のものと、深めな椀状のものとがある。なお底部の切り離し技法が判明するものはすべて回転糸切りによるものである。

A類　浅い皿状の坏である。体部から口縁部にかけてやや内彎ぎみに短く立ち上がるもので底部は大きく口径に対する底径の法量比は1：0.50～0.57である。底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリの再調整が施されるものがある。内面のヘラミガキはすべて体部から口縁部にかけてが横方向、底部は放射状である。

B類　概して深めの坏で椀を呈するものである。これらは体部から口縁部にかけてやや内彎ぎみのもの(Ⅰ)と、強く内彎するもの(Ⅱ)とがある。前者は口径に対する底径比が1：0.40～0.47で、体部下端や底部に回転ヘラケズリや手持ちヘラゲズリの再調整が施されるものがある。後者は1点のみで口径に対する底径比は1：0.52を示し、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリの再調整が施される。両者とも内面のヘラミガキの方向は体部から口縁部にかけて横方向、底部は放射状である。

〔甕〕甕は製作にロクロを使用するものと使用しないものとがある。

A類ロクロ使用のもので長胴形を呈するもの(Ⅰ)と、鉢形もしくは球形を呈するもの(Ⅱ)とがある。前者は体部中央がわずかにふくらみ口縁部が短く外反するもので、口縁端部は丸くおさまるものと下端がつまみ脇され縁帯状になるものとがある。器外面はロクロナデで、体部下半にヘラケズリが加えられるものがあり、内面はロクロ調整が主であるが刷毛目が施されるものもある。後者は体部が丸味をもって外傾し口縁部が短く外傾するもので、頸部がわずかにくびれるものがある。器外面はいずれもロクロナデののち体部下半にヘラケズリが加えられるのに対し、内面はロクロナデのものや回転刷毛目のもの、ヘラミガキ・黒色処理のものの3種がある。

B類　製作にロクロを使用しないもので、1点のみ出土している。小形の鉢形を呈するもので、器形はAⅡ類に似る。器面は内外面とも口縁部がヨコナデ、体部が刷毛目調整されている。

〔甑〕いずれも製作にロクロを使用しない無底式のものである。厚手でやや胴張りの強い長胴

形を呈しており、口縁部は短く外傾する。器面は外面に雑なナデが施され、体部下半にヘラケズリが加えられ、内面は刺毛目調整が主で底部付近はヘラケズリが施されている。

須恵器

〔坏〕底部の切り離しがヘラ切りによるものと回転糸切りによるものとがある。

A類　ヘラ切りのもので、浅い皿状のもの(Ⅰ)と椀状のもの(Ⅱ)とがある。いずれも体部から口縁部にかけてわずかに内彎しながら立ち上がるもので、口径に対する底径比は1：0.47である。内外面ともロクロ調整で再調整はない。

B類　回転糸切りのもので、皿状のもの(Ⅰ)と椀状のもの(Ⅱ)とがある。いずれも体部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がるもので、口径に対する底径比は皿状のものが1：0.48椀状のものが1：0.42である。内外面ともロクロ調整で再調整はない。

〔蓋〕2点あるがいずれもつまみ部を欠く。ともに端部が下方に折れ曲がるもので、一方はそれが直線的なのに対し他方は外反ぎみである。

〔長頸壺〕2点あるがともに頸部の破片で全体形は不明である。

2．土器の年代

以上各住居跡出土の土器についてその特徴を述べた。これらのうち量的に主体を占める土師器坏および甕A類にあってはいずれも製作にロクロを使用していることから、いわゆる表杉ノ入式(氏家：1957)に比定されるものであり、甑・須恵器坏についても第1表に示すように、住居跡の床等においてこれらと共伴していることから同一時期とみることができる。この他住居内堆積土から出土したもののうち土師器甕B類は、隣接する小梁川遺跡(新庄屋：本書収録)において表杉ノ入式の土師器と共伴しており、時期的に大きく異らないものであろう。

ところで表杉ノ入式上土器いては近年土師器坏を中心に細分の可能性が指摘されているが(阿部：1968、桑原：1969、小笠原：1976他)、こうしたなかで本遺跡の土器がどのような位置づけがなされるのか若干検討してみたい。

土師器坏が比較的まとまって出土しているのは第3号住居跡においてである。主な特徴をまとめると、器形は浅い皿状のもの(A類)と椀状のもの（B類）とがあり、椀状のものは内彎の度合いが弱いもの（Ⅰ）と強いもの(Ⅰ)とがある。法量からみると、口径に対する底径の比率がA類では1：0.53、B類では1：0.47～0.52の値を示しておりかなり安定感がある。器面調整は外面ではロクロナデが主で、底部から体部下端にかけ手持ちヘラケズリの再調整が施されるものと、底部に回転糸切り痕を残し全く再調整が施されないものとがある。内面のヘラミガキはいずれも口縁部から体部にかけては横方向、底部においては放射状となっている。

このような土師器坏や器面調整などのあり方は宮城県南部においては表杉ノ入式でも比較的古い段階に位置づけられる白石市青木遺跡第21号住居跡出土土器（小川：1980）や刈田蔵王町東山遺跡土器溜出土器群(真山：1981)のなかに類例を見い出すことができる。

ただしこの両遺跡については主に法量比から若干の時期差があり、青木遺跡が先行すると指摘されている(丹羽：1983)が、本遺跡の場合は資料の個体数が少ないこともあって、詳細な検討はできなカッター。したがって実年代についてはやや幅があるが東山遺跡の時期を下限とし、さらにやや遡る可能性のあることを考慮して9世紀前葉～中葉に比定しておきたい。

他の住居跡の土師器坏についてはその数が乏しいため、十分な比較検討はできないが、大まかにみれば上記の特徴とさして異るものではなく、第2・4・5号住居跡出土の底径/口径が0.50～0.57を示す安定感のある皿状の坏(A類)は、すでに述べた第3号住居跡出土のもの(A類)と器形的にはかなり共通性を感じさせる。また第6号住居跡から出土した体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される埦形の坏（BⅠ類）は東山・青木両遺跡において特徴的なものであることから、これら第2・4～6号住居跡出土の土器は、第3号住居跡出土のものと年代的に大きく違わない一群とみて大過ないものと思われる。第1号住居跡出土の埦形の坏にしても、体部の内彎の度合いが弱い器形(BⅠ類)は第3号住居跡において共伴しており、やはりこれらの群に包括されるものであろう。

	分類			1住	2住	3住	4住	5住	6住
土師器	坏	A			1	1	1	1	
		B	Ⅰ	(1)		2		1	1
			Ⅱ			1			
	甕	A	Ⅰ		2	1			1
			Ⅱ		1			1	1
		B							(1)
	甑								4
須恵器	坏	A		1				1	
		B			(1)		1		
	蓋							(2)	
	壺				(1)		1		

第１表　土器の出土状況

（ ）は堆積土出土

3. 竪穴住居跡

古代の住居跡は6軒検出されている。このうち第1～4号および第6号住居跡は遺跡の南寄りに位置し、小梁川に面した低位の段丘上にあって、各々10m前後の間隔で散在し一つのまとまりを構成している。一方第5号住居跡はこれらの住居跡群から150mほど北に離れた高位の段丘に単独で存在している。各住居跡の年代はすでに述べた伴出土器からいずれも9世紀前葉

～中葉という比較的限定された時間幅のなかにあると推定されるものである。以下、住居跡における規模や形態等の特徴について概括してみる。

平面形はいずれも方形を基調としており、規模は一辺が4.5m前後に集中するが、なかには5.5m～6.0m前後のものもみられる。住居の方向は長短いずれか軸が北より15～50°東に偏れた範囲にあり、方向にばらつきがある。住居跡の立地する付近はほぼ平坦で、少なくとも微地形には影響を受けえないなかでのこのようなばらつきは、同時期の青木遺跡や家老内遺跡（佐藤：1972、真山：1981）における一定した北指向の傾向と比較するとかなり異った現象といえる。

柱穴はその掘り方が明確なものは3軒あるが、その配置は住居によって必ずしも規則的とはいえない。まず、柱穴を4個有するものとしては第4･5号住居跡がある。その配置は第4号住居跡が4個とも住居の対角線上にあるのに対し、第5号住居跡は北側の一対のみが対角線上にあり、南側の一対は南壁に掘り込まれた状態で片寄っている。また第6号住居跡は規模の小さい12個の柱穴が総柱状に並んでいるが、このような配置は他にあまり類をみないものである。同住居跡ではほぼ中央から4個体の甑を伴った石囲いの炉が検出されている。

カマドはいずれの住居跡からも検出されている。計6軒のうち東壁に付設されるものが4軒、南壁に付設されるものが2軒あり、やや東壁に集中する傾向がみられる。ただし第3号住居跡では2基のうち1基は西壁にあるが、これはつくりかえたカマドであり、古くは2号カマドが示すように南壁に位置していたものである。各カマドとも壁の中央ではなくやや辺端寄りに位置するのが特徴である。カマドの構造は燃焼部と煙道部からなるもので、燃焼部の構築方法はいずれも粘土を素材としてつくられており、なかには河原石を芯として使用しているのが認められる。煙道部は長さが約1m、幅が30～40㎝前後のものが多く、低面は先端部へ向けてゆるやか立ち上がるものと平坦なものとがあり、前者が多い。また平坦なものは先端部に煙り出しピットが穿たれている。

貯蔵穴状ピットは第1～3･4号住居跡においてみられるもので、その特徴は各住居跡においてほぼ共通している。すなわちいずれも住居の隅にあってカマドの脇に位置しており、平面形態は径70～90㎝の円形を基調としたもので、深さは10～20㎝と浅く皿状を呈する。ピット内の堆積土は焼土、木炭を多量に含み、底面からは主に土師器坏が出土している。

以上が本遺跡における住居跡の主な特徴である。これを他の遺跡と比較した場合、平面形･規模･内部施設においては大きく異るものではなく、むしろ表杉ノ入式期における一般的な特徴といえる。ただし相違する点もみられ、すでに指摘したように宮城県南部の遺跡である青木遺跡や家老内遺跡のほか宮前遺跡においては住居の方向に一定の統一性がみられるのに対し、本遺跡の場合は必ずしも規則的とはいえない点は注目される。また第6号住居跡における石囲いの炉や柱穴のあり方は特異といえる。石囲いの炉については青木遺跡第1号住居跡に発見例

があるものの、柱穴の配置はあまり類をみない。その構造や機能については不明であるが、炉との関係において何か特別な性格を想定させるもので、今後の検討を要する問題といえよう。

4. その他の遺構

掘立柱建物跡は2間(3.6m)X3間(5.4m)の規模を有するもので、柱穴は規模が小さく深さも浅い。その年代や性格については明確ではないが、第5号住居跡の北隣りに位置し、棟方向が同住居跡にほぼ一致するもので、さらに付近からロクロ使用の土師器坏(ＢＩ類)が出土していることから住居跡に組み合った施設の可能性が強く、あるいは倉庫のような性格も考えられる。

竪穴遺構は平面が方形を基調としているもので、3.0×3.2mの規模を有する。堆積土中からは表杉ノ入式の土師器が出土している。これは平面形や床が比較的平坦であることから住居跡の可能性も考えられるが、カマドや柱穴がなく性格は不明である。

土壙は4基検出されている。平面は円形や楕円形を基調としており、年代はいずれも出土土器から表杉ノ入式に位置づけられるものである。

	平面形	規模(m)	軸方向	柱穴	カマド				貯蔵穴状ピット
					付設位置	構築素材	煙道(cm)	軸方向	
1住	方形	4.6×4.7	N-40°-E	不明	1号東壁南寄り	不明	48×20	E-40°-S	1号カマド右
					2号東壁北寄り	粘土		E-40°-S	
2住	長方形	4.1×4.8	N-40°-E	不明	東壁東寄り	石十粘土	90×30	E-40°-S	カマド左
3住	方形	4.4×4.4	N-50°-E	不明	1号西壁南寄り	石十粘土		W-40°-S	2号カマド右
					2号南壁西寄り	粘土	x×30	S-40°-E	
4住	長方形	4.2×4.8	N-20°-E	主柱-4個	南壁東寄り	固十粘土	120×40	S-20°-W	無
5住	長方形	6.2×x	N-20°-E	主柱-4個	東壁南寄り	粘土	100×44	E-20°-S	カマド右
6住	長方形	5.3×5.6	N-15°-E	12個	東壁北寄り	粘土		E-15°-S	無

第2表　竪穴住居跡

V まとめ

1.小梁川遺跡は小梁川左岸の河岸段丘に立地する

2.縄文時代の遺構として中期末葉の竪穴住居跡2軒、後葉～末葉の埋設土器遺構に4基および後期初頭の土壙2基が検出されている。遺物として上記の遺構に伴う土器が多量に出土したほか、微隆起線文土器、中期前葉の土器、晩期の土器が若干出土している。また土器以外では土偶、円盤状土製品、石鏃、石匙、磨製石斧、磨石、凹石等が出土しており、多くは中期後～末葉の遺構の付近から出土したもので、それらについてはほぼ同様の時期に位置付けられるものと推定される。

3.平安時代の遺構としては竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1軒、土壙4基が検出され、土師器、須恵器等の遺物が堆積している。住居跡はその出土遺物から平安時代のなかでも9世紀前葉～中葉に位置付けられ、その他の遺構もほぼ同時のものと考えられた。

引用・参考文献

阿部　義平（1968）：「東国の土師器と須恵器」帝塚山考古学Ⅰ

阿部博志・千葉宗久（1980）：「台の山遺跡」宮城県文化財調査報告書第65集

伊東信雄他（1981）：「宮城県史」第34巻

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯

梅宮　茂他（1975）：「田地ヶ岡遺跡」福島県文化財調査報告書第47集

小笠原好彦（1976）：「東北地方における平安時代の土器について二・三の考察」
東北考古学の諸問題

小川　淳一（1980）：「青木遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集

加藤道男・阿部博志・小徳晶（1984）：「二屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第99集

楠本　政助（1973）：「第1編一先史」矢本町史第1巻

桑原　滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」歴史第39輯

後藤　勝彦（1968）：「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報（南塚貝塚）」宮城県文化財調査報告書第15集

佐藤　庄一（1972）：「家老内遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集

新庄屋元晴（1982）：「小梁川遺跡」宮城県文化財調査報告書第90集

石器文化談話会（1978）：「座散乱木遺跡」

手塚　孝　（1976）：「清水北C遺跡」米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書第2集

丹羽　茂　（1983）：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集

丹羽　茂　（1981）：「大木式土器」縄文文化の研究第4巻

丹羽茂・阿部博志・小野寺祥一郎（1982）：「菅生田遺跡」宮城県文化財調査報告書第92集

林　謙作　（1965）：「縄文文化の発展と地域性ー東北」日本の考古学Ⅱ

林　謙作　（1966）：「第1地点縄文時代集落の調査（星野遺跡）栃木県星野遺跡第1次調査報告」

畠山　憲司（1981）：「内村遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第82集

藤沼　邦彦（1972）：「青木脇・青木後遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集

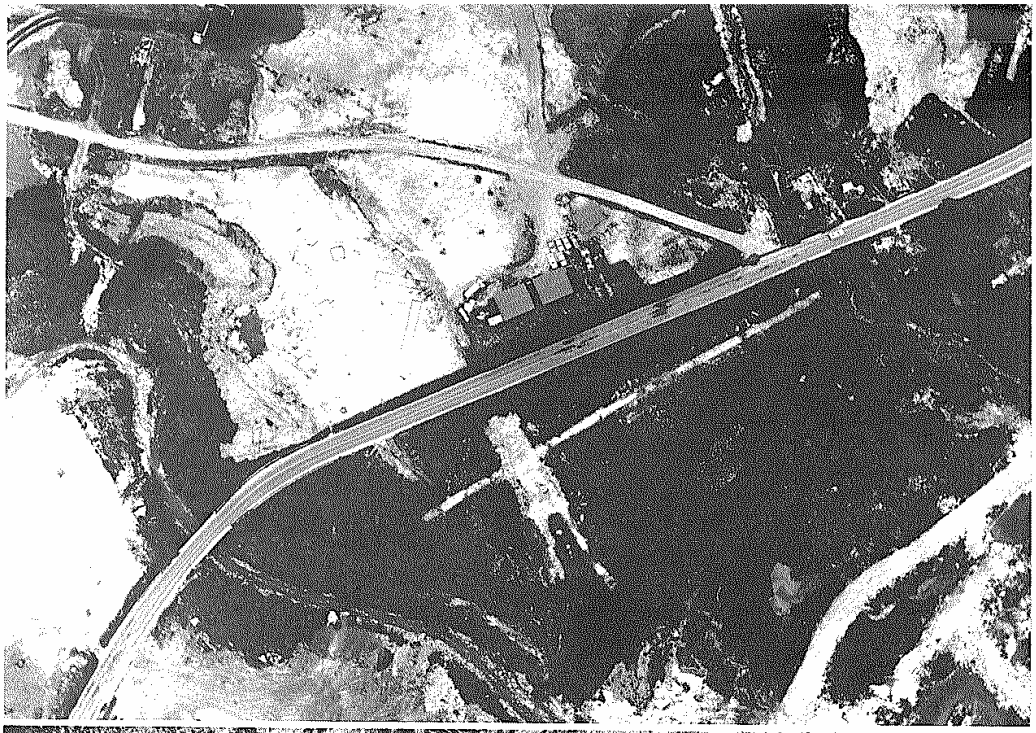
辺見　鞆高（1976）：「第1編ー原始・古代」小牛田町史上巻

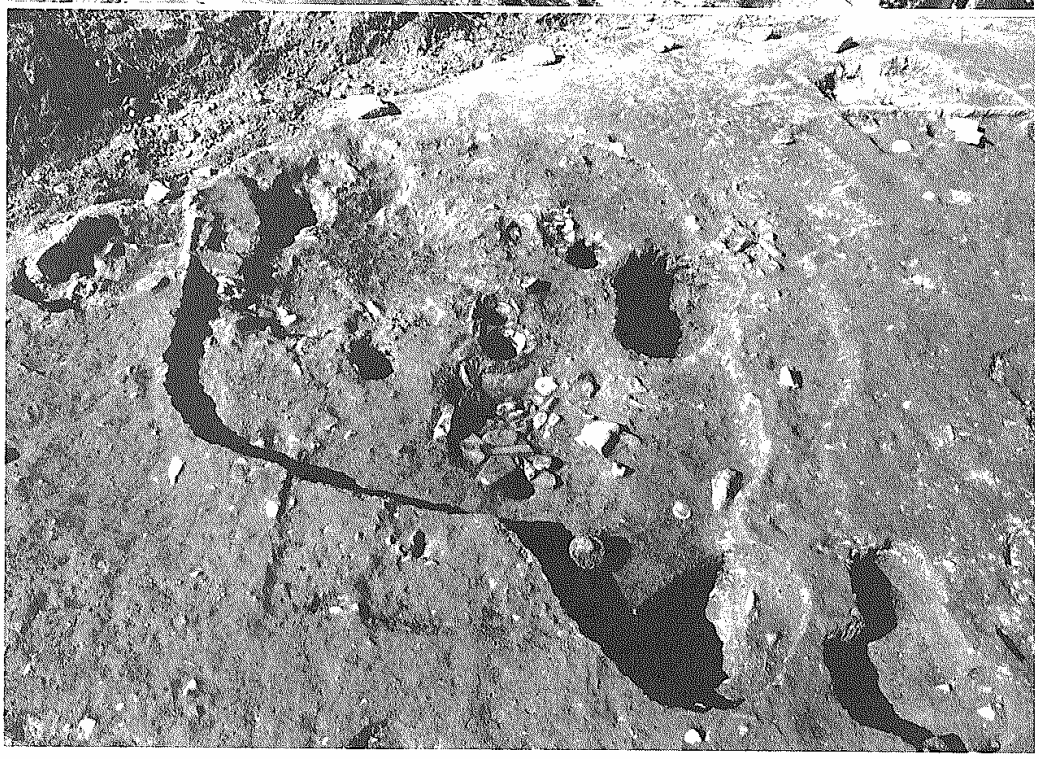
真山　悟　（1981）：「家老内遺跡」宮城県文化財調査報告書第81集

宮城県教育委員会（1978）：「上深沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第52集

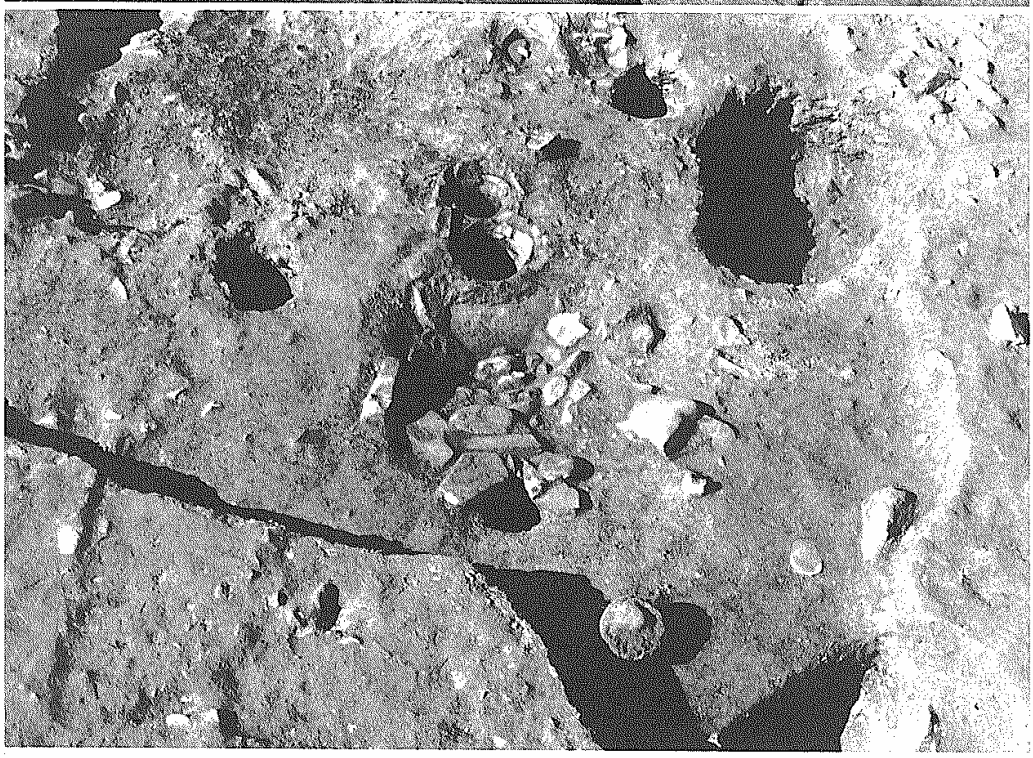
目黒吉明他（1975）：「塩沢上原A遺跡」福島県文化財調査報告書第47集

図　　版

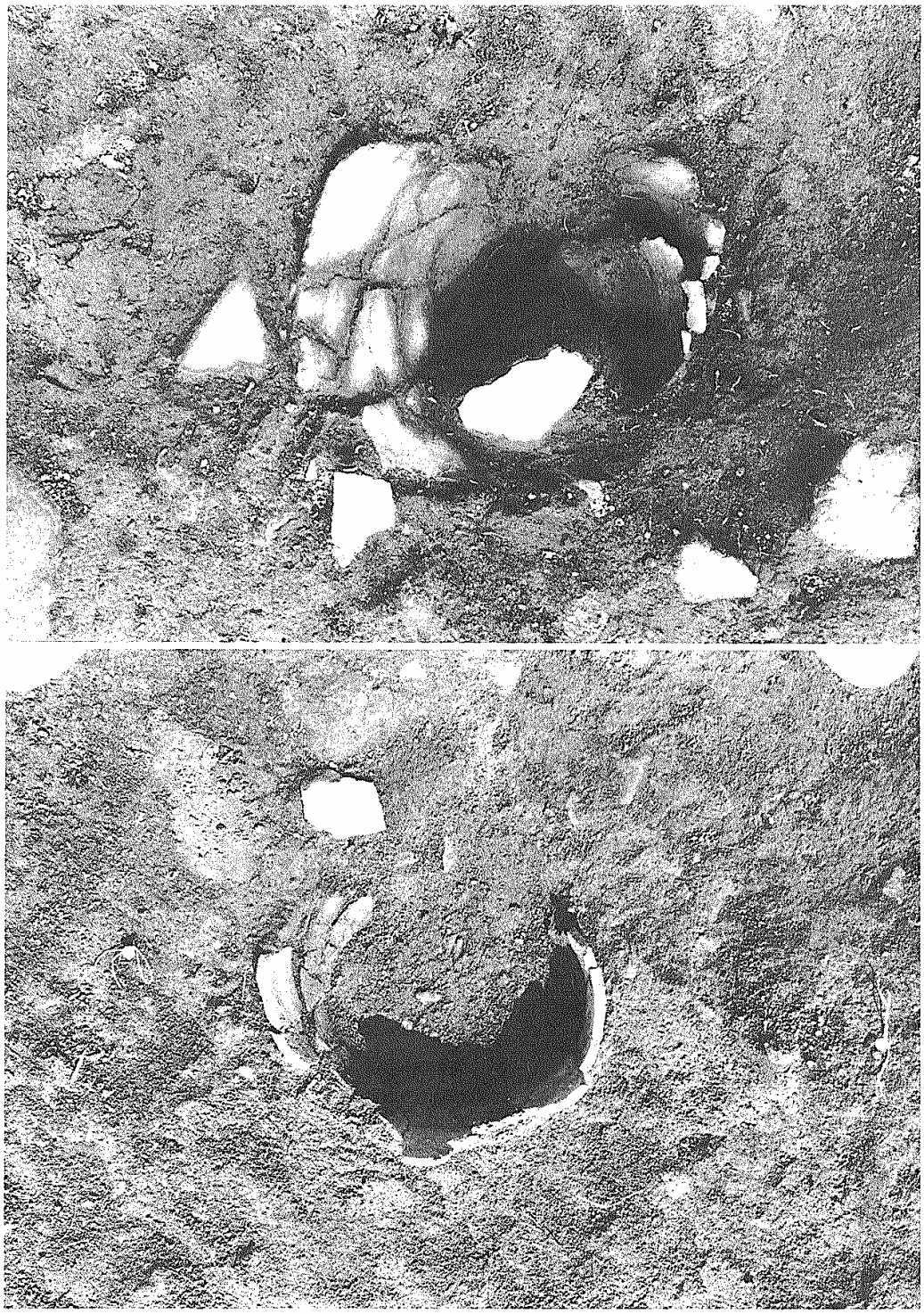




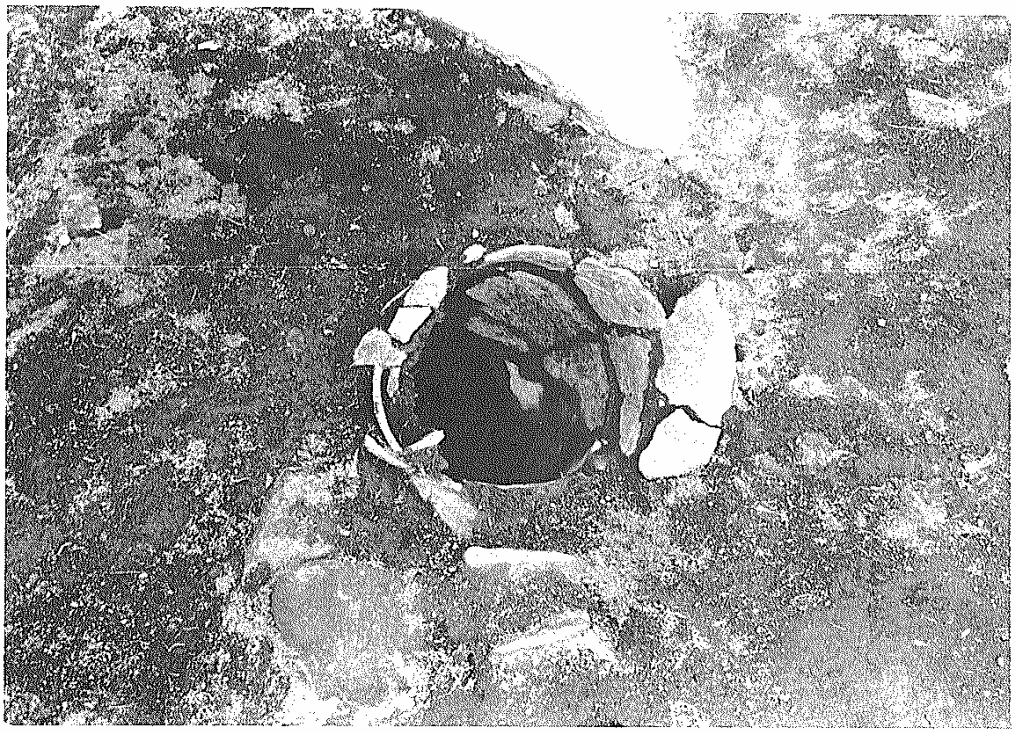
縄文時代　図版１　　上：遺跡空中写真　　下：第７・８号住居跡

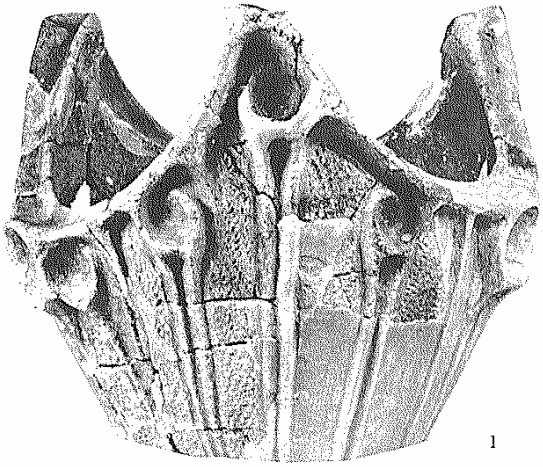


図版２　上：第７号住居跡炉　下：第８号住居跡１号炉

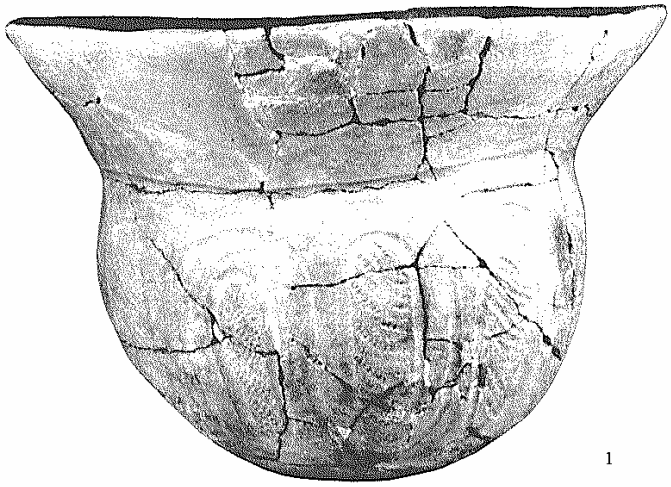


図版３　上：第２号埋設土器遺構　下：第３号埋設土器遺構

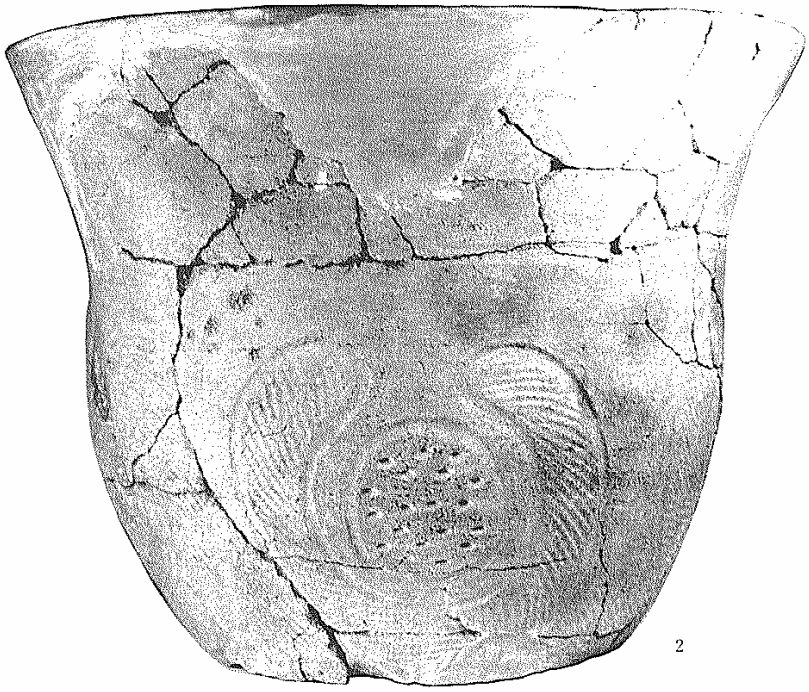




図版４　　上：第４号埋設土器遺構　　下：縄文土器

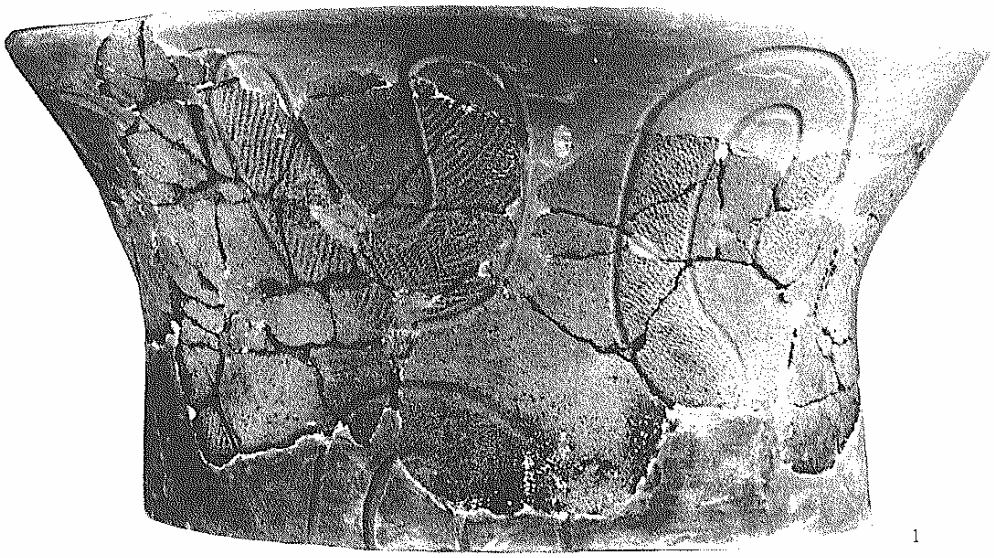


1

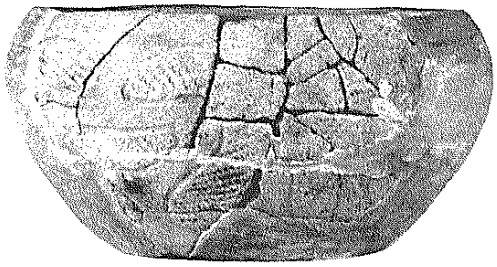


2

図版５　縄文土器

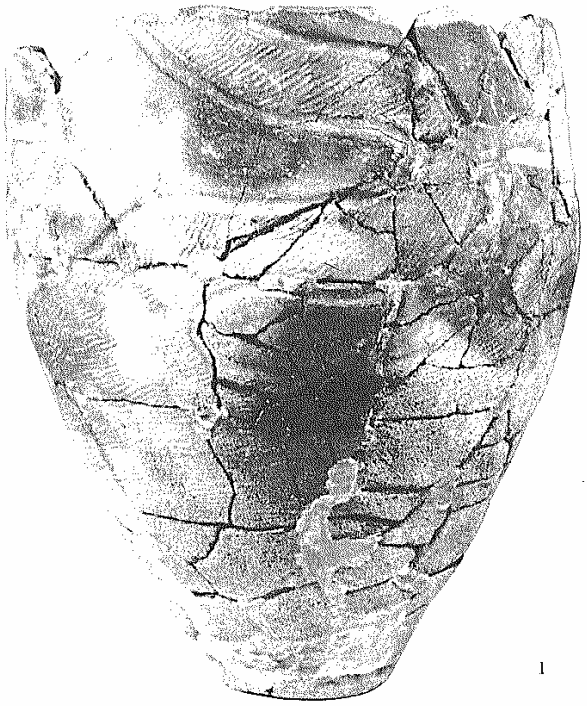


1



2

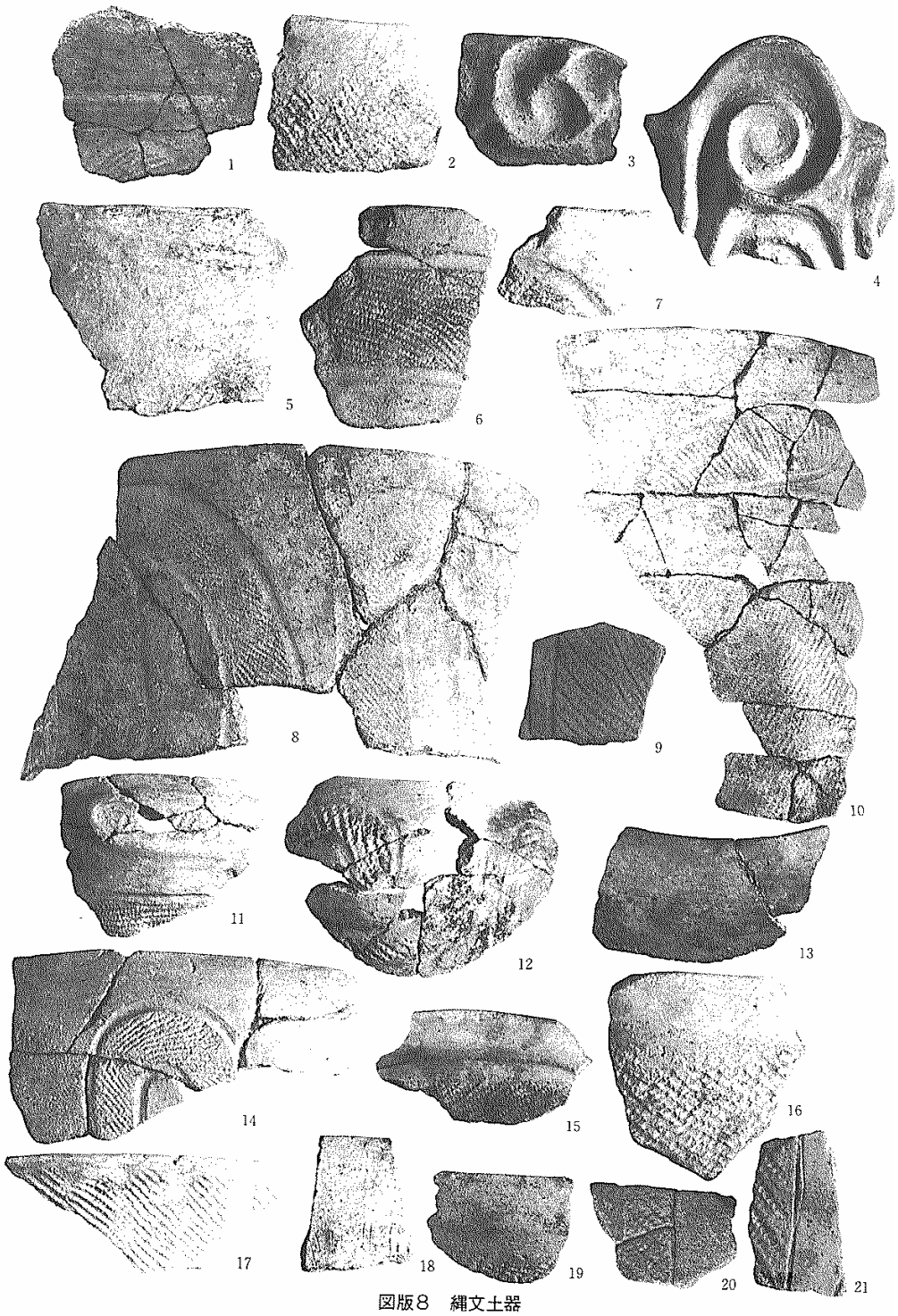
図版６　縄文土器



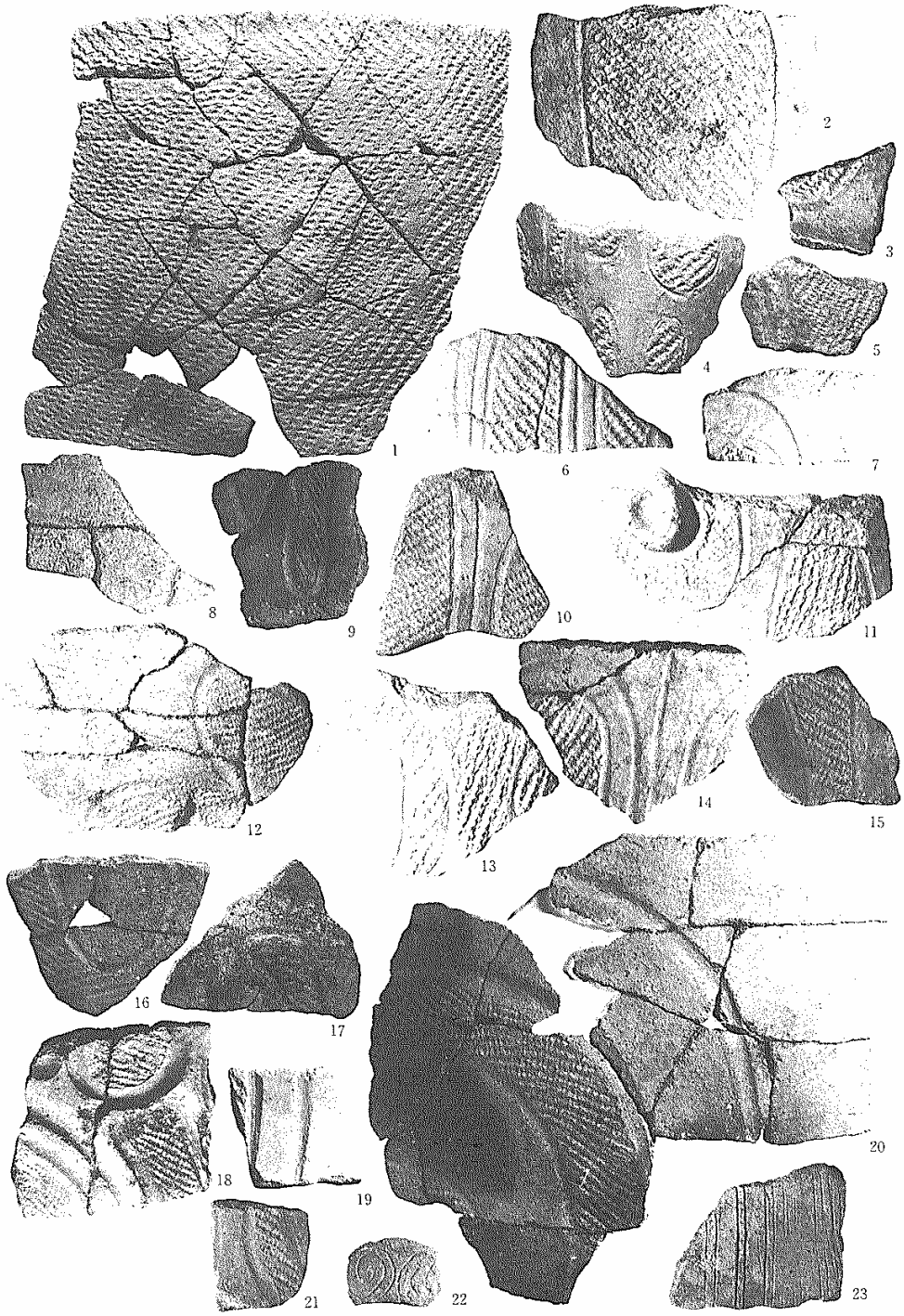
1

2

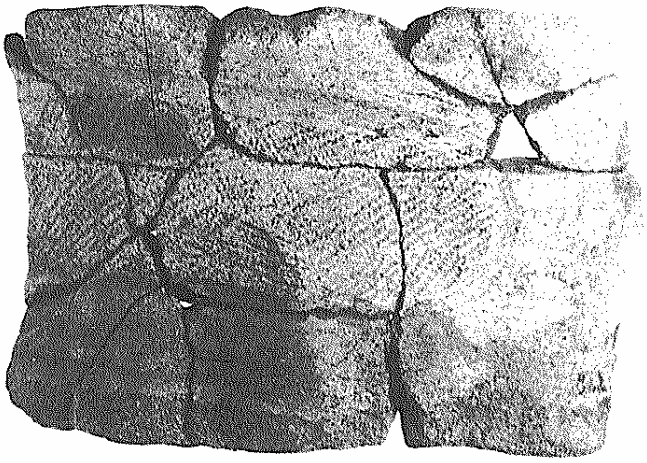
図版７　縄文土器



図版8　縄文土器



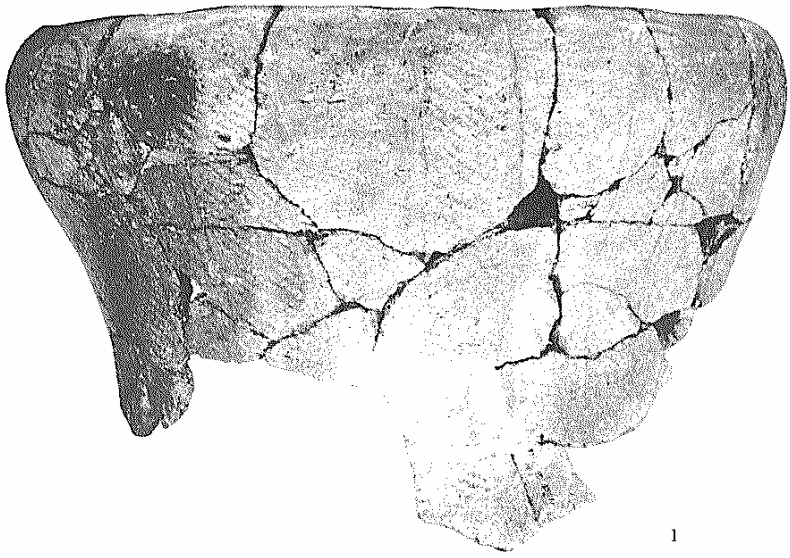
図版９　縄文土器



1

2

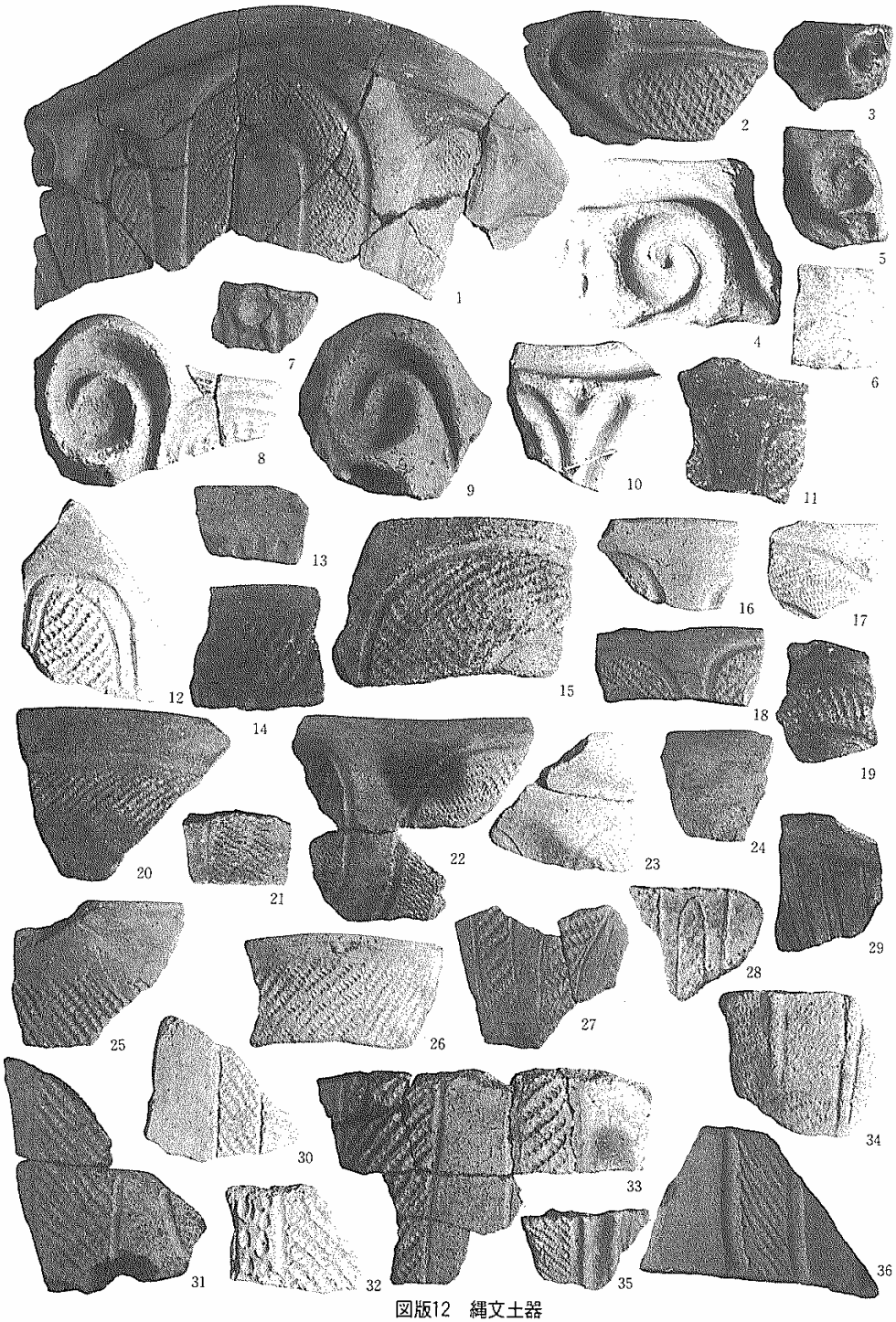
図版10　縄文土器



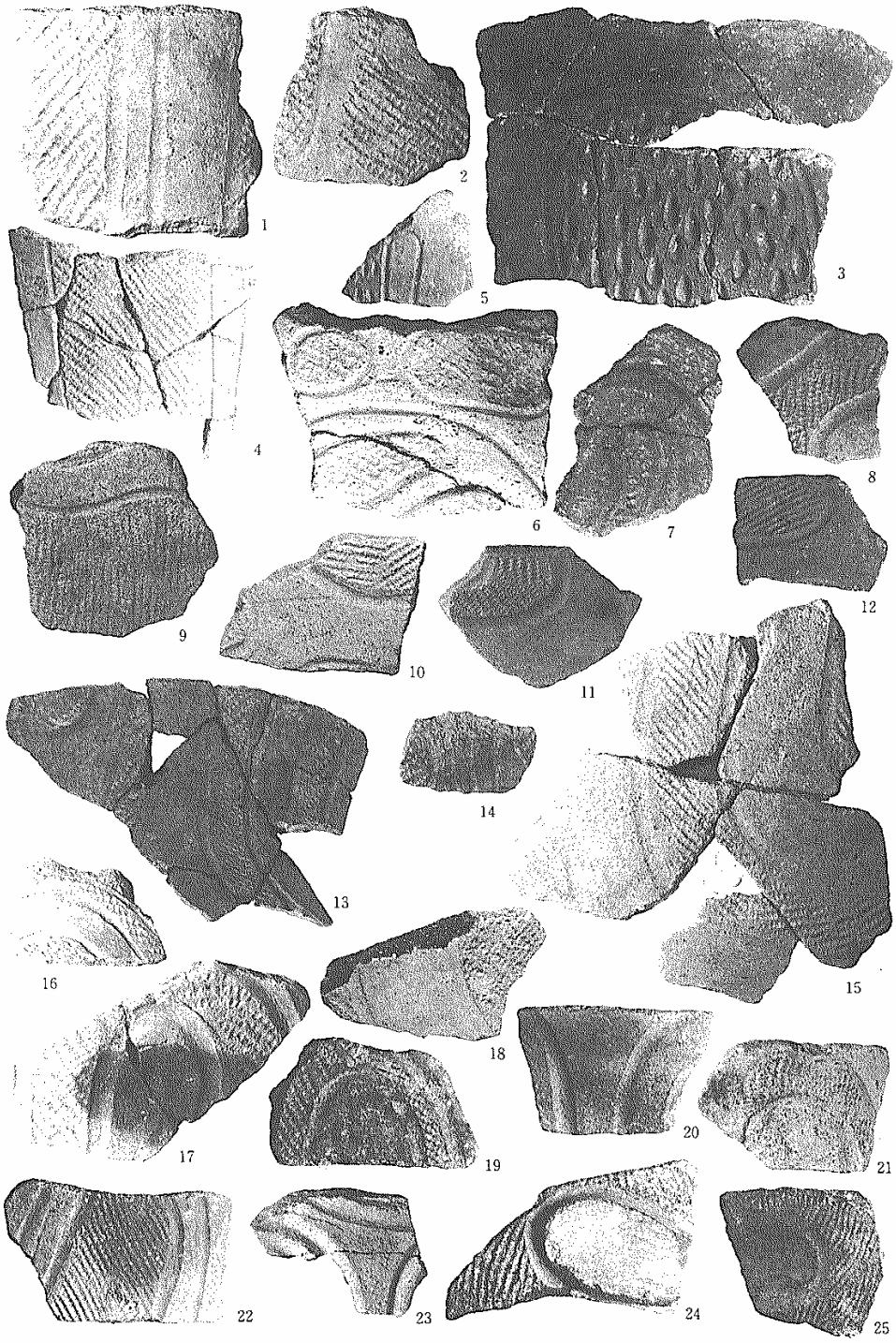
1

2

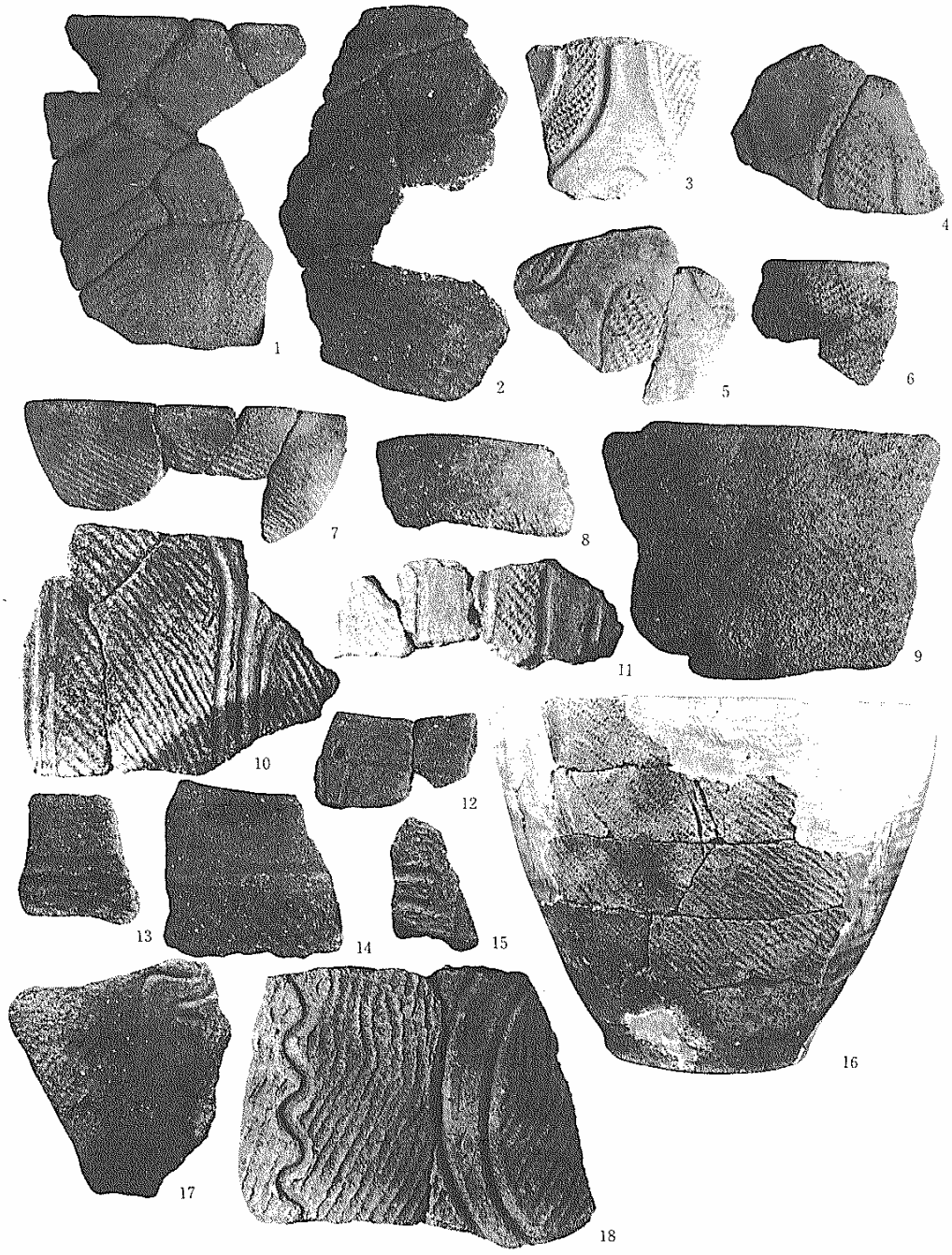
図版11　縄文土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

図版12　縄文土器



図版13　縄文土器

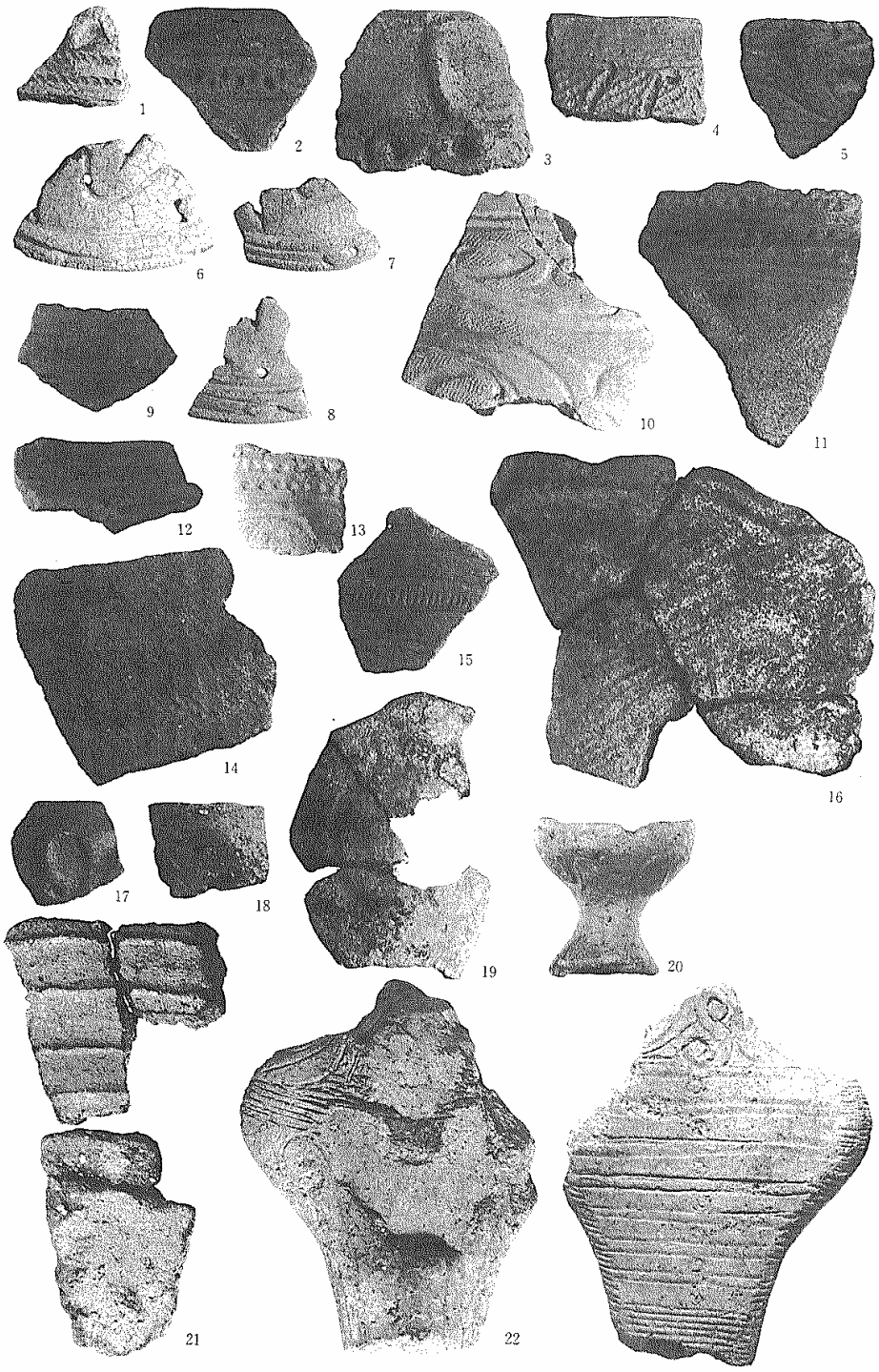


図版14　縄文土器

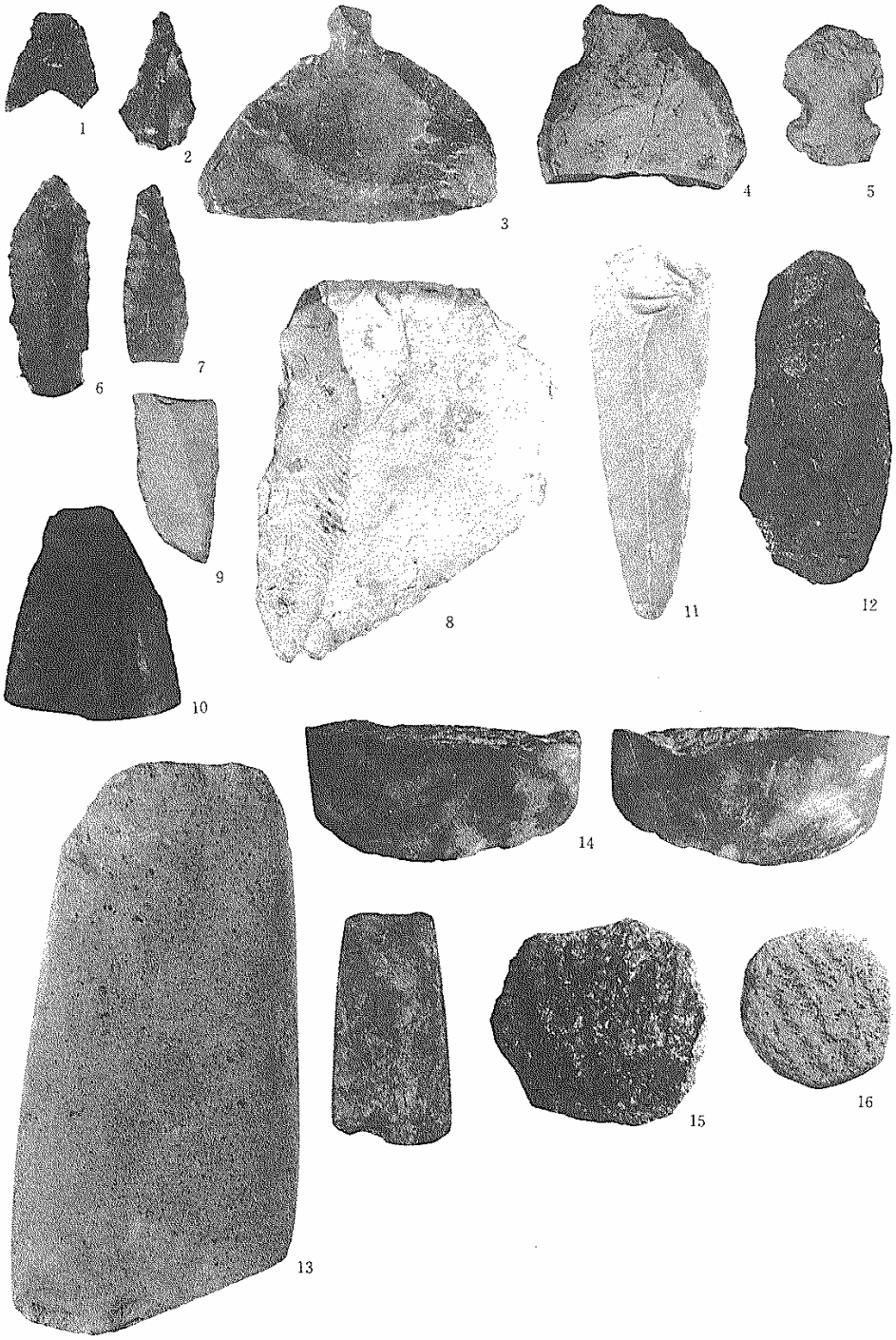
1

2

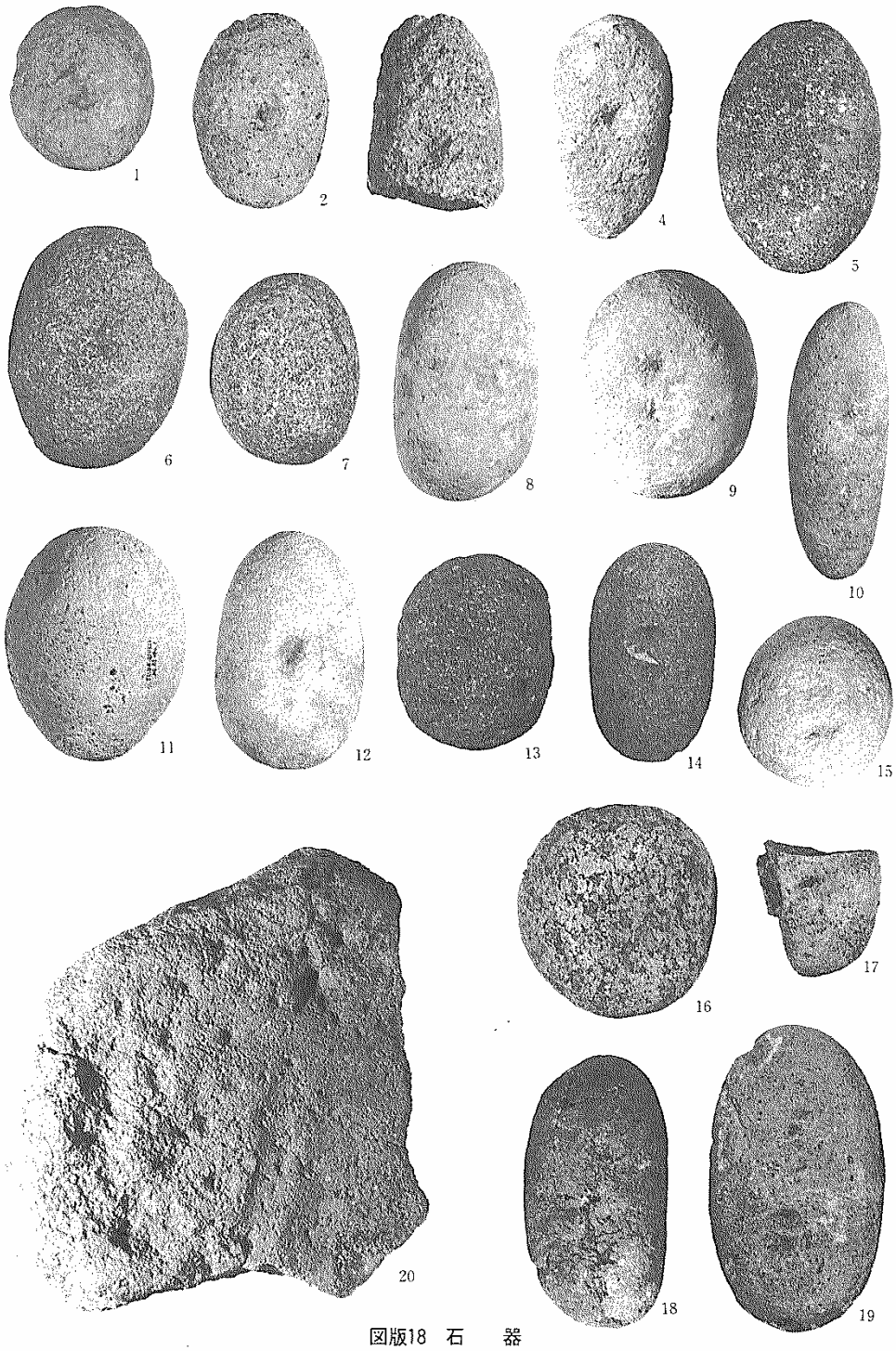
図版15　縄文土器



図版16　縄文土器・土偶



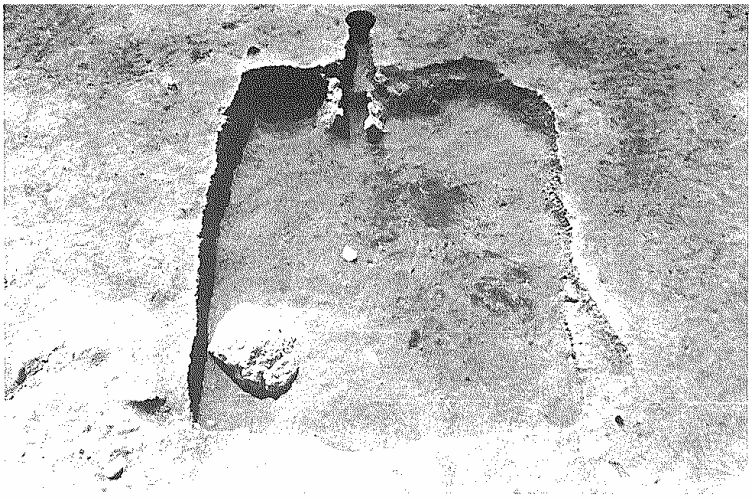
図版17　石器・円盤状土製品



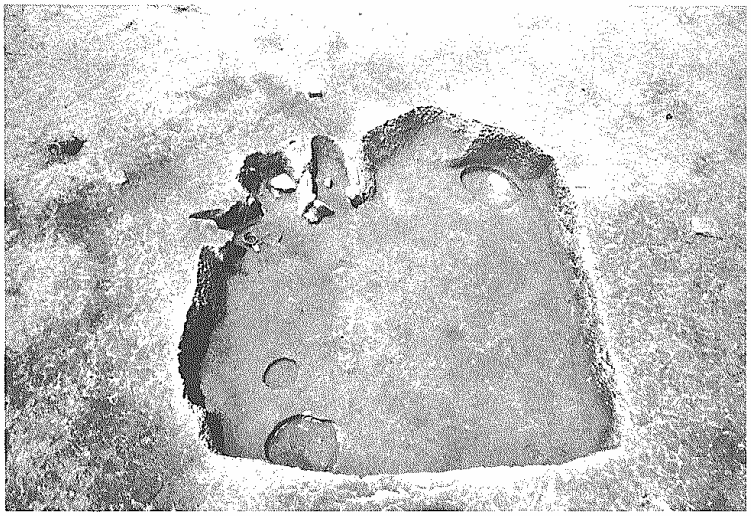
図版18　石　　器

古　代

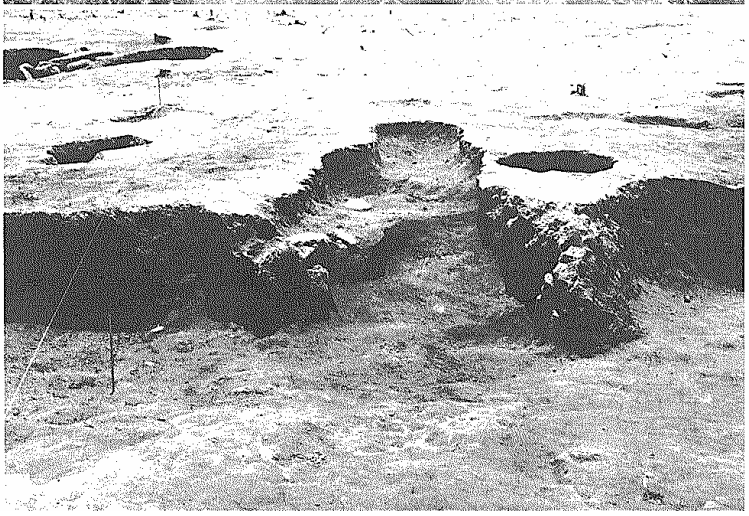
第２号住居跡



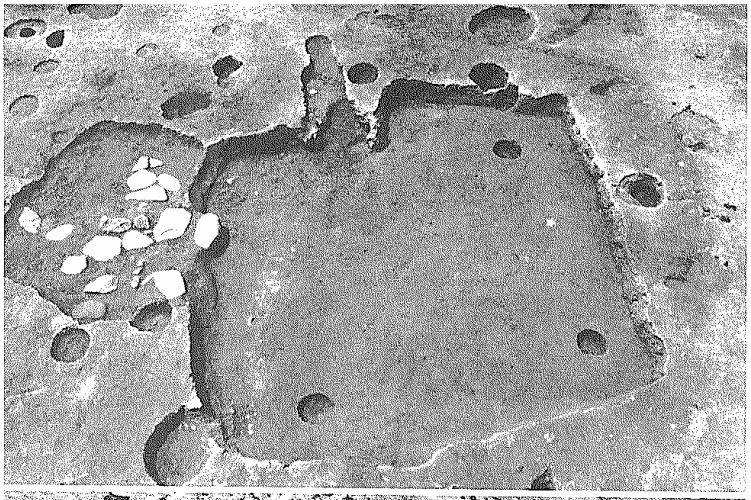
第３号住居跡



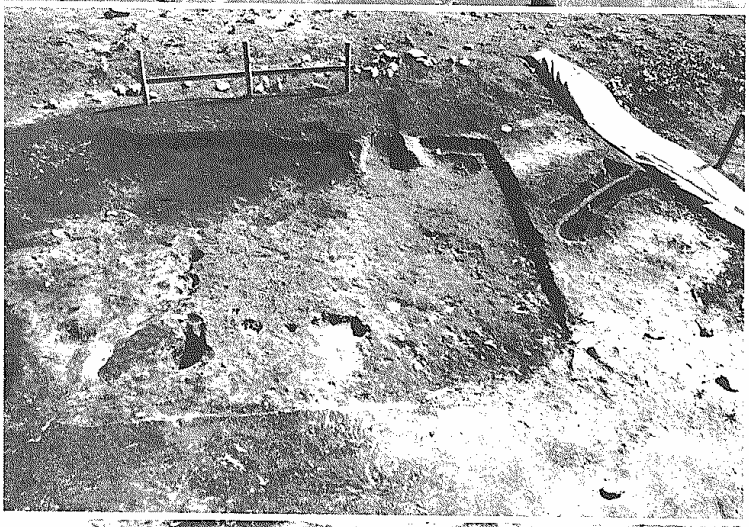
第４号住居跡カマド



図版19



第４号住居跡

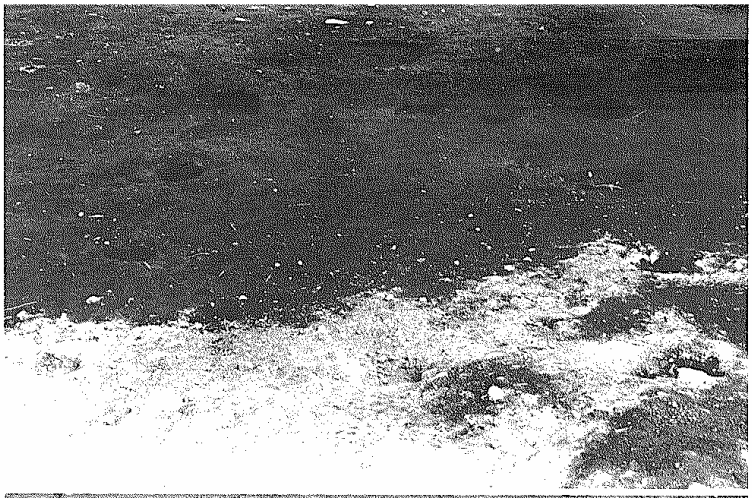


第５号住居跡

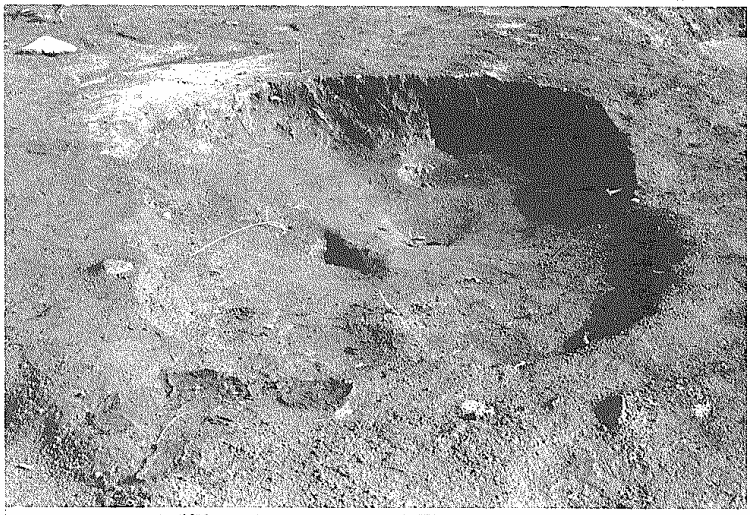
第６号住居跡

図版20

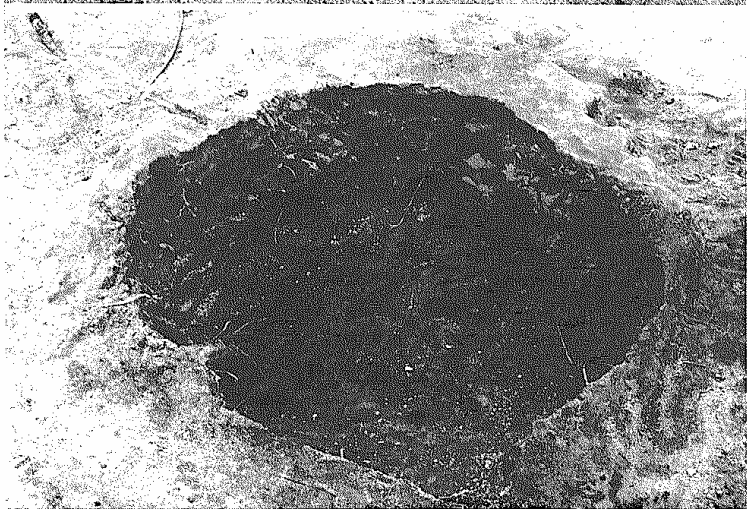
掘立柱建物跡



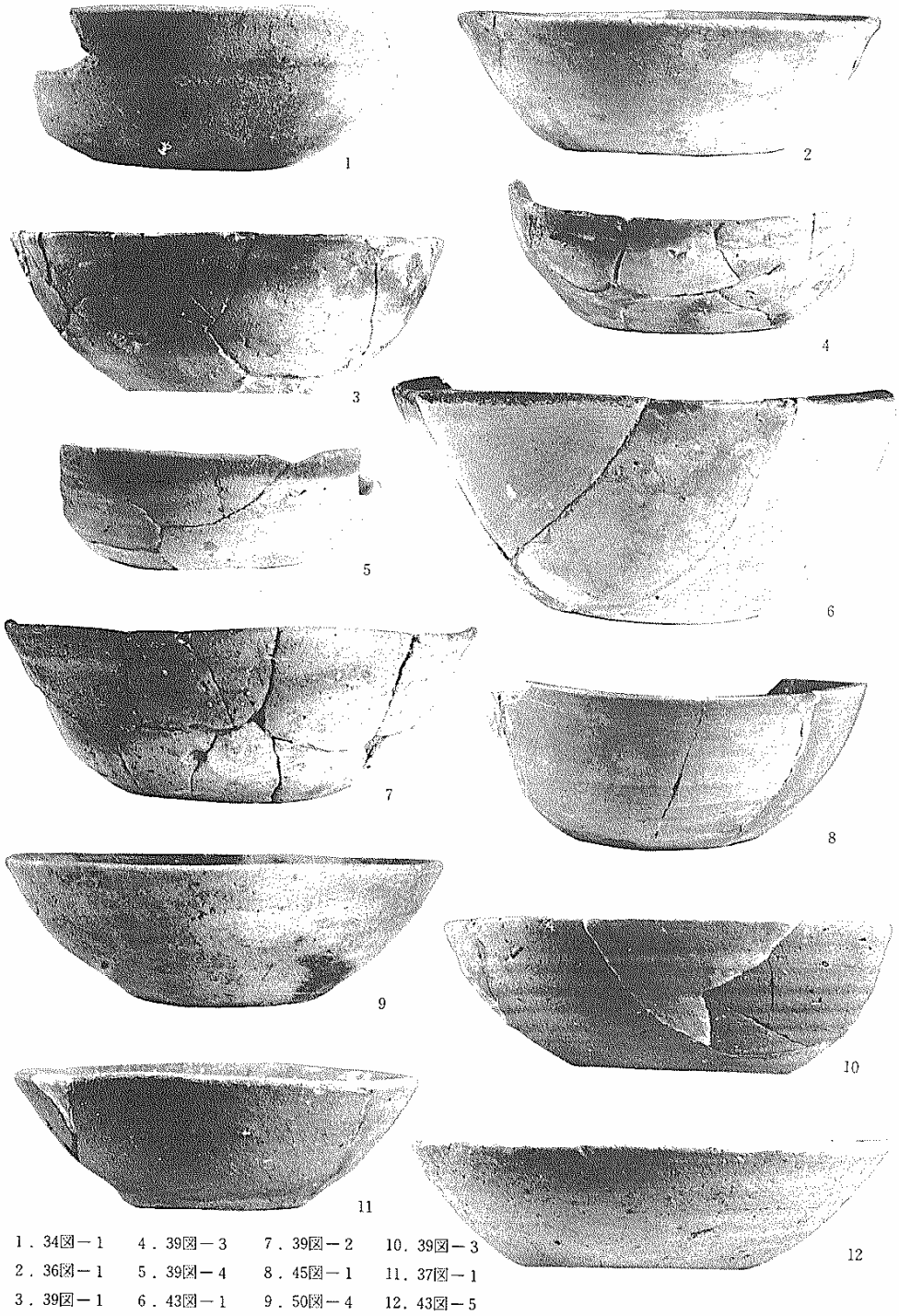
第１土壙



第２土壙

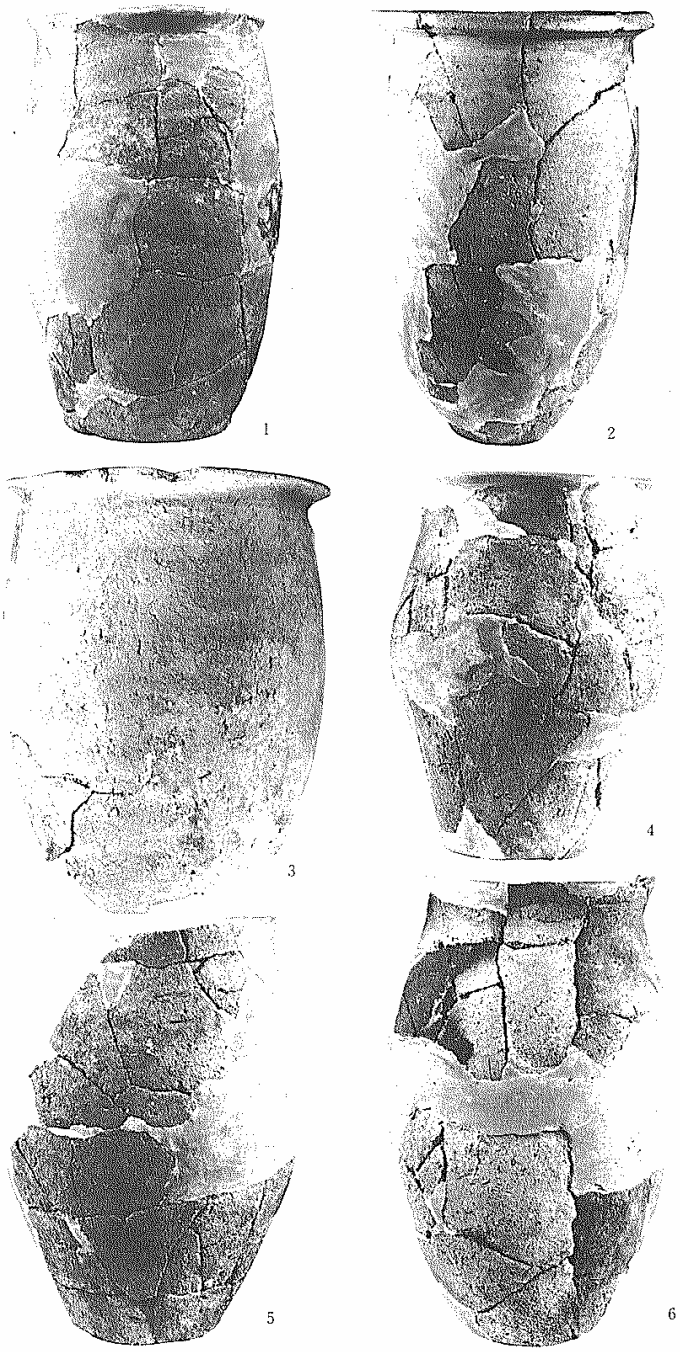


図版21



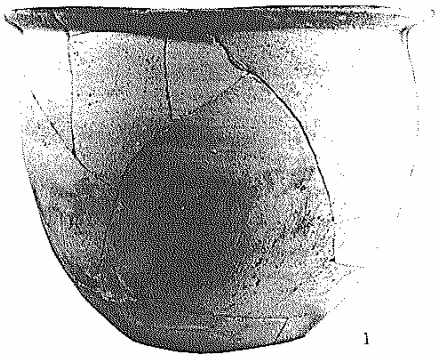
1．34図－1　4．39図－3　7．39図－2　10．39図－3
2．36図－1　5．39図－4　8．45図－1　11．37図－1
3．39図－1　6．43図－1　9．50図－4　12．43図－5

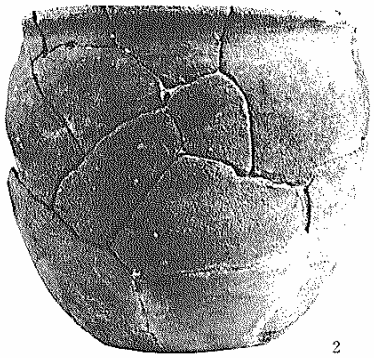
図版22　土師器・須恵器

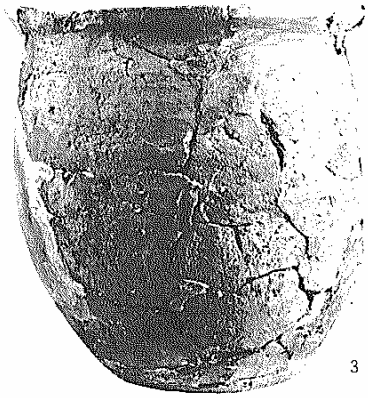


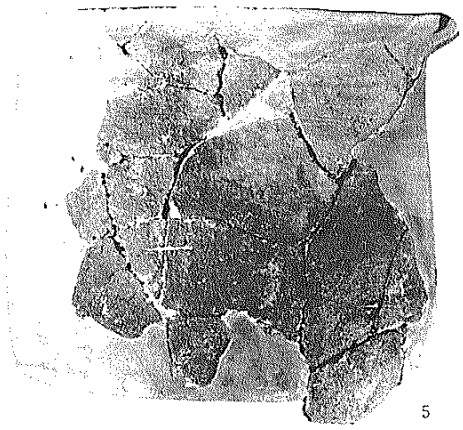
1．45図－3　　3．36図－7　　5．46図－2
2．36図－6　　4．45図－5　　6．46図－1

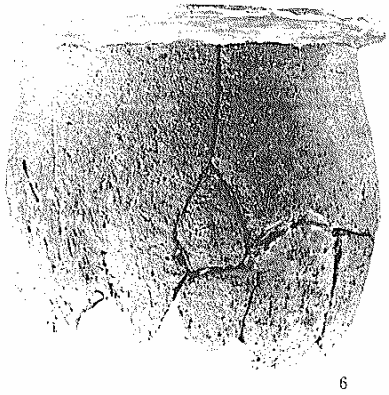
図版23　土　師　器











1．36図－5　　4．46図－4
2．45図－2　　5．50図－3
3．43図－3　　6．39図－7

図版24　土　師　器

大倉遺跡（おおくら）

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地……197
Ⅱ　調査の方法と経過……197
Ⅲ　発見された遺構と遺物……199
　1. 遺構……199
　2. 遺構内出土土器……209
　3. 遺構内出土土器……209
　4. 遺構外出土土器……214
　5. 遺構外出土石器……219
Ⅳ　考　　察……224
　1. 土器の特徴と編年的位置……224
　　（1）第１類土器の特徴……224
　　（2）第１類土器の年代……225
　2. 石器について……228
　　（1）石器群の特徴……228
　　（2）第３号住居跡出土の石器……229
　　（3）石器製作の問題……229
　3. 遺構の特徴……230
　4. 集落の構成……231
Ⅴ　まとめ……232

調　査　要　項

遺跡記号：ＪＪ（宮城県遺跡地名表登載番号　04065）
遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町字大倉
調査期間：昭和 56 年 10 月 11 日～昭和 56 年 10 月 24 日・昭和 58 年 4 月 11 日～昭和 58 年 6 月 1 日
調査主体者：宮城県教育委員会　建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
　　調査員：平沢英二郎・真山悟・菊地淳一・笹原信男・村田晃一
調査対象面積：約 23,000m^2
発掘面積：約 20,000m^2

Ⅰ　遺跡の立地

大倉遺跡は刈田郡七ヶ宿町の中心である関の集落から東方約6kmの地点にあり、字大倉地内に位置し、白石川左岸に発達した河岸段丘上に立地している。宮城県から山形県へ通じる国道113号線の北にあり、背後に山をひかえた南向きの緩斜面で、西は野沢川、東は小さな沢によって地的に区分されている。

遺跡内は、川沿いに位置する北側が最も高く、標高は270mある。最も低いのは東側で、標高は262mになっている（第2図）。遺跡の南にあって東流している白石川現河床との比高は10㎝ほどである。地山は段丘礫層を、基盤とする地層からなっているが、部分的に砂質シルトが残存している。

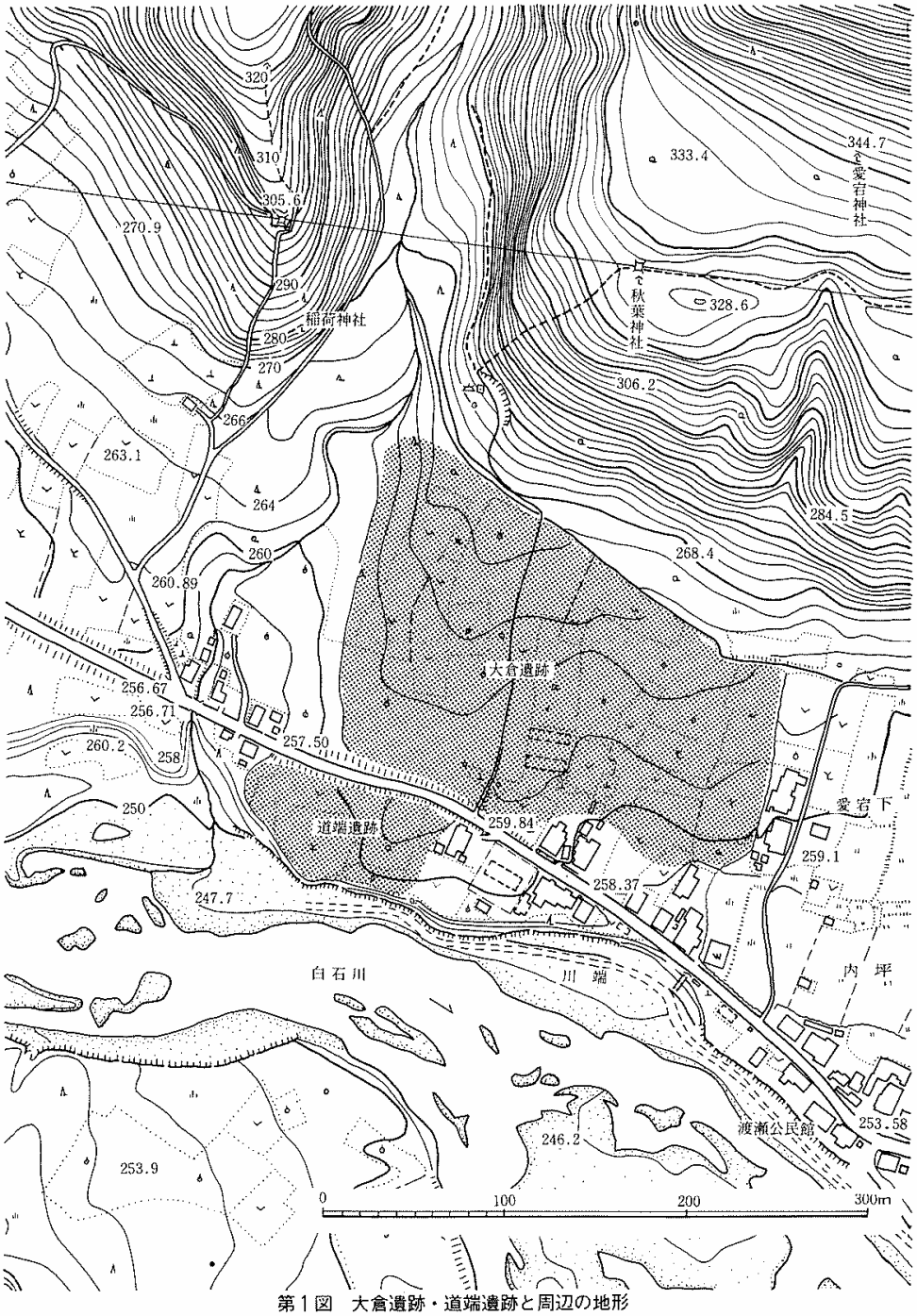
西側には、野沢川を隔てて、総文時代中期後葉～後期初頭及び平安時代の竪穴住居跡などが発見された小梁川東遺跡がある。また、南は、国道113号線を隔てて、縄文時代及び弥生時代の遺物が確認された道端遺跡がある。

Ⅱ 調 査 の 方 法 と 経 過

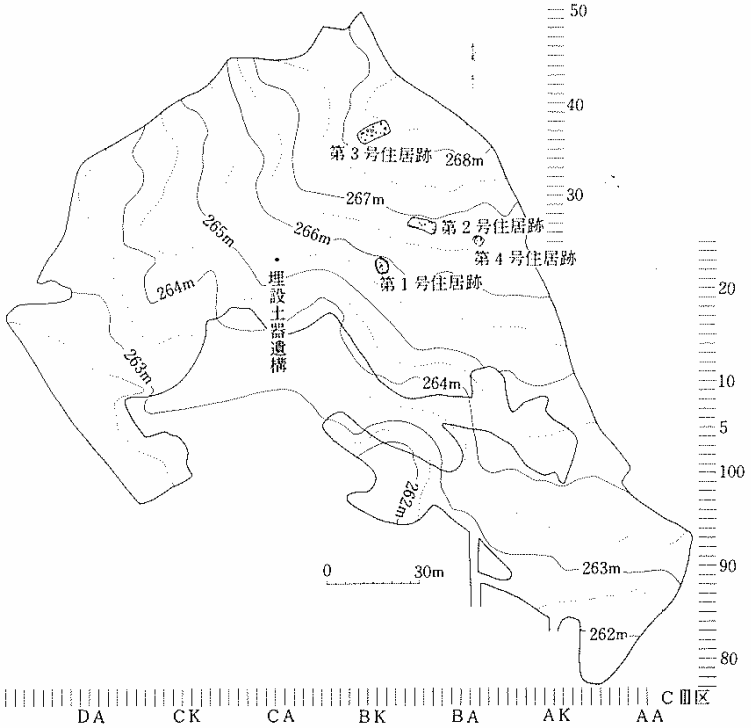
大倉遺跡は、七ヶ宿ダム建設工事と係わりをもち、七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査の初年次にあたる昭和56年度に確認調査を行い、その後、昭和58年に発掘調査を行った。

確認調査は昭和56年10月11日から2週間にわたって行われ、竪穴住居跡3軒を確認した。この時、遺跡の概要を知る必要があったため、2軒の竪穴住居跡を精査した。精査した竪穴住居跡は、1/20で実測図を作成し、板ベンチマークからレベルを記入し、写真撮影を行った後、埋め戻しておいた。

発掘調査は昭和58年4月11日から開始した。最初に、七ヶ宿ダム関連遺跡を対象にした座標に則って調査グリッドを設定し、遺跡の東側から遺構確認を行った。その結果、4軒の竪穴住居跡(昭和56年度に精査した住居跡を含む)と土壙1基、埋設土器遺構1基が検出された。検出された遺構は、精査ののち1/20の縮尺で実測を作成し、合わせてレベルの記入や写真撮影を行った。調査のすべてが終了したのは、昭和58年6月1日で、発掘調査面積は20,000m^{2}に及んだ。



第１図　大倉遺跡・道端遺跡と周辺の地形



第２図　グリッド配図・遺構配置図

Ⅲ 発見された遺構と遺物

(1) 遺構

第1号住居跡(第3図)

〔遺構の確認〕遺跡のほぼ中央にあ7たるB1－23区付近で検出された。確認面は地山の砂質シルトである。

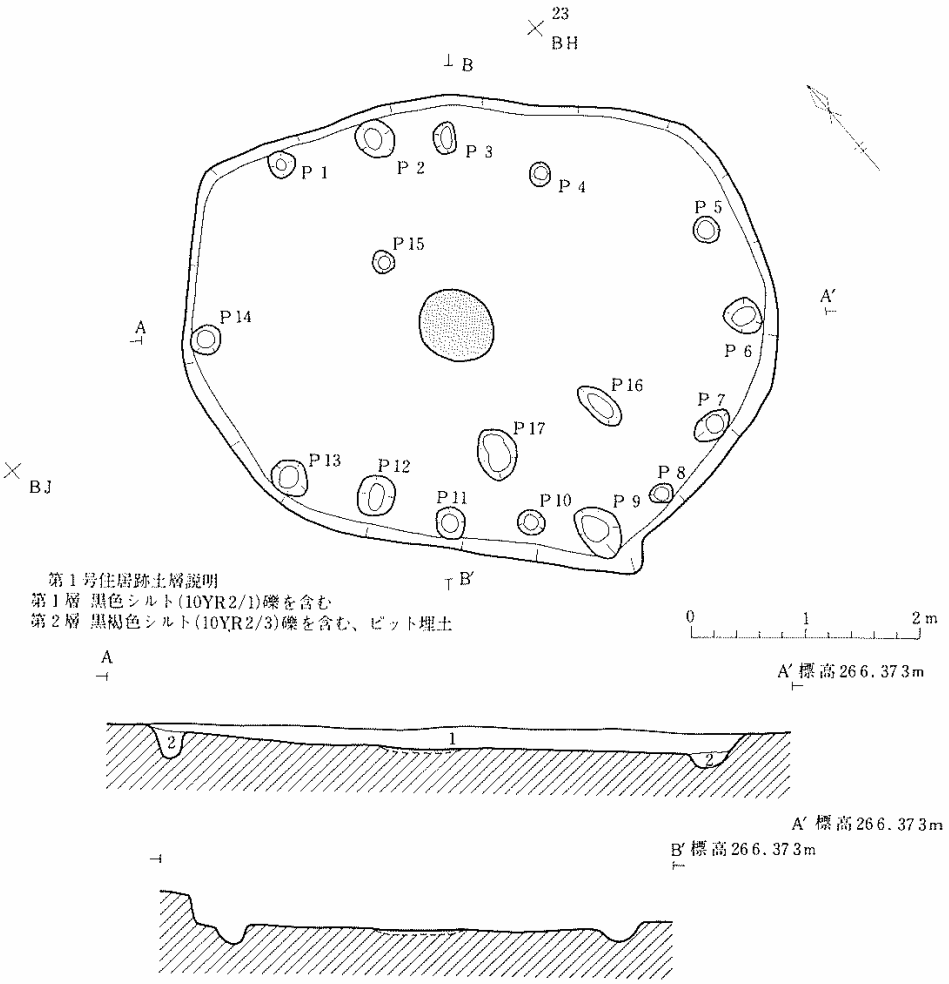
〔平面形・規模〕不整楕円形で、規模は5.2×4.0mである。

〔堆積土〕1枚認められた。

〔壁・床面〕壁の立ちあがりは急で、壁高は北東壁で25cm、南西壁で10cmを測る。床面は平坦である。

〔柱穴〕壁に沿って14個、やや内側に3個の合計17個のピットを確認した。内側の3個は配置が不規則で、主柱穴がどうか不明だが、他は壁に沿った配列になっている。壁際の14個のうちではP_9が最大で50×34cmの規模をもつ。最小はP_4で22×18cmである。深さはP_{14}が23cmで最も深く、P_8が6cmで最も浅い。ピットの規模・深さはまちまちである。

〔炉〕中央やや北寄りに70×60cmの範囲で焼け面が検出された。位置的にみて地床炉と考えられる。



第３図　第１号住居跡

〔遺物〕床面から土器、及び第1層から石錐、箆状石器が出土している。

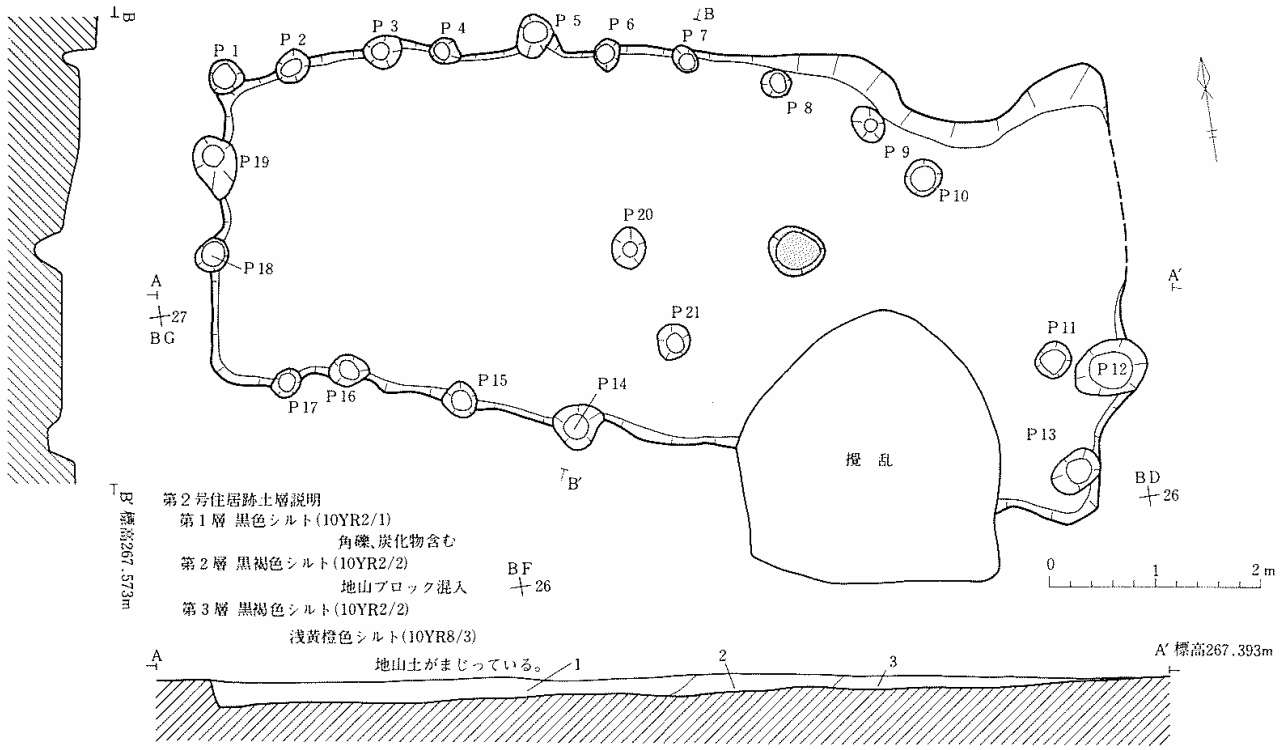
第2号住居跡(第4図)

〔遺構の確認〕第1号住居跡の北西にあたるＢＦ－27区付近で検出された・確認面は地山の砂質シルトである。

〔平面形・規模〕隅丸の長方形（梯形）で、規模は8.5×3.7mである。

〔堆積土〕3枚に区分された。1層は住居跡南西部に分布している。2層は中部、3層は北東部に分布している。1～3層は北東方向から流入して、いずれも床面を覆っている。

〔壁・床面〕壁高は西壁、南壁、北壁で20cmを計るが、東壁は削平されている。床面は平坦だが傾斜をもち、北壁側と東壁側が高い。東南部には撹乱が認められる。


P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P 10
P 11
P 12
P 13
P 14
P 15
P 16
P 17
P 18
P 19
P 20
P 21
A
27
BG
A′
BD
26
BF
26
B
B′
B′ 標高267.573m
A′ 標高267.393m
撹 乱
0
1
2 m
第２号住居跡土層説明
第１層 黒色シルト(10YR2/1)
角礫、炭化物含む
第２層 黒褐色シルト(10YR2/2)
地山ブロック混入
第３層 黒褐色シルト(10YR2/2)
浅黄橙色シルト(10YR8/3)
地山土がまじっている。
1
2
3

第4図　第2号住居跡

〔柱穴〕壁に沿って19個、中央付近に2個の合計21個のピットを確認した。中央に位置するP_{20}は西壁側のP_{12}と東壁側のP_{19}を結ぶ線上にあり、住居跡の主軸を構成している。大きさはP_{12}が最大で72×50㎝、最小はP_7で27×21㎝である。他の大部分は直径30～40㎝の間にまとまる。深さは、ほとんど掘り込みのみられないP_1から、33㎝の掘り込みをもつP_8まで多様である。

〔炉〕中央やや東寄りに直径50㎝の規模で円形の掘り込みがあり、底面は焼けている。深さは17㎝を計る。位置及び状況から掘り込み炉と考えられる。

〔遺物〕床面から土器、及び石錐、箆状石器が出土している。

第3号住居跡（第5図）

〔遺構の確認〕遺跡北側で標高の高い部分にあたるBK－37区付近で確認された。確認面は、地山の砂礫層である。中央に住居跡堆積土から掘り込まれている第1号土壙が確認された。

〔平面形・規模〕隅丸の長方形(梯形)で、規模は10.7×4.9mである。

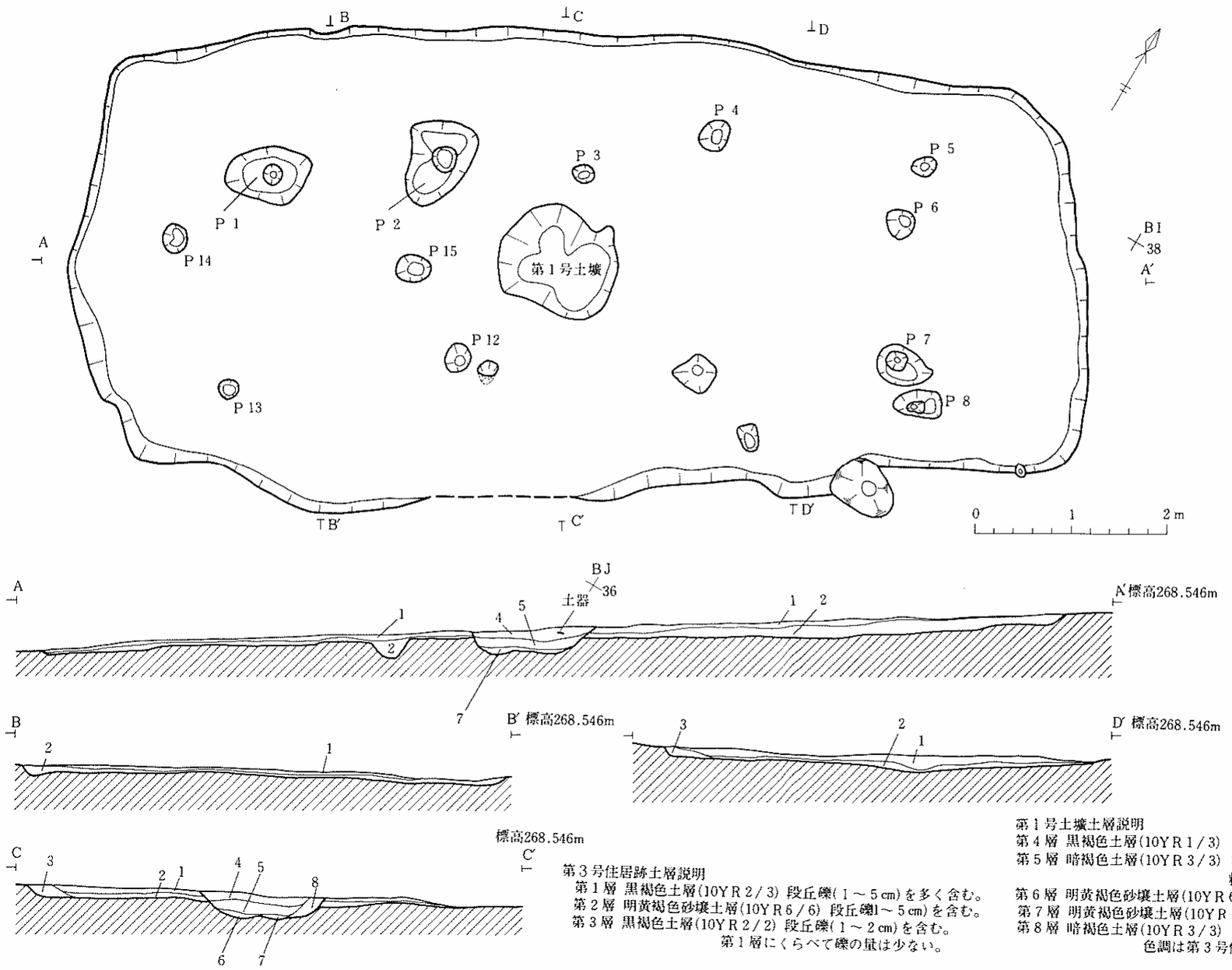
〔堆積土〕3枚からなる。第1層は住居跡全体を覆っているが、東壁から中央部にかけて第2層も住居跡全体を覆っており、東壁際が厚い。第3層は、北壁中央から北コーナーにかけて部分的に分布している。第2層と第3層は床面を覆っているが、第1層は床面を覆うことはない。第1～3の各層は北東方向から流入している。

〔壁・床面〕壁高は、北壁・東壁で10㎝、南壁・西壁で5㎝を計る。また地山は砂礫層であるため、床面には礫が露見している。床面は北コーナーが高く、南コーナーが低い。

〔柱穴〕ピットが15個確認された。長軸北側に沿うラインのP_1¯P_2¯P_4¯P_5と南側に沿うラインのP_{13}¯P_{12}¯P_{10}¯P_8に対応関係がある。また短軸西側に沿うラインのP_1・P_{14}・P_{13}と東側に沿うラインのP_5¯P_6¯P_7¯P_8が対応している。P_1・P_2・P_7・P_8には掘り方と柱穴痕が認められる。規模はP_{10}が最大で36×35㎝、最小はP_{13}で21×20㎝である。深さはP_{12}・P_{13}が39㎝で最も深くP_3が10㎝で最も浅い。

〔遺物〕土器は第1層とP_3ピット内から出土している。石器は、第1層を中心に、石鏃・石匙・箆状石器・ピエス　エスキーユ・不定形石器・「加工痕」のある剥片・使用痕のある剥片が出土している。

〔砕片の分布〕第3号住居跡は、遺構確認時に砕片が数多く分布していることが判明したため、住居跡中央を基準にして、1㎡を単位として層位別に堆積土を採取した。住居跡の壁際では1㎡に満たない所もあるが、住居跡内部は65に区画され、南東部コーナーを1区として順に西へ番号を付けていった。区画内から採取した土はメッシュを使って水洗いを行い、9.25㎜以上、4.0㎜以上9.25㎜未満、2.0㎜以上4.0㎜未満、2.0㎜未満の大きさによって破片を区別し、重量を計測した。第1表はその集計表であり、層位ごとに取りあげた砕片は63,477点に及んだ。



第3号住居跡土層説明
第1層 黒褐色土層(10YR 2/3) 段丘礫(1～5cm)を多く含む。
第2層 明黄褐色砂壌土層(10YR 6/6) 段丘礫1～5cm)を含む。
第3層 黒褐色土層(10YR 2/2) 段丘礫(1～2cm)を含む。
第1層にくらべて礫の量は少ない。

第1号土壙土層説明
第4層 黒褐色土層(10YR 1/3) 2～4cmほどの礫を含む。
第5層 暗褐色土層(10YR 3/3) 第4層同様礫を含む。
粒子は粗いがしまっている。
第6層 明黄褐色砂壌土層(10YR 6/6) 礫を含んでいない。
第7層 明黄褐色砂壌土層(10YR 6/6) 1cmほどの礫を含む。
第8層 暗褐色土層(10YR 3/3) 1～3cmほどの礫を含んでいる。
色調は第3号住居跡の第1層に類似している。

第5図 第3号住居跡

区分	9.25 mm	4.0 mm	2.0 mm	2.0mm 以下	計	重さ (g)
3層	0	0	1	0	1	0.1 未満
4 1層	1	0	0	0	1	0.1
床	0	24	134	88	246	7.3
5 1層	2	14	2	0	18	3.9
床	0	9	30	16	55	2.1
6 1層	0	8	36	43	87	1.1
7 床	1	2	7	6	16	1.1
8 1層	0	24	99	21	144	5.0
9 1層	0	3	15	6	24	0.9
床	0	4	1	1	6	0.3
10 1層	0	5	6	0	11	1.2
12 1層	0	13	76	52	141	4.0
床	1	0	4	0	5	0.7
13 1層	2	40	128	28	198	14.3
1層	0	6	32	2	40	1.7
14 1層	1	38	330	439	808	11.6
床	0	3	12	0	15	1.0
15 1層	1	37	145	162	345	7.6
床	0	3	34	15	52	0.7
16 1層	0	46	404	761	1211	13.4
床	0	16	140	517	673	4.6
17 1層	0	121	1011	2153	3285	36.9
床	0	11	85	43	139	2.1
18 1層	1	118	958	976	2055	35.8
床	0	4	82	83	169	1.9
19 1層	6	131	783	603	1521	39.0
床	0	5	17	11	33	1.2
20 1層	2	88	506	536	1132	21.7
床	0	3	42	35	80	0.9
21 1層	2	24	66	31	123	5.8
床	0	2	2	0	4	0.3
22 1層	5	21	11	7	44	11.1
2層	3	6	3	0	11	3.1
3層	0	1	0	1	2	0.1 未満
床	0	0	0	1	1	0.1 未満
23 1層	0	4	4	3	10	0.6
3層	0	1	4	2	7	0.9
床	0	0	2	0	2	0.1 未満
24 1層	6	26	62	25	119	9.9
床	0	2	4	4	10	0.2

区画	9.25 mm	4.0 mm	2.0 mm	2.0mm 以下	計	重さ (g)
25 1層	8	170	716	555	1449	43.9
3層	0	2	9	3	14	0.4
床	0	4	9	7	20	0.7
26 1層	1	156	1613	2930	4700	51.1
床	0	15	105	170	293	3.3
27 1層	5	121	646	538	1310	35.2
3層	1	6	28	62	97	2.0
床	0	4	21	35	60	1.1
28 1層	5	71	306	257	641	17.6
1層	0	3	40	21	64	1.1
29 1層	0	18	84	56	158	4.7
床	0	1	7	4	12	0.2
30 1層	0	99	650	724	1473	26.7
床	0	1	6	4	11	0.1
31 1層	4	94	801	1132	2030	31.4
床	0	0	15	16	31	0.3
32 1層	1	73	614	602	1290	21.4
床	0	6	45	51	102	1.3
33 1層	4	35	157	114	309	8.9
34 1層	0	26	164	169	359	5.8
35 1層	0	12	60	41	113	2.4
床	0	8	95	151	254	2.6
36 1層	0	37	327	384	748	12.5
床	0	15	85	54	154	3.8
37 1層	3	109	1018	1667	2797	35.4
2-3層	2	30	62	35	129	6.0
3 床	0	20	77	80	177	4.6
38 1層	1	63	326	335	725	17.1
床	0	5	14	4	23	0.6
39 1層	4	68	340	324	731	18.5
床	1	1	12	14	28	0.7
1・床	0	30	142	119	291	6.5
40 1層	3	29	299	353	684	10.0
3層	0	0	5	11	16	0.1
床	0	6	29	45	80	1.2
41 1層	0	70	666	693	1429	24.7
床	0	6	33	1	40	1.2
42 1層	4	96	389	277	766	22.1
床	0	7	54	15	76	1.5

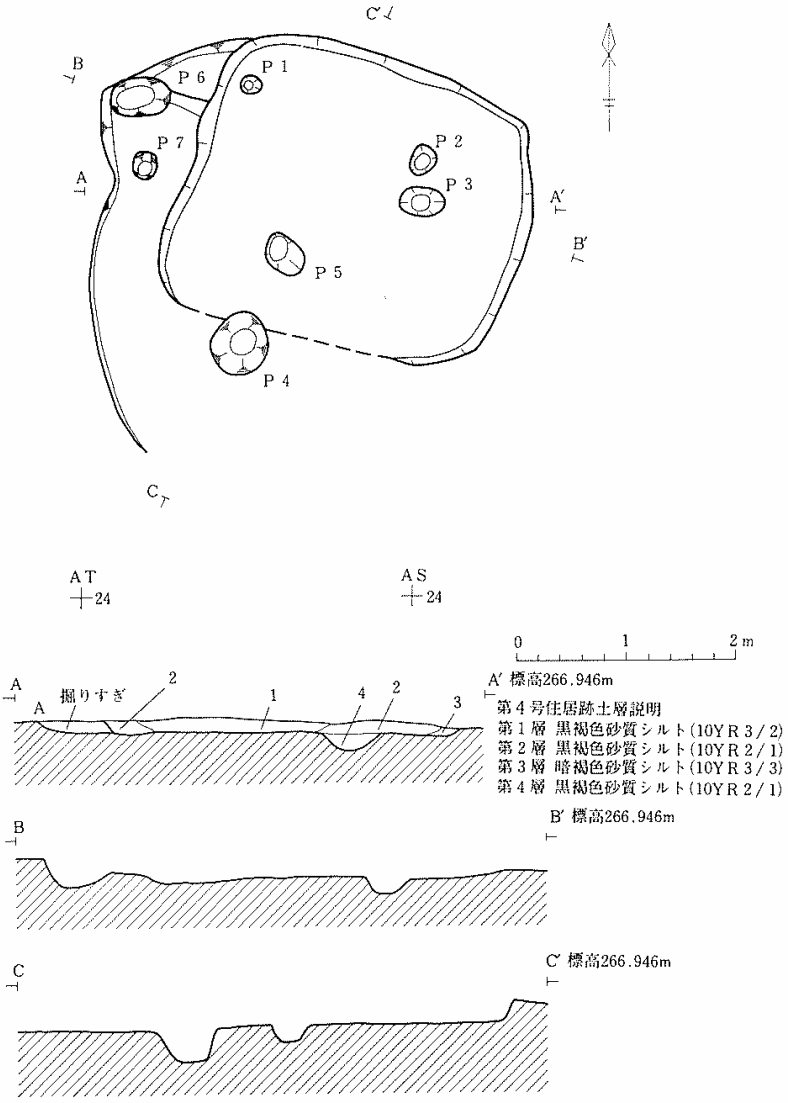
区画	9.25 mm	4.0 mm	2.0 mm	2.0mm 以下	計	重さ (g)
43 1層	0	3	11	6	20	0.5
3層	0	0	2	2	4	0.1 未満
床	0	0	2	0	2	0.1 未満
44 1層	1	6	31	13	51	2.4
2層	0	2	6	0	8	0.5
3層	0	4	0	1	5	1.1
床	0	3	3	0	6	0.5
45 1層	0	7	6	0	13	1.2
2層	0	1	0	0	1	0.1
46 1層	2	16	70	38	126	4.5
2層	1	7	8	1	17	3.1
47 1層	7	108	539	347	1001	31.5
3層	0	2	8	8	18	0.3
床	1	0	8	1	10	0.1
48 1層	1	104	436	299	840	25.8
3層	0	2	1	0	3	0.1
床	0	6	20	23	49	1.0
49 1層	2	57	481	415	955	18.4
床	1	5	45	24	75	2.0
50 1層	2	94	857	786	1739	27.8
3層	0	2	34	67	103	1.0
床	0	17	109	82	208	4.1
51 1層	0	157	1303	1533	2993	42.0
床	0	8	49	78	135	2.1
52 1層	0	143	1159	1436	2738	39.0
床	0	53	178	186	417	8.5
53 1層	6	75	390	247	718	22.3
床	0	4	39	37	80	1.6
54 1層	1	9	48	34	92	2.9
55 1層	0	48	87	25	160	7.4
床	0	3	2	0	5	0.7
56 1層	0	1	6	0	7	0.3
57 1層	2	4	0	0	6	3.2
58 1層	1	22	78	16	117	6.7
2層	0	2	9	0	11	0.5
3層	0	0	1	3	4	0.1 未満
59 1層	2	41	99	21	163	8.9
3層	1	21	53	8	83	4.2
床	0	1	2	3	6	0.2
60 1層	1	227	1207	1043	2478	48.7

区画	9.25 mm	4.0 mm	2.0 mm	2.0mm 以下	計	重さ (g)
60 2層	0	21	153	168	342	5.7
3層	0	10	158	207	375	3.6
床	0	4	10	0	14	0.5
61 1層	9	387	2100	2915	5421	95.9
2層	3	164	1039	1488	2694	43.7
床	0	12	65	108	185	2.4
62 1層	2	45	88	42	177	11.4
2層	0	15	37	19	71	3.2
3層	0	4	2	3	9	1.0
床	0	9	2	0	11	1.2
63 1層	1		3	2	5	0.1 未満
2層	0	8	15	3	26	1.2
床	0	0	3	2	5	0.1 未満
64 2層	1	0	2	4	7	0.8
65 2層	0	1	1	0	2	0.2
計	135	4479	27581	31284	63477	1221.5
BI-36	0	16	64	60	140	3.0
BI-37	6	43	73	65	187	16.3
BJ-36	5	85	127	127	344	21.2
BJ-37	0	11	62	74	147	3.0
BK-35	1	10	17	11	39	3.1
BK-36	12	136	229	276	653	32.7
BK-37	0	16	47	24	87	3.7
BL-36	1	26	28	33	88	5.1
BL-37	1	3	0	0	4	1.7
BM-37	1	4	3	3	11	2.2
計	28	351	650	673	1702	97
総計	163	4830	28231	31957	65178	1228.5
百分率	0.3	7.4	43.3	49	100	

第1表　第3号住居跡出土砕片集計表

これに遺構確認時の破片を含めると、第3号住居跡からは、総数65,179点の破片が出土している。

破片は、北壁中央部の61区から最も多く出土しており、第1層、第2層、床面を合わせて8,300点出土している。次に多いのは南東部の26区で、第1層と床面を合わせて4993点出土している。



第6図　第4号住居跡

第4号住居跡（第6図）

〔遺構の確認〕4軒の竪穴住居跡中で最も東に位置し、ＡＳ－25区付近で確認された。確認面は地山の砂礫層である。

〔平面形・規模〕隅丸方形を基調にしている。規模は3.2×2.8mである。

〔堆積土〕3枚認められた。第1層は住居中央部にみられ、床面を覆っている。第2層は西側では壁と床面を覆うが、東側では床面を覆っているだけである。第3層は東側に部分的にみられ、壁と床面を覆っている。第1～第3層は自然流入堆積土である。

〔壁・床面〕壁高は北壁で10㎝、東壁・西壁で5㎝ほどある。南壁は削平されている。住居跡の西側にも掘り込みがあるが、住居跡に付属するかどうか明らかでない。床面には礫がみられるが平坦になっている。

〔柱穴〕4個のピットが確認された。不規則な配置をしている。規模はP3西側にも掘り込みがあるが、住居跡に付属するかどう明らかでない。床面には礫がみられるが平坦になっている。が最大で42×39㎝、P1が最小で19×16㎝である。深さは4個とも15㎝ほどである。

〔遺物〕土器は第1層、及び床面から出土している。石器は第1層から不定形石器が出土している。

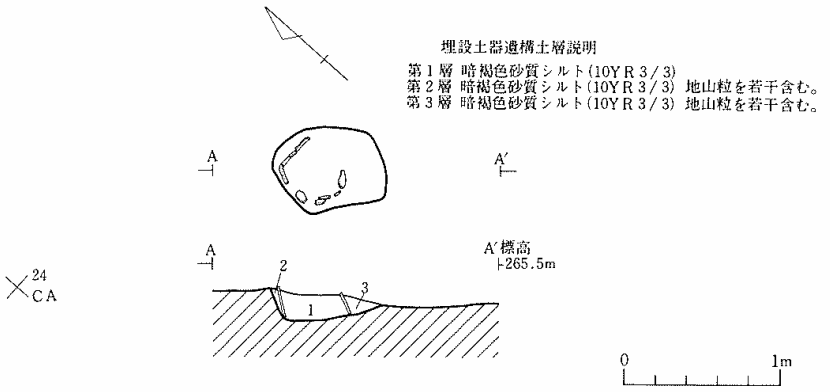
第1号土壙(第5図)

〔遺構の確認〕第3号住居跡の中央部で確認された。確認面は住居跡堆積土の第1層である。

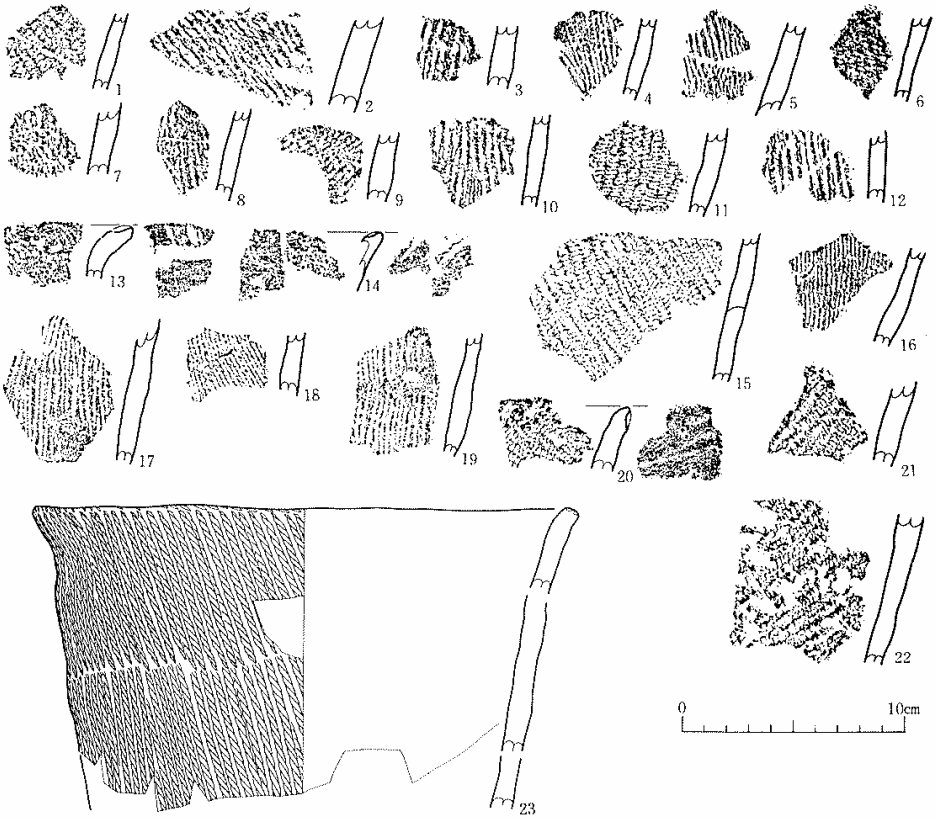
〔平面形・規模〕不整円形で、規模は1.3×1mである。

〔側面・底面〕側面の立ちあがりは不規則である。礫層を底面にして皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕5枚に区分された。第8層は第3号住居跡の第1層に類似している。第4～7の各層は周辺から流入している。



第７図　埋設土器遺構



図番号	地区	層位	分類	部位	構成	原体	内面	胎土	備考	図版
第8図 1	第1号住床面		1類	深鉢・胴部	右下り斜位	RL縄文	右下り擦痕	繊維・石英		4－1
2	第1号住床面		〃	〃	右下り斜位	R撚糸文	横位右下り擦痕	〃・石英	節もどる	2
3	第1号住床面		〃	〃	縦位	R撚糸文	横位擦痕	〃・石英	0段2条・節もどる	3
4	第1号住床面		〃	〃	縦位	R撚糸文	〃	繊維・石英(多量含む)	内面に炭化物付着	4
5	第1号住床面		〃	〃	縦位	R撚糸文	〃	繊維・石英・赤色粒	節しまる	5
6	第2号住床面		〃	〃	縦位	LR縄文	〃	〃・石英		6
7	第2号住床面		〃	〃	縦位	L撚糸文	〃	繊維・石英・長石	節もどる	7
8	第2号住床面		〃	〃	縦位	R撚糸文	〃	繊維・石英・長石	節もどる	8
9	第2号住床面		〃	〃	左下り斜位	R撚糸文	〃	繊維・石英・赤色粒子		9
10	第3号住1層		〃	〃	縦位	RL縄文	不明	繊維・石英	内面炭化物付着	10
11	第3号住1層		〃	〃	縦位	RL縄文	横位擦痕	繊維・石英・長石	0段3条	11
12	第3号住柱穴No.3		〃	〃	〃	R撚糸文	〃	繊維・石英	節もどる	12
13	第4号住1層		〃	深鉢・口縁部	右下り斜位	〃	〃	繊維・石英・長石	内面右下り斜位短沈線文・節もどる	13
14	〃		〃	〃	縦位	撚糸文	剥落	繊維・石英・雲母	内面左下り斜位短沈線文	14
15	第4号住床面		〃	深鉢・胴部	〃	RL縄文	横位擦痕	繊維・石英・長石	0段多条	15
16	第4号住1層		〃	〃	〃	R撚糸文	〃	繊維・石英	節もどる	16
17	〃		〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・長石	節しまる	17
18	〃		〃	〃	右下り斜位	〃	剥落	繊維・石英・長石赤色粒	節もどる	18
19	第4号住床面		〃	〃	縦位	〃	不明	繊維・石英・長石	内面炭化物付着,節しまる	19
20	第1号土壙		〃	深鉢・口縁部	右下り斜位	RL縄文	横位擦痕	繊維・石英・長石	口縁上部 右下り短沈線縄文	20
21	〃		〃	深鉢・胴部	左下り斜位	LR縄文	左下り擦痕	繊維・石英・長石	0段3条	21
22	〃		〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・長石	0段多条 内外面剥落	22
23	埋設土器遺構		〃	深鉢・口縁～胴部	右下り斜位	R撚糸文	〃	〃	口縁端部,R撚糸文,節もどる	3－1

第8図　遺構内出土土器

〔遺物〕堆積土から土器、及び不定形石器、「加工痕」のある剥片、使用痕のある剥片が出土している。

埋設土器遺構(第7図)

〔遺構の確認〕遺跡中央よりやや南西のＣＡ－24区で確認された。確認面は地山の砂礫層である。

〔掘り方〕不整楕円形で、規模は74×52㎝である。深さは北側で20㎝、南側で6㎝である。

〔土器の状態〕逆位の状態をしており、胴部は掘り方の北側面に接し口縁端部は掘り方の底面に接している。土器の内部には遺物は含まれていない。

(2) 遺構内出土土器

第1号住居跡出土土器（第8図1～5）いずれも深鉢形土器の胴部である。1にはＲＬ斜縄文、2～5にはR撚糸文が外面に施されている。2の撚糸文の条は右下りだが、3～5の条は縦位に走っている。

第2号住居跡出土土器(第8図6～9)いずれも深鉢形土器の胴部である。6は外面にＬR縦位縄文が施されている。7はＬ撚糸文が縦位に施されている。8・9は共にR撚糸文が施されているが、8は縦位、9は左下り斜位の条をもつ。

第3号住居跡出土土器（第8図10～12）いずれも深鉢形土器の胴部である。10・11はＲＬ縄文、12R撚糸文が施されている。条の方向は共に縦位である。

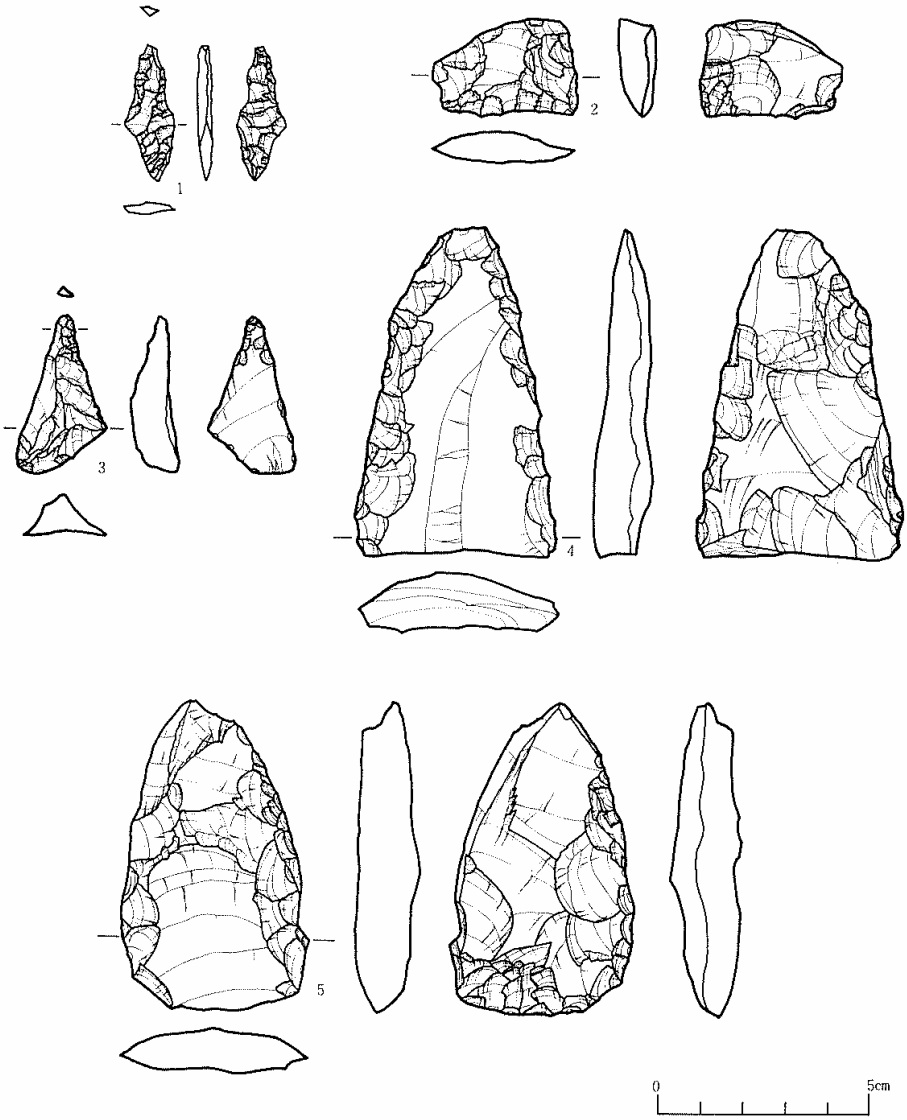
第4号住居跡出土土器（第8図13～19）いずれも深鉢形土器で、13・14は口縁部資料である。13の外面にはR撚糸文が右下りに施されている。また内面の口縁上部には、短沈線文が右下り斜位に施されている。14は外面に右下り斜位の撚糸文がみられるが、原体は不明である。また内面の口縁上部には短沈線文が左下り斜位に施されている。15～19は胴部資料で、15の外面にはＲＬ斜縄文が施されている。16～19にはR撚糸文が施されている。

第1号土壙出土土器（第８図20～22）いずれも深鉢形土器で、20は口縁部資料である。胴部にＲＬ斜線文を施文したあとに、口縁上部に短沈線文を施している。21・22は胴部資料でＬR斜縄文が施されている。

埋設土器（第８図23）口径22.8㎝の深鉢形土器で、胴部半部を欠損している。胴部から緩やかに立ち上がり、口縁部で外反する器形である。口縁上部から胴部にはR撚糸文が右下り斜位に施されている。口縁部にはR撚糸文が施されている。

(3) 遺構内出土土器

第1号住居跡出土石器（第9図1～2）1は石錐で、先端部をわずかに欠く。平面形は平行四辺形状で、断面は上方が平行四辺形、下方は扁平である。2は箆状石器の刃部で、背面か



図番号	地区 層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(mm)	備考	図版
第9図 1	第1号住 1層	石錐	先端部欠	(32)	12	3	0.78		7-1
2	〃 〃	剥片状石器	刃部	(23)	34	8	7.50		2
3	第2号住 床面	石錐	完形	37	21	9	4.50	先端部縁辺磨滅	3
4	〃 〃	剥片状石器	基部	78	47	13	46.10		4
5	〃 〃	〃	完形	72	44	10	41.00		5

第9図　第1号住居跡出土石器(1～2)・第2号住居跡出土石器(3～5)

ら主に加工されている。両刃型の直刃である。

第2号住居跡出土土器（第9図3～5）3は平面形が三角形をした石錐で、先端部は背面右縁辺と腹面両縁辺から加工され、三角形の断面に作り出されている。4は箆状石器の基部で両面加工によって作り出されている。5の箆状石器の左縁辺は腹面から多く加工されている。両刃方の円刃である。

第3号住居跡出土石器（第10図1～24、第11図1～15）第10図1～6は石鏃である。1は両面加工によって作り出された凹基石鏃の完形品である。2は両面加工による平基石鏃で、先端部をわずかに欠く。3も先端部をわずかに欠いた平基石鏃である。加工は3縁辺とも片面から周縁に施されている。4も平基石鏃で、背面から3縁辺の周縁に加工が行なわれている。5は先端部と基部を欠いている。腹面は周縁に加工がみられる。6は先端部資料で、両面加工によって作り出されている。

7・8は石匙である。7は基部で、縦長剥片を背面から加工してつまみ部を作り出している。バルブ部は内彎しているバルブである。8は先端部で、右縁辺に直刃が作り出されている。先端には、直刃方向からのが樋状剥離がみられる。

9は両面の両端につぶれがみられる、ピエス　エスキーユである。

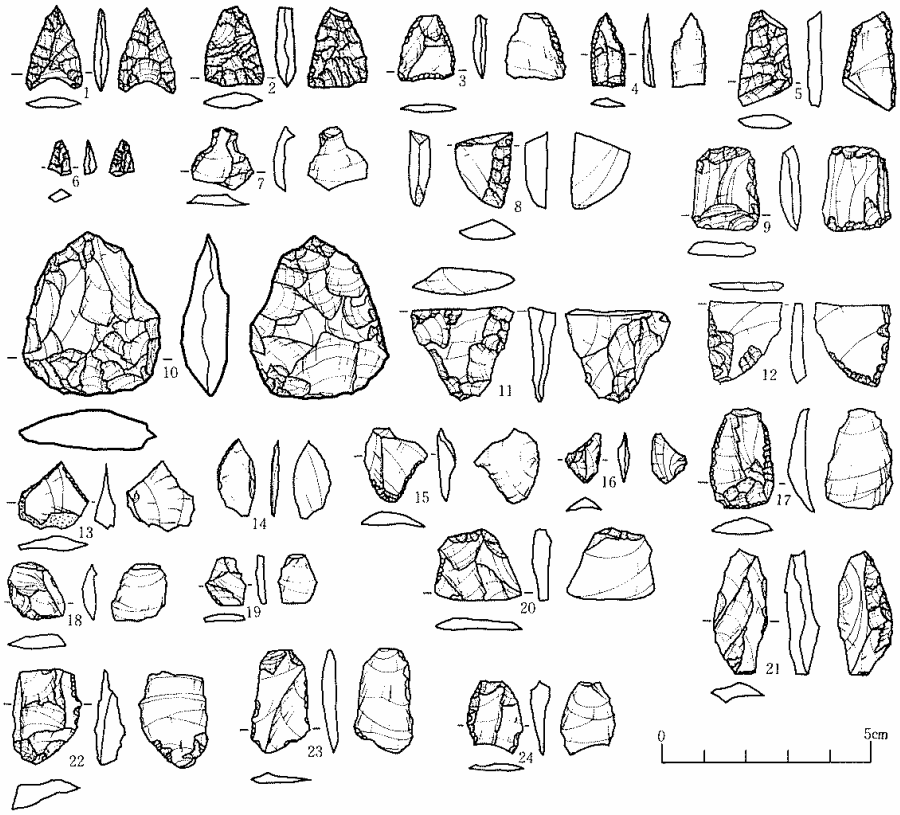
10は箆状石器である。両面加工によって両刃型の円刃が作り出されている。

11・12は不定形石器で、上辺は切断され、2側縁は鋭角で交わるように作り出されている。11は両面加工であり、12両面の周縁に加工がある。

13～24、第11図1～10は縁辺にマイクロ　フレイキングが連続的に、規則的にみられる石器である。刃こぼれ状をした使用痕とは区別して、ここでは「加工痕」のある剥片として扱う。

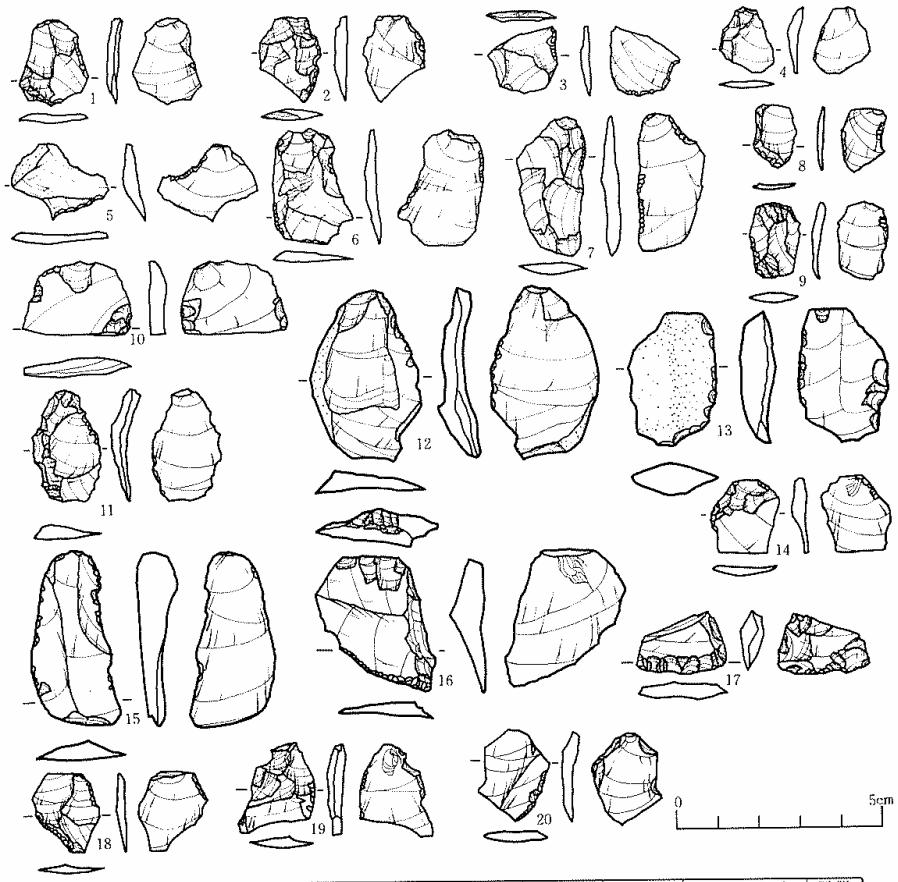
13・14には鋭い先端部が作り出されている。13は背面から両縁辺に加工を施している。14は右縁辺を切断した後に、左縁辺を背面から加工している。15・16は丸味を帯びた先端部が作り出されている。共に横長剥片を用い、背面から2縁辺を加工している。17は打面を除く周縁部に背面から加工が施されている。先端には円刃が作り出されている。18～20は1縁辺を背面から加工されている。18は下辺、19は左辺、20も左辺が加工されている。21は左辺に腹面から加工が行われている。22・23は1縁辺を交互に両面から加工している。22の右辺下部は腹面、上部は背面に加工がある。23の左辺下部は背面、上部は腹面に加工がある。24と第10図1は2縁辺を背面から加工されている。2～5は2縁辺に加工がみられるが、互いの加工面は異なっている。6～9には2縁辺に加工がみられるが、1つの縁辺は、交互に両面から加工されている。6の左辺下部は背面、上部は腹面に加工がある。また右辺下部には腹面、上部には背面に上部には背面に加工がみられる。10は下辺を切断した後、右辺下部を両面から、左辺を背面から加工している。

11～15は使用痕のある剥片である。剥片の縁辺にマイクロ　フレイキングが刃こぼれ状に観



図番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	図版
第10図 1	第3号住	1層	石鏃	完形	20	18	132	0.60		7－6
2	〃	(BJ36) 〃	〃	先端部欠	(19)	19	5	0.85		7
3	〃	(4区) 〃	〃	〃	15.5	13	2	0.45		8
4	〃	(42区) 〃	〃	完形	18	8	2.1	0.25		9
5	〃	(40区) 〃	〃	先端部・基部欠	(23)	14	3	0.83		10
6	〃	(59区) 〃	〃	先端部のみ	(8)	6	3	0.20		11
7	〃	(BK36) 〃	石匙	基部のみ	(15)	15	3	0.25	内彎するバルブ	12
8	〃	(49区)	〃	先端部のみ	(18)	14	5	1.30	先端部樋状剥離	13
9	〃	(12区) 〃	ピエス	完形	20	16	3	1.53		14
10	〃	(43区) 〃	篦状石器	〃	39	33	10	1.01		15
11	〃	(49区) 〃	不定形石器	〃	22	25	6	2.70	上辺折断	16
12	〃	(BK36) 〃	〃	〃	19	17	3.5	1.0	〃	17
13	〃	(22区) 2層	「加工痕」のある剥片		15	17	5	0.10	平坦なバルブ	18
14	〃	(21区) 1層	〃		18	7.8	2	0.65	左辺折断	19
15	〃	(BJ36) 〃	〃		17	15	32	0.20	平坦なバルブ	20
16	〃	(38区) 〃	〃		12	9	2.3	0.05	〃	21
17	〃	(47区) 〃	〃		24	15	4	1.49	〃	22
18	〃	(BK36) 〃	〃		13.1	14	3	0.47	内彎するバルブ	23
19	〃	(37区) 〃	〃		12	10	1.8	0.15		24
20	〃	柱穴No 2	〃		2.1	17	2.8	1.10	平坦なバルブ	25
21	〃	(61区) 1層	〃		30	13	5.6	1.20	〃	26
22	〃	(33区) 〃	〃		2.3	17	6	1.20	〃	27
23	〃	(28区) 〃	〃		25	14	2.2	0.90	〃	28
24	〃	(47区)床直	〃	先端部欠	27	13	4.2	0.50	〃	29

第10図　第３号住居跡出土石器



図番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(mm)	備考	図版
第11図 1	第3号住	(28区)1層	「加工痕」のある剥片		21	16	2.2	0.80	平坦なバルブ	7—30
2	〃	(61区)2層	〃		(21)	15	3	0.75	〃	31
3	〃	(BJ36)1層	〃		16.4	17	2	0.60	上辺折断	32
4	〃	(19区) 〃	〃		16	13	2.8	0.31	平坦なバルブ	33
5	〃	(19区) 〃	〃		19	24	2.2	0.61	〃	34
6	〃	(BK36) 〃	〃		28	19.3	2.8	2.46	〃	35
7	〃	(BK36) 〃	〃		34	17	3	2.75	〃	36
8	〃	(32区) 〃	〃		16	11	1.3	0.21	〃	37
9	〃	(37区) 〃	〃		18.7	12	2.3	0.40	〃	38
10	〃	(28区) 〃	〃		(17.5)	26.1	4.1	2.30	突出するバルブ	39
11	〃	(46区) 〃			27	17	4	1.32	平坦なバルブ	40
12	〃	(BK36) 〃			42.1	27	8.2	6.68	〃	41
13	〃	(47区) 〃	〃		32.1	21	7.8	6.07		42
14	〃	(31区) 〃	〃		18	17	2	0.48	平坦なバルブ	43
15	〃	(28区) 〃	〃		43	22	4.8	3.07	突出するバルブ	44
16	第4号住	〃	不定形石器		33	29	7.7	4.39	〃	45
17	第1号土壙		〃		(15)	21	5.8	1.32		46
18	〃		「加工痕」のある剥片		19.3	16.3	3	0.40		47
19	〃		〃		22	18	4	1.02	平坦なバルブ	48
20	〃	2層	〃		22	17	2.8	0.23	突出するバルブ	49

第11図　第３号住居跡出土石器（１～15）・第４号住居跡出土石器（16）・第１号土壙出土石器（17～20）

察される。

第4号住居跡出土器（第11図16）不定形石器で、背面を加工して鋭利な先端部が作り出されている。素材剥片には打面調整が行われている。

第1号土壙出土石器(第11図17～20)17は不定形石器で、下辺と右辺に刃部が作り出されている。18～20「加工痕」のある剥片である。18・19は2縁辺に、両面から交互に行なわれる加工が施されている。20は右辺に、両面から交互に加工が行なわれている。

(4) 遺構外出土土器

遺構外から出土している土器の大半は、胎土に植物繊維を含んでいる。胎土に植物繊維を含んでいない土器は4片出土しているにすぎない。そこで、植物繊維の有無によって分類を行った。なお、出土資料は図示できるすべてを掲載した。

第1類土器(第12図1～24、第13図1～28、第14図1～7)胎土に植物繊維を含む土器を一括したが、他に、内面に擦痕が施されていること、器面に凹凸があること、脆弱であることなどの共通した特徴がある。

〔口縁部資料〕（第12図1～10）

10点出土している。いずれも平口縁をした深鉢形土器である。器形は口縁部で直立するもの(1～3)と外反するもの(4～10)がある。

1は口縁部と文様帯をもつ唯一の土器である。口縁上部に竹管による左下り斜位の短沈線文がみられ、その下の口縁部文様帯には、ＲＬ縄文原体による側面圧痕文が2条右下り斜位に施されている。

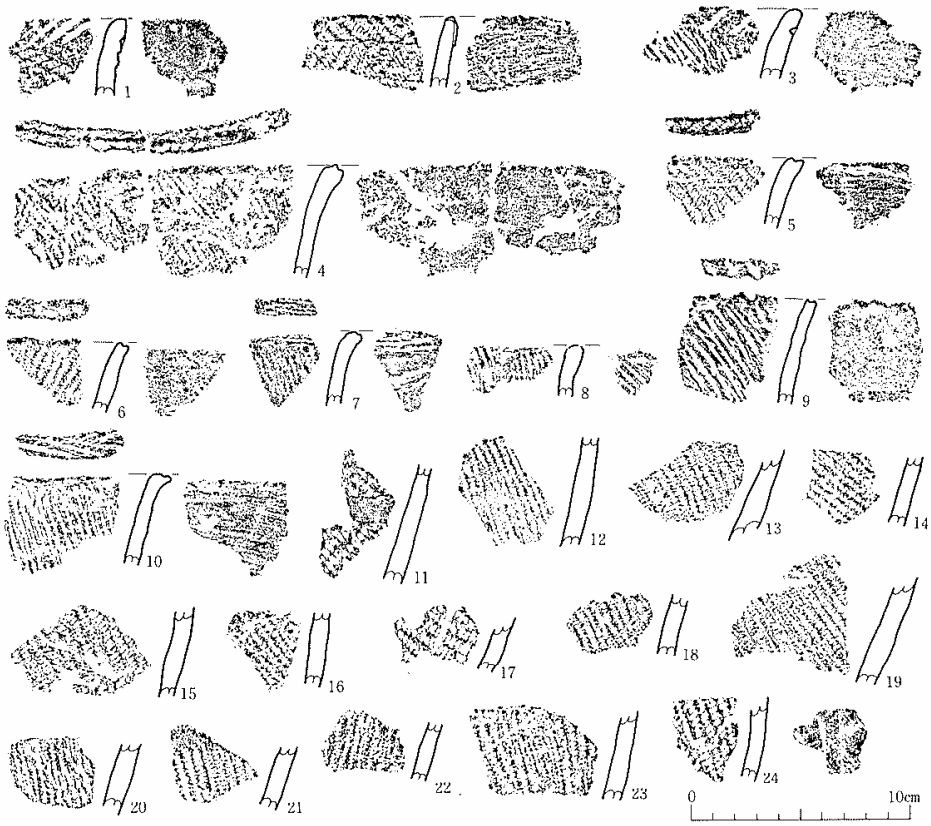
2は口縁上部に粘土帯を貼り付けて、複合口縁にした土器で、粘土帯上にはＲＬ斜縄文、その下にはＬＲ斜縄文が施され、羽状構成になっている。3はＬ撚糸文を右下り斜位に施した後口縁上部に竹管によって左下り斜位の短沈線文を施文している。

4は外面にＲＬ斜縄文が1施され、口縁端部にはＲＬ縄文原体が2条押圧されている。5は外面にＲＬ斜縄文が施され、口縁端部にはＲＬ縄文原体が半回転されている。6は外面にＬＲ縄文が施文され、口縁端部にはＬＲ縄文原体が1条押圧されている。7～9の外面にはＲ撚糸文が右下り斜位に施されている。また7･8は内面にもＲ撚糸文が施されている。9の口縁端部にはやや右下りに刺突文が施されている。10は外面にＬ撚糸文が右下り斜位に施されている。また、口縁端部にもＬ撚糸文が回転施文されている。

〔胴部資料〕（第12図11～24、第13図1～28、第14図1～7）

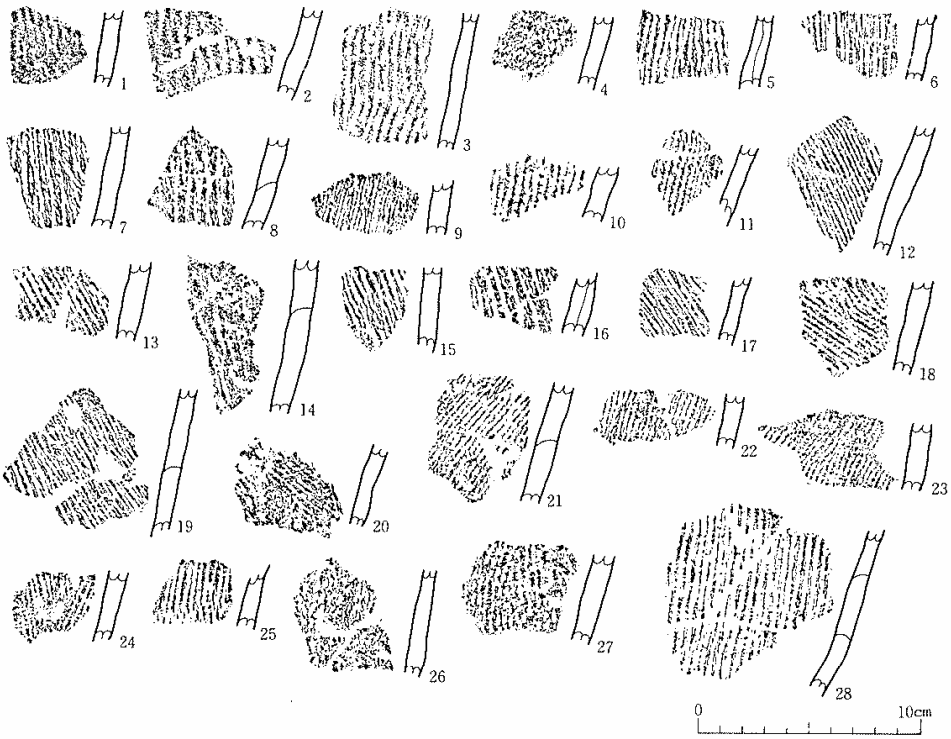
いずれも深鉢形土器の胴部である。

11は中央に無文部をはさんで上部にＲＬ縄文、下方にＬＲ縄文が施され、羽状構成になっている。



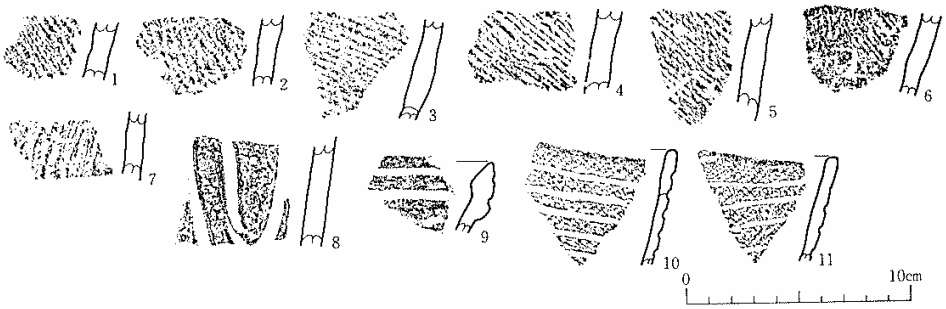
図番号	地区	層位	分類	部位	構成	原体	内面	胎土	備考	図版
第12図 1	CJ 35	1層	1類	深鉢・口縁部	?	R L 縄文	横位ナデ	繊維・砂質流石	表面左下り地文線文	4－23
2	CM24	〃	〃	〃	羽状	RL・LR縄文	横位擦痕	繊維・石英	複合口縁,0段3条LR→RL	24
3	CH38	〃	〃	〃	右下り斜位	L 撚糸文	〃	繊維・石英	口縁上部・左下り地文線文	25
4	CE31	〃	〃	〃	〃	R L 縄文	〃	繊維(多い)・長石・赤色粒		26
5	CD28	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・長石		27
6	CK27	〃	〃	〃	左下り斜位	L R 縄文	〃	繊維・石英・長石		28
7	CF34	〃	〃	〃	右下り斜位	R 撚糸文	横位R撚糸文	繊維・石英・砂質流石		29
8	BS35	〃	〃	〃	〃	〃	右下りR撚糸文	繊維・石英		30
9	不明		〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・長石	口縁端部右下り刺突	31
10	BS35	1層	〃	〃	〃	L 撚糸文	〃	繊維・石英		32
11	不明		1類	深鉢胴部	羽状	RL・LR縄文	〃	繊維・石英・長石・赤色粒		5－1
12	BP26	1層	〃	〃	右下り斜位	R L 縄文	〃	繊維・石英・長石・ガラス質粒		2
13	BT34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英(大)		3
14	BQ27	〃	〃	〃	〃	〃	縦位擦痕	繊維・砂質流石(石英)		4
15	CA26	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英多い		5
16	CJ 35	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英		6
17	BT33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維(多い)・石英	0段3条	7
18	BS26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英	0段3条、1段2条	8
19	BT34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・(大)	〃	9
20	CB27	〃	〃	深鉢胴部	縦位	R L 縄文	〃	繊維・石英		10
21	CE36	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英		11
22	CA26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・長石		12
23	CE25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英		13
24	BJ 33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・長石	内面工具痕あり	14

第12図　遺構外出土土器(1)



図番号	地区	層位	分類	部位	構成	原体	内面	胎土	備考	図版
第13図 1	BS26	1層	1類	深鉢胴部	縦位	LR縄文	不明	繊維石英		5—15
2	CB34	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	〃 〃	0段多条	16
3	BS37	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃		17
4	CK35	〃	〃	〃	交差	〃	〃	繊維・石英・長石		18
5	CA27	〃	〃	〃	縦位	R撚糸文	〃	〃	0段2条、節もどる	19
6	CB57	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・砂質変化		20
7	BA17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・赤色粒	0段2条	21
8	BA17	〃	〃	〃	〃	〃	右下り擦痕	繊維・石英	節もどる	22
9	BT41	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・白色軟粒		23
10	CA27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	節しまる。内面炭化物付着	24
11	不明	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英		25
12	BT35	〃	〃	〃	右下り斜位	〃	〃	〃	節しまる	26
13	CF34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英・砂質変化	節もどる	27
14	CK34	〃	〃	〃	〃	〃	縦位擦痕	繊維・赤色粒・石英	〃	28
15	CB37	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	〃	〃	29
16	CK33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・赤色粒・長石	〃	6—1
17	CF31	〃	〃	〃	〃	〃	多方向擦痕	繊維・石英・長石	〃	2
18	BT32	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・赤色粒	〃	3
19	CE31	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4
20	BT35	〃	〃	〃	〃	〃	横位＞縦位＞擦痕	繊維・石英・長石	〃	5
21	BQ34	〃	〃	〃	左下り斜位	〃	横位擦痕	繊維・石英・粒多い	節しまる。	6
22	BT33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英	節もどる。	7
23	BT38	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英粒多い	〃	8
24	不明	〃	〃	〃	交差	〃	〃	繊維・石英・赤色粒・砂質		9
25	BA30	〃	〃	〃	縦位	L撚糸文	左下り	〃	節しまる。	10
26	不明	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・長石	〃	11
27	CJ36	〃	〃	〃	〃	〃	横（左下り）＞擦痕	繊維・石英・赤色粒砂質変化	〃	12
28	BA17	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英	0段3条 節もどる	13

第13図　遺構外出土土器(2)



図番号	地区	層位	分類	部位	構成	原体	内面	胎土	備考	図版
第14図 1	CT35	1層	1類	深鉢・胴部	右下り斜位	L撚糸文	横位擦痕	繊維・石英	節もどる	6-14
2	CB41	〃	〃	〃	〃	〃	右下り擦痕	繊維・石英・赤色粒	〃	15
3	CK36	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・赤色粒	〃	16
4	BO27	〃	〃	〃	〃	〃	剥落	繊維・石英	〃	17
5	不明	〃	〃	〃	〃	〃	横位擦痕	繊維・石英・長石	〃	18
6	CE35	〃	〃	〃	〃	〃	〃	繊維・石英	〃	19
7	BM44	〃	〃	〃	左下り斜位	〃	左下り擦痕	繊維・石英・長石	〃	20
8	CP35	〃	2類	〃	「U」字大	LR縄文	縦位磨き	石英・雲母		21
9	CR12	〃	〃	深鉢・口縁部	横位文		横位ナデ	石英・長石		22
10	CN4	〃	〃	〃	〃	LR縄文	〃	石英		23
11	CN4	〃	〃	〃	〃	LR縄文	横位磨き	石英		24

第14図　遺構外出土土器(3)

12～19にはR縄文原体を横位回転した、斜縄文が施されている。20～24はRL縄文原体を斜位に回転施文したもので、条は縦位に走っている。24の裏面には、縦位に板状工具を使用した整形痕がみられる。

第13図1～3は、LR縄文原体を斜位に回転施文したもので、条は縦位に走っている。4はLR縄文が交差している。

第13図5～11はR撚糸文が縦位に施されている。12～20はR撚糸文が右下り斜位に施されている。21～23はR撚糸文が左下り斜位に施文されている。24はR撚糸文が交差している。

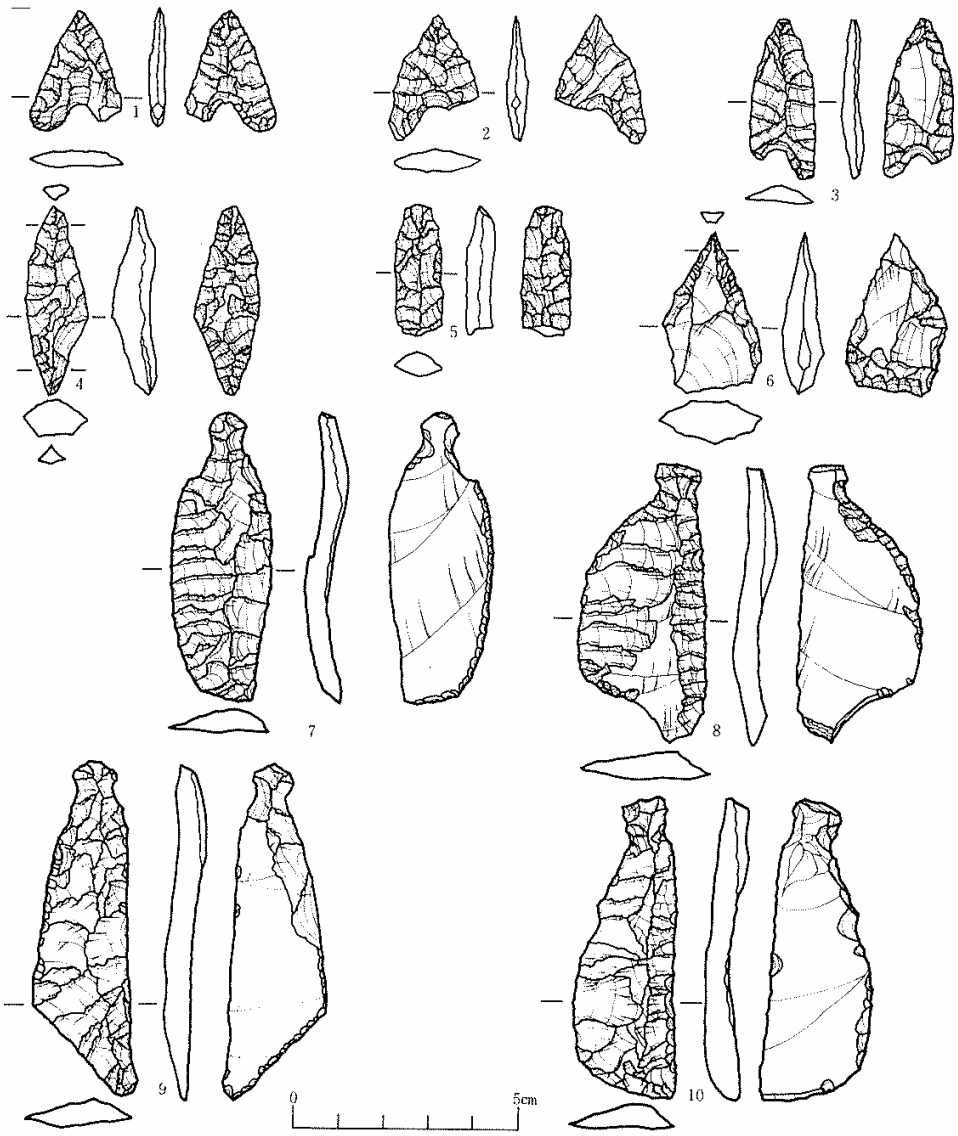
25～28はL撚糸文が縦位に施されている。第14図1～6はL撚糸文が右下り斜位に、また7は左下り斜位に施文されている。

第2類土器(第14図8～11)胎土に植物繊維を含んでいないものをまとめた。

8は深鉢形土器の胴部で、LR縄文を縦位に施文した後、棒状工具によって「U」字状の文様が施されている。9は深鉢形土器の口縁部で、沈線文が2条横位に施されている。内面の口縁下には稜が作り出されている。

10・11は同一固体で、波状口縁をした深鉢形土器の口縁部である。口縁下にLR斜縄文を施文後、横位に沈線を数条施している。

第2類土器は、文様の特徴から縄文時代後期前葉から中葉のものと考えられる。



図番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	図版
第15図 1	CM33	1層	石鏃	基部欠	(27.1)	20.9	3.4	1.40	基部一部欠損	7 - 50
2	不明		〃	〃	(28.2)	19.1	5.0	1.40	〃	51
3	BP27	1層	〃	先端部・基部欠	(36.3)	14.7	3.7	2.05	先端部基部一部欠損	52
4	CM33	〃	石錐	完形	42.2	14.0	7.7	3.30		53
5	BT33	〃	〃	先端部・基部欠	(28.9)	12.1	5.8	2.12		54
6	CM33	〃	〃	完形	36.0	22.5	9.5	5.52		55
7	BQ30	〃	石匙	〃	65.1	22.2	5.0	8.00	左辺刃部角25°，右辺刃部角40°	56
8	不明	1	〃	先端部欠	(62.3)	28.8	5.9	9.95	左辺刃部角23°，右辺刃部角45°	57
9	CA26	1層	〃	完形	75.1	24.2	5.1	9.42	左辺刃部角23°，右辺刃部角51°，下辺刃と切れ	58
10	BN34	〃	〃	先端部欠	(67.4)	23.7	5.0	11.00	右辺刃部角23°，右辺刃部角50°，下辺稜状剥離	59

第15図　遺構外出土石器(1)

(5) 遺構外出土石器

石鏃（第15図1～3）いずれも凹基石鏃で、2側縁は外彎弧をなしている。1･2は基部、3は先端部と基部を欠損している。1･2は両面加工であるが、3は背面に主な加工があり、腹面は周縁に加工がある程度である。

石錐(第15図4～6)4は平面形が菱形をした完形品で、先端部の断面図は三角形をしている。5は上下端を欠いている。4･5は両面加工によって作り出されている。右の平面形は三角形をしている。先端部は背面から加工され、菱形の断面形に作られている。また基部は、腹面に加工がみられる。

石匙（第15図7～10、第16図1～2）第15図7～10・第16図1は、2側縁が直刃と曲刃とからなっている。8は先端部を欠いているため不明だが、7･9の先端部は斜刃(やや丸味を帯びている)、10と第16図1の先端部は斜刃(直線的)をしている。どの刃部も片面加工によって作り出されているが、曲刃側の腹面に、背面加工に先行して周縁への加工がみられる。また、10は先端部に直刃側からの樋状剥離がみられる。いずれも縦長剥片を素材にしており、バルブとつまみ部は一致している。

第16図2の2側縁は、共に直刃で、先端部は円刃になっている。先端部円刃の刃部角は60°で、40°前後の他の石匙より角度が大きい。縦長剥片を素材にしており、バルブは先端部に認められる。

錐状石器(第16図3～5)3･5は三角形状の平面形をもつ完形品で、2側縁は両面加工によって作り出されている。下縁は素材の縁辺を利用して刃部にしている。4は刃部破片で、両面加工によって作り出されている。3･4は両刃型の直刃、5は両刃型の円刃である。

不定形石器(第17図1～6、第18図1～2)第16図1は2側縁の腹面を加工し、先端を鋭利に作り出している。いわゆるコンパージェント　スクレイパーである。2･3は背面から加工され、円刃が作り出されている。4は背面上下及び右縁辺に加工がみられる。平面形は平行四辺形をし、各縁辺は直刃をもつ。いわゆるサイド　スクレイパーである。5は両面加工によって刃部が鋸歯状に作り出されている。また、6は片面加工によって刃部が鋸歯状に作り出されている。第17図1は下縁辺と右縁辺に刃部がある。2は名縁辺に腹面から加工して刃部を作り出している。

「加工痕」のある剥片(第18図3)2縁辺を細かく加工して先端を鋭利に作り出している。右縁辺の下部は背面、上部は腹面から加工されている。また左辺の下部は腹面から、上部は背面から加工されている。

使用痕のある剥片(第18図4～7、第19図1～5)いずれかの縁辺に、マイクロ　フレイキングが刃こぼれ状にみられるものをまとめた。縦長剥片が多い。第19図5は主要剥離面が剥離される以前に、背面の作業面に剥離がある剥片を用いている。

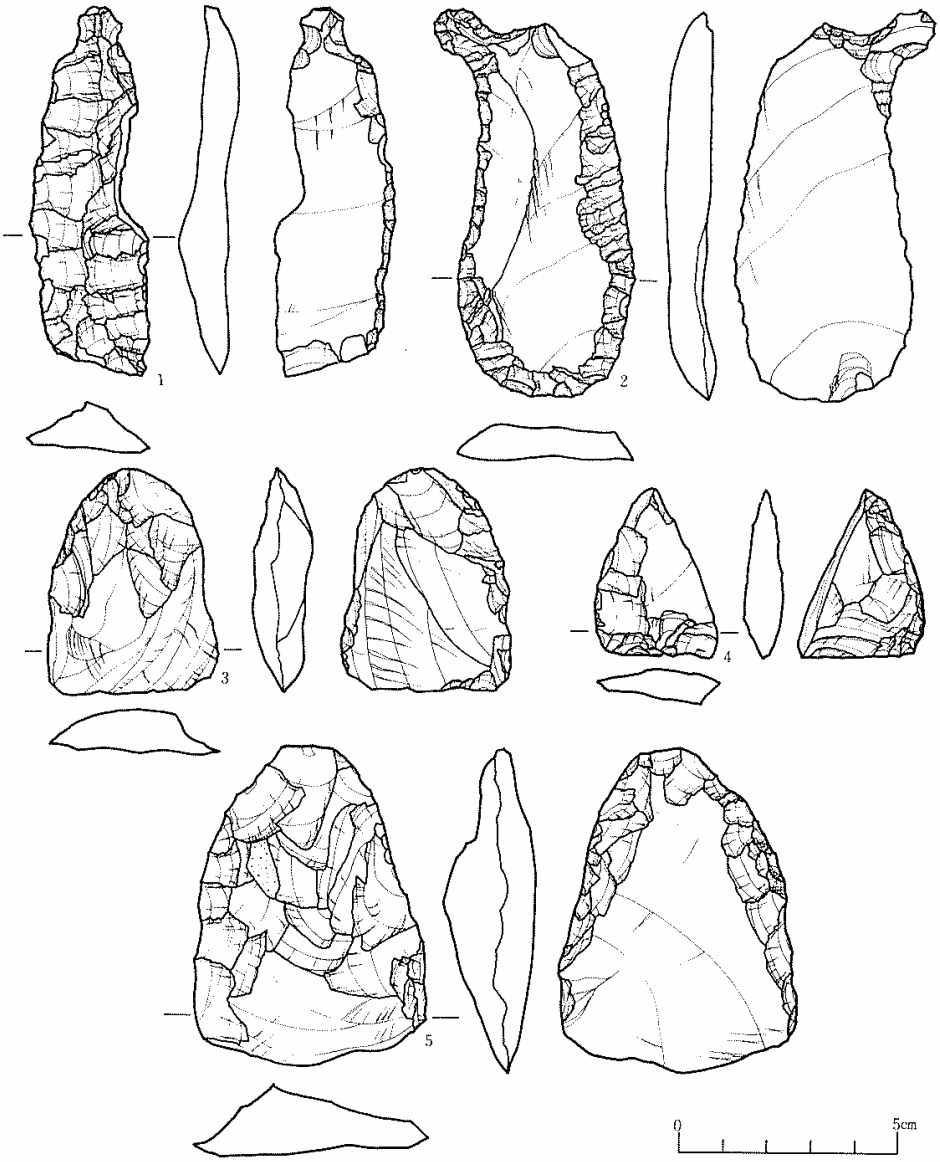


図　番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	図版
第16図　1	BR25	1層	石匙	一部欠損	84.9	27.8	9.8	19.58	左辺刃部角45°、右辺刃部角55°	7－60
2	CD24	〃	〃	完形	87.6	39.8	8.2	39.69	左辺刃部角51°、右辺刃部角60°	61
3	BS43	〃	篦状石器	〃	56.2	38.0	9.9	22.9		8－1
4	CA27	〃	〃	欠損	(38.0)	22.1	6.8	7.60		2
5	表採		〃	完形	73.1	52.8	16.9	56.77		3

第16図　遺構外出土石器(2)

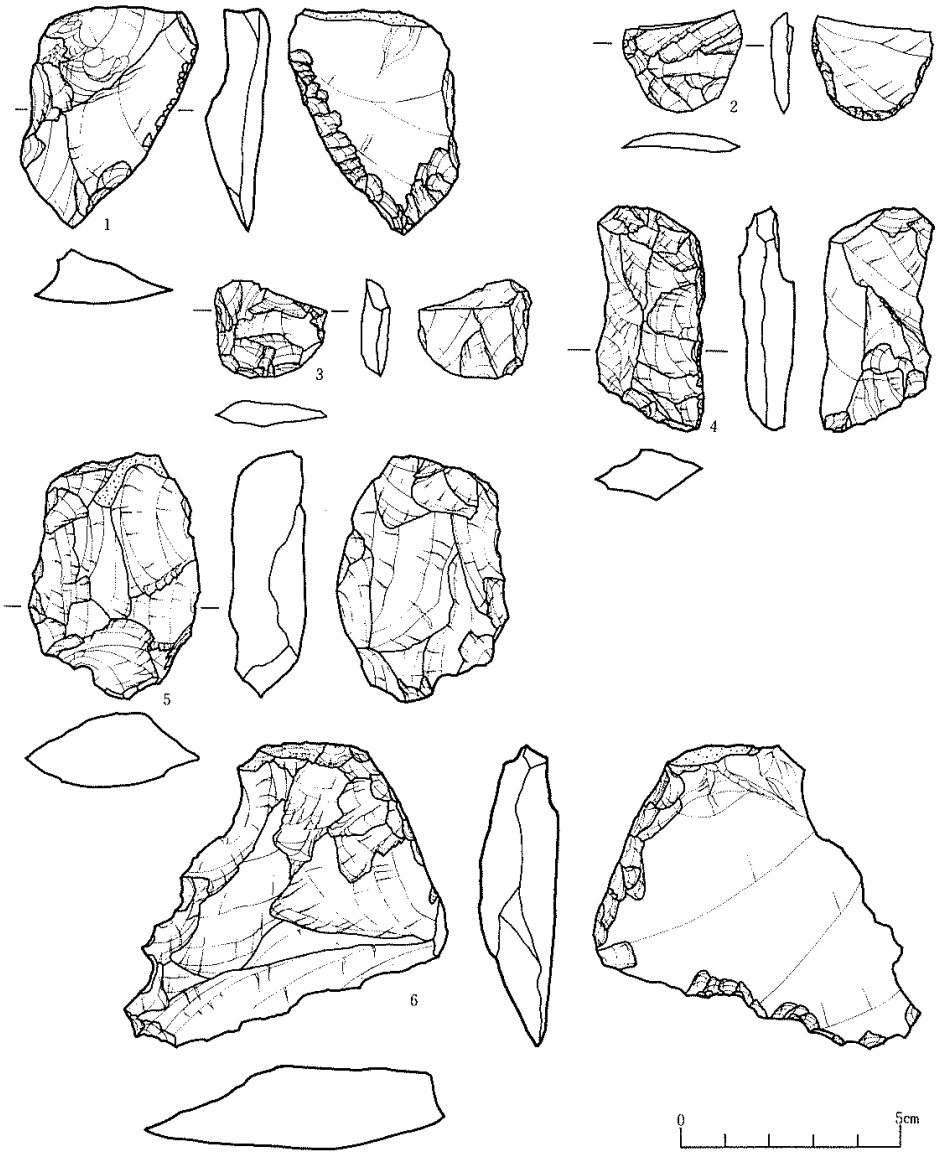
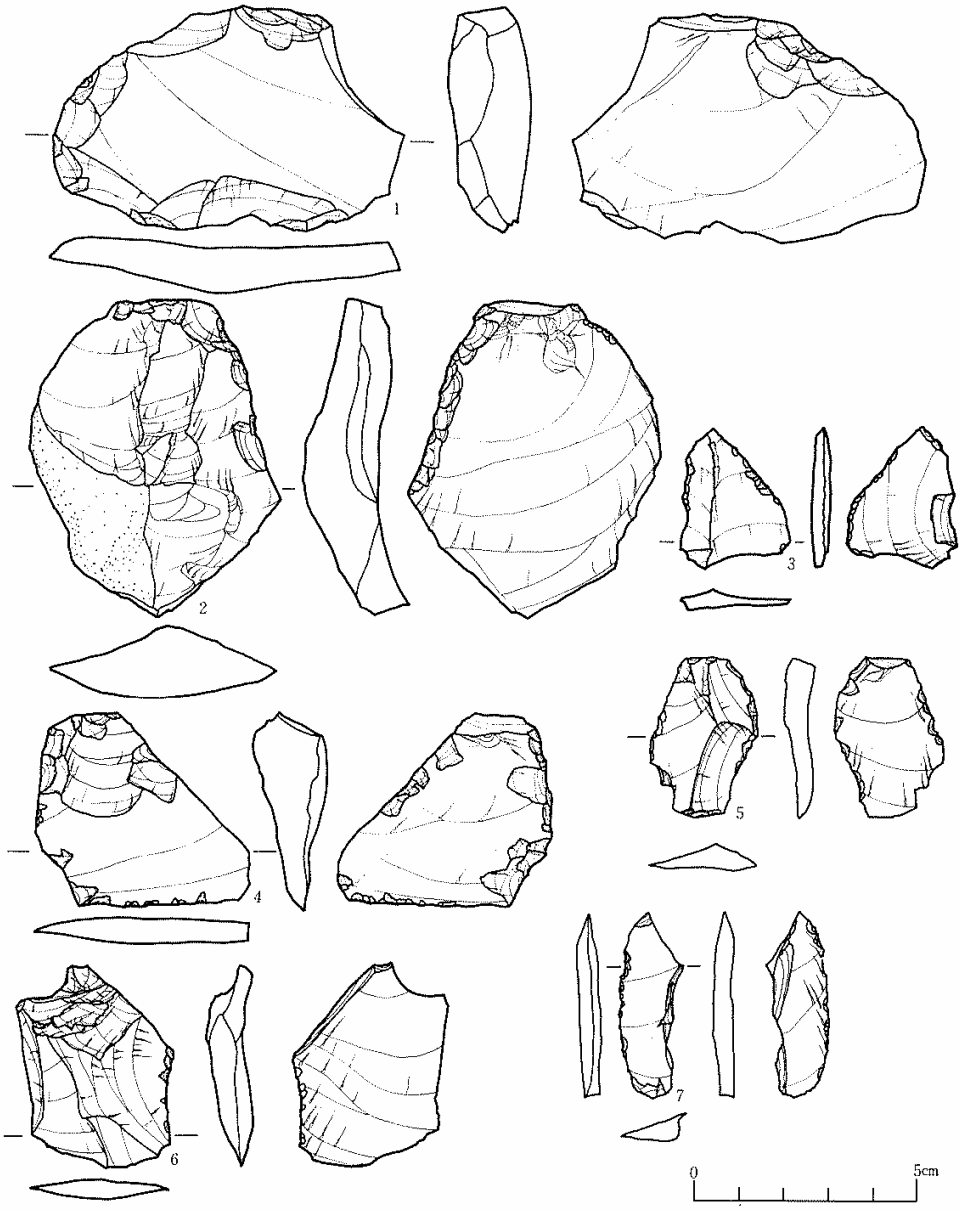


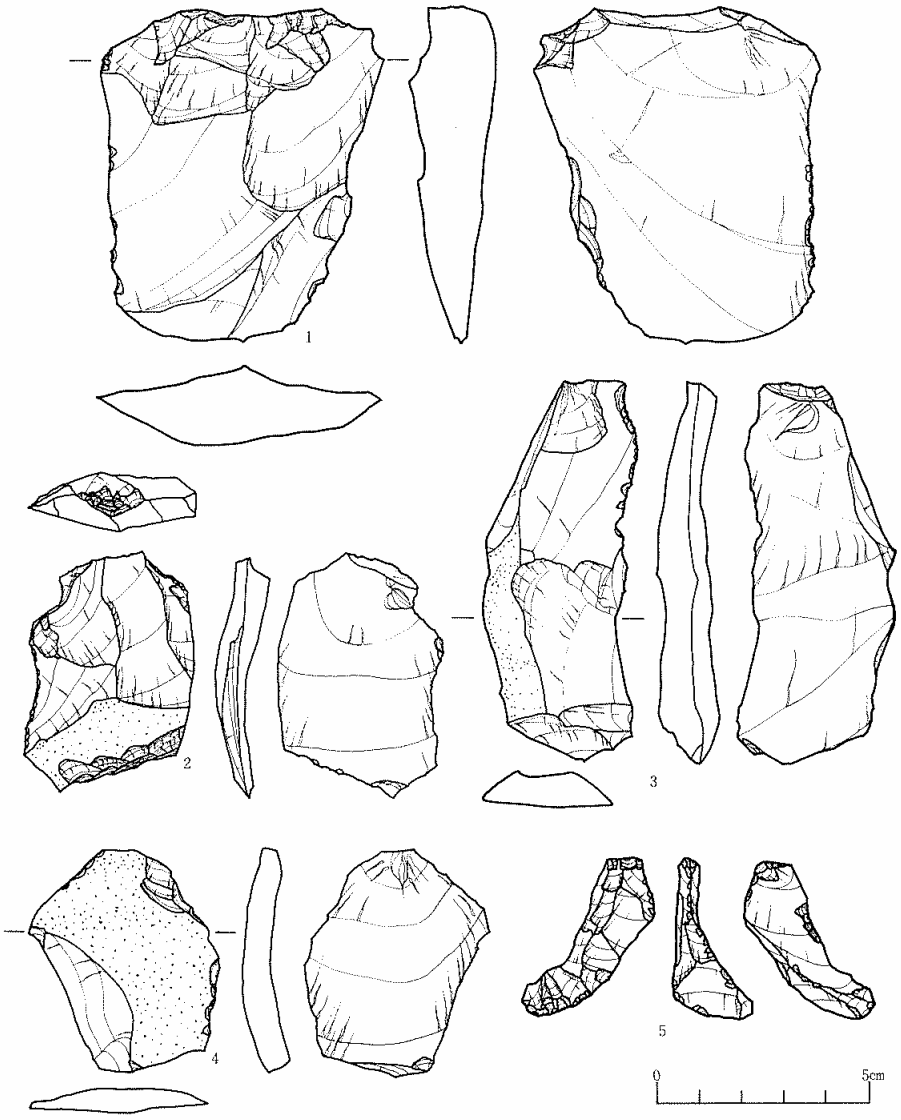
図　番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(mm)	備考	図版
第17図　1	CB34	1層	不定形石器	縦長剥片	50.8	39.2	12.2	21.61	突出するバルブ	8－4
2	BP26	〃	〃		22.9	26.0	3.8	2.32	上辺折断	5
3	BS26	〃	〃		22.0	25.1	6.7	3.90	〃	6
4	CA34	〃	〃		50.5	24.1	11.0	12.6		7
5	BS26	〃	〃		55.3	38.9	16.8	36.03		8
6	BQ95	〃	〃	縦長剥片	52.0	71.2	18.1	71.90	突出するバルブ	9

第17図　遺構外出土石器(3)



図番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	図版
第18図 1	CF33	1層	不定形石器	横長剥片	50.3	78.0	10.1	59.5	突出するバルブ	8・10
2	CE30	〃	〃	縦長剥片	70.2	56.1	16.2	54.5	〃	11
3	BQ39	〃	「加工痕」ある剥片	横長剥片	31.0	24.8	4.2	2.02		12
4	BT34	〃	使用痕ある剥片	縦長剥片	43.0	47.9	16.4	2.99	突出するバルブ	13
5	BP26	〃	〃	〃	45.1	24.2	5.7	4.40	〃	14
6	BQ27	〃	〃	〃	44.9	31.0	8.6	2.99		15
7	BI38	〃	〃	〃	41.8	9.0	6.0	2.10		16

第18図　遺構外出土石器(4)



図番号	地区	層位	分類	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	図版
第19図 1	BQ27	1層	使用痕ある剥片	縁長剥片	80.1	67.2	18.5	79.71	突出するバルブ	8 - 17
2	CJ38	〃	〃	〃	57.7	39.6	13.1	24.5	〃	18
3	BP26	〃	〃	〃	89.9	36.2	8.8	38.3	〃	19
4	BP26	〃	〃	〃	53.1	44.8	6.0	18.65	〃	20
5	不明	〃	〃	〃	37.7	30.9	4.9	5.20	〃	21

第19図　遺構外出土石器(5)

Ⅳ 考　　察

1．土器の特徴と編年的位置

原体＼構成	羽　状	右下り斜位	縦　位	左下り斜位	交　差	小　計
ＲＬ縄文	＞2	7	13	0	0	22
ＬＲ縄文		3	0	4	1	10
Ｒ撚糸文	0	16	15	4	1	36
Ｌ撚糸文	0	5	8	1	0	14
不　明	0	1	0	0	0	1
小　計	2	32	36	9	2	81(83)

（羽状縄文の原体は個別に加算してある）

第２表　大倉遺跡出土土器の原体と構成一覧表

遺構内から出土している土器は胎土に植物繊維を含み、器面に凹凸があり、内面に擦痕が施されているという共通性がある。外面にはＲＬ縄文、ＬＲ縄文、Ｒ撚糸文、Ｌ撚糸文をもつものがある。このうちＲＬ斜縄文とＲ撚糸文が第1号住居跡の床面から出土している。またＬＲ縄文、Ｒ撚糸文、Ｌ撚糸文の土器が第2号住居跡の床面から出土している。住居跡床面から出土している土器は少ないがＲＬ斜縄文、Ｒ撚糸文、ＬＲ縄文、Ｌ撚糸文は住居跡床面上に分布していることから共伴していると考えられる。住居跡堆積土中から出土している土器は出土状況からすれば共伴しているとはいえない。しかし、胎土や器面、及び外面文様の特徴が床面から出土している土器と類似していることから、床面出土土器と同時期のものである可能性が高い。

遺構外から出土した土器のうち第1類土器は、胎土、器面状態内面手法に住居跡床面から出土している土器と同様の特徴がある。出土地点を見ると、その大部分は第3号住居跡より西で埋設土器遺構より北の遺跡北西部(第2図参照)から出土している。同一層に面上に分布しているとはいえないため、出土状況から共伴関係を明らかにすることはできない。

遺跡における出土状態から共伴関係がはっきりしている資料は少ないが、遺構内出土及び遺構内出土第1類土器には胎土、器面状態、内面手法に強い斉一性がみられる。従って以下ではこれらの土器を一括して第1類土器として扱い、器形や文様上の特徴を明らかにした上で編年的な位置づけを検討したい。

(1) 第1類土器の特徴

大倉遺跡第1類土器には胎土、器面、内面手法の斉一性に加えて、以下の特徴がある。

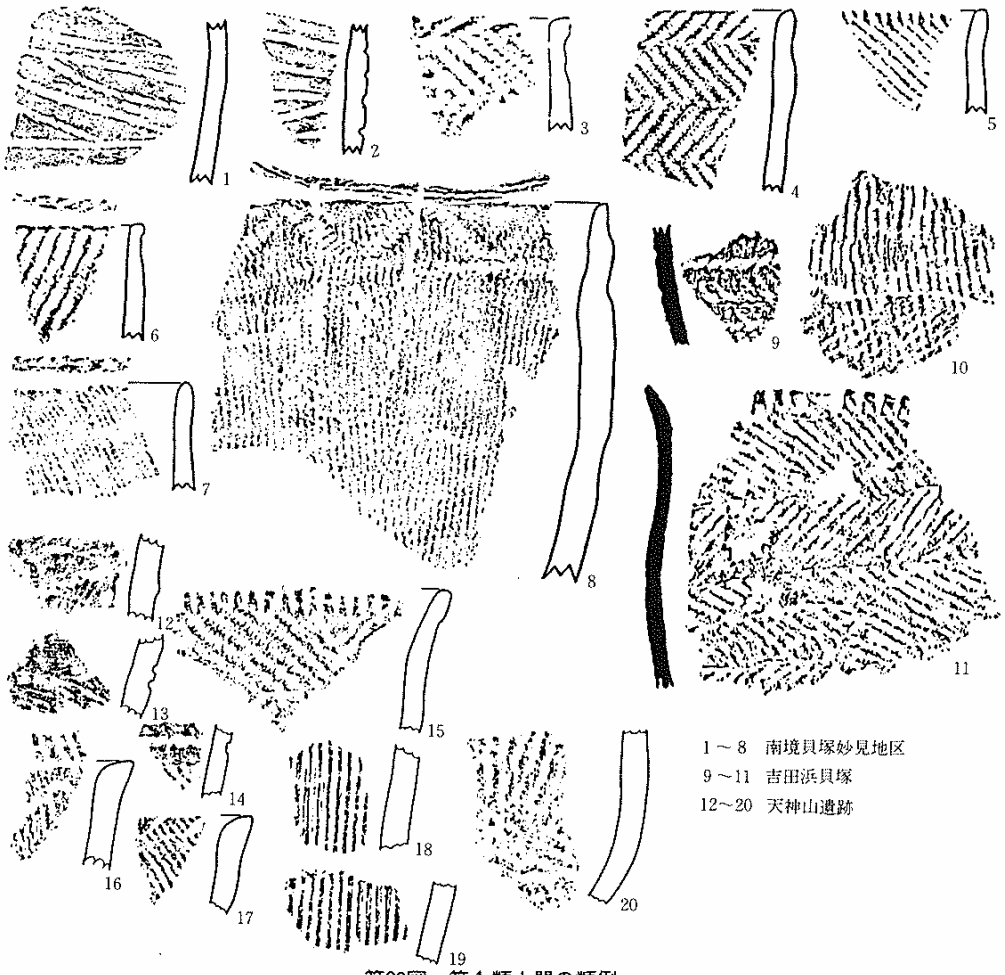
①器形には口縁部が直立する形と外反する形がある。

②口縁端部に刺突文や、縄文原体の圧痕文、撚糸文をもつものがある。口縁上部には斜位の端沈線文が施されるものがある。

③口縁部文様帯中には2段撚の縄文原体が斜位に抑圧されるがモチーフは不明である。

④胴部文様の原体には縄文と撚糸文がある。そのうち最も多いのはＲ撚糸文である胴部文様の構成では右下り斜位と縦位構成が多用されている。他に左下り斜位と羽状構成がある。

⑤口縁上部に施される短沈線文の傾きは地文の傾きと90°異なり、羽状構成との関連が認められる。口縁上部が短沈線文と地文の組み合わせで羽状構成をとる土器と胴部が羽状構成をと



第20図　第１類土器の類例

る土器の器形は口縁部が直立している。これに対して、口縁端部に文様が施文されている土器は斜位や縦位の胴部構成をもち、器形は口縁部が外反している。

(2) 第1類土器の年代

大倉遺跡第1類土器には、胎土に植物繊維を含み、内外面は凹凸に富み、内面に擦痕をもつ特徴を加えて、上述した①～⑤の特色がある。

このような特徴をもつ土器は、石巻市南貝塚妙見地区第1層土器（後藤1969）、七ヶ浜町吉田貝塚第１土器（後藤1968）、岩出山町天神山遺跡ⅣB類（小徳1982）、白石市明神裏遺跡（後藤他1976）中に類例(第20図)が求められる。

これらが遺跡から出土している土器をもとに、第1類土器を補足すると、器形は尖低あるい

は丸底をした、平口縁の深鉢形土器であること、口縁部文様帯に2段撚の原体による側面圧痕文で連弧文が描かれていること、口縁上部に刺突文をもつ土器が含まれることの3点が加えられる。しかし、宮城県内の資料では、口縁部文様体をもつ土器の胴部半部に施される原体及び条の構成が明らかな土器はない。この点については、同類と思われる福島県石川町の源平Ｃ遺跡第III群第1類土器（第21図3）を参考にすると理解しやすい。

この第1類土器は、今のところ、同じ繊維土器である縄文条痕土器群や羽状縄文土器群（林1965）と層位的に明確な状態で出土した例はない。このため、別な観点から年代を求めておき将来に備えておきたい。

縄文条痕土器群は林謙作氏によって素山ⅡＢ式→上川名Ⅰ式→梨木畑式→船入島下層式に編年されている（林1965）。このうち、大倉遺跡第1類土器の特徴②～④に近い様相のものには、塩釜市船入島貝塚貝層黒土出土土器がある。この土器の全体像は不明だが、現在までに公表された資料（角田1936・伊東1940）及び記述(加藤1950・林1965・伊東1981)をもとに特徴をまとめると以下のようになる。

①器形　尖底の深鉢形土器で、胴部で緩やかに立ちあがり、口縁部で外反する。

②口縁端部　刺突文などのスリットが施される。

③縁部文様帯　縦位の線を基準にして、左右に傾斜が施される幾何学的なモチーフが2段撚の縄文原体による側面圧痕文で施される。

④胴部文様斜縄文、縦位縄文が多いが羽状縄文（ＲＬ縄文とＬＲ縄文の組み合わせによる）及び撚糸文も認められる。

⑤内面　条痕及び縄文が施され、擦痕もある。

羽状縄土器群は林謙作氏によって上川名Ⅱ式→桂島式→大木式に編年されている。このうち第1類土器特徴①～⑤と近い内容をもつ土器には、上川名貝塚上層出土土器（加藤1951）がある。それらは以下のようにまとめられる。

①器形　丸底あるいは掲底風丸底をした深鉢形土器で、胴部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形と、胴部中ほどに括れをもち、口頸部で外反し、口縁部が鋭く内傾する器形がある。

②口縁上部　刺突文あるいは斜位の短沈線文が施される。

③口縁部文様帯　ａ、渦巻と弧線が組み合うモチーフが1段撚の縄文原体の側面圧痕文で描かれ、空白には短沈線文が充填される。

ｂ、菱形区画中に渦巻が1段撚の縄文原体の側面圧痕文描かれる。

ｃ、菱形区画が平行沈線文で描かれ、内部には円形竹管文が刺突される。

ｄ、糸文と平行沈線文によって横位文が描かれかれる

第21図　早期末葉～前期初頭・口縁部文様帯モチーフの比較

e、截竹管刺突文によって同心円文が描かれる。

④胴部文様　羽状縄文（結束と非結束）が多用されるが、斜縄文もある。

⑤内面　研磨及び擦痕がある。

縄文条痕土器群と羽状土器群は上川名貝塚で層位的に出土しており、下層から出土している土器と同様に条痕をもっている、船入島貝塚層下出土土器の特徴①～⑤は、上川名貝塚上層出土土器の特徴①～⑤に先行していることは明らかである。

第1類土器は、口縁部に刺突をもち、胴部に斜縄文が多用される点、及び口縁部文様帯に2段撚の縄文原体を押圧して文様を描く点で、船入島貝塚例に類別され、口縁上部に刺突文や短沈線文が施されることでは、上川名例と密接な関係がみられる。

また差異は口縁部文様帯中のモチーフと内面手法に顕著にみられる。同種の施文具で描かれていることから、船人鳥貝塚例の幾何学的な文様は、上川名貝塚例の渦巻と弧線が組み合う文様へと変化していると考えられるが、型式学的にはこのままでは連続しない。両者の文様は、連弧文を間に入れて考えることによって同一の系譜としてスムーズに理解される。すな

わち、縦位の線を基準に左右に施されていた斜線（第21図1）が連結して弧線文化し（第21図3）、その後、渦巻と弧線が組み合う（21図4）という流れを通して連続する。

ここにおいて、第1類土器の位置づけがはっきりしてくる。第1類土器は前後する土器といくつかの特徴を共有しているが、口縁部文様帯中のれ連弧文は先行している土器の特徴③をうけて成立し、後出する土器徴の特徴③ａを成立させる基盤となっているのである。従ってもう1つの独自性である、内面の擦痕は、条痕から研磨へと大勢が変化する流れをつなぐ手法として位置づけられる。

以上のことから、第1類土器は、船入島貝塚貝層黒土出土土器→大倉遺跡第1類土器→上川名貝塚上層出土土器という縄文早期末葉から前期初頭の土器群の変遷を通して位置づけられる。しかし、第1類土器を早期末葉とすべきか、あるいは前期初頭とすべきかを判断するには、資料が不足している。このことは型式設定が可能かを含めて、今後の課題としておきたい。

2、石器について

遺跡から出土している土器は、大半が縄文時代早期末葉から前期初頭に位置づけられる土器であることから、石器も同一時期の所産と考えたい。

遺跡内からは石鏃6点、石錐3点、石匙2点、箆状石器4点、ピエス　エスキーユ1点、不定形石器3点、「加工痕」のある剥片34点、使用痕のある剥片5点が出土している。また遺構外からは石鏃3点、石錐2点、石匙6点、箆状石器3点、不定形石器8点、「加工痕」のある剥片1点、使用痕のある剥片9点が出土している。

（1）石器群の特徴

石鏃は9点出土している。そのうち基部形態が判明しているのは7点で、内訳は凹基4点、平基3点である。平基のうち2点は周縁を片面から加工しているもので、両面加工による石鏃とは区別される。従って両面加工による石鏃は凹基が多いことが指摘できる。周縁を片面加工された2点の石鏃は、第3号住居跡の堆積土から出土したもので、「加工痕」のある剥片と技術的な特徴を共有している。

石錐にはつまみ部のあるものとないものがある。また両面加工によって尖頭部を作り出している類と片面加工によって尖頭部を作り出している類がある。

石匙には2側縁が直刃と曲刃からなる類と2側縁とも直刃からなる類がある。前者の先端部は鋭利に作り出されており、そこには第10図8、第15図10のように樋状剥離がある例もある。
これを使用痕とすれば、先端部は今日のカッターナイフのようにあてがわれて使われることもあったと考えられる。この型の石匙は早期末～前期前半によくみられることは既に秦昭繁氏によって指摘されている。また後書の型の先端にある円刃は、浅い剥離からなり、刃部角も大きいことから、エンド　スクレイパーの刃部と類似している。

箆状石器を製作技術の観点からみると、①側縁と刃部片面加工で作り出されている②2側縁のみ両面加工で作られ、刃部は素材の鋭利な部分を利用している③2側縁と刃部が両面加工で作り出されているの3つに区分される。しかし、形態的には、平面形が三角形をし、刃部は両刃型であるという共通性がある。

(2) 第3号住居跡出土の石器

第3号住居跡の堆積土中からは、剥片に細かな加工を片面から施した石器が出土している。これらは以下のように区分できる。

①定形石器　a）石鏃　B）石匙

②特定の刃部を作り出したもの　a)先端を尖らせたもの　B)円刃を作り出したもの

③1～3縁辺に刃部をもつもの　a）縁辺を片面から連続的に加工している　B）縁辺を5～10㎜の「まとまり」を単位とする剥離によって両面から交互に加工している。

第3号住居跡から出土している石器には定形石器も含まれ、器種組成は一般的な二次加工によって作り出される石器のあり方と大きな違いはない。1回の剥離が小さいこと、片面加工であることが特徴になっている。また折断したもの(第10図11、12、14、第11図3)もある。一部には折断調整石器（阿子島1979）との関連がみられるが、この種の石器を大倉遺跡独自の特徴とすべきか、あるいは一定の時間的、空間的な広がりを持っているかを今後注意して検討していく必要があろう。

(3) 石器製作の問題

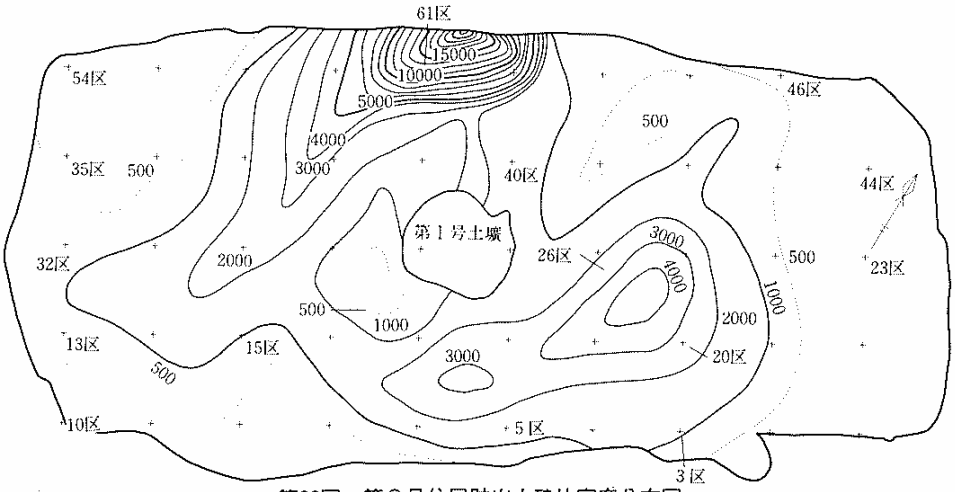
石器が作られる場合、一般には①原石採取→②剥片剥離（原石から石器の素材になる剥片を剥離する）→③二次加工（素材剥片を加工して石器にする）の工程がある。

大倉遺跡には石核がなく、大形の剥片も少ないため①、②工程が行われた可能性は少ない。一方、第3号住居跡の堆積土からは約65，000点に及ぶ砕片検出されており、③工程が行なわれたことを示している。従って①、②工程は原石が採取できる白石川の河原で行われ、遺跡内には必要に応じて剥片が持ち込まれ、③工程が行なわれたといえよう。

ところで、第3号住居跡内から出土している石器には、第10図7の石匙をはじめ内彎しているバルブをもっているものが認められる。内彎しているバルブは二次加工時の剥片に多く行われることから、大倉遺跡では③工程のときに出る剥片を素材にした石器製作が④工程として行なわれているようである。

次に石器製作の場について第3号住居跡から出土している砕片をもとに検討する。

第22図は第3号住居跡内の各区から出土している砕片を密度化して、その相関を表わした図である。多量に出土している61区の東にあたる62区では極端に密度が薄い。これに対して南西側では51区、37区、31区とざん漸移的に減少している。もう一つの集中区である26区でも南西部で



第22図　第３号住居跡出土砕片密度分布図

は漸移的に減少している。

垂直分布では、第1層に多く含まれていることが第1表から理解されるが、層理面上に分布している傾向はなく、砕片は「層中の分布」(林1973)として捉えられる。砕片は第2層や床面にも認められるが、本来は第1層中の遺物と考えてよいであろう。

次に堆積土の状況をみたい。第3号住居内堆積土の第1層あるいは第2層は、北東から南西に流入した状態を示している。この状態は遺跡の自然地形と対応しており、堆積土を自然流入土とする根拠にもなっているが、堆積土の流入状況と堆積土中に含まれている砕片の分布が一致している点は重要であろう。つまり、2つの集中地点に見られる南西方向への分布の広がりは、第1層が自然流入した結果と考えられる。となれば、2つの集中地点は、第3号住居跡が廃絶され、窪地に転化し、堆積土が流入した時点で61区と26区内に集積したといえる。従って上述した③、④工程の石器製作は、第3号住居跡内、あるいはその周辺で行われたことになる。

3、遺構の特徴

検出された４軒の竪穴住居跡は、出土遺物からみて、いずれも縄文時代早期末～前期初頭の所産である。これらには比較的規模が大きい住居跡（第2・3号住居跡）と小さい住居跡（第1・4号住居跡）がある。特に第3号住居跡は長軸が10mもあり、この時期の住居跡としては、全国的にみても大形の部類に属する。また、柱穴の配置をみると、壁際にピットをもつだい1・2号住居跡と、壁際にピットをもたない第3・4住居跡がある。さらに、住居跡内に炉をもつ第1・2号住居跡ともたない第3・4住居跡がある。

早期末から前期初頭の住居跡はさまざまな属性からなり、定型性を示さないといわれている（高

橋1982、鈴鹿1983)。大倉遺跡で同様のあり方をしている。しかし、前期前半になると、大形住居では壁際にピットをもつ例(山形県東根市小林遺跡2ａ･2Ｂ号住居跡大木2式期)があり、小形住居でも壁際にピットをもつ例（名取市今熊野遺跡の59軒の住居跡大木1～2ａ式期）がある。このことから、前期前半には、壁際にピットをもつ住居跡）が一般化しているといえる。
もちろん、宮城県内でも早期後半の段階でこの種の住居跡がある(仙台市北前遺跡第5号住居跡)が、壁際にピットを有する住居跡が前期前半に普及していることは、東北地方だけでなくもっと広い地域で捉えられる事実(宮本1983)である。しかし、残念ながら、出土土器を検討した限りでは、住居跡間に時期的な差は認められない。

第1号土壙も出土遺物からは、住層跡と同時期の所産と考えられる。しかし、第3号住居跡の堆積土を掘り込んで構築されていることから、第3号住居跡よりも若干新しいといえる。

埋設土器遺構は、土器遺構からすると、他の遺構と同時期のものといえる。

このように、大倉遺跡から検出された各遺構の時期は、いずれも第1類土器がもっている時間幅に収まっている。しかし、第3号住居跡と第1号土壙には切り合い関係があり、より小さい意味での時期差の存在が確認される。

4、集落の構成

東と西は沢によって区画され、南は道端遺跡を経て、白石川が東流していることから、大倉遺跡の調査は一つの段丘面を全面にわたって行っていることになる。その結果、縄文時代早期末から前期初頭に属する竪穴住居跡4軒、土壙1基、埋設土器遺構1基が検出された。

大倉遺跡周辺は七ヶ宿ダム建設に伴って分布調査が行われており，この時期の遺跡は大倉遺跡だけであると確認されている。ちなみに大倉遺跡に後続する、上川名Ⅱ式が出土している原頭遺跡は、大倉遺跡の西約1.5㎞の地点にある。

このようなことから、該期の遺構は、遺跡が所在している七ヶ宿ダム付近を合わせても、本遺跡で発見きれたものだけであると理解される。
出土遺物からみると、遺構間に期間的な差はみられなカッターが、前々節で第3号住居跡内堆積土中に含まれている砕片は、住居跡が廃絶された後に積していることがわかり、第3号住居跡は、「住居の場」として一定期間利用された時期と「石器製作、あるいは砕片投棄の場」として一時的に利用された時期が区画される。

さらに前節で明らかなように、第3号住居跡の堆積土を掘り込んで第1号土壙は構築されている。上述した2つのことから、第3号住居跡においては、そこに「住んだ者」とそこの窪地を「利用した者」が区分される。そのため「利用した者」の住居の場」は付近にある同時期の

住居跡、この場合、第1・2・4号中住居跡のいずれかになる。
　すなわち、場の問題から検討すると、4軒の竪穴住居跡は集落景観として同時に存在していたのではなく、少なくとも2期にわかれていたことになる。この場合、個別的な属性として、より前期的な施設をもつ第1・2号住居跡が集落の構成として若干新しくなるかもしれないが、可能性を指摘するにとどまる。

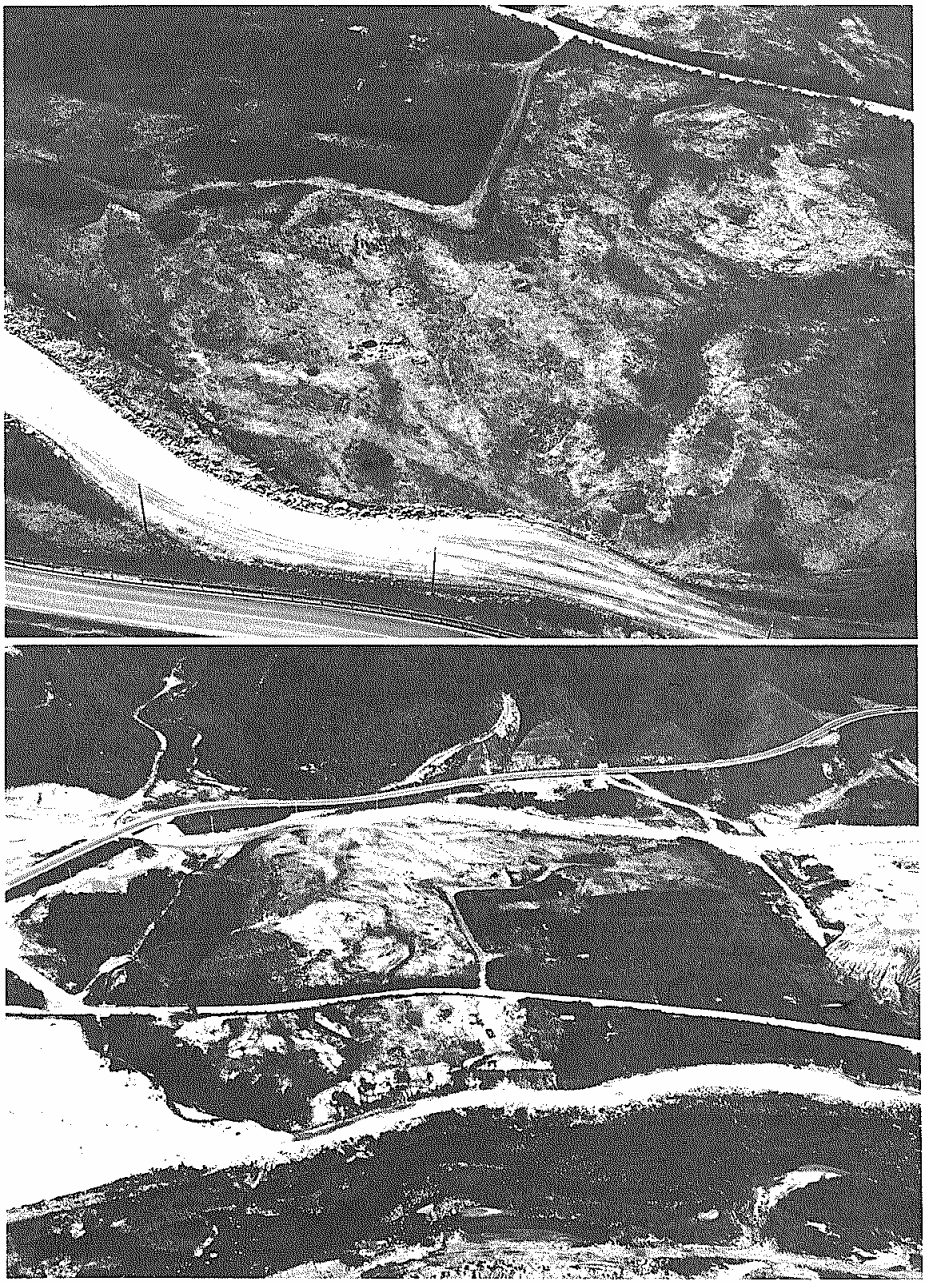
Ⅴ ま　と　め

1、大倉遺跡は白石川左岸の河岸段丘上に位置する。
2、検出された遺構は竪穴住居跡4軒、埋設土器異遺構1基、土壙1基がある。住居跡のうち第2・3号住居跡は、長軸が10mほどあり、大形の部類に属している。遺構の時期は出土遺物から縄文時代早期末葉あるいは前期初頭と考えられる。
3、出土遺物には、土器・石器ともに縄文時代早期末葉あるいは前期初頭のものが大部分を占める。他には縄文時代後期の土器が若干出土している。
4、調査は広範囲に及んでいることから、該期の遺跡の広がりは調査範囲内に収まっている。

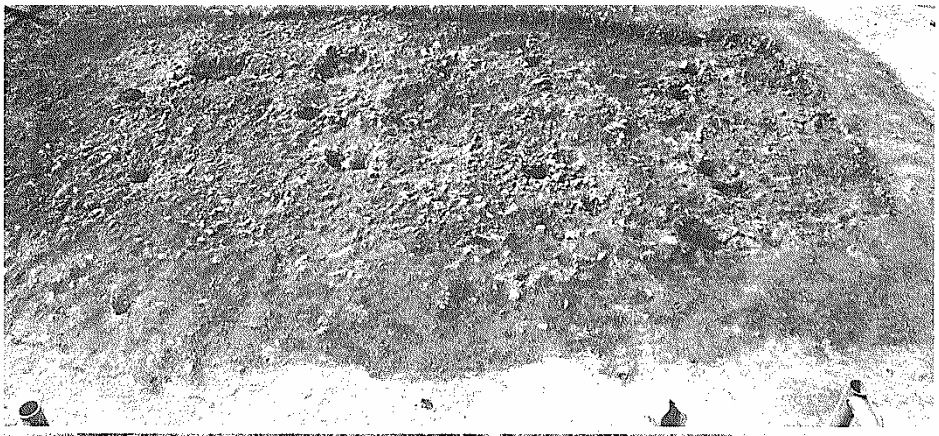
＜引用・参考文献＞

阿子島香1979　「折断調整石器」『聖山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
阿部　恵1980　「宇賀崎貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集
伊東信雄1940　「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」東北帝国大学法学部奥羽史料調査部研究報告第2
伊東信雄1981　「船入島貝塚」　宮城縣史34　史料集Ⅴ考古資料
加藤　孝1951　「宮城県上川名貝塚の研究－東北地方縄文式文化の編年学的研究（1）－」『宮城学院女子大学研究会論集Ⅰ』
加藤　孝1960　「考古学上より見た塩竈市周辺の遺構」塩竈市史Ⅲ、別篇Ⅰ
後藤勝彦1968　「宮城県七ヶ浜吉田浜貝塚〔Ⅰ〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編
後藤勝彦1969　「埋蔵文化財代四次緊急調査概報－南境貝塚－」宮城県文化財調査報告書　第20集
後藤勝彦・片倉信光・中橋彰吾1976　「明神裏遺跡」白石市史　別巻　考古資料篇
小徳　晶1982　「天神山遺跡」宮城県文化財調査報告書第89集
笹森健一1981　「縄文時代前期の住居と集落（1）」土曜考古3
佐藤鎮雄・佐藤正俊1976　「小林遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第8集
佐藤洋他1982　「北前遺跡」仙台市文化財調査報告書第36集
鈴鹿良一1983　「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－松ケ平Ａ遺跡（第1次）－」福島県文化財調査報告書第118集
鈴鹿良一1984　「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－松ケ平Ａ遺跡（第2次）－」福島県文化財調査報告書第129集
関　豊他1981　「中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書」二戸市教育委員会
高橋信一他1982　「母畑地区遺跡発掘調査報告書Ⅷ－唐松Ａ遺跡－」福島県文化財調査報告書第106集
角田文衛1936　「陸前船入島貝塚の研究」考古学論叢3
中村良幸1982　「大形住居」『縄文文化の研究』8　社会・文化　雄山閣
芳賀英一1980　「母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ－源平Ｃ遺跡－」福島県文化財調査報告書第87集
泰　昭繁1977　「松原」置賜考古学会
林　謙作1965　「縄文文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学』Ⅱ河出書房新社
林　謙作1973　「層序区分」物質文化21
林　謙作1982　「縄文早・前期の土器－北海道南部、東北地方－」『縄文土器大成』第1巻　講談社
宮城県教育委員会1973　「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書第33集
宮本長二郎1983　「古代の住居と集落」『講談日本技術の社会史』7　日本評論社
山内幹雄1983　「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭の土器編年について」しのぶ考古8
四井謙吉1982　「長瀬Ｂ遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第36集

図　　版

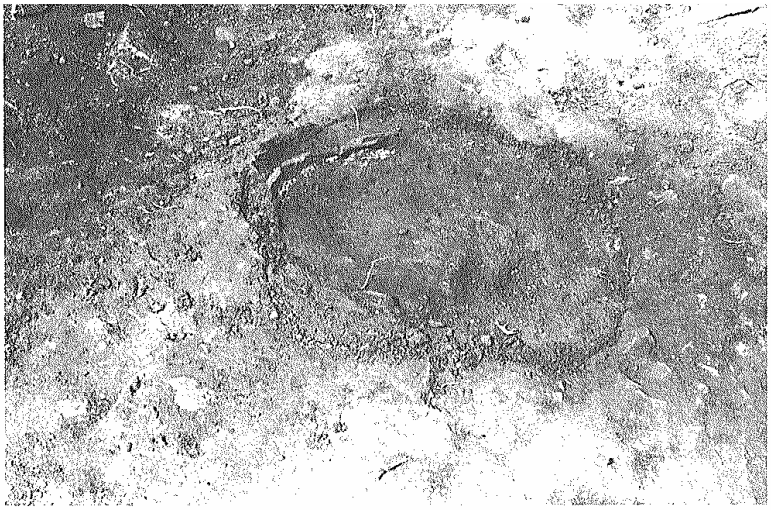


図版１ 上 ： 大倉遺跡遠景（北から）
下 ： 大倉遺跡・道端遺跡遠景（南から）

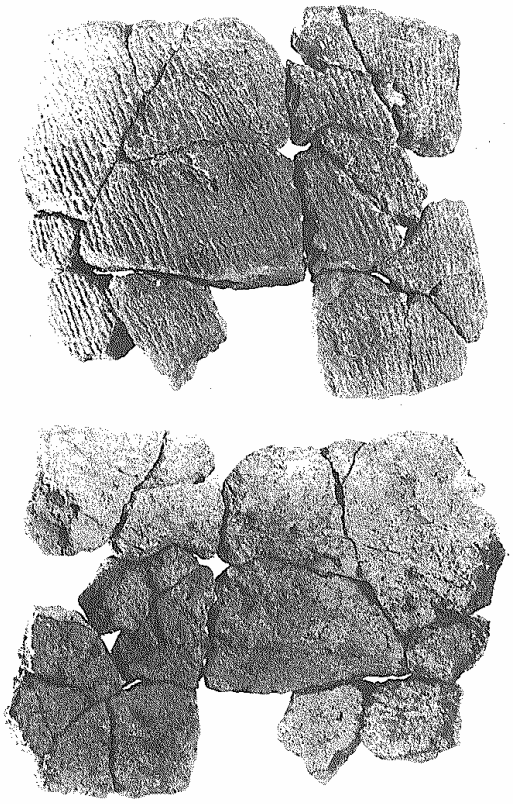


図版２　上：第３号住居跡
　　下：第４号住居跡

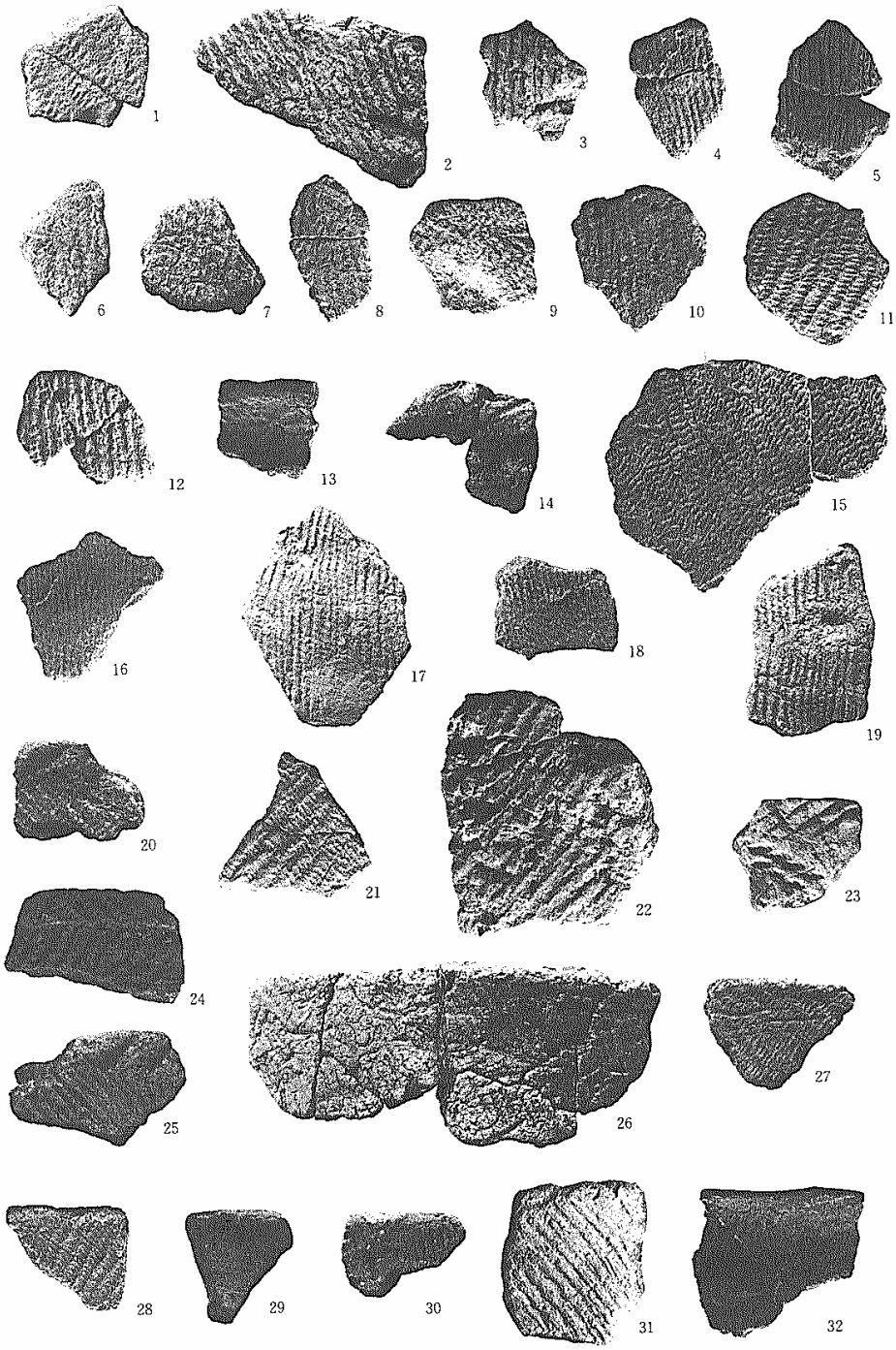
埋設土器遺構



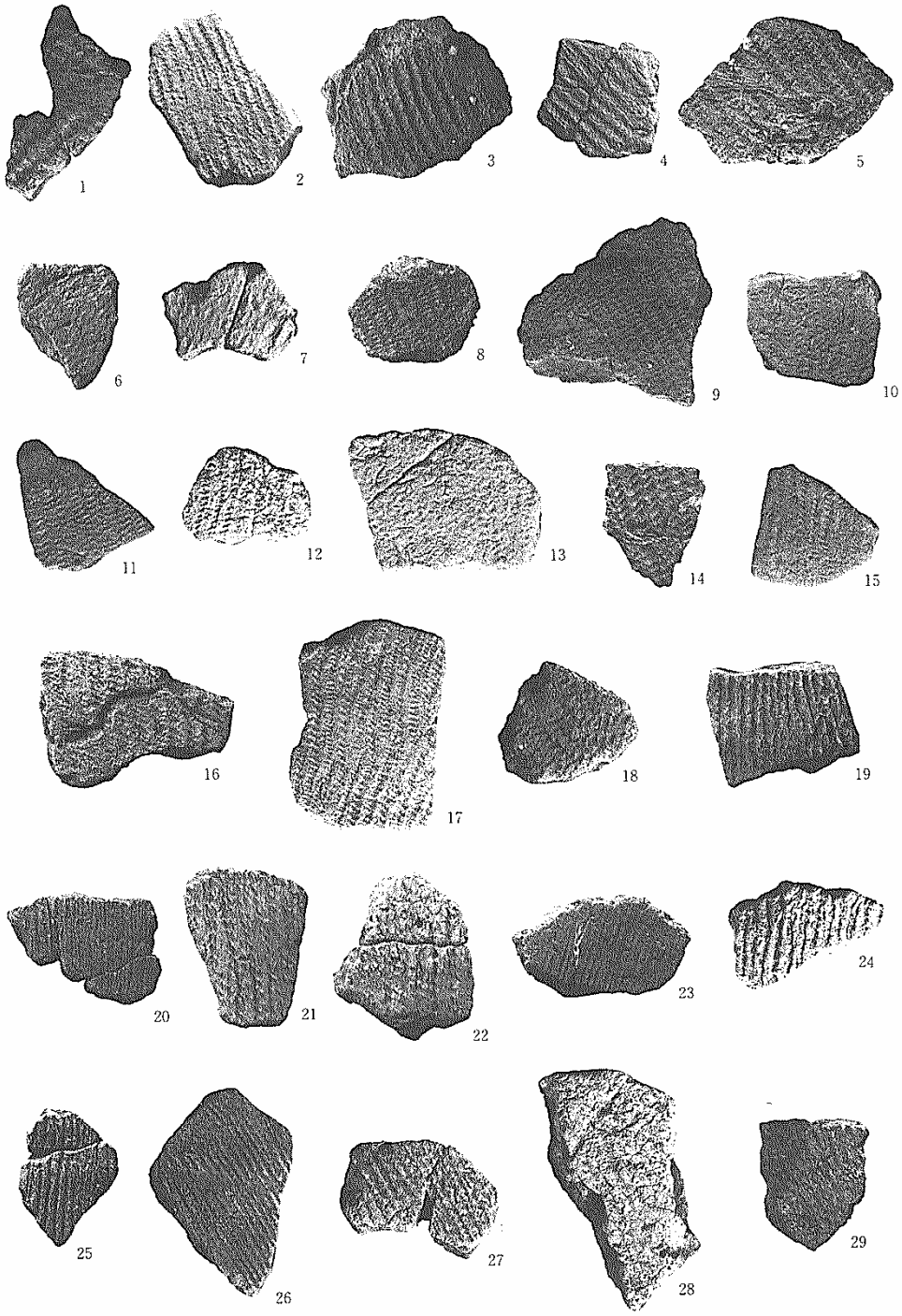
埋設土器



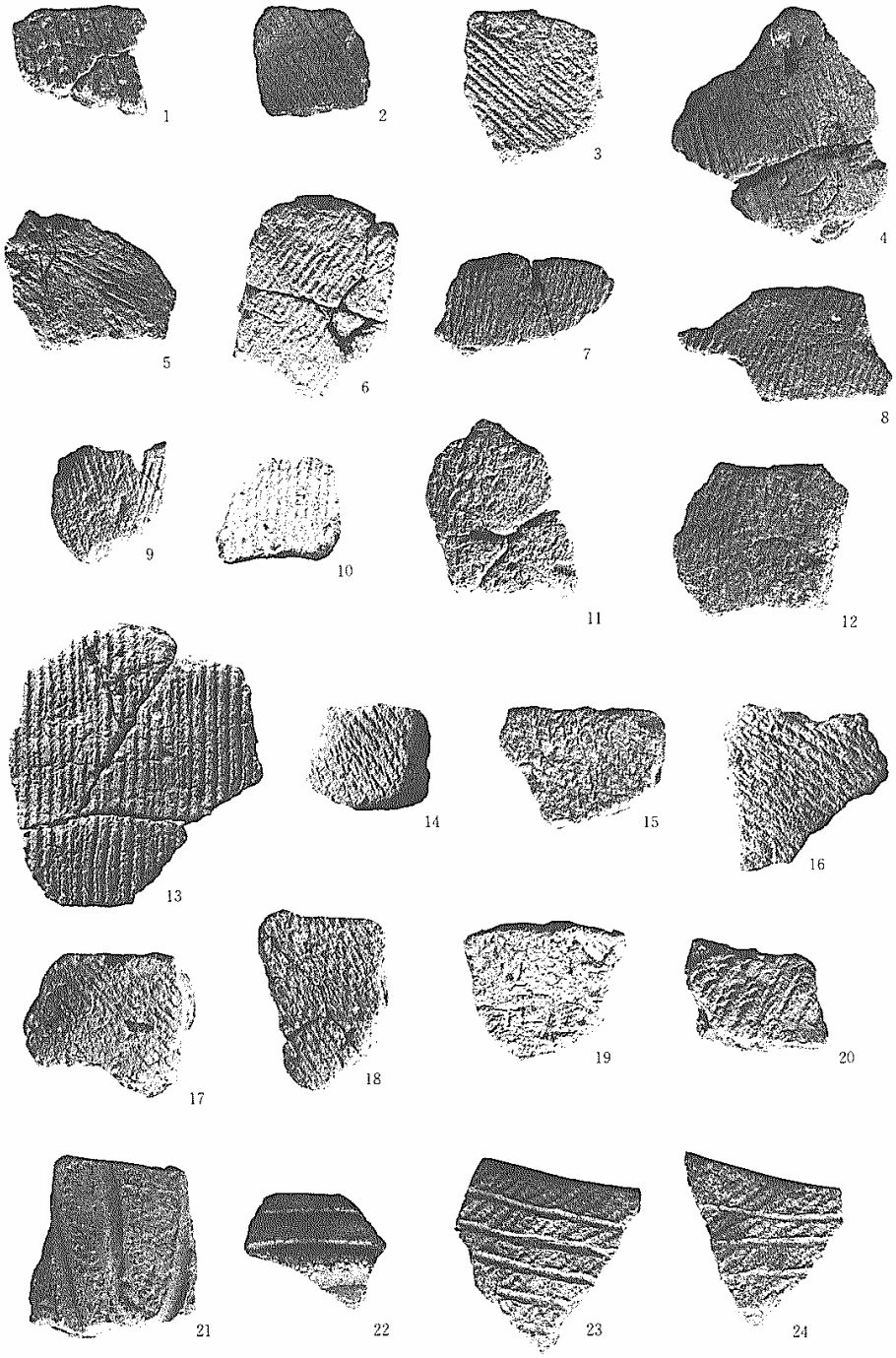
図版３



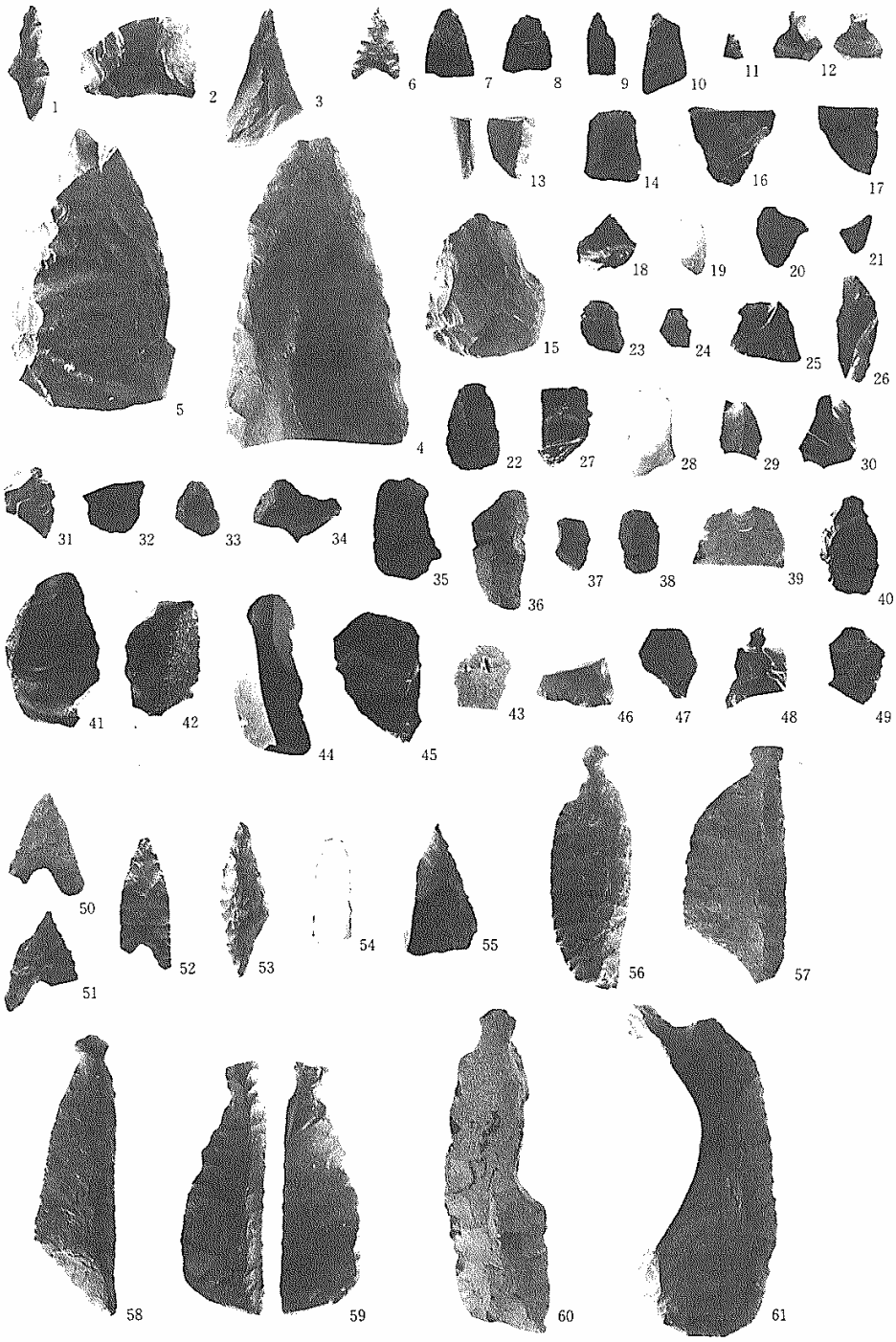
図版4　遺構内・遺構外出土土器



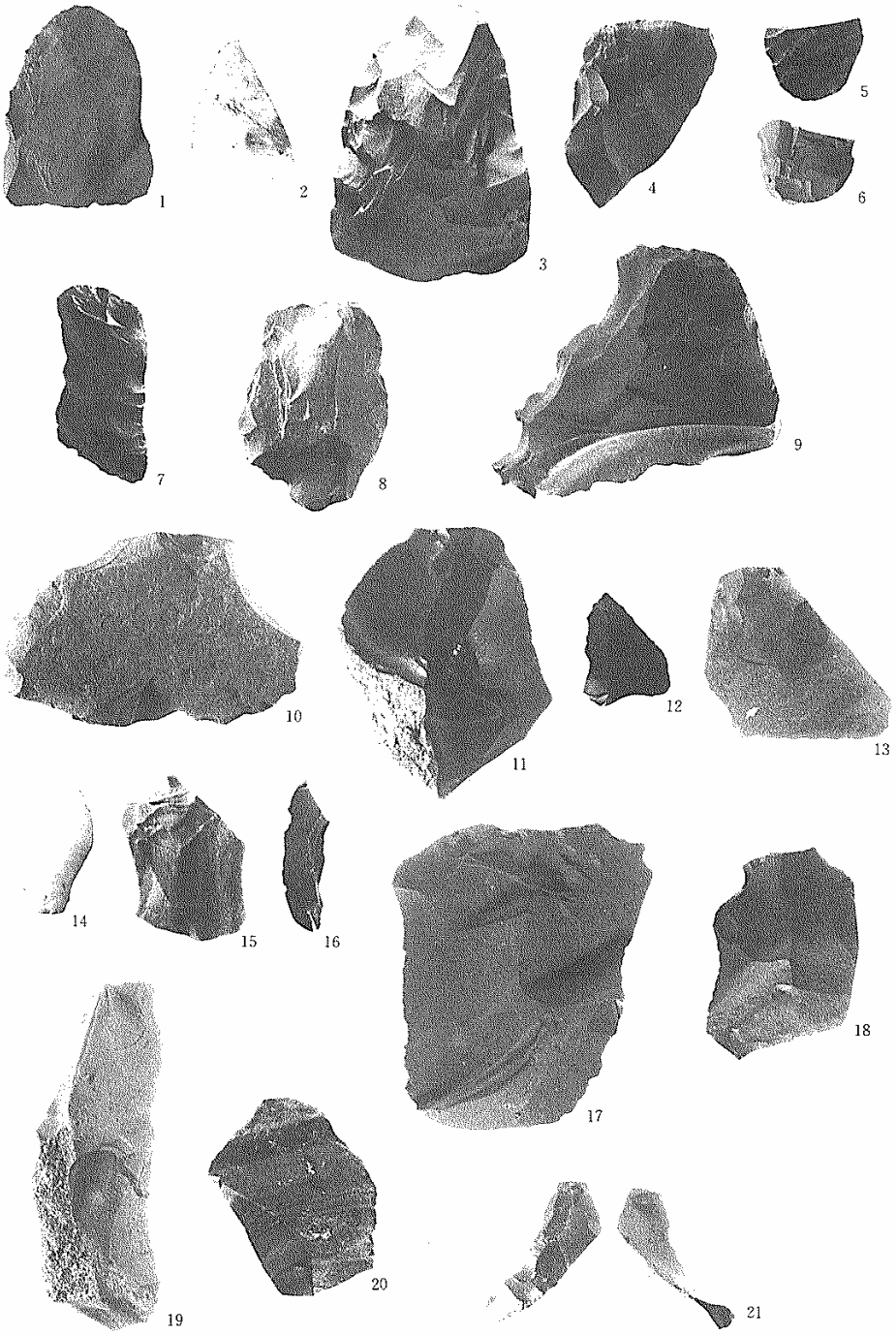
図版５　遺構外出土土器



図版６　遺構外出土土器



図版7　石　器(1)



図版8　石　器(2)

道端遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地 245
Ⅱ　調査の方法と経過 245
Ⅲ　調 査 の 成 果 245
　1．土　　器 245
　2．石　　器 246
Ⅳ　ま と め 248

図 版 目 次

第 1 図道端遺跡出土土器 246
第 2 図道端遺跡出土石器・石核 247

※周辺の地形図は大倉遺跡第 1 図、全体写真は大倉遺跡図版 1 に含めて扱った。

調 査 要 項

遺跡記号：ＪＫ（宮城県遺跡地名表登載番号　04066）
遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町字道端
調査期間：昭和 58 年 5 月 31 日～昭和 58 年 6 月 11 日
調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所
調査担当者：宮城教育庁文化財保護課
　　調査員：平沢英二郎。真山悟、小徳晶、笹原信男、村田晃一
調査対象面積：6500m^2
発掘調査面積：6150m^2

Ⅰ　遺 跡 の 立 地

道端遺跡は刈田郡七ケ宿町字道端にあり、国道113号線をはさんで大倉遺跡と向い合っている。地形的には白石川左岸の河岸段丘上に立地しており、南端は段丘崖で、白石川が東流している。白石川の現河床との比高は10mである。西は野沢川が南流して遺跡の南流して遺跡の南西部で白石川と合流している。東側は段丘面が続いており、遺跡内は北東から南西にかけて緩やかな斜面になっている。

Ⅱ　調査の方法と経過

調査は昭和58年5月31日から行われた。初めに七ヶ宿ダム関連遺跡を対象にした座標を基準にして調査グリッドを設定した後、遺構確認を東側から進めていった。

調査の結果、遺跡内に縄文時代及び弥生時代の遺物が発見された。

遺構の確認作業を終了した後、調査区内の微地形を把握するためにレベリングを行い発掘を終了した。調査が完了したのは昭和58年6月11日である。調査面積は6150m^{2}である。

Ⅲ　調 査 の 成 果

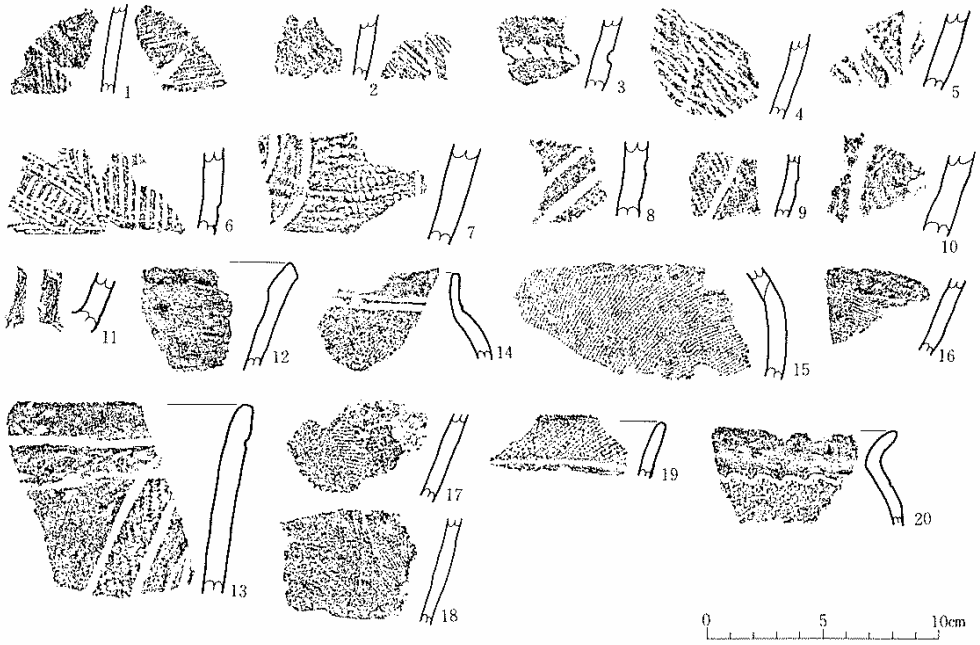
1、土　器（第1図）

1～4胎土に植物繊維を含んでいる。いずれも深鉢形土器の胴部で、1は外面に縦位、内面に横位の条痕が施されている。2の外面には右下りの擦療があり、内面には右下りの条痕が施されている。3は外面にＬＲ縄文原体の側面圧痕文が施されており、地文部と内面は横位にナデられている。4はＬ撚糸文が右下り斜位に施されている。内面には擦痕が横位にみられる。
1～4は胎土、文様の特徴から縄文時代早期あるいは前期に属する土器と考えられる。

6は深鉢形土器の頸部で、梯子状の文様によって右下りに区画した後、沈線文が縦位に充填されている。5、7～9は縄文を地文にもち、沈線文によって曲線的なモチーフが描かれている。10は条線を地文にして曲線的なモチーフが施されている。5、7～10は深鉢形土器の胴部である。11は把手で縦位に沈線文がみられる。12は無文の浅鉢形土器で、内面の口縁下に稜をもっている。5～12は文様の特徴から縄文時代中期に属する土器と考えられる。

13は深鉢形土器の口縁部で、縄文帯によって幾何学的な文様が施されている。文様の特徴から縄文時代後期の土器と考えられる。

14と15は同一個体で、深鉢形土器の口縁部と胴部である。口縁部は無文で沈線文によって下端は区画されており、胴部にはＬＲ斜縄文が施されている。部分的に赤彩が残っている。16～18は深鉢形土器の胴部でＬＲ斜縄文が部分的に施されている。14～18は文様の特徴から縄文時



第１図　道端遺跡出土土器

代晩期の土器と考えられる。

19は鉢形土器口縁部でＬＲ斜縄文が施されている。下端には沈線文が縦位に描かれている。20は鉢形土器の口縁部である。口縁部に無文帯をもち、胴部にはＬＲ斜縄文が施されている。口縁部と胴部はＲの綾絡文によって区画されている。19～20は文様の特徴から弥生時代中期の土器と考えられる。

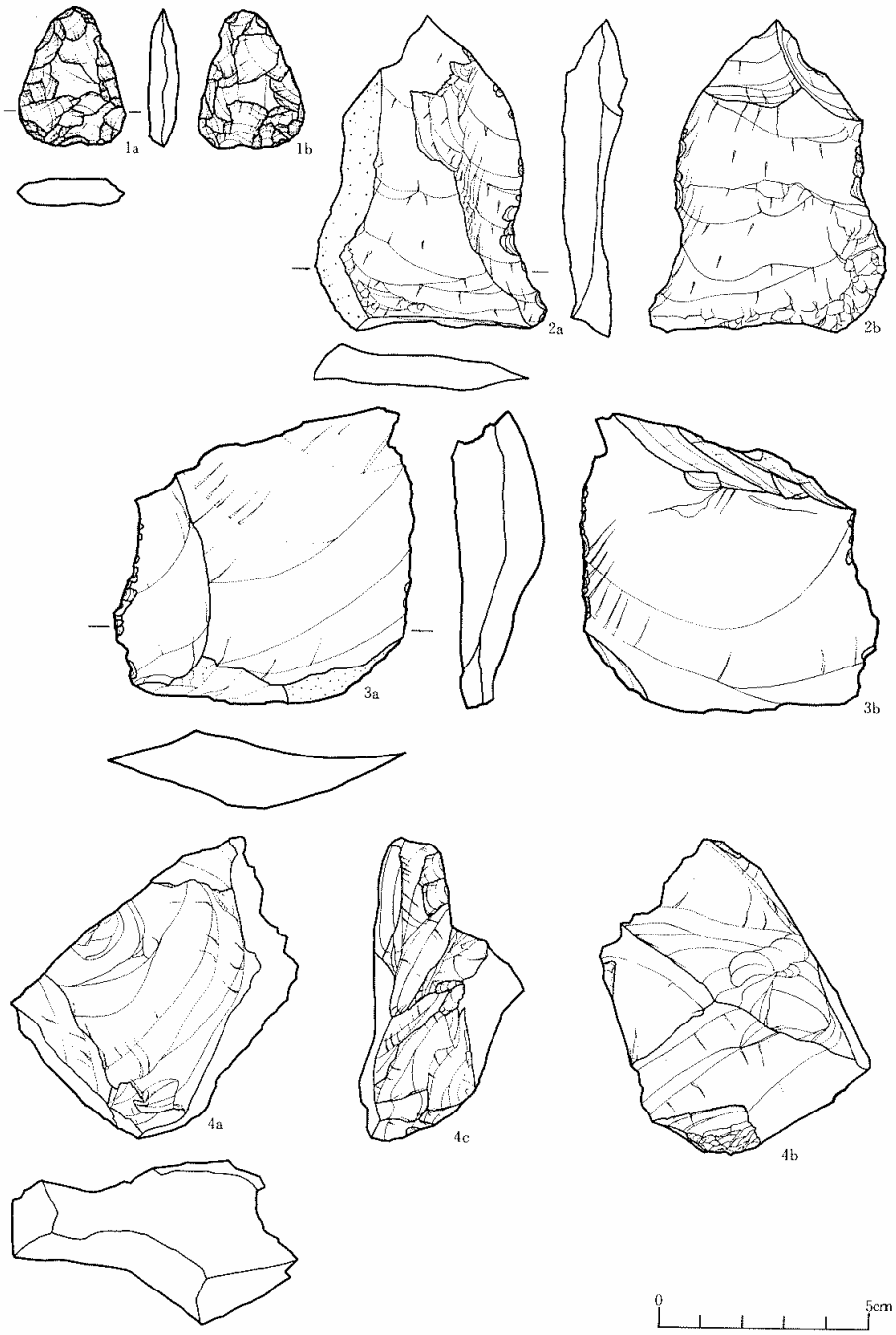
2、石　　器（第2図）

1は箆状石器で背腹両面から加工されて平面形は三角形に作り出されている。下縁の刃部は両刃型の直刃である。

2～3は使用痕のある剥片で、縁辺にマイクロ・フレイキングが不規則的にみられる。

4は石核で、C面→ａ面←Ｂ面の順に剥片剥離作業が行われている。打面は90°転位されている。

1～4の石器は遺構確認時に発見されているため、時期は明らかでない。

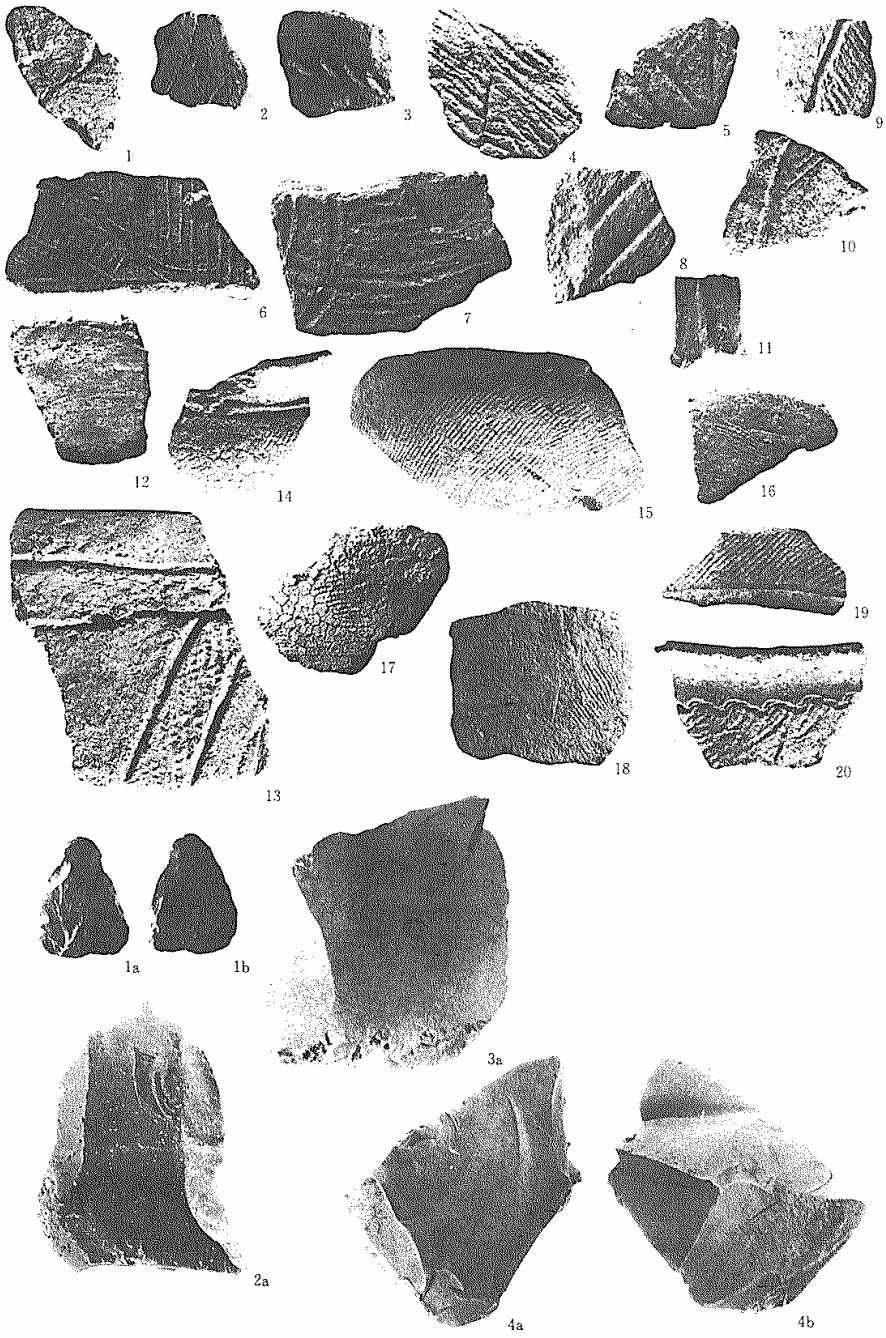


第２図　道端遺跡出土石器・石核

Ⅳ　まとめ

1、遺跡は白石川左岸の河岸段丘上に立地している。
2、遺構は検出されていない。
3、土器は縄文早期、中期、後期、晩期、弥生中期に属するものが出土している。
4、石器は箆状石器、使用痕のある剥片、石核が出土しているが時期は不明である。

図　　版



図版1　道端遺跡出土土器・石器

矢　立　西　遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地 253
Ⅱ　調査の方法と経過 253
Ⅲ　調査の成果 254
　1．基本層位 254
　2．発見された遺構と遺物 255
　　(1)．土壙とその出土遺物 255
　　(2)．ピットとその出土遺物 256
　　(3)．遺構以外の出土遺物 257
Ⅳ　まとめ 259

調 査 要 項

遺跡記号：ＪＬ（宮城県遺跡地名表登載番号　04076）

遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町字柏木山

調査期間：昭和 58 年 6 月 4 日～昭和 58 年 8 月 29 日

調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所

調査担当者：宮城県教育委員庁文化財保護課

調査員・真山　悟、小徳　晶、笹原　信男、村田　晃一

調査対象面積：約 10,000m^2

発掘面積：5,000m^2

第１図　グリッド配置図

Ⅰ　遺跡の立地

矢立西遺跡は刈田郡七ヶ宿町字柏木山に所在する。遺跡は東流する白石川に向かって北から舌状にはり出した丘陵先端部に立地している。遺跡の周囲は北を除く三方が急な斜面となっており、北側は東から沢が入り込んでいる。今回の調査区は遺跡の南端を東面に横切る。調査区内は南と東へ傾斜しているが、東への傾斜の方が急である。

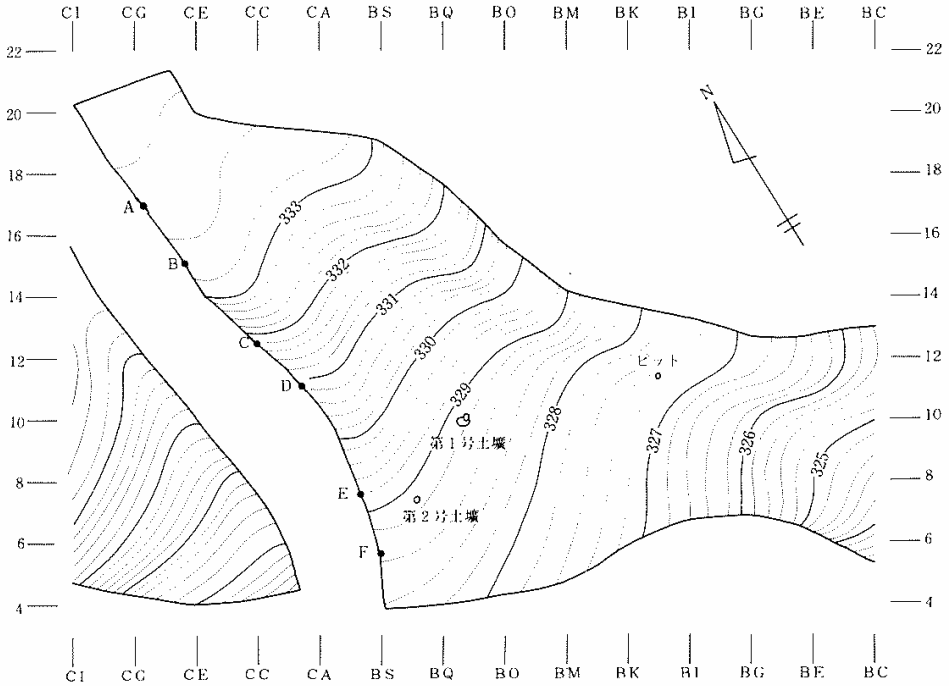
なお、遺跡周辺の歴史的環境については「小梁川遺跡」を参照されたい。

Ⅱ調査の方法と経過

発掘調査は七ヶ宿ダム建設に伴う国道113号線の迂回路の路線敷にあたる畑地及び山林約5,000㎡を調査対象地域とし、その全域を発掘している。

調査は路線敷の中心杭No.14とNo.18を結ぶ直線を東西の基準線とし、それに直交する直線を南北の基準線として3m方眼グリットを設定した。グリット名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表わし、中心杭No.14をＣＡ－10とした。

発掘調査は昭和58年6月4日に開始した。最初に基本層位を把握するため調査区を南北に縦



第2図　遺構配置図

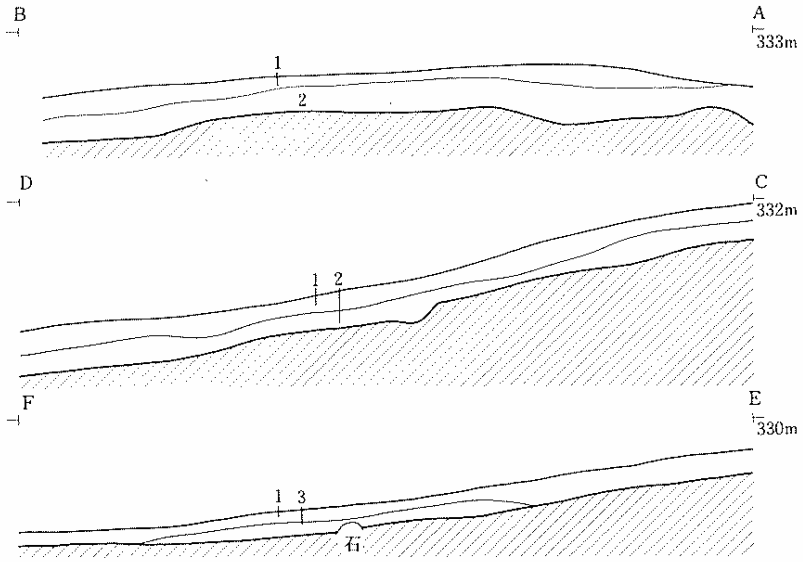
道路沿いにベルトを設け、調査区内の表土を重機で除去し、その後にケズリをかけて遺構確認作業を行なった。その結果ＢＰ－9区、ＢＱ－7区で土壙を1基ずつ、ＢＪ－11区でピットが1基発見された。遺構はプラン確認後ベルトを残して精査し、断面図を作成した。出土遺物は層位毎に取り上げ、完掘後は平面図を作成しレベルを記入した。写真撮影は発掘の諸段階に応じて行なった。発掘調査の終了時には調査区全体の微地形を把握するため、遺構の分布にあわせて3m方眼もしくは6m方眼でレベルを記入した。

発掘調査の一切が終了したのは昭和59年8月29日である。

Ⅲ　調　査　の　成　果

1. 基本層位

遺跡の基本層位は4層から成り、第1層の黒褐色(10ＹＲ3/2)シルトは調査区北西部にのみみられる。第2層は暗褐色(10ＹＲ3/4)シルトで北西部を除く調査区全体を覆っている。第3層の褐色(10ＹＲ4/4)シルトは主に道路東側の緩斜面に分布し、第4層の黄褐色（10ＹＲ5/6）シルトは地山へ漸移層で遺跡南側の低い所に認められる。遺物は主に第3層から出土している



第3図　基　本　層　位

0　1　2 m

No	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色(10YR 3/4)	シ ル ト	表　土
2	褐　色(10YR 4/4)	シ ル ト	遺物を含む
3	黄褐色(10YR 5/6)	シ ル ト	地山粒を多量に含む、漸移層

2．発見された遺構と遺物

(1)．土壙とその出土遺物

第1号土壙(第4図)

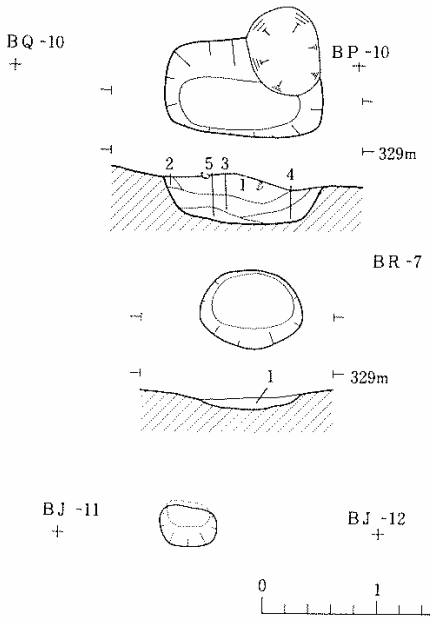
第1号土壙はＢＰ－9区で発見された。遺構検出面は地山である。平面形は隅丸長方形で、規模は東西1.4m、南北0.9m、深さ0.4mである。土壙低面は皿状である。壁は南壁を除いてゆるやかに立ち上がる。南壁は急に立ち上がる。土壙内堆積土は5層にわかれる。堆積状況は下層が将棋倒し状で上層が水平状である。遺物は主に第1層から出土した。

＜出土遺物＞

土師器　甕(第5図1)

頸部で「く」字状にくびれ口縁部が外反する甕で、最大径が胴部中央よりやや下位にある。器壁は薄い。外面の器面調整は口縁部が横ナデ、胴部がヘラミガキ、胴部下端がヘラケズりである。内面の調整は口頸部が横ナデ(一部ヘラミガキ)、胴部がヘラナデののちヘラミガキである。

この土器の所属時期は不明である。



第1号土壙

No	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色(7.5YR 3/4)	粘土質シルト	焼土を多量に含む
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃	
3	黒褐色(10YR 2/2)	〃	炭化物を多く含む
4	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	〃	地山ブロックを含む
5	黄褐色(10YR 5/6)	〃	地山ブロックを多量に含む

第2号土壙

No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR 5/6)	粘土質シルト	地山粒を斑状に含む

ピット

No	土　色	土　性	備　考
	褐　色(10YR 4/4)	シルト	遺物を少し含む

第４図　土壙・ピット

第2号土壙(第4図)

第2号土壙はＢＱ－7区で発見された。遺構確認面は地山である。平面形は楕円形で、規模は南北0.9m、東西0.7m、深さ0.1mである。土壙底面は皿状で壁面はゆるやかに立ち上がっている。土壙内堆積土は1層である。土壙確認面より上部で縄文土器の一括遺物が出土している。出土状況は横に倒れ潰れていた。

＜出土遺物＞

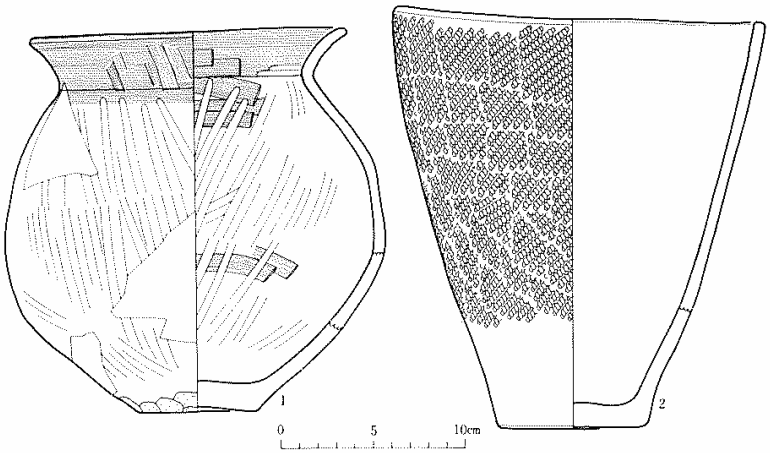
縄文土器(5図2)

平底の底部から外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいタール。胎土には砂粒が多く含まれている。内面の調整はナデである。外面は口縁上部から胴部下半まで斜行縄文(ＬＲ)が施されている。

この土器の土器の所属時期は不明である。

(2)．ピットとその出土遺物（第4図）

1基確認された。ＢＪ－11区で発見されている。遺構確認面は地山である。平面形は楕円形で、規模は南北50㎝、東西34㎝、深さ26㎝である。堆積土は1層で褐色(10ＹＲ4/4)シルトである。堆積土中から土師器の小破片が数点出土している。



第５図　土壙出土土器

No.	遺構・層位	種　類	外　面	内　面	図　版
1	１号土壙－１層	土師器甕	口縁部:横ナデ、胴部:ヘラミガキ、	口縁部:横ナデ、胴部ヘラナデ後ヘラミガキ、底部:ナデソケ	図版３－１
2	２号土壙	縄文土器深鉢	斜行縄文（ＬＲ）	ナ　デ	図版３－２

(3)．遺構以外の出土遺物(第6図、7図)

縄文土器、土師器、須恵器、剥片石器、剥片がある。図示したのは縄文土器13点、剥片石器2点である。

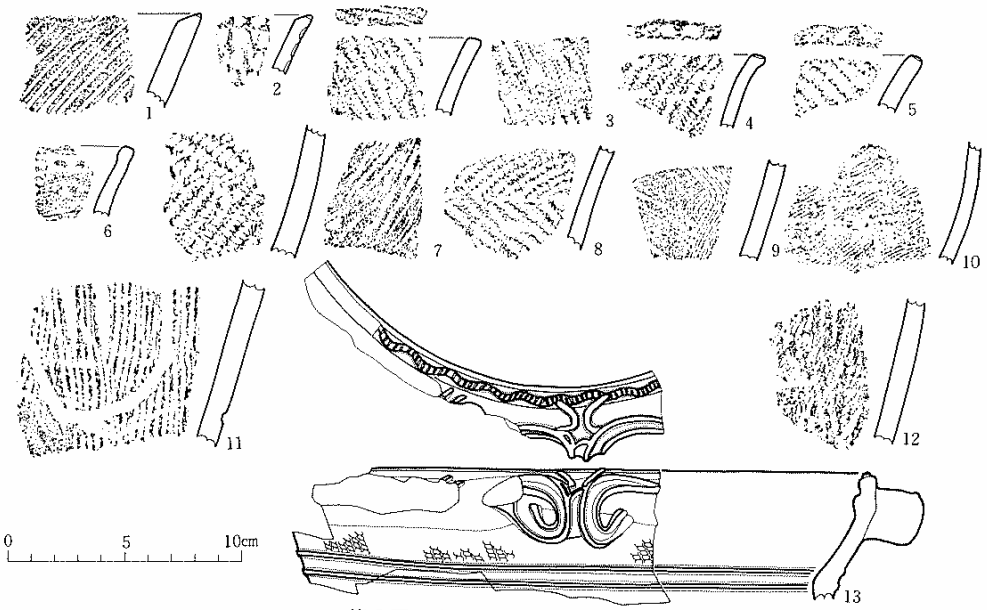
ー縄文土器ー（第6図1～13）

1～6、13は口縁部資料で、7～12は胴部資料である。1、2は口縁部が内側に削がれており、口縁上端に刻み目が施されている。1はその下に口縁部に対して斜位の沈線が施され、2は下に横位の爪形文が施されている。3～5は胎土に繊維を含んでいる。3は表裏、口唇部とも0段多条の斜行縄文（ＲＬ）が施されている。4、5は口縁上部に刻み目があり、内面には擦痕が認められる。外面には0段多条の斜行縄文(4－ＬＲ,5－ＲＬ)が施されている。6は口縁上部に半截竹管による押し引き状の文様がある。

7、8は胎土に繊維を含み、内面に擦痕があり、外面には非結束の羽状縄文（7－ＲＬ・ＬＲ 8－ＲＬ・ＬＲ）が施されている。9～12は胎土に繊維を含まない。内面調整はいずれもナデである。外面は9が櫛描文、10が斜行縄文(ＬＲ)、11,12は地文が撚糸文(Ｌ)で、11はその上に沈線によって文様が施されている。12の内面には炭化物が付着している。

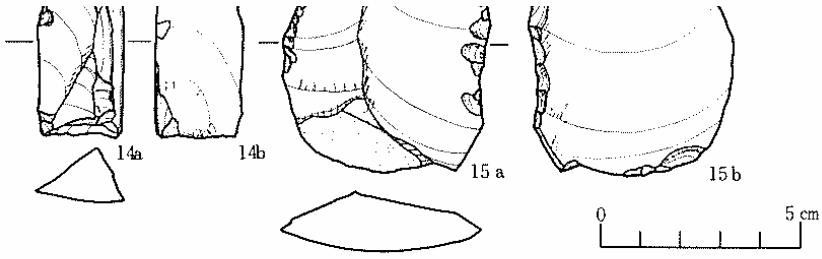
13は口縁部が内弯している。外面は斜行縄文(ＬＲ)を施されたのち、口縁部に橋状把手から成る突起を配し、その下に隆線を2本以上施されている。

これらの土器は小片のため、その所属時期を決められないものが多いが、3は縄文時代早期、4、5、7、8は縄文時代早期末～前期初頭、9は縄文時代後期、13は縄文時代中期大木8a式に位置付けられよう。



第６図　出土遺物(1)土器

No.	地区層位	部位	繊維	口縁部	外面	内面	その他	図版
1	CL-16-2層	口縁部	なし	口縁上端刻目	沈線文（斜位）	ナデ		3－3
2	CE-19-2層	〃	〃	〃	爪形文	〃		3－4
3	BH-11-2層	〃	含む	口唇部縄文(RL)	斜行縄文（RL）	斜行縄文（RL）		3－5
4	BG-11-2層	〃	〃	口唇部刻目	〃　（LR）	擦痕		3－6
5	BG-12-2層	〃	〃	〃	〃　（RL）	〃		3－7
6	BI-18-2層	〃	なし	—	半截竹管による押し引き沈線文	ナデ		3－8
7	BH-11-2層	胴部	含む	—	非結束の羽状縄文	擦痕		3－9
8	BG-11-2層	〃	〃	—	〃	擦痕		3－10
9	CC-18-2層	〃	なし	—	櫛描文	ナデ		3－11
10	BT-18-2層	〃	〃	—	斜行縄文（LR）	〃		3－12
11	CT-19-2層	〃	〃	—	沈線文、撚糸文（L）	〃		3－14
12	BH-11-2層	〃	〃	—	撚糸文（L）	〃	内面に炭化物付着	3－13
13	CI-12-2層	口縁部	〃	口唇部に隆帯 （隆帯上刻目）	橋状突手から成る突起、斜行縄文(LR)	〃		3－15



第７図　出土遺物(2)石器

―石　器―

（第7図14、15）

2点とも縦長の剥片を素材にしている。14は先端付近に15は両側縁に二次加工が施されている。

No.	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
14	CE-19-2層	58.5	21.8	13.4	16.6	珪質頁岩	3-16
15	BQ-16-2層	69.5	51.0	14.9	55.6	〃	3-17

Ⅳ　ま　と　め

（1）、矢立西遺跡は白石川北岸の舌状をなす段丘末端部に立地している。

（2）、発見された遺構は土壙2基、ピット1基であるが、第2号土壙は縄文時代に位置付けられ、第1号土壙、ピットの時期は不明である。

（3）、遺構に伴わない遺物には縄文土器、土師器、須恵器、剥片石器、剥片がある。このうち縄文土器の中には早期後葉、早期末～早期初頭、中期中葉、後期に位置付けられるものもあるが、大部分は時期が判明しない。

<引用・参考文献>

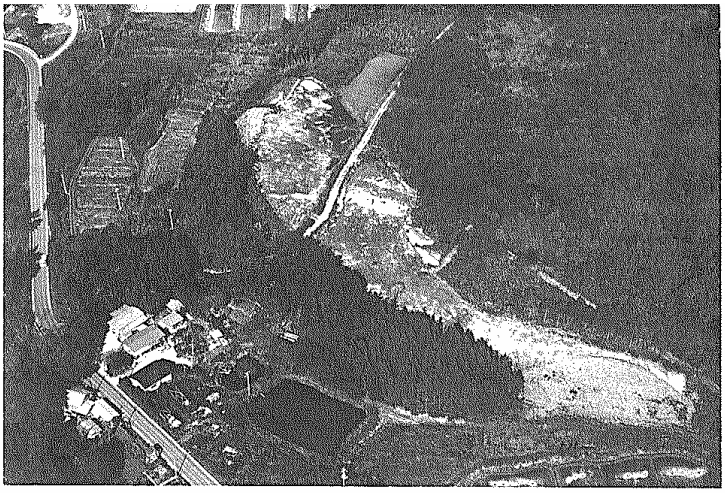
阿部・遊佐（1978）「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第1集

阿部　恵　（1980）「宇賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集

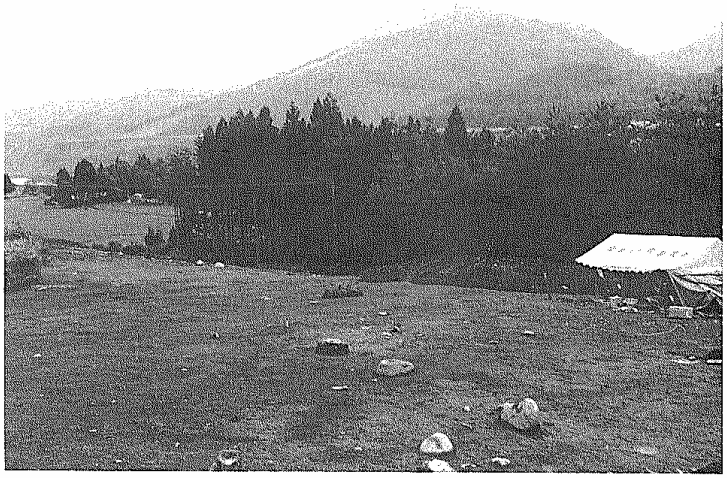
林　謙作　（1968）「縄文文化の発展と地域性2、東北」『日本の考古学』Ⅱ

図　　版

遺跡航空写真



道路東側調査区



基本層位

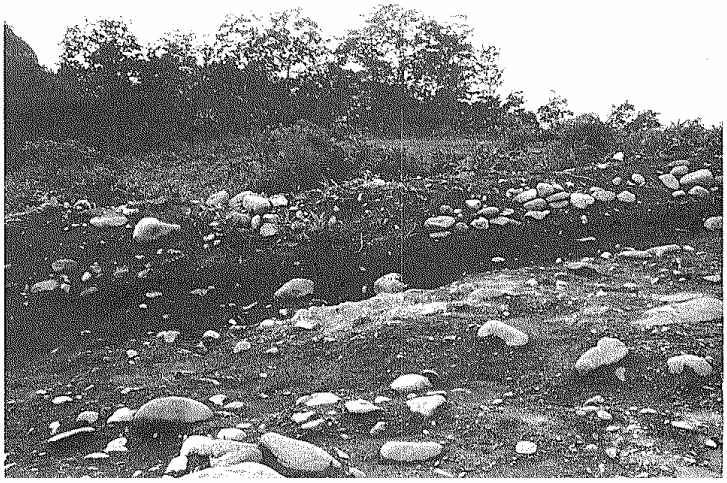
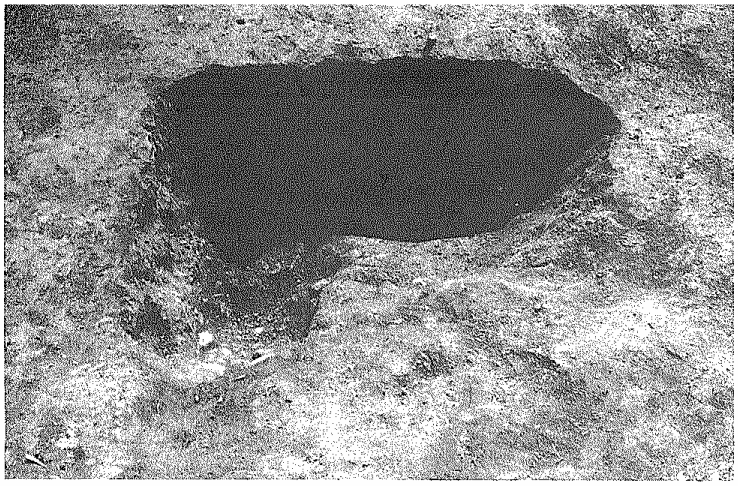
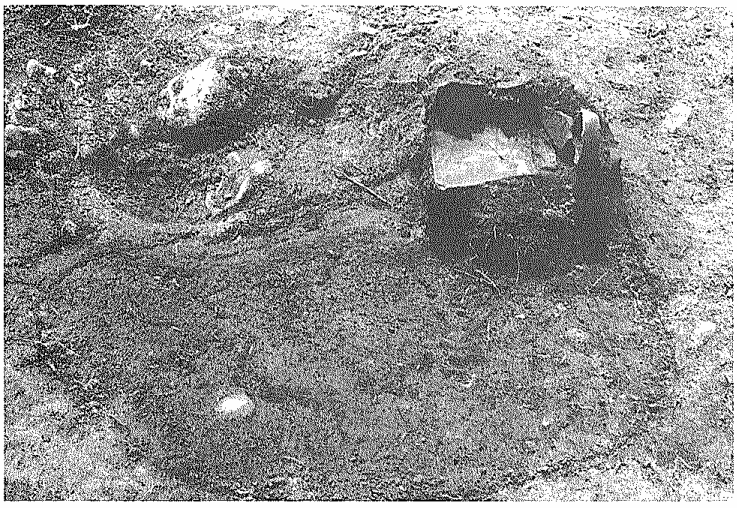


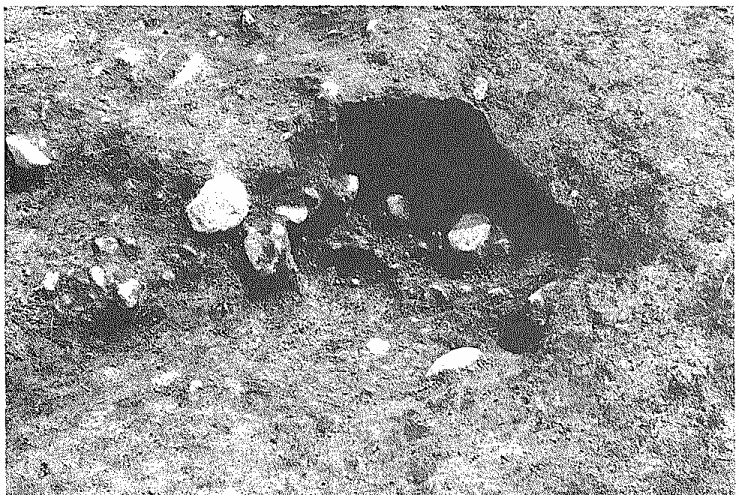
図　版　1



第１号土壙

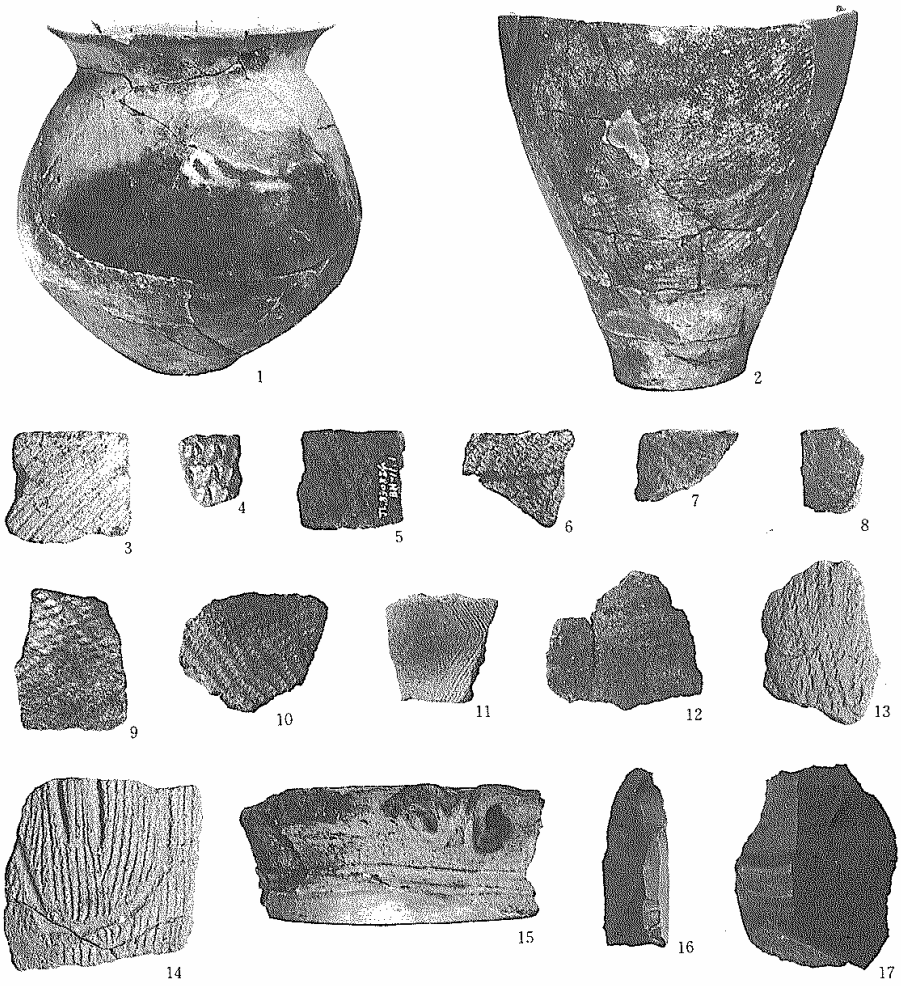


第２号土壙確認面



第２号土壙

図　版　２



図版3　出土遺物

若林山遺跡（わかばやしやま）

目　　次

Ⅰ．周辺の地形 267
Ⅱ．調査の方法と経過 267
Ⅲ．調査の成果 267
1．土壙と出土遺物 267
2．表土の遺物 269
（1）縄文土器 269
（2）剥片石器 273
Ⅳ．ま と め 273

調 査 要 項

遺跡記号：ＪＩ（宮城県遺跡地名表登載番号　04064）
遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町字若林山
調査期間：昭和 59 年 4 月 16 日～昭和 59 年 4 月 25 日
調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダ工事事務所
調査担当者：宮城県教育庁文化在保護課
　　調査員：真山　悟、小田山　正男、今野　隆
調査対象面積：6000m^2
発掘調査面積：500m^2

Ⅰ周辺の地形

若林山遺跡は刈田郡七ヶ宿町若林山に所在し、東流する白石川の支流小梁川の右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の北端から東方にかけて段丘崖が形成され、段丘面と高低差は約5mである。西側は標高350mの山が迫り、南方はゆるい沢状の地形となっている。
遺跡は東と南へ向かってそれぞれゆるやかに傾斜し、東側の段丘崖近くに遺物が散布していた。現状は山林、畑地などからなる。本遺跡の南方には小梁川遺跡・小梁川東遺跡・大倉遺跡などと接している。

Ⅱ調査の方法と経過

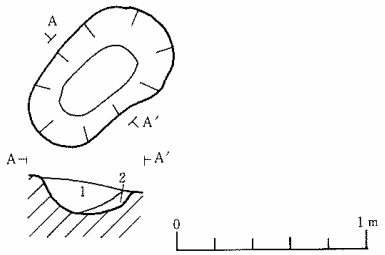
今回の調査は昭和59年4月16日から開始された。調査対象区は段丘上のゆるやかな斜面にあり、面積は6000m²に及んでいる。発掘区はこのうちの南側の沢状地形を除いた部分で、面積は5000m²である。調査は重機によって表土を除去した後、遺構検出作業を行った。その結果土壙1基が検出され縄文土器、石器が出立した。検出した土壙については1/20で実側図を作成し、遺物は各グリッドごとに取り上げた。基本層位は表土のみであったため立層断面図は作成せず平面図にレベルを記入し、これにかえた。

遺構検出作業及び一切の記録を終了したのは昭和59年4月25日である。

Ⅲ調査の成果

1・土壙と出土遺物

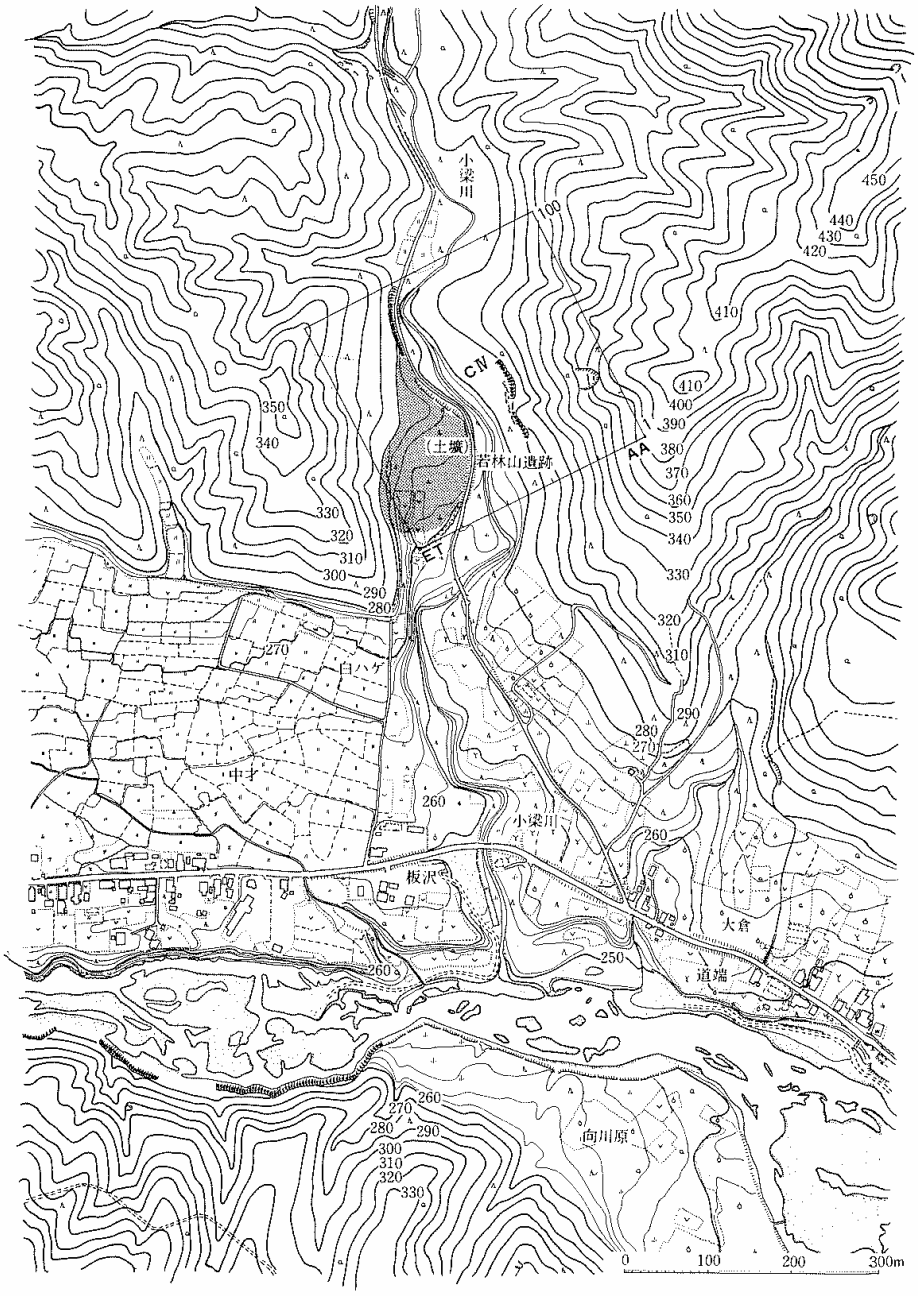
検出され土壙は1基で、調査区のＤＦ－46区の東側で確認された。平面形は楕円形を呈し規模は長軸が約80㎝、短軸が約60㎝で、壁の立ち上がりは全体的にゆるやかだが、南側でやや急である。堆積土は褐色土で2枚の層に分かれる。この土壙の床面近くから縄文土器が出土している。



層位	土　色	土性	備　考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物を少量含む
2	褐色(10YR4/6)	シルト	

第２図　土　壙

出土土器　胴部から頸部にかけてややふくらみをもち、頸部でくびれ、口縁部で外傾する深鉢である。波状口縁部で波頂部に「U」字状の隆線をもち、波頂直下を起点とした横位の長楕円形



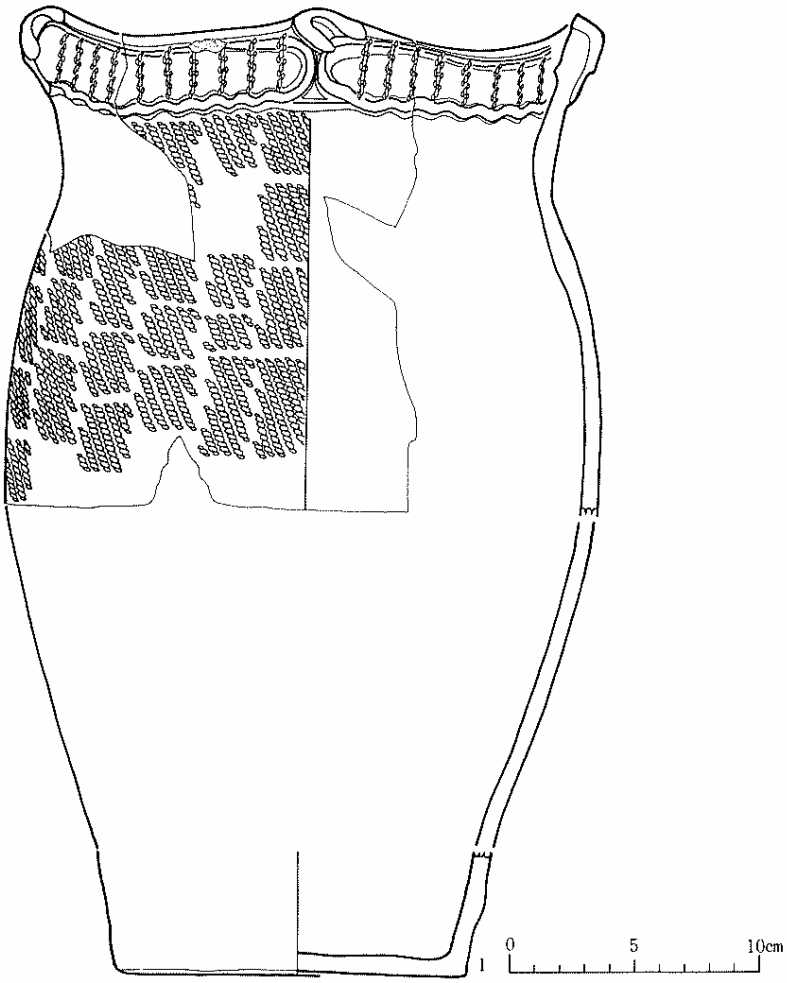
第１図　遺跡及び周辺の地形

の隆線区画文の中に縦位の押圧縄文ＬＲが連続して施されている。低面は平底で、低部は綱代痕がみられる。地文はＬＲ縄文である。

2．表土の遺物

(1) 縄文土器

完形土器はなく破片の中から口縁部資料及び文様のある胴部資料について観察を行った。器形はいずれも深鉢である。



No.	区名　層位	器形	分類	特徴	図版
1	第1号土壙	深鉢	1	口縁部隆線区画文内に縦位の押圧縄文ＬＲ　胴部縄文ＬＲ	2－1

第３図　土壙内出土土器

胎土に繊維を含む土器（第4図：1～3）

＜口縁部資料＞１は押圧縄文が施されているもので，口縁部のボタン状粘土貼付部とその下方に1段の原体Ｌを渦巻状に押圧しまた、口縁部に沿って横位の押収を施している。

<胴部資料>2は0段多条の斜行縄文ＲＬが、3は結束されない羽状縄文が施されている。

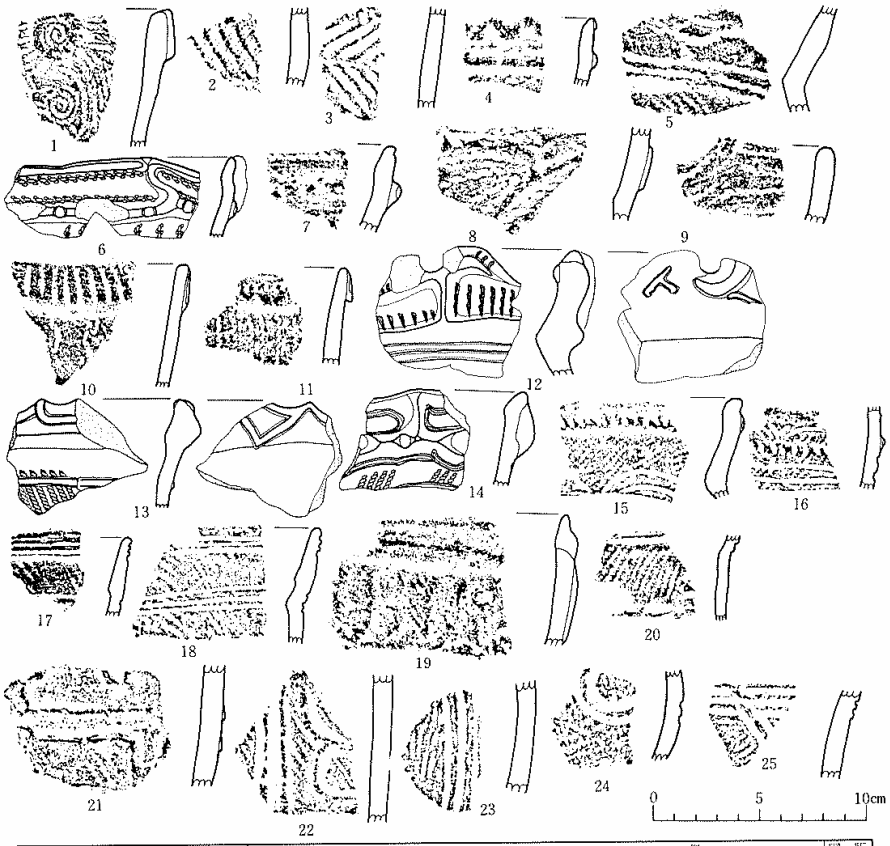
胎土に繊維を含まない土器（第4図：4～25）

＜口縁部資＞4は口縁部が外傾するもので、口縁上部に小波状の隆線が施され、この隆線上に押圧縄文が認められる。その下方に横位の隆線が施されている。5～9は横位、波状、弧状押圧縄文が施文されるものである。5は頸部が屈曲し、口縁部で外傾するもので、弧状の押圧縄文ＬＲの下方に横位の平行沈線が施されている。6、7は同一個体と考えられる。外傾する波状口縁で、口縁直下に横位の長楕円形の隆線区画文をもち、この隆線上に連続する指頭状圧痕文が、区画文内には横位の押圧縄文が施されている。口縁部隆線文様帯直下には形状の不明な押圧縄文がみられる。8は口縁部が外傾するもので、口縁部隆線区画文の沿うように横位の押圧縄文が施文されている。9は外傾する波状口縁で、これに沿うように横位の押圧縄文が施文され、押圧は波頂の上端の上端に達している。10、11は肥厚した口縁部をもつものである。ともに直立ぎみに外傾し、肥厚部分には10は縦位の押厚が11は刺突文が連続して施されている。胴部には縦位の綾絡文、11は縦位の押圧が施されている。12は頸部で屈曲し、口縁部が外傾するものである。口縁部隆線区画文内に縦位の刻目が連続して施され、口縁上部に半截竹管の先端を利用した刺突文がみられる。また口縁部内面に隆線が施されている。13は口縁部が外傾するもので、口縁上半が肥厚し、肥厚部に細い波状の隆線が、口縁下部にも横位の隆線が施されている。14は口縁部が外傾するもので、口縁部隆線区画文に沿うように沈線が施されている。

隆線上には連続する指頭状圧痕文がみられる。15、16は同一固体と考えられる。頸部で屈曲し口縁端部で内弯するもので、口縁上位にみられる横位の隆線上に連続する押圧縄文がなされる。

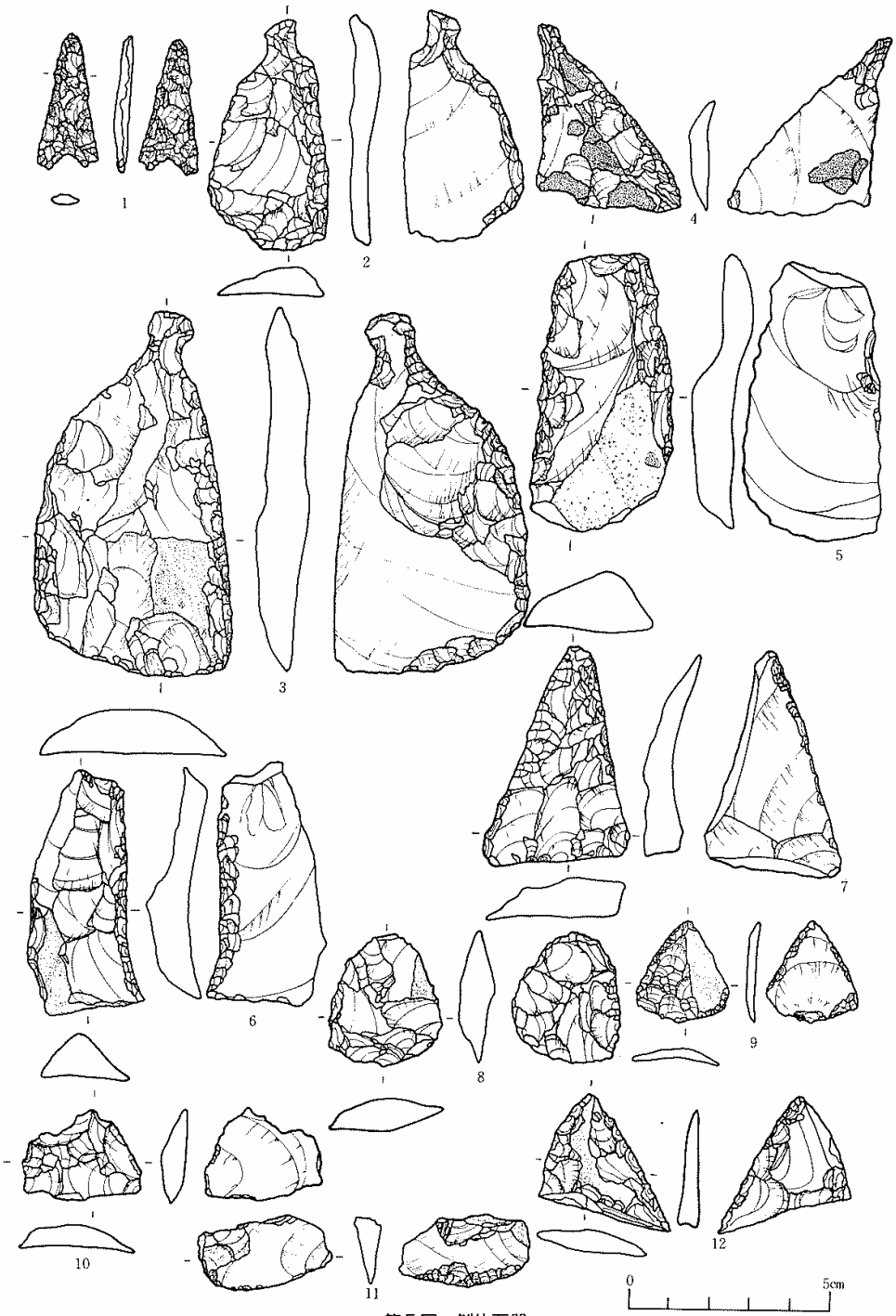
胴部隆線上にも同様の押圧がなされこれをはさんで上部に波状の沈線、下部には横位の平行沈線が施されている。17、18も同一固体と考えられる。口縁部がやや肥厚し外傾するもので、肥厚部と胴部に3本の横位の平行沈線が施されている。19は内弯ぎみに外傾する波状口縁部で、縦位のナデ付け後、縄文ＬＲが施されている。

＜胴部資料＞20は横位の沈線が施され、地文はＲＬ縄文である。21は曲折する2本の隆線がほぼ平行に施文されている。地文はＬＲ縄文である。22は縦位の平行する沈線と弧状の沈線に沿って隆線が施されている。地文はＬＲ縄文である。23～25は弧状、横位、縦位などの文様が平行沈線によってなされているもので、地文は順にＲＬ、ＬＲ、ＲＬである。



No	地区・層位	器形	分類	特徴	図版
1	DN-35 1層	深鉢	1	口縁部：押圧縄文(L) ボタン状粘土貼付部	2-2
2	DO-22 〃	〃	1	胴部：0段多条 縄文(RL)	2-3
3	DL-31 〃	〃	1	胴部：非結束の羽状縄文	2-4
4	x-x 〃	〃		口縁部：口縁上部に小波状の隆線、隆線上に押圧縄文	2-5
5	DO-35 〃	〃	2	口縁部：弧状の押圧縄文(LR) 横位の平行沈線	2-6
6	DE-45 〃	〃	2	口縁部：波状口縁、長楕円形の隆線区画文、隆線上に指頭状圧痕文、押圧縄文(LR)	2-7
7	DD-43 〃	〃	2	口縁部：隆線上に指頭状圧痕文、押圧縄文(LR)	2-8
8	DE-45 〃	〃	2	口縁部：隆線区画文 横位の押圧縄文(LR)	2-9
9	DD-43 〃	〃	2	口縁部：波状口縁、横位の押圧縄文(LR)	2-10
10	DF-44 〃	〃	2	口縁部：口縁肥厚部の中に縦位の押圧縄文(L) 胴部に縦位の綾絡文	2-11
11	DE-41 〃	〃	2	口縁部：口縁肥厚部に刺突文 胴部に縦位の押圧縄文(RL)	2-12
12	DD-34 〃	〃	2	口縁部：隆線区画文内に縦位の刻目、口縁上部に半截竹管による刺突文	2-13
13	DF-47 〃	〃	2	口縁部：口縁上半が肥厚、肥厚部と口縁下に細い波状の隆線 縄文(LR)	2-14
14	DH-46 〃	〃	2	口縁部：隆線区画文に沿うように沈線、隆線上に指頭状圧痕文 縄文(RL)	2-15
15	DE-44 〃	〃	2	口縁部：横位の隆線に押圧縄文(LR) 縄文(RL)	2-16
16	DH-43 〃	〃	2	口縁部：弧状と横位の平行沈線文、横位の隆帯部に押圧縄文 縄文(RL)	2-17
17	DH-42 〃	〃	2	口縁部：平行沈線文 縄文(LR)	2-18
18	DI-43 〃	〃	2	口縁部：平行沈線文 縄文(LR)	2-19
19	DD-43 〃	〃	2	口縁部：波状口縁 縦位のナデ付 縄文(LR)	2-20
20	DG-46 〃	〃	2	胴部：横位の沈線文 縄文(RL)	2-21
21	DE-46 〃	〃	2	胴部：曲折する2本の平行隆線 縄文(LR)	2-22
22	DH-43 〃	〃	2	胴部：縦位の平行沈線、弧状の沈線、これに沿う隆線 縄文(LR)	2-23
23	DD-42 〃	〃	2	胴部：横位の平行沈線 縄文(RL)	2-24
24	DH-44 〃	〃	2	胴部：弧状の平行沈線 縄文(LR)	2-25
25	DD-43 〃	〃	2	胴部：横位、斜位の平行沈線 縄文(RL)	2-26

第4図 表土の遺物



第5図　剝片石器

(2) 剥片石器（第5図：1～12）

石鏃 1点のみ出土している。尖頭部側縁が直線的で、基部中央に抉りが入れられ凹状を呈するもので、両面とも細かい調整剥離を加えている。基部の両端は欠損している。

石匙 3点出土している。いずれも縦長の形態を示すもので、主として背面に2次加を加えており、背面の右側縁に連続する剥離を施している。2・3には腹面の右側縁に連続する剥離がみられるが、4の腹面にはつまみ部以外に剥離はみられない。両面に焼けはじけがみられる。

不定形石器 8点出土している。5・6はほぼ長方形を呈し、縦長の剥離を素材としており、腹面には打面が残されバルブがみられる。5は背面の左側縁に粗い剥離片が施されているが、腹面にはほとんどみられない。6は背面の右側縁と腹面の左側縁に連続する剥離がみられる。7は三角形を呈し、背面全体に2次加工が加えられているが腹面にはみられない。9～12は小形のもので8は円形を呈し、両面とも粗い剥離が加えられている。9は三角形を呈し、石鏃に近い形態を示すものである。10は背面に粗い粗い剥離が施されている。11は縦長の剥片を素材としており、背面の剥離は粗いが、腹面下方には連続する剥離がみられる。12は下方に折れがみられ、尖頭器に近い形態を示すものと考えられる。背面の右側縁と左側縁に連続する剥離がみられる。

	地区・層位	器種	石材	重さ(g)	長 × 幅(mm)	厚(mm)	図版
1	DD－42・1	石鏃	ケツ岩	1.6	(34) × (15)	4	1－1
2	DG－45・1	石匙	〃	14.0	58 × 30	8	1－2
3	DP－37・1	石匙	〃	10.7	58 × 30	10	1－3
4	DI－33・1	石匙	〃	44.2	91 × 48	14	1－4
5	DG－44・1	不定形石器	珪化凝灰岩	31.0	70 × 35	15	1－5
6	DF－45・1	〃	ケイ質ケツ岩	17.9	61 × 26	12	1－6
7	DF－45・1	〃	〃	15.4	58 × 32	10	1－7
8	DF－35・1	〃	ケツ岩	7.3	34 × 28	9	1－8
9	DF－46・1	〃	ケイ質ケツ岩	2.0	25 × 23	4	1－9
10	DG－44・1	〃	ギョクズイ	3.8	30 × 23	6	1－10
11	DN－37・1	〃	碧玉	4.0	34 × 18	7	1－11
12	DJ－39・1	〃	ギョクズイ	6.3	40 × 25	8	1－12

石器　観察表

Ⅳ まとめ

1・若林山遺跡は刈田郡七ヶ宿町字若林山に所在し、白石川の支流、小梁川の河岸段丘上に位置する。

2・本遺跡から出土した縄文土器は1－胎土に繊維を含む土器、2－胎土に繊維を含まない土器の2類に分けられる。

－第1類－胎土に繊維を含み渦巻状の押圧縄文や羽状縄文を地文としているなどの特徴を有し、上川名貝塚出土の上層土器と類似している事から縄文時代前期初頭、上川名Ⅱ式と考えられる。

－第2類－5～9は口縁部に横位、弧状、波状の押圧が、口縁部隆線区画文内に横位の押圧が

なされるなどの特徴を有し、南方町青島貝塚（加藤、後藤他：1975）の第5類土器、大和町勝負沢遺跡（丹羽、阿部、小野寺：1982）の第1郡3類土器、築館町佐内屋敷遺跡（森：1983）の第4類土器等としている事から縄文時代中期前葉、大木7Ｂ式と考えられる。また19は口縁部に縦位のナデ付けがみられるのが特徴で、報告書は刊行されていないが七ヶ宿町小梁川遺跡の縄文時代中期前葉が包含層から出土した土器と類似していることから大木7Ｂ式と考えられる。

図4の10～13、17、18、20、21、23～25と土壙内出土遺物のうち、10～13と土壙内遺物に、肥圧が施されるという特徴を有し、17、18は口縁部と頸部に横位の平行沈線文が施されるという特徴をもつ。また胴部の文様としては弧状、縦位、横位の沈線や隆線による平行線文が特徴である。これらは勝負沢遺跡出土の第1群6類どき、青島貝塚出土の第6類土器、長者原貝塚（阿部、遊佐：1978）代1号住居後出土の土器と類似しており縄文時代中期葉、大木8ａ式と考えられる。14～16、22は文様の特徴から縄文時代中期前葉～中葉のものと考えられるが時期は限定できない。

＜引用・参考文献＞

加藤　孝（1951）「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』1

阿部　恵、遊佐五郎（1978）「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第1集

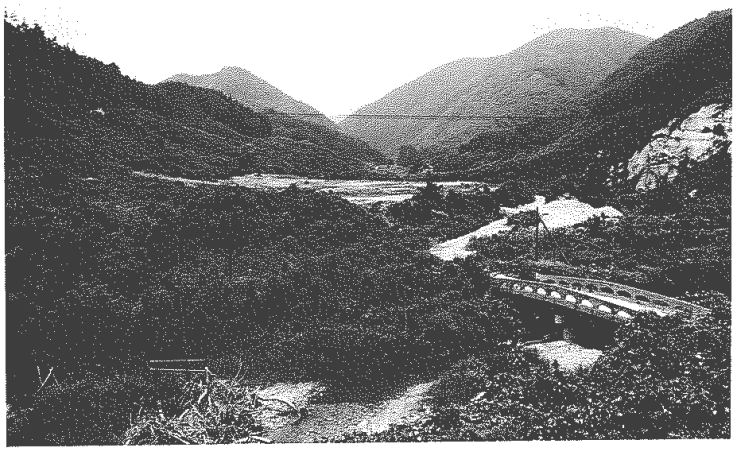
加藤　孝、後藤勝彦（1975）「宮城県登米群南方町青島貝塚発掘調査報告書」

丹羽　茂（1981）「大木式土器」『縄文文化の研究』4雄山閣

丹羽　茂、阿部博志、小野寺祥一郎（1982）
「勝負沢遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」
『宮城県文化財調査報告書』第83集　宮城県教育委員会

森　喜喜（1983）「佐内屋敷遺跡ー東北自動車遺跡調査報告書Ⅷ」
『宮城県文化財調査報告書』第93集　宮城県教育委員会

図　　版



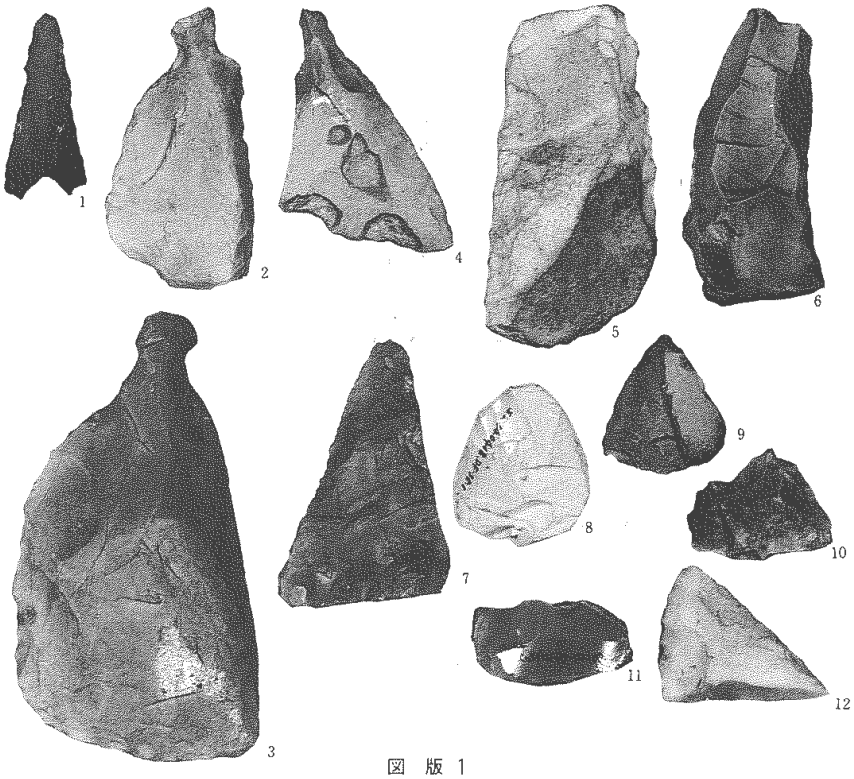


図 版 1

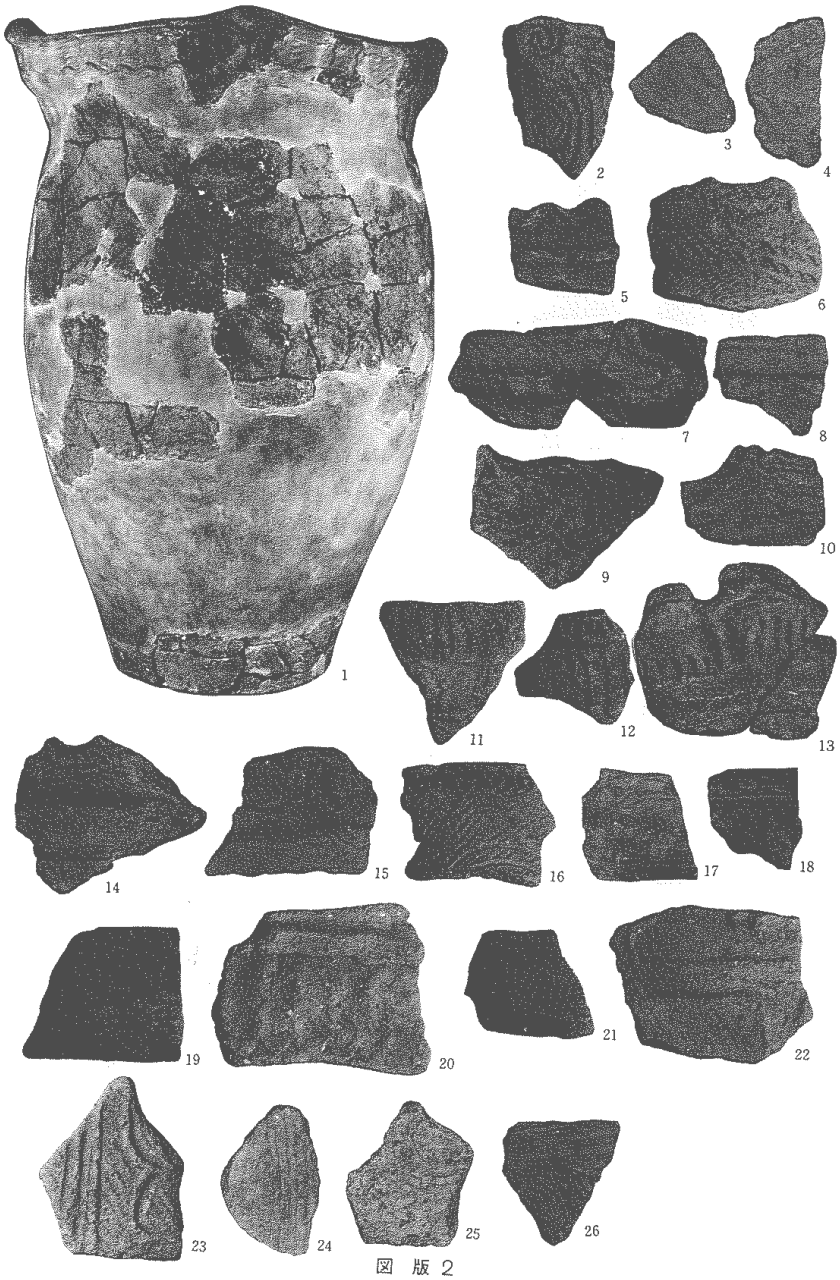


図 版 2